
剣銃魔学

閃光広里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣銃魔学

【Nコード】

N2272Q

【作者名】

閃光広里

【あらすじ】

人間と魔物、その他種族との戦いを描く。

とある世界に迷い込んだ主人公、「藤山宏樹」は、近くの村から爆発音を聞くのであった。

序章 謎の世界

ここは、どこだろ……。

心地よい風が俺の身体全体を包み込む。

目を開くと、そこは雲一つない晴天。

俺はここで何をしていたんだ？

でも、気持ちいいな。

風で草同士が擦れる音、鳥達のさえずりもまた心地よかった。

「よつと」

身体を起こし、辺りを見渡す。

自然が辺り一面に広がるだけで人気はなかった。

「誰もいないのか？」

独り言のように呟く。

自分の腕を見て気づく。

青いブレザー……確か、俺が通ってた制服。

……俺、なにに通ってたんだ？

ってかここどこ？

「……いったいどうなっているんだ？」

草が踏みしめられる音がして後ろに振り向く。

「兄ちゃん、ここでなにしてるの？」

男の子が話しかけてきた。

その男の子の後ろに隠れている女の子は恥ずかしそうにうつ
た。

「お兄ちゃん、迷子？」

「ははっ、そんなんじゃないよ」

でもこの状況は迷子と呼べるのだろうか？

悩んでると、隠れていた女の子はゆっくり出てきて俺の頭を遠慮
気味に撫でた。

「大丈夫だよ」

「……ありがとう」

女の子に微笑みかけると、えへへと無垢な笑顔を見せてくれた。

「兄ちゃん、予定ないなら俺達の村に来てくれないか？」

「そうしょ、お兄ちゃん」

「そうだな、でも俺はもう少しここにいるよ。後で必ず行くから二
人は先に帰っていな」

「うん」

元気よく頷くと、二人は村があるのであろう方向に向かって駆け
ていった。

そして辺りは静まりかえる。

「おいそこのお前」

「えっ？」

辺りを見回すが、人はいなかった。

「気のせいか」

「気のせいじゃない、下を見る」

「下……へ？」

言われた通りに下を見ると、手のひらサイズの大きさと腕を組んだ俺……というかわいらしい俺がそこにいた。

アレだ、例えるならばデフォルメ？ SDサイズ？

「……ドツペルゲンガー？」

「違うわボケ！」

「じゃあお前何者なんだよ？」

「俺はスモールフェアリー、人に宿る小さな妖精さ」

「ふくん、フェアリーね……」

「お前、藤山宏樹だよな？」

「ん？ ああそうだよ」

「そうか、じゃあ単刀直入に言うぞ、この世界は……」

スモールフェアリーが何か言おうとしたとき、子供達が駆けていった方向から爆発音が聞こえた。

「な、なんだ!？」

「ちっ、話は後だ、ドライブフォームしろ」

「はっ？ なにそれ？」

「いいから、ドライブと言え！ そう言えば武装化される」

「武装化？ なんなんだよそれは……」

「ブツブツ言っでないで早くしろ！」

「ぬう……ド、ドライブ！」

「……」

「おい、スモールフェアリー、反応ないぞ」

「あれ？ どうやるんだっけ？」

「俺をなめてるのか!？」

と、怒鳴っていると、再び爆発音が響いた。

「とりあえず、なにが起こったのか見てこよう」

「あ、おい、待てよ！」

慌てて俺の肩に乗るスモールフェアリーを気にすることなく走り出す。

嫌な予感がするな……。

さっきの場所から肉眼で見える場所だったので、すぐに到着した。

「こ、これは……!？」

逃げ惑う村人に襲っている人とは思えない生物。

爪は長く、相手を射抜く鋭い目つき。

口から牙が飛び出しており……例えるなら、魔物……。

「た、たすけ……」

「目障りだ！」

「ぐはっ！」

「!？」

命乞いする者も容赦しない。

辺り一面血の海、この世のものとは思えない惨状。

無残にも息絶えた屍が無数に転がっていた。

「と、父ちゃん！」

さっきの男の子が斬られた村人の元に駆け寄る。

女の子もその後を追う。

「父ちゃん、父ちゃん！」

「に、逃げ……ガバツ！」

「！？」

重症だった村人に胸を突き刺してとどめをさした。

「そ、そんな……」

まずい、あのままでは男の子も殺される。

ぶ、武器、なにか対抗できる武器は……。

視界に入ったのは藁わらの塊を運ぶ時につかう三又の槍だった。

「よ、よくも！」

「ガキのくせしてやりあうつもりか？ あいにく、男のガキに用はないんだ！」

「！」

男の子に振り上げられる剣。

「間に合ええ！」

三又で、振り下ろされた剣を受け止める。

「に、兄ちゃん！？」

「早く逃げろ！ 死ぬぞ！」

「う、うん」

「へへっ、ヒーロー気取りか？」

「お前がどう考えようが知ったことないがな、子供の目の前で親殺

されたんだぞ。お前、子供の気持ちになつて考えてみる！」

「はっ、ガキの考えなんてどうでもいいんだよ！」

「ぐうっ!?!」

なんて力だ、押さえられない。

「なんだよ、足腰震えてるじゃないか、怖いんだろ？ 今なら苦し
まずにあの世に送つてやるよ」

「確かに怖いさ、今すぐ逃げ出したいくらいに。けどな、子供一
人二人守れないんじゃない、男じゃないんだよ！」

「なめるなよ俺達ヒューマンハーフ族の力を思い知るんだな！」
「なっ！」

三又が一瞬で砕け散る。

「なんてパワーなんだ」

「死にな」

「ちっ」

バックステップで距離を置く。

「宏樹、思い出したぞ」

「なにを……」

「ドライブフォームの方法だよ、もう一度『ドライブ』って言うて
くれ」

「ドライブ！」

「クロスフォーム！」

唱えると、青い魔方陣が描かれ、それが高速で回転し、上に上が
っていく。

一瞬の出来事だったが、身体中に重みを感じて自分の身体を見る。

「本当に武装化してる……」

「こいつ、ドライブできるのか!？」

(今俺達は同調して一つになっている)

頭の中からスモールフェアリーの声が響く。

(今の状態なら魔物と充分対抗できる)

「へえ、そうかい」

左腰に装備している剣を右手で抜く。

「し、しかし、腕はおぼつかない。いける」

「……逃げないのか？」

「はっ、そういうお前も逃げないのか？」

「ああ……ここで逃げたらクズだな」

「面白い、返り討ちにしてやる！」

魔物がこちらに向かって斬りかかる。

それを、バックステップで避け、剣を突き出す。

しかし、サイドステップで避けられ、俺の横に魔物がいる形になる。

「しまっ……」

「調子に、乗るからだ！」

鋭く光る剣の先端が腹に向かってくる。

俺はとっさに左に持った丸いシールドで攻撃を防ぐ。

「なに？」

「まだまだ！」

左足を軸にして、右足で魔物の横腹辺りを蹴る。
魔物がそれで怯んだ隙に距離を置く。

（今だ、ハンドガンで撃て！）

「これか」

ブレイドをしまいながら右腰に装備しているハンドガンをホルダーから抜き、トリガーを引く……が、引けない。

（安全装置解除してないだろ）

「えっ、こ、これか？ ってうわっ！」

（それは銃剣を出すボタンだ）

「これか？ あ、あれ？ マガジンが出てきた」

（それでもないわ！）

「なにをこちゃこちゃ抜かしてやがる！」

体制を立て直した魔物は一気に近づいてくる。

横からきた剣をさつき間違っって出した銃剣で受け止める。

（お前が間違っってマガジンを落とすから撃てないじゃないか！）

「知るかよ！ そんなの！」

（まあ、幸いなことにお前は魔力が高い、『マジックショット』を唱えるんだ）

「くっ、やってみるか」

魔物を蹴り飛ばし、後ろにジャンプする。

「マジックショット！」

銃口に魔方阵が作られ、トリガーを引くと、青い閃光の如く、魔物を貫いた。

「そ、そんなバカな……」

魔物は胸を撃ち抜かれ、絶命した。

「や、やった……」

「に、兄ちゃん、後ろ！」

男の子に言われ、慌てて振り向くと、既に剣を振り上げていた別の魔物がいた。

「し、しま……」

刹那、何者かが魔物に体当たりを浴びせ、魔物を吹き飛ばす。俺と同じ青い制服に身を包んだ黒髪の男、俺は、こいつを知っている。

幼馴染みの宮河勇樹だ。

「大丈夫か、宏樹？」

「勇樹！？ なんでここに？」

「俺も知らん、気づいたらここにいた」

吹き飛ばされた魔物は起き上がって、こちらに来ようとするが、どこからか鉛弾が飛んできて、魔物の頭を撃ち抜いた。

「よくやった、マヴィ」

「礼には及びません」

「マ、マヴィもいるのか!？」

マヴィとは勇樹に仕えるメイドロボだ。

「話は後です、まずはこの状況をどうにかしませんと……」
「そうだな」

俺達三人は激戦地に赴くのであった。

【序章終わり】

第一章 旅立ち

「でやつ！」

向かってきた魔物をブレイドで突き刺す。

銃ではどうってことなかったが、剣で生き物を殺めるってこんな感覚なのか……？

(宏樹、気持ちはわかるが、やらなきゃやられるんだ、わかるよな？)

「ああ……わかってるつもりさ」

(だったら気にするな、向こうだって死ぬ気で来てるんだからな。それに、じきに慣れるさ)

あまりこういうのに慣れたくないな。

「宏樹」

「ん、どうした勇樹？」

「なんか妙だと思わないか？」

「妙……？」

辺りを見回し、その『妙』に気づく。

屍の数は凄まじいが、老人や男性、子供の死体が圧倒的に多く、女性はほんの数人だということか。

「なにか裏がある……というわけか？」

「だろうな」

「それに、私達では実力も兵力も不足してます。深追いはできません……って、ひ、宏樹様、勇樹様、あれを！」

マヴィの指差す先には、魔物に担がれた二人の少女。目を凝らして見てみると、青い制服に身を包み、水色髪の少女、赤い制服に身を包み、黒髪の少女。

どちらも見覚えがある。

けど、担がれて抵抗もないということは気絶してる？

「アレって、里流葉と麻奈美なんじゃ……」

「くっ、今助けるぞ！」

「無茶ですよ！ 深追いは禁物です！」

「その通りだな！」

突然俺達の目の前に立ちふさがる大男。

バズーカを背中に背負い、両腕にトンファーを持った男。

「お前……山本大毅か！？」

「ご名答」

「なんでお前がここに！？」

「ガキがギャンギャン吠えんなよ！」

勇樹の問いかけを無視してバズーカを構える。

「インパクトショット」

「！ 各自散開！」

「遅い」

俺の指示通りに散開するが、山本のインパクトショットは絶大だった。

「うわっ！」

「きゃー！」

「ぐっ……」

凄まじい衝撃で三人とも吹き飛ばされてしまう。

「はっはっは、最高だな！」

「くそ……目の前にりるとかなが居るのに……くそあー！」

歯を食いしばって立ち上がり、山本に向かって突っ込む。

「うわわああ！そこをどけえ、筋肉ダルマ！」

背中のブレイドを右で抜き、そのまま振り下ろす。

山本は左のトンファーでそれを受け止める。

「あのおな、藤山、先輩の格言だ、『勇敢と無謀は大違い』ってな！

覚えておきな！」

「えっ！？」

山本は俺の胸ぐらを掴み、そのまま建物に向かって投げ飛ばされる。

当たった建物は柱がどんどん折れていき、そのまま崩れてしまう。

「宏樹様！」

「だ、大丈夫……」

シールドなかったら死んでたかもな。

「はっ、そのまま建物ごと死ねばよかったのによ」

山本は再びバズーカを構える。
銃口は俺に向けられる。

「先に逝きな、後からお前の友達も連れて逝ってやるしよ！」
「くっ……」

力を振り絞ってハンドガンを構える。

「マジック……」
「インパクトショット」

ここまでか……。

『諦めたらそこで終わりだよ』

かすかに聞こえた声に我に戻る。
目を開くと、まさにインパクトショットが発射されようとしていた。

だが、俺の目の前に少女が上から飛び降りてくる。

「マジックシールド！」

彼女が唱えると、手につけたバックラー辺りに光の壁が形成され、
山本の攻撃を受け止めた。

「ふう、間一髪だったね、ひろ」

俺の方に振り向く。

俺と同じ制服、後ろにオレンジリボンで束ねた髪とスカートが風
でなびく。

「井上、鹿波!？」

「うん」

「調子に乗りやがって……」

「隙あり」

「!？」

山本が慌ててバックステップを踏むと、さっきいた場所に短剣が二本突き刺さる。

その後かなの隣に長い青髪少女が飛び降りてくる。

「佐藤美希、只今参上ってね」

「美希……」

二人とも幼馴染みだ。

「はっ、女が二人増えたところで!」

「大毅様、目的は達成しました、引き上げましょう」

「む、そうか、じゃあな、ガキども」

「ま、待て!」

「スモーク」

山本を中心に煙幕が発生し、視界を奪われる。

「ゲホツゲホツ……いない」

煙幕がなくなった頃には跡形もなくいなくなり、残ったのは俺達と大量の屍だけだった。

「くそ!」

自分の非力さに苛立ち、地面に向かって拳をぶつける。

「宏樹……気持ちわかるが、今は村の生存者が先だ」

「ああ……そうだな」

勇樹の言葉に頷きつつ立ち上がる。

俺達にドライヴができたんだ、恐らくあの二人にもできるはずだ。そんな淡い期待をしつつ、二人の安否を祈るしかなかった。

*

「酷いな……」

戦争の終わった町とか村ってこんな感じなんだから。得られるものなんてなにもない、ただ無駄に命を失っただけ。

「ん？」

地面に倒れている人の身体が僅かに揺れていた。

「生存者か」

駆け寄り、顔を覗き込む。

「!？」

見るも無残な光景だった。

顔は血まみれで既に絶命していた。

傷からして逃げていた時に背中を斬られたのであろう。

「ん、仔犬？」

屍の下に、必死に生きようとする仔犬の姿があった。しかし、手を差し伸べようとすると、仔犬は力尽きてしまった。行き場を失った俺の手は震えていた。

「俺は、仔犬一匹すら助けられないのか……」

なにもできない。

ふと頭を過つたのは最初に出会った子供達だ。

あの子達はどうしてるだろうか。

自然と二人を探していた。

「おい、誰がいるか？ 居るなら返事をしてく……」
「ぐすつ」

どこからかすすり泣く声。

「こっちから聞こえたような……いた」

「……兄ちゃん」

「大丈夫か？ 女の子の方は？」

「……いかれた」

「えっ？」

「ゴブリンに連れていかれたー！」

泣き叫びながら俺に飛びついてくる。

「そうか……でも君だけでも生きててよかった」

慰めの言葉なんて見つからなかった。
とりあえず男の子を背中におぶり、皆の元に戻った。

*

皆の元に戻ると、まず美希が出迎えてくれた。

「あれ、生存者？」

「ああ。マヴィ、この子を頼む」

「わかりました」

男の子をマヴィに預け、勇樹達の元に向かった。

「かな、食料はどれくらいあるんだ？」

「えっと、一週間分かな」

「そうか、これだけ破壊されたのにそれだけ出てきたら上出来だ」

「宏樹、これからどうするんだ？」

勇樹の問いに「うーん」と唸りながら、こう言った。

「この世界のことを知る必要がある。俺達は今どこにいるのか、この世界はいつたいなんなのかを」

「そうだね、私達、元からここにいたわけじゃなさそうだしね」

美希は食料であるバナナを食べながらそう言った。

「ああ、そうそう、さっき言いそびれたことなんだが……」

不意にスモールフェアリーが俺の肩に乗りながら話しかけてきた。

「なんだ？」

「この世界のことだよ」

「知ってるのか？」

「……お前、誰と話してるんだ？」

勇樹が不思議そうに聞いてきた。

「え？ 見えないの？ 俺の肩にいるよ？」

「どこにいるんだ？ ……えっ、そうなんだ」

勝手に勇樹が一人で納得してしまった。

「俺達スモールフェアリーは宿った者にしかその姿、言葉を見聞きすることができないんだ」

「そうなんだ。で、お前はなにを知っているんだ？」

「まあ、俺自身もそんなに詳しくはないんだけどさ、この世界はあらゆる種族が入り混じっているんだ」

「そうなのか……それだけ？」

「すまんな」

「まあいいけど」

たいした情報ではなかったが、この世界について、ザックリではあるがわかった気がする。

人以外にもさつき人を襲っていた魔物、確か、ヒューマンハーフ族だったっけ？

それ以外にもいるのだろうか？

「宏樹様、来てください」

マヴィに呼び出され、マヴィの元に向かう。

「どうした？」

「少年が起きましたよ？」

寝ぼけた表情で俺の顔を見る。

「兄ちゃん……ここは？」

「大丈夫か？ 名前、わかるか？」

「うん、俺はラット。ラット・マッシュユビル」

「ラットか、俺は藤山宏樹、よろしくな」

「うん」

「……で、なんだけど、話、聞いてくれるか？」

「うん」

「この村は……さっきの攻撃で村人は全滅した」

「えっ……」

「生存者はあなただけです」

マヴィは表情を歪めながら付け足した。

マヴィも悔しいのであろう。

「それでなんだが、ラット、君はどうするんだ？」

「俺は……兄ちゃん達についていく」

「そっか」

「でも宏樹様！」

「責任は俺が持つよ、それにラット一人がここに残っても仕方ないだろ？」

「そうですね……」

「俺がついていっても足手まといかもしれないけど、俺、ルチアを助きたい！」

「ルチアってラットの隣にいた女の子のこと？」

「うん、俺の妹なんだ、だからお願い、赤髪の姉ちゃん！」
「……し、仕方ありませんね」
「マヴィの許可をもらえてよかったな」
「うん！」

ラットは嬉しかったのか、元気よく頷く。

「なあラット、ここから近くに村か町はあるか？」
「あるけど結構遠いよ？」
「ん〜。なにか移動手段は……」
「馬ならあるけど」
「馬か、よし、それにしよう。どこにあるんだ？」
「村の外にある牧場にいるよ」
「そうか、マヴィと俺とラットの三人で行ってみるか」
「わかりました」
「案内するよ」

勇樹達に留守番を任せ、三人は村の外を出た。

*

村から少し進んだ場所に確かに牧場はあった。

「もう少しだよ」
「ん？」
「どうしましたか、宏樹様？」
「今話し声が聞こえたような……」
「気のせいなんじゃない？ 村の人達は今日、ここに来てないはずだし」
「ラット、それ本当か？」

「うん」

「じゃあ、ここにいる奴って……」

「魔物……ですかね」

マヴィと目を合わせて頷く。

「ラット、今から隠密行動にはいるから静かにな」

「オンミツコウドウ？ なにそれ」

「隠れて動くことです」

マヴィはラットにわかりやすく説明していた。

「かくれんぼだね、俺得意だよ」

「ラットの得意分野か、そりゃ頼もしいな」

ラットに笑いかけ、話し声が聞こえた方向を睨む。

三人で息を殺しながら牧場に近づく。

話し声は次第に大きくなり、茂みの隙間から様子を窺^{うかが}う。

魔物が三体、雑談を交わしていた。

「どうでしたか？」

「やはり魔物がいた。確認したのは三体だが、他にもいるかもしれない」

「残存部隊でしょうか？」

「いや、そうでもないようだ、会話内容が昼間に話すことじゃない話題だった」

「と、言いますと？」

「村の女がどうか、楽しみだとか」

「はあ……」

マヴィは意味を理解していないのか、曖昧に頷くのみだった。
けど、この会話内容から推測すると、なぜ村の女性を殺さず生け
捕りにしたのか予測がつく。

「要するに、男の性的欲求をはらすための女性だろう、奴等（魔物）
の考えは」

「えっ、だから女性だけ極力殺さなかったと？」

「だろうな。でだ、もしかして、ここに連れてきた女性達を一旦こ
こに集めてるかもしれない」

「可能性はありますね」

「けど、その割には兵隊が少なすぎる」

どうしたものか……。

「おい、見回りはどうだ？」

「」「！」「」

声が近くから聞こえ、慌てて姿勢を低くする。

「異常なしだ」

「そうか、補給物資の片付けもあと少しで終わるからもう少しだけ
頼む」

「OK、それが済んだらやっと……できるんだな？」

「ああ、最近やってないからな、ここの村の娘、結構かわいいみた
いだぜ」

「ははっ、やりがいがあるな！」

「……マヴィ」

黙っていたマヴィの左手は力強く握られていた。

「……ここを攻めよう」
「でも、どうするんですか？」
「そうだな……」
「俺にいい考えがあるぜ」
「スモールフェアリー？」
「宏樹が装備しているハンドガンな、銃剣以外にもオプションがあるんだよ」
「なにあるんだ？」
「いろいろだぜ」
「そう……マヴィ、ラット、聞いてくれ」

*

俺の考えた作戦、電撃奇襲作戦。
ドライヴした俺はハンドガンから銃剣を外し、ハンドスナイパー
ツと呼ばれるオプションを取り付ける。

「実践すらくくにやってないのにいきなり狙撃とは……我ながら無
謀だな」

（大丈夫ドライヴしてる時は俺の力を借りて身体能力が上がってる
から）

「そうは言ってもなあ……」

そうボヤキながらうつ伏せの状態でスコープを覗き、魔物の頭を
狙う。

「……はあー」

ゆっくり息を吐き出す。

この一撃を外せば俺の作戦がパーだ。

「当たれよ……」

トリガーを引く。

俺の放った弾丸はあくびをしていた魔物の頭にヒットする。

そのまま二回発砲し、地面を横に転がりながらその場を逃げる。

その後、俺がいた場所に数本の矢が地面に突き刺さる。

俺は立ち上がりながらハンドスナイパーを取り外し、閃光弾を銃口の下に取り付ける。

「これでもくらえ！」

トリガーを引き、閃光弾を三発放つ。

「な、なんだ!?!」

「目が……目があ!」

「マヴィー！」

「了解！」

俺とちょうど反対の方向からマヴィーが飛び出し、サブマシンガン
を乱射する。

次々と倒れていく魔物を尻目に、銃剣を取り付ける。

「なにごとだ!?!」

「いただきい！」

建物から出てきた魔物を銃剣で斬り倒す。

「あの村の生き残りか!?!」

「さあ……どうだかな！」

ショートシールドに回転を与えながら魔物に投げる。

「ぐっ！」

顔面に当たり、仰け反る隙に、一気に近づく。

俺は左腰のショートブレイドを逆手で抜き、横に斬る。

「ふう……」

「おおかたは倒しましたよ」

「ああ」

俺とマヴィはラットに教えられた場所に向かった。

*

「ここだな」

馬が五頭と馬車があった。

「さて、ここからどうやって運び出そうか……」

「馬一匹でも目立ちますからね」

「見つけたぞ！」

「ちっ、早すぎるー！」

俺はハンドガンを、マヴィはマシンガンを構え、待ち受ける。

「私が囿になって敵をひきつけます、その隙に敵陣の後方に回り込んでください」

「挟撃か……でも大丈夫か？」

「大丈夫です」

「……わかった」

マヴィの言葉を信じて、一旦この場を離れる。

が、出ようとする、柱に矢が突き刺さり、止められてしまう。

「っ、遅かったか」

「女は生け捕りだ、男はこの場でなぶり殺せ！」

「ちっ、させるかよ！」

持っていたハンドガンで攻撃するが、魔物は物陰に隠れてしまう。

「まずいな……このままでは俺達が完全に不利だ」

「せめて、外に出れば……」

簡潔にこの状況を言えば、困まれたと言える。

出口や窓には魔物がいる。

もし仮に出ても不利な状況には変わりない。

かといってここで戦うにはあまりに狭く、袋叩きにされてしまう。

「……あ」

「どうかしましたか？」

「いいことを思いついた……」

そう言いながら、ブレザーのポケットに入っていたハンドガンのオプションを取り出す。

「それは？」

「スモークグレネードだよ」

銃剣を外し、そのパーツを取り付ける。

「いいか、俺が煙幕をまくから、マヴィはあの窓にマシンガンマガジンを使い果たすまで乱射してくれ」

「は、はい」

マヴィが頷くのを確認し、天井に向かってスモークを撒き散らす。その後、マヴィは窓に向かって乱射した。

「行くぞ、マヴィ」

「えっ！」

驚くマヴィの手を握り、壊れた窓に向かって突っ込んだ。

「なんだ!?!」

「もらった!」

面食らった魔物に、ハンドガンで頭を撃ちぬく。

「マヴィ、このまま迎撃するぞ!」

「は、はい!」

俺はスモークグレネードを投げ捨て、銃剣を取り付ける。そして、空いてる左手にもハンドガンを構える。

「こつちにきたぞ……えっ?」

煙から出てきた魔物達は俺達の構えに固まる。

「数撃ちや当たる！　一斉射！」

俺の合図でマヴィと共に鉛弾を魔物に浴びせる。

魔物達の断末魔を聞きながら、マガジンを使い果たすまで撃ち続けた。

「……………後味悪いな、こんな作戦考えた俺も俺だが……………」

血の海……………それはあの村で見た光景と同じだった。

「……………おあいこです、魔物も、人間も……………」

マヴィも同じ気持ちだったのだろう。

「とりあえず、馬を運び出そう。後、奴等が言ってた補給物資もさ」「はい」

暗い気持ちを持ちつつ、馬と物資を確保した。

あと、周囲を散策したが、他には誰もいなかった。

*

馬や物資を村に運び終えた俺達は、明日に備え、休んでいた。

ただ、俺一人は夜の村を歩いていて。

暗闇に浮かぶ屍……………それは恐怖としかいえない光景。

死者を埋葬しなくてはならないだろうが、今の俺達では人手も、気力も足りなかった。

「……………酷いものだな」

「誰だ！？」

不意に見知らぬ声が聞こえ、辺りを見回す。
すると、暗闇からなにかが出てくる。

背中に翼を持ち、クチバシを持ち、どこか人間離れた体つき…

…。

「お前、魔物か？」

「魔物？ ああ、ヒューマンハーフの事か……」

すると、そいつは俺を素通りし、右斜め後ろで立ち止まる。

「俺をそんな野蛮な野郎と一緒にされちゃあ困るな」

「じゃあ……お前は誰なんだよ」

「俺か？」

そう言いながらこちらに向き直る。

「俺はアースティ、鳥獣族だ」

「鳥獣族？」

「ヒューマンハーフやヒューマン族なんかよりも高貴な存在の事だ
よ」

軽くバカにされてるよな、俺達人間を。

「高貴な存在かどうかは置いていて、お前はなにしにここに来たんだ？」

「野暮用といったところだ……」

すると、アースティという奴はおもむろに両腰に装備した剣を抜く。

「野暮用の一つ、お前の實力を見てみたいな」

「生憎、俺は疲れてるんだ、お前と相手してられる余裕はない」

「……逃げるのか？」

「なに？」

「流石ヒューマン族、腰抜け野郎だぜ！」

「なんだと……誰が腰抜けだ！」

「おめえだよ、こんな腰抜け野郎にあの方は……」

「……ドライヴ」

「ク、クロスフォーム」

武装化し、右手にハンドガン、左手に逆手でショートブレイドを握る。

「いいだろう、相手してやるよ」

「ムキになると良い未来は訪れないぜ」

「そんなの知るかつ！ この世界そのものが良い未来なんか望めない世界なんだよ！」

俺は怒りに任せて話続けた。

「この世界は魔物が天下をとっているに見える、そのせいで人間の扱いはなんか奴隷かそれ以下の扱いだ。そんな世界で良い未来なんて実現するのか！？」

「するんじゃないか」

「は？」

「俺達鳥獣族はヒューマンハーフ族のやり口はどうも気に入らないしな。俺達だけじゃない、ヒューマンハーフ族以外の種族だって不満を持っている」

「俺達以外にも、不満を持つものが……？」

「そう……今のこの世界はヒューマンハーフ族が圧倒的に強いんだ、けど、勝てない奴等ではない」

「どういうことだ？」

「団結……することかな？」

「団結？」

「そう……各人族は対抗する力を持っている、例えば、お前のようにドライブできる者とかな」

「ドライブ……」

すると、アースティは剣をしまい、俺に背中を見せる。

「はっ、ガラでもないことをペラペラと語っちゃまったな、俺は帰るわ」

「ちょっと待て、勝負は？」

「おあずけだ、疲れているんだろ？」

「それは……」

「いつでもできるからな、じゃあな」

「待ってくれ！ 団結すれば魔物達に勝つことができるのか？」

「そう、あの方は仰っていたが……現実的にそれはあり得ない」

「なぜだ？」

「異なる種族を嫌っているからな……」

そう言い残して翼をはばたかせ、漆黒の空に消えていった。

「嫌っている……から団結できない……」

俺は言葉の意味をつまく理解できなかった。

お互いがお互いの種族を嫌っている理由でもあるのか……？

*

次の日の早朝、俺達は村を後にした。
目的がないわけではない、この世界を知るために……。

【第一章・旅立ち終わり】

第二章 潜入

なんだか暖かい……。

『お兄ちゃん』

誰かの声が聞こえてくる。

かわいらしい声だ……それに、どこか懐かしい……。

『お兄ちゃん、起きてよ』

『……』

目を開くと、水色の髪が垂れ、ピヨコンと跳ねたアホ毛。

そして、俺を真っ直ぐに見つめる水色の瞳……。

『りる……か？』

『そうだよ、さっ、早く起きて、ね？』

俺の義理の妹が優しく微笑む。

それと同時に視界が白くなり、なにも見えなくなってしまった。

・
・
・

「……夢、か……」

馬車の中で昼寝をしていた。

腕時計を見てみると、横になって五分しか経ってなかった。

「……そんなに眠かったのかな？」

一人で呟きながら、身体を起こす。

「おはよっ、寝れた？」

「五分だけな。あと、今昼だからな、おはようは違うだろ」

俺の隣で座り込んでいた美希にツッコミをいれる。

「さてと、村から出て半日過ぎたけどさ、なにもないね」
「そうだな」

美希の言葉に頷きつつ馬車から見える風景を見る。

とてもきれいな景色で、みとれてしまう。

何気なく馬車を操るマヴィの方を見ると、ラットと楽しく雑談を交わしていた。

「ラットったら、マヴィにベツタリなのよ」
「だろうな」

ラットが楽しそうに話しかけ、マヴィはそれをしっかり聞き、頷いたり笑ったりする。

すると、不思議と話も弾む。

「……ん？」

不意に先頭を馬で歩いていた勇樹が立ち止まる。

「おっとっと、どうしたの、勇樹？」

慣れない馬の扱いに少しテンパりながら、二匹を止めた鹿波が勇樹に話しかける。

「アレを试着みる」

「……人、だよな？」

鹿波の言葉を少々疑いつつも目をひそめる。

「は、離してください！」

「いいじゃないか」

「俺達と楽しもうぜ」

「ちよ、どこ触ってるのよ！」

「ふへへっ」

女性二人に三人の男がたかっていた。

「なにになに？」

美希も興味津々で馬車から身乗り出す。

「……助けた方がいいんじゃない？」

「だな、かな、俺達と交代だ」

「うん」

二匹を操っていた鹿波と交代した俺と美希は、それぞれの馬に馬上した。

「俺と勇樹と美希の三人で様子を見てくるから、馬車はペースを落として来てくれ」

「わかりました」

「マヴィが頷くのを確認し、馬を走らせた。」

「『ドライヴ』」

「クロスフォーム」

馬の上でドライヴフォームする。

そして、俺はハンドガンを空に向け、威嚇射撃をした。

目の前にいた男女はこちらに視線が集中する。

「今すぐにその手を離せ」

「あ？ ガキがなに抜かしてんだよ」

「お前達の持つてるのは子供の遊び道具じゃないんだぜ」

「ははは、違いねえ！」

「黙れ、その女性達から離れないならば、お前達の頭を撃ち抜く」

「やれるのか？」

「きゃ！？」

「なに！」

三人の男は二人の女性を盾にするように女性の後ろに隠れた。

「これでも俺達の頭を撃ち抜けるかな？」

「ちっ、卑怯な……」

勇樹が舌打ちする。

今の状況で、精密射撃できるのは俺だけか……。

(宏樹、お前ならこの技を使いこなせる、やってみろ)

頭から聞こえる。

……スナイプ、ショット？

「……スナイプショット」

スペシャルアタック

SAを唱えると、銃口から光のサークルが出てくる。

そして、そのサークルは男の頭を指し示していた。

相手はこのサークルが見えてないのか反応がなかった。いけると思い、トリガーを引く。

銃声と共に男は頭を撃ち抜かれ、倒れた。

「え、ええ！？」

盾にされていた女性は腰を抜かしてしまつ。

「こ、こいつ、まじでやりやがった！」

「は、話が違うじゃないか！？」

残った男は逃げ出す。

それを馬に乗った美希が後を追う。

「逃がさない！ ネットショット！」

美希がSAを唱え、銃口から銃弾が発射される。

そのまま逃げる男の一人に向かっていき、破裂した銃弾からネットが飛び出す。

たちまち男はネットに絡まり、身動きがとれなくなった。

「って、宏樹、勇樹！ アイツ魔物だよ！？」

美希が指差す先には先程いた男ではなく、魔物の姿だった。

「逃がすか！」

勇樹が馬で逃げる魔物を追いかける。

腰に装備した刀を鞘から出し、構える。

「ソニックブーム！」

刀を一振りすると、衝撃波が飛び出し、魔物の上半身と下半身を切断した。

俺がさっき撃ち抜いた男も姿が魔物に変わっていた。

「あ、ありがとうございます！」

女性が頭を下げる。

「い、いえ……」

「あ、あの……お礼がしたいんです。是非とも私達の村に来てください」

「村……ですか？」

女性の言葉に首をかしげる。

ラットから聞いた話によると、目的地の町の間には村はないと言っていた。

馬車とも合流し、捕獲した魔物に尋問しようとした時。

「っ！？」

美希が声にならない悲鳴をあげた。

様子を見に、美希に近づくと、理由がわかった。
魔物は短剣を腹部に刺し、自害していた。

「……なにかマズイことでもあるのか、自害してまで……」

「ねえ、宏樹」

「ん？」

「なにか、引つ掛かるんだけど……」

「ああ、魔物どもの驚きや、あの女性の発言、そして、こいつの自害……」

美希も同じことを考えていたんだろう、コクンと頷いた。

「さっ、早くいらっしやってください」

「あ、ああ……」

「待ってください！」

突然の叫び声に驚くが、聞き覚えのある声に思考を働かせつつ、
声のする方に視線を向ける。

そこに居たのは赤い制服に身を包んだ男子が三人、馬に乗っていた。

三人の内、二人は知ってる……一人は茶髪少年、森岡進也。

もう一人は黒髪の松嶋健治。

後一人、身長が比較的低い茶髪の少年だった。

「先輩、こいつらはヒューマンハーフ族だ！」

「えっ、なに!？」

「なにをおっしゃりますか……私達は人間ですよ」

「……なら、これでもか？」

すると、進也はドライブフォームし、ハンドガンを構える。

「待て、進……」

俺の制止も虚しく響いた後、銃声が辺りに響く。
女性は人間とは思えないジャンプで銃弾を避けていた。

「……魔物だ」

言葉を詰まらす。

今まで見た魔物ではなく、腕から鋭い刃が伸びていた。

「私の作戦を、よくも！」

「貴様ら、覚悟はいいなあ!？」

もう一人の女も魔物に変わっていた。

「マズイ! 馬車を守れ！」

「ドライブ！」

馬車にいたマヴィと鹿波はドライブフォームする。

「マヴィさん、馬車をお願いします！」

「わかりました！」

馬車から飛び降りた鹿波は弓を構える。

「進也達三人は馬車を守ってくれ！」

「わかりました！」

「作戦変更だ、奴等をなぶり殺せ！」

魔物が口笛を鳴らす。
すると、草むらから魔物が大量に出てくる。

「くっ……」

「ふふっ、かかれえ！」

「くっ」

腰のブレイドを左手の逆手で抜き、魔物に攻撃する。
しかし、あっさり剣で受け止められる。

「ぬるいなあ〜？」

「ならば……」

右手で背中中のブレイドを抜き、そのまま振り下ろす。
肉を斬る感覚と共に血が噴き出す。

「あいつらは……」

号令を出していた奴さえ倒せば、なんとかなるかもしれない。

「……どこいった？」

右から矢が飛んできたので左のブレイドで叩き落とす。

そのまま右ブレイドで矢を放った魔物に向かって投げつける。

「ぐひゃ!?!」

胸に突き刺さり、膝から崩れ落ちた。

俺は投げたブレイドを回収しつつ辺りを見回す。

「きゃ！」

「今の声、かなか!？」

鹿波の悲鳴が聞こえた方向を見ると、号令を出していた魔物が鹿波を追い詰めていた。

「ちっ、今行くか……」

「あなたの相手はこの私なんだよ、メガネ君」
「なにっ!？」

背後の木から飛び降りてきたもう一体の魔物がこちらに槍を突いてきた。

俺はそれを二本のブレイドで受け流す。

「ふふふ……メガネ君のガールフレンド、実戦慣れしてないみたいね」

「えっ？」

「あんなに息を切らして……」

鹿波がいる方向を向く。

「はあ、はあ……くっ、はあ」

「ふふふっ……殺しがいがあつて、興奮するわ」

「ちっ、趣味悪すぎなんだよ!」

左逆手ブレイドで腹部を攻撃するが、鉛のように硬く、斬りつけられなかった。

「な、なんだこれ!？」

「一時的に皮膚を硬化させることができるの、メガネ君の攻撃はす

べて単調だから読み易いのよね……」

魔物の鋭い爪が俺の顎^{あご}めがけて飛んでくる。

「!?!」

身体を後ろに反らし、攻撃を避ける。

俺の目の前に魔物の手が通過していった。

「あら、避けたの」

「死ぬわけには、いかないからなあ!」

魔物の腹部を蹴り、その力で魔物と距離を置く。

「鹿波っ!」

「ひろ!?!」

「スライドダツシュ!」

「なに!?!」

魔力により、高速移動が可能になる。

そのまま鹿波の近くにいた魔物に体当たりをぶつける。

それと同時にスライドダツシュの効果は切れる。

「ふっ、ガールフレンドに近づいただけだ、マリナ、行くわよ!」

「ええ、タリカ!」

さっき相手していたタリカとさっき吹き飛ばしたマリナが構える。

(あいつら、連携するつもりだ)

「連携……」

「死にな！」

「ひろ！」

「なに！？」

タリカがこちらに突っ込んでくる。

俺と鹿波は別々に距離を置く。

「まずは、その小娘！」

「えっ！？」

タリカの背後から不意に現れたマリナ。

両手を振りかざす鋭い爪が鈍く光る。

「スライドダツシュ！」

体制を立て直し、地面を蹴り、鹿波の元に直行する。

「かあなああ！」

「！？」

勢いよく鹿波に飛び込み、その場を鹿波と共に離れる。

「ひろ……」

「大丈夫か？」

「う、うん」

「ごさかしい真似を……」

「メガネ君のくせして……」

二人で立ち上がる。

(相手が連携してくるなら、こっちはクロスフォーメーションだ)

「かな」

「うん」

かなも今からすることをスモールフェアリーから聞いたのだろう、すぐにコクンと頷いた。

「クロスフォーメーション！」

声を揃えて発すると、二人の足元から魔方阵が描かれる。

俺は二丁の銃剣ハンドガンに、鹿波は弓矢に持ち変えて構える。

俺は身体をひねりながらジャンプする。

魔方阵のおかげで人二人分の高さまで飛び上がる。

「地の矛よ」

「天の矛よ」

銃口を魔物達に構える。

鹿波は弓を引き絞る。

「天地の裁き！」

俺はトリガーを引き、鹿波は矢を放つ。

銃弾は途中で分裂し、数を増やしながら目標に突き進み、矢は巨大なオーラをまとい、目標に直進する。

「ちっ、ガードフォーメーション！」

「はっ！」

「なにっ!?!」

手下の魔物三体がタリカ達の盾になり、俺達の攻撃を受けた。重力に従って落下している時、魔物の叫びが聞こえた。

「……技名にしては、威力はそこまでのようね」
「なんて奴等だ……」

俺達の攻撃は完全に魔物三体に防がれてしまった。

「自分の仲間なのに……」
「ふっ、哀れむ余裕があるのかしら？ ガールフレンドさん？」
「お前、なんとも思わないのかよ!?」
「思わないね、こいつらは私に命を捧げた奴等なんだから」
「だからって……これはないだろ！」
「メガネ君、敵に説教する前に自分の身を案じたらどうかしら？」
「えっ!?!」

後ろを振り返ると、既に魔物二体が剣を振り上げていた。

「マジックサーベル」

刹那、二体の魔物は上から下へ一刀両断されていた。

血を噴き出しながらきれいに枝分かれする魔物の隙間から、勇樹と進也の姿が見えた。

「危なかったですね、先輩」
「つたく、気をつけるよな」
「進也、勇樹！」
「私も忘れてもらっちゃ、困るな!」

左にいた魔物を頭からアサルトライフルで撃ち抜く美希。

「再び宏樹を助けちゃいました」

「美希」

「っ……数で不利か、引き上げるわよ！」

「逃げてく、追いましょ！」

「進也、深追いは禁物だ。俺達、結構ギリギリだから……」

「わかりました」

「とりあえず、進也達と話す為に、この場から離れよう」

俺の提案に皆頷くのであった。

*

「進也、質問がある」

「なんです？」

「進也と健治はわかる、前にどこかで会ってたような気がするからな。で、このちっこいのは誰？」

そのちっこい奴を指差して聞いてみる。

「ちっこいって、先輩とあまり変わりませんけど？」

「あ？　なんか言ったか？」

「いえ、別に……」

男子平均を軽く下回る160くらいで悪かったな。

「えっと、彼は塚田雅啓（まこと）です、俺の友達です」

「よろしくな、雅啓」

「あ、はい、よろしくお願ひします」

雅啓と握手を交わすが、雅啓の表情はどこか機嫌が悪そうだった。

「えっと……俺、マズイこと言った？」

「ええ、雅啓に向かってその『ちっこい』奴って言いました」

健治が『ちっこい』を強調して答えた。

「ああ……身長が低いのに気にしてたんだ……えっと、ごめんな、悪気はないんだ」

「いえ、気にしてませんから」

むっちゃ素っ気ないんですけど。

「お、俺も身長のこと結構気にしてるんだよ、俺達似た者同士だよな？」

「ちなみに、先輩の身長はいくらですか？」

「161だけど」

「俺よりも一センチ高い……」

「あ、あはは……進也」

「いや、こっちないでください」

後輩に拒絶された！

「……ま、まあ、話の寄り道はこれくらいにして、本題にいきましょうか」

「逃げた」

「逃げましたね」

美希とマヴィの冷めた視線を無視して本題に入った。

「進也、なんで魔物が変装してるとわかったんだ？」

「俺達があの場合を通った時に、あいつらが打ち合わせをしていたんです。状況を理解できなかったので茂みに潜んで様子を見ていました。で、先輩達がやって来ると、猿芝居を始めたわけですよ」

「なるほど……で、さ、麻奈美、知らないか？」

「麻奈美ですか？ いえ、見てませんけど……麻奈美になにかあったんですか？」

「……拐われた、魔物達に」

「……」

「一瞬だった、気づいたら里流葉と一緒に連れ去られていた」

「そう、ですか……」

「すまん、俺の妹……いや、お前の大事な人を守れなくて……」

進也に向かつて頭を下げる。

俺に力があれば、もしかしたら魔物達からまなとりるを奪還することができたかもしれない……。

「あまり、自分を責めないでください。仕方のないことですよ」

「……ああ」

「で、これからどうしますか？ このまま立ち往生しとくのもいいですが……」

「あいつら……魔物が俺達を連れて行こうとした村に行こうと思う」

俺の提案に美希が反論する。

「畏だよ、絶対！」

「わかってる」

「なら……」

「畏とわかっていたら『畏』とは言わないんじゃないか？」

「えっ？」

「それに、寝込みを襲う……俺達が攻めるんだ」

「この数で……正気か？」

勇樹が飽きれ気味に聞いてくる。

「ああ、寝込みを奇襲するんだ、この戦力でも充分だ。それに、もしかしたら居る達が居るかもしれない」

「そうですね、お供します」

「進が行くなら俺達も行くよ」

「うんうん」

「進也、健治、雅啓……ありがとう」

他のメンバーを見てみると、コクンと頷いていた。

「よし、作戦会議だ」

作戦会議を済ませ、夜になるまで自由時間にした。

*

「ドライブ」

「クロスフォーム」

誰もいない森の中、俺は一人で練習をしていた。

「……上手いかないもんだな」

（仕方ないさ、慣れれば結構強くなると俺は思うぞ）

「そう……かな」

右腰のホルダーからハンドガンを取り出し、サイレンサーを取りつける。

そのまま巨木に向かって構える。
狙いをつけ、トリガーを引く。
三発撃って一発外してしまう。

「……おかしいな」

「秘密特訓……ということかな？」

「？ その声は……」

声のする方に首を向ける。

声の主は木の上で腕を組んで木にもたれ掛かっていた。

「……アースティ」

「よっ」

木から飛び降りてくる。

「その腕じゃ、俺はおろか、そこら辺のヒューマンハーフ族に勝てないぜ？」

「……うるさいな、決闘しに来たのか？」

「いや、今日はお前を冷やかしにきた」

「なら今すぐ俺の前から消えろ」

「酷いこと言うなよ、別にお前に危害を加えるつもりはないしさ」

「なくても、味方じゃないんだろ？」

「まあ……そうなる、かな？」

「だったら集中して練習できんな、だから帰れ」

アースティを無視して射撃練習に戻る。

銃声を抑えた音が辺りに響く。

「……」

「……あのさ、アースティ」
「ん？」

「黙って見られても困るんだが……」

「……肩の力を抜け」

「は？」

アースティの方を向き直る。

「肩に力が入ってるんだよ」

「……アドバイスか？」

「そうだ、あの方が一目置かれているんだ、こんなへなちよこ野郎じゃあの方の面目が保てん」

「はあ……前から思ったんだが、あの方って誰？」

「……いずれわかるさ」

「？」

俺に薄く笑いかけ、この場を離れていく。

「……ああ、そうそう、言い忘れてた」

「今度はなんだ？」

「デカブツの弱点は頭だ。じゃあな」

「えっ、ちょ……またどっか行きやがった……」

あいつ、何者なんだ？

気を取り直して射撃練習をする。

「肩の力を、抜け……か」

アースティに言われた通りにしてみると、三発撃って三発とも木に当たった。

「……………」
「……ひろ？」
「ん？ かな」

茂みの中から鹿波がやって来た。

「なにしてるの？」
「射撃練習だよ」

そう言いながらドライブを解除した。

「真面目だね」
「そりゃな、今のままじゃ生き残れなさそうだしな」
「だよね……私達が力不足だったからあの時、魔物三体に防がれたんだよね」
「ああ……」

力があれば三体ごとき、貫通できたかもしれない大技だった。

「がんばらないとね」
「ああ」
「……それにしてもさ」

鹿波は一番大きい木にもたれ掛かり、夜空を見上げた。
風で小さくなびくオレンジリボンとそれでまとめられた黒髪。
俺は不覚にも見とれてしまった。

「……静かだね」
「そうだな……」

「まるでひろと二人っきりの世界にいるみたい……」
「……そう、だな」

俺はゆっくり鹿波に近づき、鹿波に覆い被さるように両手で木を触る。

「……」

上目遣いで俺をみつめる二つの瞳。

「……どうしたの？」

「いや、なんとなく……」

「あっ……」

両手を鹿波の身体に回し、優しく抱きしめる。

そして鹿波の耳元でこう呟く。

「……あの時はありがとう」

「えっ、あの時？」

「ああ、山本のインパクトショットを防いでくれた時だよ」

「ああ……いいよ別に。むしろさっきはありがとう、私を守ってくれて……」

鹿波の両手が俺の背中を通り、肩に手がのる。

そして、そのまま鹿波が手に力をいれながら密着させていく。

「……あつたかい」

「かなも……」

今、この時だけ時間が緩やかに感じた。

鹿波の温もり、匂いを感じながら、目をゆっくり閉じた。

*

ラットと雅啓を馬車に残し、村の目の前に来ていた。

「（番兵は二人ですね）」

「（ああ、マヴィが草の音をたてたらミッションスタートだ）」

健治と息を殺して様子を見る。

（カサカサッ）

「ん？」

「どうした？」

「いや、草が不自然にこすれる音が……」

「様子見てこい」

「ああ」

ゆっくりとした足取りで俺達の方に向かってくる。

「（……きた）」

俺は右手にハンドガンを逆手ナイフのように持ち、銃剣を出す。

俺達に気づかず通りすぎていく番兵。

俺は気づかれないように番兵の背後に近づき、番兵の口を塞ぐ。

「！？」

「悪く思っなよ」

そのまま銃剣で頸動脈を斬る。

噴き出す血に気をつけながらゆっくりと地面に置く。

「……あいつ、遅いな」

「（先輩、もう一体が来ました）」

「（よし、ついでに血祭りにあげてやる）」

「ん？」

「（つて、先輩、このままじゃ見つかってしまいます！）」

文字通り俺達めがけて来ていた。

「（慌てなくても大丈夫だよ）」

「サイレンショット」

遠くの方からSAを唱える声が聞こえ、こちらにきた番兵は頭を撃ち抜かれていた。

「（さっ、こいつをさっさと隠すぞ）」

「（は、はい）」

健治と協力して番兵を草むらに隠す。

「うまくいきましたか？」

少し息を切らしたマヴィがやってきた。

「ナイススナイプだ、おかげで計画は順調だ」

「えっ、もしかしてさっきの、マヴィさんですか？」

「はい」

「すご、結構距離あつたんじゃ……」

「まあ、ロボットだからな、レンズをズームしたら遠くのものも見
えるみたいだぞ」

「へえ……」

「さて、行きますか」

「はい」

村に侵入した俺とマヴィと健治は、息を潜めながら村の中を散策する。

「村、というか、野営地みたいですね」

「ああ、尚更りる達がいるかもしれないな」

健治と話ながらハンドガンにサイレンサーを取りつける。

その時、村の外から銃声が数回響いた。

「（時間通りです）」

「（ああ、流石だな）」

さっきの銃声で村の中は騒然とする。

「なんだいまのは!？」

「わからん、同胞が襲はいつからわれたかもしれん」

「よし、様子を見てこよう」

「（……これで半分いなくなったな）」

「（はい。宏樹様、いきましよう）」

マヴィに小さく頷き、動き始める。

魔物に気づかれないように村を素早く散策したが、連れ去られた人達がいた形跡はなかった。

「（……戻るか）」

「ん？ 誰かいるのか？」

「「「!？」」「」」

慌てて物影に隠れる。

ハンドガンを強く握りしめ、待ち構える。

「……」

様子を見てみると、魔物は俺達の丁度反対側を覗きこんでいた。

このままじゃ、見つかる。

そう思った俺は銃口を魔物に向ける。

……動くなよ、あと、当たれよ。

トリガーを引く。

銃弾は奴の頬をかすめた。

「っ、誰だ！」

「(しまった!)」

こんな時に外してしまうなんて!

この場を逃げようとしたが、魔物にバレてしまう。

「人間が侵入したぞっ！」

「ええい、バレたなら！」

サイレンサーを外しながら銃剣を出し、魔物の腹部を突き刺す。

そのまま零距离射撃で撃つ。

「先輩、こちらにも魔物が！」

俺の方向にも魔物がどんどんやってくる。

「っ、各自応戦! 突破口を開けた方から脱出する!」

「了解」

健治は二丁のサブマシンガンを持って弾幕を張る。
マヴィはサブマシンガンを持って俺と一緒に応戦する。

「くっ、これじゃあこちらが不利だ」

「健治、嘆くな」

俺が外しさえしなければこんなことには……。

「……大丈夫ですよ」

「えっ？」

サブマシンガンで撃ちながらマヴィが呟く。

「別に誰も宏樹様を責めたりしませんよ、誰だってミスはありますから」

「……そう、かもな」

空いてる左手にもハンドガンを持つ。

「だけど、大事な時にミスをしたのは事実だ、巻いた種は、自分で刈る！」

「宏樹様！」

「スライドダツシュ！」

魔物の背後に一瞬で回り込み、頭を撃ち抜く。
横からきた魔物の攻撃を避け、銃剣で斬る。

「よし、今だ、突破するぞ！」

「は、はい！」

「了解！」

「行かせないわよ！」

「お前は、マリナか！」

「ご名答」

マリナと数体の魔物が立ち塞がる。

「さっ、行きなさい、番犬よ！」

「ガルルツ！」

四足の魔物二体がこちらに向かってくる。

「くっ、速すぎて狙いが……」

他の二人も狙いが定まっていなかった。

俺を含め、射撃中心の装備だから接近戦に持ち込んでも不利か……。

…。

「ふふっ、止まってる死ぬわよ」

「きゃー！」

「マヴィー！」

マヴィーはとつさにスナイパーライフルでマリナの攻撃を防いだ。腕の鋭い刃でライフルは真っ二つになった。

「ちっ、よくも！」

「ピーストウルフ」

「ガルツ」

「ぐわっ！」

四足の魔物がこちらに体当たりを繰り返して、吹き飛ばされる。

「グルッグルッ！」

「っ……っ」

俺に馬乗りになり、首に噛みつくようにする。
噛みつく瞬間に銃剣で押さえる。

「くっ、どけよ！」

もう片方のハンドガンで魔物の身体を撃ち抜く。
そのままともえ投げで魔物をどかす。

「マヴィー！」

「ひ、宏樹、様……」

「ふふふ……恐怖にかられた娘は、殺しがいるねえ！」

マリナの攻撃をシールドで防いでいた。

「お前も趣味悪いんだよ！マジックショット！」
「当たらないわ」

俺の攻撃をバックステップで避けられる。

「健治、いまだ！」

「ソニックショット！」

健治のハンドガンから発射された銃弾は、従来の弾のスピードを超越した速さで突き進み、マリナの硬化よりも速く身体を撃ち抜い

た。

「ぐふっ……」

よろけるマリナに俺とマヴィは銃口をマリナに向けた。

「マジックショット！」

同時に放たれた魔法の弾はマリナの心臓と頭を撃ち抜いた。

「……」

「倒せ、ましたね」

「よし、勇樹達にも撤退を……」

フェアリーを使って連絡しようとした時だった。

「うわっ！」

目の前に勇樹が豪快に吹き飛ばされていた。

「えっ、勇樹!?!」

「勇樹様！」

「せ、せせせ先輩！」

「健治、どうした？」

「あ、あれ……」

震える手で指差した先を見る。

「なんだよ、あれ……」

非常に大きなゴブリン。
パツと見た感じ、ゴブリン三体分の大きさ。

「まさか、アレに勇樹が……」
「んあ？」

でかい魔物がこちらを見下ろす。

「くっ……他の皆は……」

勇樹に近づきながら辺りを見回す。

「そんな……」

ボロボロになって地面に突っ伏していた。
だが、氣息はあるみたいだ、立つ氣力がなくなっただけか。

「！ マリナアア！」

地響きをたててマリナの屍に近づくとでかい魔物。

「かな……皆……っっ！」

でかい魔物を睨み付ける。

「お前達が……マリナを殺ったのかあああああ！」

耳の鼓膜が潰れそうな咆哮に耳を塞ぐ。

「殺ったらなんだ！ お前だって……皆を！」

「ルコ、お前達を、許さない！」

ルコというやつは俺に向かって拳を振り降ろす。
それをバックステップで避けるが、凄まじい地震により、うまく
着地できず、しりもちをついてしまう。

「しまっ、ぐわっ！」

ルコに捕縛されてしまう。

「へへへ、今からマリナの敵をとってやる……」
「うっ……ぐっ……」

締め付けられる力が徐々に強くなり、身体全体に痛みが走る。

「手の、感覚が……」

両手に力が入らなくなり、ハンドガンを二つとも落としてしまう。

「うっ……つあああぁ！」

「宏樹様！」

「先輩！」

マヴィと健治の叫び声が耳に響く。
意識が……飛びそうだ。

「うっ……あ！」

うっ伏せになっていた鹿波が顔を上げて俺を見る。

「そんな……ひろっ！」

鹿波の泣き叫ぶ声を最後に意識が落ちた。

意識が戻った時、かすかに誰かが俺の名を呼んでいた。

「……きー」

き？

「大丈夫だよ！」

「えっ！」

目を開く。

「ファイアウィップ！」

鞭むちに炎をまとい、俺を握っているルコの右手に鞭が絡まる。

肉が焼けるような音と共にルコが痛みで悲鳴をあげる。

その拍子に一瞬握る強さがきつくなっただが、その後ゆるくなり、解放された。

そのまま地面に着地するが、力が入らず膝から崩れ落ちてしまう。

そして俺の前に人の気配を感じ、顔をあげた。

長くてきれいな赤髪、俺と同じブレザーに袖を通し、青の服により、赤の髪をより一層引き立てる。

「大丈夫？ ひっきー？」

「中川……涼風すずか」

中川涼風は俺の友達だ。

「よ、よくも……」

体制を立て直すルコ。

「ひっきー、ちょっとそのまま置いてね
「？」

涼風は、俺の目の前で手をかざし、何かを唱えた。

「ヒーリング」

すると、俺の足元に輝く魔方陣が描かれ、それが上に上がっていき、

「……力が入る。涼風、これは……」

「この魔法は疲れなどを取り除く魔法だよ」

「へえ、ありが……」

「ひろの疲労を取り除く、なんちゃって」

「……後でツッコミという名の制裁を下してやるから、とりあえず、今の状況をなんとかしないと」

「うん」

涼風のおかげで身体も軽い。

「ルコ、許さない！」

「いくよ、ひっきー！」

「ああ！」

左腰と背中の中のショートブレイドを両手で抜く。

その勢いで持ち手の端同士をくっつけ、一回回す。

両剣状態になったブレイドを右手に持ち、ルコに向かって突き進む。

「スライドダッシュ！」

一瞬でルコの懐に近づき、ブレイドで足を斬りつけるが、斬れることはなかった。

「こいつも皮膚を硬化させられるのか!？」

「ん？ そんな武器でルコ、斬れない！」

「だったらコレはどうかしら！」

涼風が高くジャンプし、左手にビームの短剣を二本持っていた。

「貫け！ ダガーストライク！」

腕を振り、短剣を投げつける。

投げられた短剣はどんどん加速していき、ルコの腹部を貫通させた。

「ひつきー、今のうちに私が開けた腹に！」

「わかった！」

俺も飛び上がり、ブレイドを腹部に空いた穴目掛けて突き刺す。

しかし、突き刺す直前に穴が塞ぎ、弾かれてしまった。

「残念」

「!？」

左からルコの拳が迫る。
それを涼風が再びファイアウィップで攻撃した。

「あついつ！」

「ひつきーは、殺らせないから！」

「助かった」

「いえいえ」

「しかし、何が弱点なんだ……ん？」

ふと、頭を過つたのがアースティの言葉だった。

『デカブツの弱点は頭だ。じゃあな』

「頭……涼風」

「なに？」

「今から踏み台にしていいか？」

「は？ なにをいきなり……」

「あいつの頭まで飛びたいんだよ」

「わ、わかった」

涼風が頷くとルコが攻撃してきたので二人は同時にジャンプして避ける。

「ひつきー！」

「よしー！」

涼風が両手で足場を作り、俺はその足場に両足をつける。

「いつけえー！」

涼風の手を押し出す力と俺の足のバネを使って飛び上がる。

「えっ？」

見上げるルコに対して両剣ブレイドを下に向かって構える。

「くらえっ！ マジックサーベル！」

SAを唱えると、ブレイドが光輝き、ショートブレイドの二倍くらいの長さになる。

ルコの頭めがけてマジックサーベルを突き刺す。

「ぐわあああ！」

「うっ」

凄い勢いで血が吹き出し、俺の顔面や上半身にかかる。

視界が真っ赤に染まりつつルコの手を見ると、震えながらも、こちらに近づいていた。

俺はブレイドを分離させ、右手で逆手に持つ。

「くたばれ！」

勢いよくブレイドを頭に突き刺す。

「あああああ………」

ルコは力なく膝から崩れ落ちた。

「ふう………」

「ひっきー、凄い返り血」

「そっだな」

(アンドライブすれば元通りになるから)

「そっか、アンドライブ」

ドライブを解き、自分の身体を見る。

「ホントだ、血がついてない」

再びドライブする。

「さてと、奴等が来る前にここを離脱しようぜ」
「すず」

「あ、みは、回復した？」

「うん、最低動けるようには……宏樹君？」

「天坂美春もいたのか」

「うん、みゆもいますよ」

そう言いながらメガネをクイツとあげた。

マヴィと健次が勇樹と進也を支えながら俺達と合流した。

他のメンバーも足を引きずりながら合流した。

「それじゃあ皆にホバーをかけますから、離脱しましょう」

美春が一人一人に魔法のホバーをかけていく。

「すず、魔物達が戻って来てるよ」

ヘアバンドをつけた女が走ってやってくる。

「そっか、急がないと」

「……宮本深雪までいたんだ……」

「むっ、あたしがいちゃ悪い？ 宏樹君」

機嫌の悪い感じで答えた。

「いや、別に。とりあえず急ごう」

俺達は魔物が来る前に村から離脱した。

*

なんとか馬車まで逃げてこられた俺達は一息いれることなく移動を開始した。

俺と涼風は同じ馬に乗った。

「ふう、それにしても助かったよ、ありがとう、涼風」

「いえいえ、当然のことをしただけだから」

「でも、結局りるとまなは居なかったな……」

「えっ、りるちゃんがどうしたの？」

「いや、魔物に拐われてしまったんだ」

「そっか……私も手伝おうか？」

「いいのか？」

「うん、だつてひつきーの親友だもん」

「……そっか」

「あ、そうだ、あと少し進んだら風斗ふうとが待ってるはずだよ」

「風斗？ 風斗も一緒だったのか」

風斗とは涼風の弟だ。

まあ、信用できる後輩だ。

「うん」

……それにしても、りるとまなは一体どこにいったんだ？
そんなことを考えながら夜道を突き進んだ。

【第二章・潜入終わり】

第三章 選択

……なんだか地面が冷たい。

「っ……」

目を開けると、辺りは真っ暗でなにも見えない。

けど、横を見ると、青い制服に身を包んだ女の子が倒れていた。私は意識がもうろうとしつつも、その女の子の身体を揺すった。

「大丈夫？ ねえ……」

「うんう……ん、まな、ちゃん？」

「うん、りるちゃん、ケガはない？」

私は友達である藤山里流葉ちゃんの身体を軽く調べる。

「……外傷はなしか」

「うん。それにしても……ここはどこだろ？」

「室内つてのはわかるんだけど……」

私達が元々どこにいたのかすらわからない。

「お目覚めのようですね」

突然部屋内に男の声が響く。

「誰!？」

私の声も無駄に部屋中に響く。

それと同時に部屋内に明かりがつく。
突然の光に私は眩しくて目を細める。

次第に目が慣れてくると、前から赤い制服に身を包んだ男が歩いてきていた。

「お前は……」

不気味な笑みを見せる男は、口を開く。

「はじめまして、藤山里流葉さん、橋本麻奈美さん……まあ橋本さんははじめましてじゃあおかしいですね」

「岩沢、宗太……」

「まなちゃん、知り合い？」

「え、ええ……一応ね」

りるちゃんの問いに、曖昧に頷く。

私の記憶の中に岩沢との良い思い出なんてまったくないけど……。岩沢はメガネをクイツと持ち上げてこう言った。

「早速ですが、お二人方に、選択権を与えましょう」

「その前に、ここはどこなの？」

「答える権利がないですね」

「……そう、で、選択権とは一体なにかしら？」

「選択肢は二つ、一つは僕のいいなりになる。もう一つは奴等の奴隷になるか」

「なんであந்தのいいなりに……ちょっと待って、奴隷って一体なんなの？」

「言葉の通りです。あ、『性』が付きましたね」

「えっ!？」

「なんだと……じゃあ、奴等ってのは一体誰？」

「ヒューマンハーフ族のゴブリン……ですよ」

「ゴブリン……って」

「人とは異なる者です。それも大量のゴブリンに犯されますねえ」

「っ……」

「で、あなたはどっちを選ぶんですか？」

「まなちゃん……」

不安そうに見つめるりるちゃんに、私は唇を噛みながらりるちゃんの手を握る。

りるちゃんの手はブルブルと震えていた。

岩沢が提示してきた選択肢はどれも私達にとって不利益。

「……他に選択肢はないの？」

「ないですね……ただ、僕のいいなりになるんですしたら命の保証はします」

「命の保証？ どういうこと？」

「まあゴブリンの性奴隷ですからね……ゴブリンの性的欲求は人間の何十倍ですから、それが一斉にくるんですから……」

「身体が持たない、と？」

「そうですね」

「……女の子が居るのにその話題を出すなんてね」

「仕方ありません、僕は事実を言っただけです」

「……」

それにしても、状況がまったくわからない。

今私達はどこにいるのか、どういう世界にいるのか……。

「さあ、そろそろ決めてもらいましょうか」

「私は……あなたに……」

「まなちゃん！」

「ふっ……」

岩沢をキツと睨み付け、構える。

「歯向かう!」

「無理ですよ、グラヴィティフィールド」

「っ!?!」

突然私達の周りに薄暗いオーラが出てきて、凄まじい重力が身体全体に掛かる。

「っ、な、何が……」

四つん這いになり、顔を必死になって岩沢に向ける。

「あなた達の周りに通常の数倍くらいのGがかかっています」

ゆっくりとした足取りで私に近づく。

「今は四つん這いですけど、あなたにGを追加すれば……」

「や、やめ……ぐっ!」

四つん這いで踏ん張ることができず、地面に突っ伏してしまふ。

「ふふっ、橋本さんが苦しそうに歪む顔……最高ですね」

「い、岩沢っ!」

「……調子に乗るなよ」

「っああああ……」

「ま、まなちゃん……」

身体全体に体験したことない重力が襲う。
最早、痛みしか感じられない。
重力つて、こんなに辛いものなんて……。

「さて、藤山さん」

「な、なんですか……?」

「結構かわいい顔立ちですね」

「そんなこと……ないです」

「彼氏とか、いるの?」

「いますよ……」

「そう、キミもリア充というわけか」

「くっっ」

「い、岩沢……りるちゃんには……」

「ふはは、最高の眺めだな、なあ、咲子?」

「そうね……」

柱の影から岩沢と同じ制服を来た女が現れる。

「橋本麻奈美、悪く思わないでね」

「石田、咲子、つあっ!」

赤髪をなびかせながらやってきた石田は、私のお腹を強く蹴った。
気持ち悪い……。

「こういう奴等は、ゴブリン達の餌にしとくのが充分よ」

「そうだな、僕のお情けも無意味だったみたいだし……ゴブリンナ

イト

「はっ」

「なにか?」

「こいつらを別々の牢屋に閉じ込めておけ」

「はっ」

鎧に身を包んでいて、何者かはわからなかったが、こいつらもゴブリンなんだろう。

私達にかかっていた重力がなくなり、ゴブリンに引っ張られ、岩沢達と別れた。

*

「早く入れ！」

「……」

強引に牢屋に閉じ込められる。

薄暗い牢屋内を見回すと、十代から二十代の女性ばかりが生氣なく座り込んでいた。

息絶えた者がはしつこのほつに追いやられていた。

正直、人間が暮らすには環境が悪すぎる。

「あなた、無事だったの？」

「えっ、あなたは……？」

一人の少女が立ち上がり、私の元にやって来る。

暗闇の中でもはつきりとわかる銀色の髪で、長さは肩にかかるかからないかの長さ。

「私はポーラ・ヴィナル」

「ヴィナルさん……」

「ポーラでいいわ」

「……ポーラさん、私は橋本麻奈美です」

「麻奈美ね、よろしく」

「あ、はい、よろしくお願ひします……」

「そんなかしこまらなくてもいいよ。それにしても、麻奈美、スモールフェアリーいるの？」

「はい？ スモールフェアリー……ですか？」

「うん、人に宿る小さな妖精……それがスモールフェアリー」

「はぁ……」

「あれ、疑ってるのかしら？」

「ま、まぁ……」

「魔物がいる世界ですもの、妖精がいてもおかしくないでしょ？」

ほら、丁度あなたの頭の上に乗ってるよ」

「頭……？」

そう言いながら自分の頭を触ってみる。

頭のとっぺんになにかが寝そべっているのか、人の感触がした。

私はそれをつまんで目の前に持ってくる。

「……ホントだ」

つまんでたのが、丁度妖精の足だったので逆さ吊るしになっていた。

私のような手のひらサイズの女の子が、逆さま故にスカートがめくれ、必死に押さえている行動が妙にかわいかった。

「は、早く下ろしてください〜！」

「あ、うん、ごめん……」

右手の平に妖精を置く。

「妖精って言うより、デフォルメの私？」

「まぁ、そうね、麻奈美並にかわいいスモールフェアリーね」

「か、かわいいのかな……？」

「でもよかった、ドライブできる人で……」

「ドライブ?」

「うん、スモールフェアリーから見て宿った人間を『操る』という意味らしいの。ドライブすることで私達人間は武装化することができるの」

「武装化……それじゃあゴブリンとかという奴等にも対等に戦えるということ?」

「対等に戦うにはそれ相応の実力をつけなきゃならないけどね。まあいいわ、ドライブ」

ポーラさんがドライブと言うと、ポーラさんの足元に白い魔方陣が描かれる。

その魔方陣は高速で回転し、上に上がっていく。

「……本当に武装化しちゃった」

「まあね。麻奈美、あなたに選択肢をあげる」

「選択肢……」

「そう、魔物……ヒューマンハーフ族に抗うか、このまま素直にヒューマンハーフ族に身体を汚されるか……麻奈美はどっちを選ぶ?」

「えっ……」

「まあ、どの選択も過酷なものだからね、時間はそんなにないけど、少しだけ考える時間をあげるね」

「……」

「私はちよつと用事があるから」

「用事って、ここ、閉じ込められてますよ?」

「ドライブした私は瞬間移動ができるから」

「瞬間移動? それができるなら脱出できるんじゃない?」

「そうだけど……捕まった皆を裏切るわけにはいかないから……」

「……仲間思いなんだね」

「まあね」

「……決めた」

「えっ？」

「私、ヒューマンハーフ族に抗う」

「本当にそれでいい？ 命の保証はしないよ？」

「ええ、どうせ後者を選んだところで命の保証はないしね」

「そりゃそうだね、改めてよろしく、麻奈美」

「ええ、よろしく、ポーラ」

握手を交わす。

「それじゃあ、そのまま私について来てね」

「へっ？」

「テレポート」

私の手を握ったまんまでどこかに飛ばされてしまった。

【第三章・選択終わり】

第四章 覚醒

「ん、アレじゃないのか？」

「そうそう、風斗〜！」

涼風達と合流した俺達は、一人で待機している風斗とも無事合流できた。

「姉貴、それに、宏樹先輩」

「よっ」

涼風の弟でりるとは友達でもある黒髪少年、中川風斗。

「つてか、結構人いますね」

「ま、まあな、お前つて優等生っぽいし、多分空気扱いされるかもな」

「空気は酷すぎですよ」

風斗と話していると、風斗の後ろに見慣れぬ物が二台あった。

「なあ、風斗、後ろにあるやつは？」

「ああ、ホバークラフトですよ、荷台付きの」

「へえ、なかなかカッコいいじゃん」

「そうですね。あ、そうそう、ここからもう少し進んだところにクラミナという町がありますよ」

「そっか、もう少しか……じゃあさっさと参りますか」

風斗を加え、再び歩みを進める。

ホバークラフトを操る風斗を見ると、二台のホバークラフトが横

に連結されていた。

「へえ、合体機能もあるんだ」

「はい、コレ、結構ハイテクなんですよ」
「凄いな」

感心しつつ、話題をマヴィに振った。

「凄いといえばマヴィも凄いよな」

「えっ、私ですか？」

馬車を操るマヴィは首を傾げる。

俺は乗っている馬ごとマヴィに近づき、こう言った。

「うん、遠距離からの狙撃、なかなか凄いよ」

「そうでしょうか……」

謙遜しつつもマヴィは少し照れていた。

「あゝあ、俺にも銃の命中率がもっと高ければなあ……」

「宏樹様ならきつと上手くできますよ」

「そうかな……」

ボーツとしながら目の前を見ると、俺が乗る白い馬の頭にスモールフェアリーが現れた。

「お前、唐突に出てくるよな」

「神出鬼没と言っただぜ、それ」

「お前が言っちなよ……で、なにか用か？」

「ああ、言い忘れてたことがあってな」

「なんだよ」

「ドライブフォームしたお前のメガネな、実は射撃をアシストする機能があるんだよ」

「まじで？」

「ああ、スナイプショットほどじゃないが、使った方が断然いいぜ」

「それ、先に言おうぜ」

「すまん、忘れてた」

「まあ、いいけどさ……ん？」

突然、クラミナの町がある方向から黒い煙が舞っていた。

「まさか、魔物が……」

「宏樹、とりあえず急いだ方がいいぞ！」

勇樹の言う通りだったので頷く。

その直後だった。

「見つけた！ 人間どもだ！」

「宏樹先輩、後ろからさっきの残存部隊が！」

「なんだって！？」

後ろに振り返ると、羽を生やしたゴブリンやら四足の魔物、ビー
ストウルフと言ったか、そいつらを引き連れ、タリカがいた。

「マリナとルコを……よくもっ！」

「くっ……」

どうする、町に直行するか、タリカとこの場で戦つか……。
俺の選択は……。

「馬と馬車は先行して町の安全を確保、ホバークラフトは後ろからきた敵を迎え撃つ！」

「了解！」

「かな、俺の馬……バルドを頼む」

「わかった」

かなにバルドを預け、俺はホバークラフトの荷台に飛び乗る。

「ドライブ」

「クロスフォーム」

ハンドガンを両手に持ち、構える。

「早速スモールフェアリーが言ってたアシストを使うか」

メガネの右レンズがスナイパーライフルのスコープを覗いているような視界になる。

（右レンズは右手のハンドガンのスコープになる、左は左手のハンドガンだ）

「おっけい、だいたいわかった、風斗、涼風、操縦頼むぞ」

「任せなさい」

「先輩の期待に応えてみせます！」

連結していたホバークラフトは分離し、風斗が操るホバークラフトには俺と美春、涼風が操るホバークラフトには深雪が乗っていた。

「一気に攻めるぞ、突撃っ！」

タリカの号令によりビーストウルフは走るスピードを上げ、羽付

きゴブリンは下半身に怪しい装置をつけ、ジェット噴射で加速してくる。

「くっはっはっ！ メガネ！ 今すぐその首を斬らせてもらおう！」

タリカも下半身に装置をつけ、急加速してくる。

「ちっ、各自応戦！」

俺と深雪の二丁銃弾幕により、なんとか一定の距離を保っていた。しかし、慣れぬ荷台での戦いで思うように狙いがつけずらい。

「こつも当たらないなんて……！」

「宏樹君、上から矢が飛んでくる！」

「なに？」

深雪に言われ、羽付きゴブリンを見る。

羽付きゴブリンが矢を大量に放っていた。

「げっ、あんな数、防ぎきれない！」

「任せて、バリアフィールド！」

美春が杖を高く掲げ、魔法を唱える。

すると、美春を中心に広範囲をバリアで包み込む。

矢はそのバリアに当たり、俺達に降り注ぐことはなかった。

「ナイスフォローだ、美春」

「いえいえ、宏樹君も頑張ってたね」

「ああ！」

美春の期待に応える為、より射撃に集中する。

「ロック！」

右レンズのスコープを見ながら狙いをつける。

「当たれえ！」

トリガーを引く。

「ぐう！」

羽付きの胸を撃ち抜く。

一発一発を集中して当てていく。

「あのメガネ、急に当ててきやがった……ふふ、面白い！」

「タリカ！」

俺に向かって突っ込んでくるタリカに対して、俺は銃口を向けトリガーを引く。

「！ 弾切れ！？」

「はっ、もらった！」

荷台に飛び乗ってきたタリカは右手の爪で俺に攻撃してくる。

俺はそれを左のシールドで受け止める。

「弾がなくなつて、マジッ……」

銃口を向けようとしたらタリカに腕を押さえられる。

「っ…………」

「やるわね…………」

両者睨み合つ。

「宏樹君、今助け…………」

「俺に構うな！ 防御魔法に専念してくれ！」

「わ、わかつた…………」

しかし、この狭い荷台で戦うのは少々厳しい。

…………けど、やるしかない！

押さえられている右手のハンドガンから銃剣を出し、逆手に持ちかえる。

「マジックサーベル」

「なにっ!?!」

銃剣から魔法の刃を出し、タリカに突き刺す。

しかしタリカの皮膚硬化により、傷一つつけられない。

「甘かつたわね」

「どうだか…………」

一瞬だけ気が緩んだのか、シールドで受けていたタリカの右手の力が弱くなった隙に払いのけ、すかさずずっと持っていた左ハンドガンでタリカの腹部を撃ち抜く。

「ぐっ…………」

怯むタリカに銃弾を三発浴びせる。

「トドメだ！ マジックサーベル」

そのまま両手の銃剣で突き刺す。

「に、人間の分際でええ！」

「その人間に、お前は負けるんだ……マジックショット！」

二丁のトリガーを同時に押し。タリカを荷台から吹き飛ばす。

「よし、指揮官は倒した、そのまま先行してる皆と合流するぞ！」

「……おう！」「……」

残存部隊を少し残してしまっただが、今は二つに別れた部隊を一つにまとめないと。

*

俺達が町に着いた頃には既に戦闘は始まっていた。

周りには息絶えた人や、魔物と刺し違えて絶命してる人もいた。

「この町にはドライブできる人がいるみたいだな」

(そのようだな)

「ひっきー、皆が戦ってる」

「ああ、行くぞ」

ホバークラフトから飛び降り、ハンドガンでゴブリンを撃つ。

「大丈夫か、皆？」
「まあまあね」

澄ました表情で美希がそう言うが、額には汗が流れていた。

「そっか、けど、あんまり無理するなよ」

「あ……うん、わかってる」

そう言いながら美希は、太ももに装備しているダガー六本を手に持つ。

「行けっ、ダガービット！」

ダガーを上空に放り投げると、突然勝手に動きだし、羽付きゴブリンの元に直進した。

「美希、これって……」

「ごめん、今話しかけないで……」

「あ、ああ……」

(ダガービット……そのSAは頭で動きを描き、ダガーに指示を出す技だ)

なるほど、そりゃ額に汗くらいかくな。

「なら、俺も行くか」

ツインブレイドを作り、魔力を右手に集中する。

「ブレイド、ブーメラン！」

手首のスナップを利かせ、魔物達に投げつける。

「な、なんだ!?!」

「ぐわっ!」

魔物を斬りつけながら俺の右手に戻ってくる。

(ははっ、まさか独自に技を作るとは……)

「まあね」

「俺も負けてられないな」

勇樹が複数のゴブリンに向かって居合いの構えをとる。

「ミラージユ、ソニックブーム!」

刀を一振りする。

恐らく、「ソニックブーム」の強化版だろう。

音速波は残像を残してゴブリン達を真っ二つにした。

「でえい!」

深雪は槍二本を巧みに扱い、魔物を圧倒する。

「マジックアロー!」

背中同士を合わせた鹿波と美春の矢攻撃に、魔物は近づぐことが
できずにいた。

「もらったあ!」

そこを風斗と雅啓が次々と倒していく。

「ひっつきー、クロスフォーメーション行くよ！」

「あ、ああ！」

「クロスフォーメーション！」

二人の足元に魔方陣が描かれる。

二丁の銃剣を空高く投げ、涼風はクナイ二本を上投げる。

投げた四個の武器は、ゴブリンの両手両足に刺さり、動きを封じる。

「か、身体が、動かない!?!」

ゴブリンを中心に対角線に並ぶ俺と涼風。

俺はショートブレイドを、涼風はビームダガーを持ち、ゴブリンに突っ込む。

ゴブリンの前半分を俺が、後ろ半分を涼風が横切りする。

二人の刃が少しかする程度で、お互いがお互いの最初にいた対角線に止める。

「パラレル」

「スラッシュ」

「ぐわあああ!?!」

斬りつけたゴブリンは、上半身と下半身が分離し、その場に倒れた。

「やった、私にもできた」

「よかったな」

周りを見てみると、どうやら魔物どもを蹴散らしたようだ。

「ふう……」

ため息を一ついれ、皆を見回す。

「なんとか片付いたな」

「もしかして、この町を救ったのは、あなたたちですか？」

年老いた男性が数人のドライブフォームした男女を引き連れ、俺の元にやってきた。

「あ、まあ……はい」

「ありがとうございます！ もうダメかと思いました」

「は、あはは……」

素直に感謝、されとくべきなんだろうか？

「なんとお礼をしたら……ん？」

「……なんだか町の外が騒がしい」

「まさか、また魔物が……」

「わかりません。とりあえず俺達で様子を見てきます」

「で、ですか……」

「大丈夫です、任せてください。行くぞ」

町の人に馬車とラットを預け、俺達は町の外に出た。

*

「な、なんだ、この数は……」

町の外に待ち構えていたのは大量の魔物達だった。
大型トラックの荷台にも魔物が乗っていた。

「やるしかない……各自独自の判断で応戦！」

「……おう！」

「皆に素早さを、エリアホバー！」

美春が杖を上に掲げ、魔法を唱える。

すると、皆の足元が地面から少し浮き上がる。

「よし、行くぞ、皆！」

俺達が動き出すと、魔物達も動き出し、乱戦になる。

「敵の隊長は男のメガネだ、殺つてしまえ！」

「死ねえ！」

ゴブリンの剣を銃剣で受け止める。

「やられるわけには……いかないんだよ！」

受けた剣をどかし、すれ違いざまに斬りつける。

そのまま二丁のハンドガンでゴブリン二体の頭を撃ち抜く。

「な、コイツ！」

「どけ、邪魔だ！」

飛び上がり、攻撃を避ける。

そのままゴブリンの肩に足をつき、踏み台にする。

空中で前転しながらハンドガンで撃ち貫く。

「ガルルウ！」

「グシヤァ！」

着地した直後にビーストウルフ二体が俺に向かって飛びかかってくる。

俺は両手に持った銃剣ハンドガンを投げつけ、ビーストウルフに刺さる。

「当たれ！」

羽ゴブリンの矢を避ける。

そのままさつき投げたハンドガンを回収し、羽ゴブリンを撃つ。

「……数が多すぎる」

「ふっ、頑張るね、メガネの少年……」

俺の目の前に現れた鎧に身を包んだ魔物。
鎧の隙間からでもわかる鍛えられた身体。

「子供のくせに、よく頑張るよ、ホント……」

「死にたくないからな……」

「そうか……君は何故戦うのだ？」

「は？」

「死にたくないのだろう？ だったら戦わなければいいのに……」
「戦ってなくても……お前達が殺しにくる。だったら戦うしかないだろ。それに俺達にはお前達と対等に戦える力がある。だから皆を守る為に……これ以上悲劇は増やさない！」

「ヒーロー気取りか……滑稽な」

「なに？」

「俺達だつて無闇に人間を殺めているわけではない。素直に我々の要求に従えばいい話のこと……」

「その要求が、悲劇を生むんだよ！」

一気に踏み込んでショートブレイドで斬る。
しかし槍で受け止められる。

「怒りに身を任せていると、死ぬよ？」

「ちっ、黙れ！」

空いてる手でブレイドを抜き、斬りつける。
しかし、さっきの槍でそれも受け止められる。

「太刀筋が単調過ぎるよ……それじゃあ、死ぬよ！」
「なっ!？」

押し出され、吹き飛ばされる。
後転をして起き上がり、体勢を立て直す。

「なんて力だ……」

「さて、お話はこちらまで……覚悟しなっ！」

「くっ！ お、重い……」

剣に持ち変えた鎧ゴブリンの攻撃を避けることができずに受け止める。

「ふっ、対等に戦える力だと？ 非力過ぎるぞ」

「ぐっ……」

腹に重い蹴りが入り、前屈みになる。
そのまま顎にアッパーを受け吹っ飛ばされる。

「くっ……」

頭が揺れる……さっきのアッパーがもろに入ったみたいだ。

「トドメだ……ん？」

「見つけたああ、メガネエエ!!」

「タ、タリカ……!？」

左から凄まじい勢いで突っ込んでくるタリカ。
倒したはずなのに……。

「はははっ、死ねえええ!!」

「くそっ、足に力が……」

膝をついたままで立ち上がることができなかった。
タリカの鋭い爪が俺に襲いかかってくる。
……ここまでなのか。

「させない、マジックシールド!」

鹿波が俺の前に立ち、攻撃を防ぐ。

「邪魔をするなああ!!」

しかし、狂気と化したタリカを防ぎきることができず、マジックシールドが割れる。

「かな……」

俺の前で引き裂かれる鹿波。
血を大量に吹き出しながら俺の方に倒れてくる。
俺は倒れてくる鹿波を受け止める。

「かな、そんな……」

「……ごめん、ね」

「えっ……謝るのは俺のほうだろ……」

「……」

「こんな、こんなことって……」

そして、鹿波の身体に力が抜け、ぐったりとした……。

「か……かな、み……」

視界が涙で歪む。

「ちっ、小娘が邪魔しやがって……」

「……お前が」

「あ？」

「お前がかなを殺ったんだなあ……」

怒りしか出なかった。

タリカが憎い、今すぐ八つ裂きにしてやりたい。
殺す、タリカを……ぶっ殺す！

「……オーバードライブ」

（ひ、宏樹！？ それは……）

「早くやれ！ オーバードライブ！」

(ク、クロスフォーム……)

目の前の奴等を……生きては帰さん！

*

宏樹が教えてもいないオーバードライブを唱えたということは……
……もう意識はないのか……。

「……許さない、貴様等、皆殺しにしてやる！」

背中から生えた青いシャイニングウイングと呼ばれるエックス状
に広がる光の翼を羽ばたかせる。

「まずは……貴様からだ！」

青く光る目から残像を残しながら一瞬でタリカの背後をとる。

「なにっ!?!」

「死に損ないが、さっさと逝きな！」

「!?!」

両腰のショートブレイドでタリカを両断した。

(宏樹、俺の話を聞け!)

「はっ、弱いな……」

駄目だ、やはり俺の声が届かない。

「次は……お前だ」

「くっ、くっい！」

「ああ……今すぐ行ってやるよ」

再び一瞬でゴブリンナイトの目前に移動した。

「バカめ、こちらの……あれ？」

剣を振るが、そこに宏樹の姿はいなかった。

「遅いよ……ブレイドビット、ライフルビット」

身体中に装備していたショートブレイド、ハンドガン、サブマシンガン、アサルトライフルが自律機能を持って動き出す。

「な、なんだ、これは!？」

「お前みたいな下等に知る権利はない」

宏樹じゃないのは言動を聞けば确实だ、なんとか正気に戻さない
と。

(宏樹、自分を取り戻せ！ このままではお前の仲間がお前自身に
傷つけられるぞ！)

「断罪してやる」

「調子に乗るなよ！」

宏樹に突っ込んでくるゴブリンナイト。

突き出された剣先が宏樹の目の前で止まる。

「かつ……」

ゴブリンナイトの鎧の隙間に浮遊したショートブレイド六本が突き刺さる。

「今から公開死刑だ……」

ショートブレイドの力でゴブリンナイトがどんどん上に上がっていく。

そして、一定の場所で停止し、十字架のようにゴブリンナイトの身体を刺さったショートブレイドで動かした。

「さて……どうされたい？」

「くっ……」

「命乞いしたっていいんだぜ？　そしたら解放してやってもいいんだぜ？」

「貴様……」

「まあ、命乞いしたら貴様をぶっ殺してから解放してやるよ！　行け、ライフフルビット！」

不規則に動きながらゴブリンナイトの身体を銃弾で撃ち抜く。

「ぐわああああ……」

「存分に苦しめ……アサルトアタック」

各銃から銃剣が飛び出し、刺しては撃つ、また刺しては撃つを繰り返す。

そして、宏樹のアンカーシールドから隠しブレイドを出し、脳天から下に斬った。

「くっくっく……」

刺さっていたすべての武器が外れ、二つに別れたゴブリンナイトは重力に従って落ちていく。

それに追い討ちをかけるショートブレイド。

落下しながら刺し続け、最後に胸めがけて六本がすべて刺さり、地面に叩きつけた。

「あっはっはっは！」

宏樹とは思えない高笑いが辺りに響く。

魔物は勿論、味方でさえ宏樹に怯えていたのが目に見えていた。

「さて……掃除の時間だな」

魔物達を空から睨み付けたかと思うと、一気に加速していった。

「て、撤退するぞ！」

「皆殺しっていったる？」

背中を向けて逃げる魔物にも容赦なく斬りつけた。

辺りに魔物の断末魔と宏樹の狂った高笑いだけだ響く。

そして、三分もかからずに、大量にいた魔物を虐殺した。

逃げ延びた者、零……。

（宏樹、宏樹！）

「……………」

宏樹は殺られた鹿波の元にやってくる。

（止める、お前の大事な人じゃないのか！？）

「……………」

宏樹は鹿波の心臓辺りに右手をかざす。

「アライブ……」

宏樹が唱えた魔法、それは蘇生魔法だった。

鹿波の傷はあっという間に回復し、息もし始める。

「……」

蘇生を終えた宏樹は膝から崩れ落ち、オーバードライブが解けた。

「……なんとか、最悪の事態は避けたか……」

素直には喜べない、戦いだった。

*

気がついたらまず見知らぬ天井が視界に入った。

「……ここは」

「起きたか」

「スモールフェアリー……俺、一体なににして……」

「どこらへんから記憶にないんだ？」

「かなが俺を庇って……そうだ、かなは!？」

「大丈夫だ、隣のベッドで寝てるよ」

「えっ？」

スモールフェアリーに言われた通りに隣のベッドを見つめる。

鹿波は確かに息をして寝ていた。

「でも、なんでかなは生きてるんだ？ 確か、あの時に死んだんじや……」

「それが、助かったんだよ、お前の力で」

「俺の力？」

「ああ、オーバードライブでな」

「オーバードライブ？ なにそれ？」

「オーバードライブとは、最上級フォームのこと。リミッターが外れた状態とも言える」

「リミッターって……ドライブフォームよりも凄い力が出るってことか？」

「ああ……ただ、強大な力故に扱いが難しく、最悪使用者が暴走したり、死に至らしめる代物だ」

「死ぬ……」

「ただ、幸いにも味方に被害を出す前に魔力を使い果たしたみたいだからお前は生きてるし仲間も無傷だ」

「そっか……」

「しかしオーバードライブして死ななかったということは、スモールフェアリーが増えればなんとか制御できるかもしれないな」

「扱えたらかなり心強いが……」

扱えなかったら、死ぬ。

たとえ死ななかったとしても味方に危害を加えかねない。

「……オーバードライブ、今後発動しない事を祈るよ」

「そっか」

ドアが開き、涼風が入ってくる。

「あ、ひっきー！」

「よし」

「もう、心配したんだから！」

「すまんすまん」

「皆も呼んでくるね！」

「……はあ、騒がしくなるな」

【第四章・覚醒終わり】

第五章 戦闘センス

「……ここは？」

気がついたら薄暗い場所にポーラさんと一緒に立っていた。

壁はコンクリートでできており、なんだか少しひんやりしていた。

「ここは、地下迷宮……と言ったほうがわかるかな。本来、この場所は戦闘訓練等で使うの」

「あの、私達って今どこにいるんですか？」

「疾風学園よ」

「学園なんですか？」

「ええ、今は変わり果てているけどね。さっ、急ぎましょう」

「急ぐって、どこに？」

「他の牢屋があるところまでよ。私のテレポートでは範囲が狭すぎるからね」

「は、はあ……」

いまいち理解できない。

この世界は人間と魔物と呼ばれる者がいる。

そして、魔物が人間を虐^{しいた}げているということか。

「ん、ポーラ、アレは？」

目の前に紫の液体が動いていた。

「あれはコピーバブルン、あらゆる姿をコピーして形を変える生き物よ」

「敵……だよな、見つかってもいいの？」

「大丈夫、魔物とはまた違う奴等だから」

すると、ポーラは背中に装備した槍二本を手に持ち、コピーバブルンを攻撃した。

「麻奈美もドライヴフォームして」

「ド、ドライヴフォーム？」

「武装化のことよ、麻奈美は『ドライヴ』と云えばいい、後はスモールフェアリーがしてくれる」

「わ、わかったわ。ドライヴ」

「クロスフォーム」

すると、私の足元に赤い魔方阵が描かれ、高速で回転しながら上に上がっていく。

いつの間にか背中と腰に武器が装備されていた。

「これが、ドライヴフォーム……」

「じゃあ、いきなり実戦だけど、戦ってみたら？」

「いきなり過ぎますよ……じゃあこれで」

腰周りに装備していたスイッチ付きの小さな棒を手に持つ。

「ビームセイバーね、そのスイッチを押せば魔法の刃が出る」

「これ……あ、出た」

棒から黄色い剣が出てきた。

「じゃ、攻撃してみなさい」

「う、うん……それ！」

コピーバブルンに近づき、セイバーを振る。
すると、水が急速に蒸発していくように消えてしまった。

「あれ、倒したの？」

「ええ、コピーされる前ならすぐに消える。けど、コピーされると……」

「って、言ってるそばから液体がなんか形になってきたよ!？」

人のように二足の物体になった。

色は紫一色だけど……。

「こうなったら少し苦戦するかもね、私なら腕慣らしにちょうどいいけど」

「もしかして、私がいっつを倒すの？」

「ええ、危なくなったら助けるから。習うより慣れるよ」

「まず習ってないけど……やるしかない」

コピーバブルンの手が鋭い剣に形を変えた。

「集中すれば……」

コピーバブルンに踏み込んでセイバーを横に振る。

コピーバブルンはその攻撃を剣で受け止める。

「くっ、ならば……」

空いてる左手で背中 of 剣を抜き、振り下ろす。
切り口から液体が吹き出し、消滅した。

「へえ、とっさの判断としては上出来よ」

「そうですか？」

「うん、初陣で大抵つばぜり合いになったらテンパー傾向があるからね。もしかしたら麻奈美には戦闘のセンスがあるかもしれないね」

「べた褒めですね」

「そりゃ逸材だからね、麻奈美が。さっ、先を急ぎみしよう」

「はい」

途中、何回かコピーバブルンと戦いながら、目的地に到着し、再びテレポートした。

*

牢屋に入っては『作戦を早める』と伝えて地下迷宮に戻るを繰り返した。

「また、敵ね」

「うん、行くよ、ポーラ！」

形作られる前にセイバーで切り裂く。

「麻奈美、後ろ！」

「くっ！」

形作られたコピーバブルンの剣が斬り上がる。

それをジャンプで後ろに反らし、コピーバブルンを飛び越える。

そのままセイバーで両断する。

着地すると、そのまま別のコピーバブルンに近づき、斬る。

「えっ！？」

しかし、その攻撃は避けられてしまう。

「危ない！ えっ!?!」

私はとっさにばく転し、攻撃を避ける。

「スピードブレイカー！」

魔法の力により、高速でセイバーを振り下ろす。

「ふう………なんとか全滅したね」

「……」

「ポーラ？」

「す、凄いよ！」

「えっ？」

ポーラは突然私の手を握り、ブンブンと振る。

「私でもできなかったばく転をやるなんて、しかもSAを使うなんて……私、凄い子をスカウトしたかもしれない」

「あ、あはは………先、急ぐんですね？」

「あ、そうだった。ごめん、思わず興奮しちゃった………急ごっか」
「うん」

目的地に着き、テレポートで飛んだ。

*

最後の牢屋にやって来ると、見知った顔を見かけた。

「まなちゃん？」

「りるちゃん……ここに居たんだ」

「麻奈美の友達？」

「ええ、彼女は藤山里流葉と言うの」

「よろしくお願いします」

「あ、うん、よろしく、私はポーラ・ヴィナル」

りるちゃんとポーラは握手を交わした。

「里流葉もスモールフェアリーが宿ってるわ」

「スモールフェアリー？」

「ええ、妖精よ」

首を傾げるりるちゃんに私は少しだけ笑ってしまった。

「な、なんで今笑ったの？」

「いや、なんでもないよ……ねえ、りるちゃんの後ろにいる女の子は？」

りるちゃんの腕にしがみつき、瞳に涙を浮かべて震えていた女の子。

黒い髪がさらさらときれいだから、恐らく捕まった時期は同じかもしれない。

「ああ、この子はルチア・マツシユビルちゃん」

「ルチアちゃんね、私は橋本麻奈美、りるちゃんとは親友関係よ」

そう言いながらルチアちゃんに視線を合わせる。

「そうなの？……よろしく、お願いします」

俯くルチアちゃんの頭を優しく撫でる。

「さて、本題を伝えるわね。『作戦を早める』」

それだけを伝え、私達は元居た牢屋に帰った。

*

「ポーラ」

「ん？」

「作戦って……ここを脱出する作戦のこと？」

「ええ、大脱走劇よ」

「へえ。具体的になんなの？」

「脱走したもん勝ち」

「……へ？」

「だから、逃げ出した人が勝ちなわけ」

「……それ、作戦なの？」

「仕方ないでしょ、非戦闘員が多いんだから。でも、闇雲に行動するわけじゃないの。ちゃんと非戦闘員は私が事前に教えたルートを通って逃げるから、私達ドライブフォームできる戦闘員はなるべく魔物を引き付けるわけ」

「ああ……てつきり適当に脱走するもんだと思ってたよ」

「いや、それは流石にないから……」

「ですよね」

牢屋内に少しだけ笑い声が出るんであった。

【第五章・戦闘センス終わり】

第六章 攻略戦前

「ひろ、朝だよ」

「んんうゝ……かな、おはよ」

「うん、おはよう」

身体を起こし、ゆっくりと伸ばす。

「なあ、かな」

「うん？」

「……ありがとう」

「えっ？」

なんのことが理解してないんだろう、かなは首を傾げていた。その仕草が妙に見とれてしまう。

「ど、どうしたの？ 顔になにかついてる？」

「ああ………ついでるよ」

「えっ、どこに？」

自分の顔を触る鹿波。

俺は鹿波の右手を握り、俺の方に抱き寄せる。

「えっ、ひろ………」

互いの吐息がかかる距離。

僅かだが、鹿波の頬が紅く染まっていた。

「あの時、俺を庇って………」

「い、いいよ、感謝しなくても……」
「いんや、感謝させる。ありがとう、かな」
「ど、どういたしまして……」

言い切ると、かなは俺の胸に頭を寄せてくる。

「は、恥ずかしいよ……」

「だったら離れたら？」

「……イヤ」

「どうなんだよ、つたく……」

悪態をつきつつも、鹿波の頭を撫でる。

鹿波の両腕が俺の背中にまわる。

「……ひろは、私が守るから」

「かな……はあ、女に守られる男ってもな。俺が、かなを守ってやる、絶対にな」

「ひろ……うん」

そして、誰が言ったわけでもなく、顔をゆっくりと近づけ……。

「おっはよ、二人とも起き……て？」

勢いよくドアを開け、美希が入ってきた。

互いの唇は僅か数センチ。

「……あゝお邪魔でした？」

「いや、別に」

美希は苦笑しつつ、「ごめんね」と言い残して部屋を出ていった。

「ふぁ〜あ、さて、朝食でもとるか」
「そ、そうだね……」

壊されてしまった空気を修復するのは止め、宿の食堂に向かった。

*

「疾風学園？」

宿の食事を取りながら、宿主の話しを聞く。

「ああ、最近、魔物達のすみかになっているんだ」

「魔物のすみか……か」

「ルチア……居るかな？」

「ラット……」

不安そうに聞いてきたラットに俺は笑顔を見せる。

「ルチアちゃんなら大丈夫だと思うよ、多分俺の妹達と一緒にいる
と思うし」

勿論、確証なんてない。

ただ、同じ奴等に同時に拐われたのだから、もしかしたら……。

「うん……」

「よし、次の目的地は疾風学園だな」

「まさか、本当に行くのか？」

「勿論です」

「しかし、ここから疾風学園はかなり距離があるぞ」

「そうなんですか？」

「ああ、歩いて半月、馬車でその半分、車でさらに半分と言ったところだ」

「車？ 車なんてあるの？」

美希がパンを食べながら聞いてきた。

「ん、あるぞ、知らなかったのか？」

「ま、まあ、そうなりますね」

俺は苦笑しつつ頷く。

車、この世界にあつたんだ。

「しかし、君達が疾風学園に向かうなら町の皆は協力すると思うぞ、てか協力するぞ」

「協力？」

「例えば移動手段を譲る……とか？」

「……く、車？」

「ああ」

「あ、でも、運転手は？」

「大丈夫、ちよつと講習を受ければ大丈夫だから」

「こ、講習だけ!？」

この世界は……講習受けるだけで車乗れるのか？

「まあ、16歳以上でないとダメだぞ？」

「なら大丈夫です。ここの大半は16歳以上です」

「そうか、なら早速受けよう」

気の早い宿主は俺達の食事を急かしながら講習を受けさせた。

ざつと二、三時間の講習を終えた俺達に町の人達が感謝の意味を

込めてパーティーを開いてくれた。

「まあ、酒飲め〜」

「いや、未成年ですから……」

最早お約束というやりとりを受けた俺達だが疲れを癒した。

*

次の日、俺達は町の門のところに来ていた。

「もう行ってしまふのか……」

町の人達は残念そうに言った。

「また、来ますよ」

「ホントか？」

「はい、いつになるかわかりませんが、必ず来ます」

「そっか……それは嬉しいよ」

俺達は四人乗りの荷台トラックとホバークラフトと馬を運ぶトラックにそれぞれが乗り、クラミナの町を出発した。

「「「……………」」」」

町の外は、俺がオーバードライブ時に殺った魔物達の無惨な屍がたくさんあった。

首がないもの、滅多刺しされたもの、原形を留めていないもの……。

「……やっぱり、俺がやったんだな……」

「ひろ……」

「仕方……なかったんだよな、かな……？」

「うん……多分」

「……」

魔物とはいえ、俺は酷い事をしてしまったみたいだな……。

「ひろ……元気ないね」

「えっ、そうかな」

「うん、浮かない顔してるし……魔物の事、気にしてるの？」

「まあ……」

「ねえ、ひろ」

「ん？」

「私が殺られた時、怒ってくれたみたいだね」

「ああ、だからこんなことに……」

意識がなかったとはいえ、これは流石にやり過ぎた。

「……嬉しかった」

「えっ？」

鹿波の顔を見る。

なんだか嬉しそうだった。

「それを聞いて……魔物には悪いと思うけど、とっても嬉しかった。ありがとう、ひろ」

「いや……」

俺に微笑みかける鹿波に対して、顔を反らしてしまう。

「んっ」

「!?!」

不意に頬から柔らかく、少し湿った感触が伝わる。
鹿波に向き直ると、顔を真っ赤にして苦笑していた。

「え、えへへっ……感謝のしるし」
「かな……」

急に鹿波をいじりたくなかったので、むちゃぶりしてみる。

「ふあゝあ。なんだか眠くなってきたなあゝかな、膝……」
「膝枕してあげようか？」
「へっ？」

意外だったので、すっとんきょうな声を出してしまった。

「どうか、むちゃぶりカウンターは」
「かなにはお見通しというわけか……よし、膝枕しろ」
「えっ、本当にするの？」
「当たり前だろ、女の子から膝枕のお誘いがきたんだから、ラッキ
ーって思っるのは普通だろ？」
「でも、幼馴染みなの？」
「だからどうした、幼馴染みって言ったって、しょせん俺達は男と
女だ。違うか？」
「うっん……」
「あれ、もしかして、宏樹は鹿波のことを異性として見てるの？」

不意にトラックの後部座席から美希が荷台に向かって頭を出した。

「えっ、そりゃ……」

言いかけてハツとなる。

「ほほ、まさかこんな白昼で、しかも他の人が居る前で愛の告白を!？」

「ち、違うよ、そんなんじゃ……」

「あれ、じゃあ、鹿波を遊び感覚で付き合っつと?」

「えっ……」

鹿波を始め、荷台にいるメンバーが冷めた視線を俺に送っていた。

「えっと……あーもう! かな、膝貸せ!」

「えっ、ええ!？」

「なにを驚いているんだよ、俺は眠いの」

「あ、ちよつと……」

鹿波の膝の上に頭を乗せる。

さっさと寝てしまおう、それが一番だ。

「……まったく」

鹿波の言葉は仕方なくといった感じだが、優しくささやいていた。

*

その日の夜、車を止め、野宿をすることにした。

「この調子で進んだら三日後に疾風学園に到着するな」

「そつだな……よつこらしよ」

「宏樹、どっか行くのか？」

「ああ、ちよつと夜風に当たってくる」

勇樹の問いかけに答えつつ、テントを出た。

少し歩くと、登りやすそうな木があった。

俺はその木に登り、太い枝の上に腰を下ろす。

「……静かだな」

「まったくだ」

「ああ……えっ？」

反対の枝から声が聞こえたので、そちらに顔を向ける。

「えっ、アーステイ？」

「久しぶりだな、宏樹」

「な、なんでお前がここに？」

「監視してるんだし居てもおかしくないだろ」

「監視？　なんで俺を監視する必要があるんだよ」

「俺だつて好き好んで監視なんかするかよ、あの方の命令だから仕方なくだ」

「あのさあ……前にも聞いたけどさ、あの方って誰？」

「いずれわかる」

「それも前に聞いたような……」

「いや、それにしても、オーバードライブして生きてるなんてな」

「お前、見たたのか？」

「まあね。やはりあの方の他人を見る目は腐ってないみたいだな」

だからあの方って誰なんだ？

どうせ聞いたところで適当にあしらわれるだろうが……。

「さてと、宏樹」

「ん？」

「……死ぬなよ」

「はっ？」

「俺との決闘があるからな。それに、お前は皆を引つ張る義務がある」

「なに言ってるんだ？」

「気にするな、じゃあな」

「あ、ちよ……またどっか行きやがった」

俺が、皆を引つ張る義務？

俺にそんなこと……。

「あ、いたいた」

「かな？」

俺の視界に入ったのが、鹿波だった。

「なにしてたの？」

「ん、いや、夜風に当たってたただけだよ」

木から飛び降りて鹿波を見る。

「？ どうかしたの？」

「いや……」

俺は鹿波の腕を引つ張り、引き寄せる。

「えっ、ちょっと……」

「昨日の続き、しょうか」

「昨日……ああ」

理解したのか、鹿波は俺に身体を預ける。

「うん、続きだね……」

お互いの温もりを感じあう。

とてもあたたかく、心が安らぐ。

「立ったまんまなのもアレだし、座るか」

「うん」

身体を引っ付けたまま、木にもたれかかる。

「……ねえ、ひろ」

「ん？」

「私……ひろのこと……」

「好きなんだろ？」

「えっ、どうしてそれを？」

きよとんとする鹿波に少し吹いてしまう。

「な、なんで吹くのよ」

「いや、俺もかなのことが好きなんだって気づいたから」

「えっ……？」

「俺を庇ってかなが殺られた時、俺、凄く怒ってた。その後の記憶が曖昧だけど、俺の隣で眠るかなを見て凄く安心したんだ。それに

……」

「それに？」

「好きじゃないとこんなこと、しないよ……」
「!?!」

鹿波の唇に自分の唇を近づけ重ねる。

一瞬ビクツと身体を動かしたが、力が抜けていった。

「……不意討ちはダメだよ」

「悪い悪い。今度はかなからしたらいいさ」

「じゃ、じゃあ、するよ……」

鹿波の顔がゆっくりと近づき、唇同士が重なる。

俺は鹿波を少し強めに抱きしめる。

唇を離れた俺達は抱きしめあつた。

「ひろ、好き……」

「俺もだよ、かな……」

守ってみせるさ……なにがなんでも。

【第六章・攻略戦前終わり】

第七章 作戦前夜

私達はドライブできる者を集めて地下に来ていた。
集まった人数は、私達を入れても三十人弱。

「作戦前の最終確認をする」

ポーラが皆に聞こえるように話していた。

「この作戦が成功するか否かは私達ドライブ可能な者にかかってい
る。更に、電光石火の如く、動かなくてはならない。相手に時間を
与えるわけにはいかないからね」

少数精鋭で大軍に勝つには迅速な作戦行動が重要。

ましてや、今回は非戦闘員を庇いながら脱走しなければならない
から尚更スピーディーに行動しなくては。

「作戦内容は皆には言ったと思うけど、もう一度おさらいしとくわ
ね。今回の作戦、簡単に言えば敵陣からの脱出というわけになるん
だけど、なにより戦闘員の数に比べて非戦闘員の数に圧倒的に多い
こと。それにより、私達戦闘員が脱出を援護する為にこの場に留ま
らなくてはならない。敵の追撃も激しくなるだろうから、無理だと
感じたらすぐに脱出すること」

相手の戦力はこちらの数十倍に相当するらしい。

魔物達を全滅させるより、素直に離脱した方がリスクも低くなる。

「脱出したら各自の判断で疾風学園を離れること、それもさっさと
行動しないと追撃隊に追いつかれるからね」

すんなり脱出させてくれたらいいけど……。

ここ数日間、この地下迷宮で、特訓をしてたからかなり実力はついたと思う。

けど、魔物とは直接戦ったことがないし、魔物の実力は未知数……。

ポーラから聞いた分だと、通常の人間の二倍から三倍の能力を持っているらしい。

ただし、ドライブすればこちらも二倍から三倍の力を発揮できるから五分五分なんだろうけど。

「作戦決行日は明日の十二時、魔物が性奴隷として女を選ぶ時よ。

私達の気持ちを踏みにじる魔物どもに一泡吹かせてやりましょ！」

「……おっ！」「……」

最後の作戦会議は終わり、ポーラのレポートで各自がいた牢屋に戻った。

*

「ねえ、ポーラ」

「なに？」

「ここを脱出できたらさ、なにをするの？」

「そうね……脱出できたら……」

ポーラは地面に座り込み、腕を組んで考えるそぶりを見せる。

「まずは、近くに住んでる友人のところに行きたいわ。麻奈美は？」

「私はりるちゃんと二人で兄さんを探したいと思う」

「お兄さん、いらっしやるの？」

「うん、でも見つける自信はないな……」

もし見つけれたら、すぐに兄さんの胸に飛び込みたいけど……。

「兄さんもそうだけど、私の大事な人も探さないよ」

「大事な人？ 彼氏？」

「えっ、うん…… 普段は面倒くさがりなんだけど、私のことを第一に考えてくれる私の大事な人……」

「そっか…… 大事な人と会う為に戦うのもいいわね」

「ポーラはそういう人、いないの？」

「……前はいた、かな」

「ポーラ？」

徐々に小さくなっていくポーラの声。

「あ、ううん、なんでもない」

けど、いつものポーラに戻った。

「だったら尚更この作戦をミスるわけにはいかないね。麻奈美のお兄さんと大事な彼氏を探す為に」

「うん、そうだね」

その後も、監視に気づかれないように、ポーラと身内話で盛り上がるのであった。

【第七章・作戦前夜終わり】

第八章 疾風学園攻略戦

「……見えてきたな」

学園の校舎が肉眼ではつきりと見えるところまで迫って来ていた。俺達は武装化して戦闘態勢を整える。

「準備はいいか？」

皆に問いかけ、静かに頷く。

「前方から魔物が来る！」

トラックを運転する勇樹が声を荒げる。

「よし、全員、攻撃開始！」

俺の合図で飛び道具を持つ者は攻撃を開始した。空から大量の矢が降り注ぐ。

「美春！」

「任せて、バリアフィールド！」

美春は杖を掲げ、魔法を唱える。

俺達の周りにバリアが形成され、矢を防いだ。

「風斗、ホバークラフトの準備は！？」

「準備にあと少しかかります！」

「そうか……バルドを出してくれ」

「宏樹、なにする気？」

美希がアサルトライフルを構えながら聞いてくる。

「相手を錯乱させる」

「ひろ、だったら私も！」

「かなはここにいろ」

「いや！ ひろと一緒に行く！」

駄々をこねる鹿波に、俺は鹿波を抱きしめる。

「……ひろ」

「大丈夫、俺はかなの元に必ずかえってくるから」

「えっ、んっ……」

かなの唇を奪う。

「だから、ここで皆と戦ってくれ」

「……わかった」

「バルドだすよ！」

ラットがトラックからバルドを降ろす。

俺はそれに飛び乗る。

「バルド、行くぞ！」

疾風学園を目指して突き進む。

*

「そこを……どけえ！」
「ぐはっ！」

馬に乗ったまま、通り過ぎざまにゴブリンの首をはねた。

「数だけはいっちょまえに集めやがって」

刹那、俺に向かって冷気の閃光が前を横切る。

「うわっ!?!」

俺はバランスを崩して落馬してしまう。

「そんなくらいでバランスを崩すなんて、まだまだひよっこね、藤山宏樹」

「お前は……」

身体を起こし、声がる方向に顔を向ける。
そこにいたのは、制服も髪も赤い少女だった。

「お前……誰だ？」

「はじめまして、私、石田咲子と申します。いきなりですが……死んでください！」

石田咲子の前に現れたゴブリンナイトという鎧に身を包んだゴブリンが立ち塞がる。

「さっ、行きなさい！」

「っ!」

両手にショートブレイドを持ち、構える。

「これでもくらえっ！」

振り下ろされる剣をショートブレイドで受け流し、ゴブリンナイ
トを抜く。

「なにっ!?!? けどな!」

「スライドダッシュ！」

さつき抜いたゴブリンナイトがこちらに向きながら剣を横に振る。
俺はスライドダッシュで再び背後に回る。

「マジックサーベル！」

鎧ごと一刀両断する。

「ちっ、ふざけやがって！」

突き出す槍をジャンプして乗る。

「えっ!?!」

そのまま飛び越え、着地と同時にブレイドを振り下ろす。

「くっ……そんなに私の手で殺されたいみたいですね！」

咲子は大きな鎌を持ち、こちらに向かってくる。

「ええい!」

咲子の一閃を屈んで避ける。

そのまま左手のブレイドを下から振り上げる。

「ちっ！」

鎌で防ぎながらバックステップする。

俺は振り上げたブレイドを逆手に持ち変える。

「ブレイドジャベリン！」

魔力を左手に集中させ、咲子に投げつける。

投げたブレイドはオーラをまとい、咲子に直進する。

「くっ、アイスウォール！」

咲子は地面に手を着き、氷の壁を作ってブレイドを防ぐ。

「そんな攻撃……えっ!？」

「碎ける、エクスプロージョン！」

ハンドガンを構え、極太ビームを放つ。

氷ごと咲子を撃つ。

「そんなことって……」

刹那、爆発が起こり、辺りに砂埃が舞う。

「……やったのか？」

「ふう、危ないなあ」

咲子の前に立っていたのは、赤い制服に身を包んだ男子がいた。

「まったく、兄妹揃って侮れない方達ですね」

「お前、りるを知ってるのか!？」

「ええ、知ってますよ、僕の奴隷にならないかと聞いたら断られま
したけどね……」

「貴様……」

「あなたが探してる藤山里流葉と橋本麻奈美は疾風学園にいますよ」

「本当か!？」

「ええ……なんだ?」

突然、耳元に手を当てて誰かと話し出すメガネ男。

「ふふつ、まったく、兄がこれでは妹もですか……」

「は、お前、なに言ってる……」

「咲子、いったん下がるぞ」

「な、なんで、私はまだ戦える!」

「君の大好きな人が脱走しました、咲子にはそちらを任せます。そ
れに、このまま残っても無意味でしょうし……バリアフィールド」

男がフィールドを展開すると、一本の矢がバリアに当たる。

「それでは、僕達はこれにて失礼します、『宏樹お兄さん』。はは
はっ! テレポート」

「なっ、待て!」

男と咲子の姿が消えたが、声だけは聞こえてきた。

「そういえば自己紹介がまだでしたね、僕は岩沢宗太、またどこか

「でお会いしましょう……」

「岩沢、宗太……」

「ひろっ！」

皆と合流し、進軍を再開した。

*

「俺が、道を切り開く！ ツインエクスプロージョン！」

ハンドガンを二丁持ち、魔物の軍団に極太ビームを放つ。

「「「オールアロー！」」」

その両隣で鹿波と美春の同時攻撃で撃ち漏らしを撃つ。

「「「シヨットオール！」」」

美希とマヴィと健治が空中にいる魔物めがけて攻撃する。

「よし、白兵戦に持ち込むぞ！」

勇樹を筆頭に、近接組は疾風学園に突撃する。

「美希とマヴィはここに留まって残存勢力の排除とトラックの防衛を頼む」

「わかったわ」

「残りは俺に続け！」

「「「おー！」」」

鹿波と美春と健治を連れ、疾風学園に向かった。

*

中の様子は既に勇樹達の部隊が敵を蹴散らした後だった。流石、戦力の大半を勇樹に任せたからな……。

「私達はどうするの？」

鹿波の問いかけに、俺は答える。

「りる達を助けるんだ」

「でも、どこに居るか……」

「だから、片っ端から探すんだよ」

「侵入者がいたぞー！」

「ちっ、まだいたのか、各自応戦！」

それぞれ、武器を構え、魔物に近づく。

「これ以上は進ません！」

「くらいなさい、ブラインドー！」

美春が俺達の後ろで魔法を唱え、まばゆい光を発生させる。

「ぐわっ、眩しい……」

「なにも見えねえー！」

「今のうちに！」

「美春、助かる、健治、鹿波、撃ちまくるぞー！」

「わかりましたー！」

「うん！」

視界を奪われた魔物めがけて飛び道具で攻撃する。
そしてあっという間に目の前から魔物は消えた。

「やはり結構居るんだな……」

マガジンを変えながら呟く。

「これだけいると宮河君達のところも心配だね」

美春も心配そうな声で呟く。

「止まっても仕方ない、こっからは二手に分かれよう」

「戦力を分散させるのは得策ではないと思うけど……」

「健治の言うことも一理あるが、まとまって動くとかえって目立つし、全滅してしまえば意味がない。二人一組で隠密行動を心がけるんだ」

「わかった、じゃあ私と松嶋君で行動するね」

「ああ、頼んだ」

美春と健治と別れ、残った俺と鹿波で探索を続けた。

*

「はあはあ……」

「っ、疲れた……」

俺達は誰もいない教室みたいなところに逃げ込み、休憩することにした。

ここに来るまで、かなりの戦闘をこなしてきた。

「かな、残ってる矢は？」

「三本だけ……三十本を節約しながら使ってきたけど、敵の数が多くて……ひろの弾薬は？」

「いまセツトしてるマガジンだけ、弾数は……八発かな」
「消耗戦だね」

「そうだな、向こうが圧倒的に有利だけどな……」

しかし、こつも消耗しては迂闊に動けないな。

「そついえばさ」

「ん？ どうかしたか？」

「私達がここに来たときからなんか慌ててたね、向こうが」

「そりゃ、俺達が奇襲してきたから……ん？」

そこでふと思い出す。

岩沢宗太が咲子に言っていた言葉、『脱走』……。

「もしかして、捕らえられてた人達が脱走したのかな？」

「脱走？ どうして？」

「いや、かなが放った矢を防いだ奴がさ、逃げる直前の時、仲間こそう言つてたから、」

「ここから脱走つて、なかなか勇氣いると思うよ。敵陣のど真ん中から逃げるんだし」

鹿波と話していると、突然廊下の方から話し声が聞こえ、俺達は口を閉じる。

「くそ、メガネの野郎、どこいきやがった？」

「焦るなよ、わざわざ向こうから来たんだ、この学園のなかのどこ」

かにいるよ」

俺は、スモールフェアリーの力を借りて、鹿波に連絡する。

(かな、聞こえるか?)

(うん、聞こえるよ)

(どうする?)

(どうするって言われても、ひろみたいに作戦とか考えられないし……ひろはなにか考えがあるの?)

(まあな、このまま通り過ぎてくれるならラッキーなんだけど……もしこの教室に入ってきたら、不意討ちしようと思う)

(どうするの? こんな狭い教室で……)

(大丈夫、話し声から察するに、相手の数は二人だ)

「ちよつと休憩しないか?」

「そうだな、ここで休むか」

((?!?))

(く、来るよ!?)

(落ち着け、ドアの両サイドへばりついてショートブレイドを抜けるようにしとけよ!)

(わ、わかった)

鹿波は左腰に装備したショートブレイドを左手で支え、抜ける態勢をとる。

俺も息を殺し、背中のショートブレイドに右手をそえる。

魔物達の声がドアの目の前にまで近づき、足音が止まる。

「……」

二人で、ドアを睨み付け、唾液を飲み込む。

「誰もいないな……」

魔物が教室内を軽く見回し、中に入ってくる。

(まだまだぞ……)

(うん……)

ブレイドを握った手が汗ばむ。

「ふう、休憩休憩」

二体目が、入った。

(いまだ！)

俺が合図すると、鹿波と同時に斬りかかる。

「ぐはっ！」

「な、なんだぐわっ！」

鹿波は腹部に突き刺し、俺は心臓を突き刺す。

「き、貴様ああ！」

「えっ!？」

「かな、伏せろ！」

鹿波がブレイドから手を離し、屈む。

俺は空いてる手でもう一本のショートブレイドを持ち、瀕死の魔物めがけて投げつけた。

魔物は力なく地面に倒れこんだ。

「はあ、はあ……あ、ありがとう……」
「いや、いいけど、なんで腹なんだよ」

そう言いながら鹿波に手を差し出す。

「だって、届かないから……」

「まあ……180センチくらいあるしな、こいつら」

投げたブレイドを回収し、刃に付いた血を素早く振り落とし、鞘に納める。

「とにかく、先を急ごう」

「うん」

教室を後にし、先に進むことにした。

*

「くそっ、ここ広すぎだろ」

「確かにね……」

さつきから散策しているが、一向に牢屋とかが見つからない。

「ははっ、見つけたぜ!」

「くっ、敵は見つけてしまったけどな」

バズーカを構える山本大毅。

「早速だが、吹っ飛びな!」

「ちっ！」

バズーカを撃つ山本に、俺はハンドガンで放たれたバズーカの弾を撃ち落とす。

弾は爆発し、爆風が周囲を襲う。

「くっ……」

「やるじゃねえか！」

「なっ！？」

爆発による煙から不意に現れる山本。

右トンファーが俺に向かってくる。

俺は身体全体を使って受け流し、銃剣を出したハンドガンで斬る。

「おっと、危ない」

「ちっ……」

しかし、もう片方のトンファーで防がれる。

「まだまだヒョッコだな！」

「なめるな、この筋肉ダルマ！」

「ちっ、口だけは達者なようだな！」

「ぐっ！」

腹部に激痛が走る。

「うっ……ゲホゲホッ！」

「はっ、調子に乗るからだな」

腹部を抱え、膝から崩れ落ちる。

「ひろっ！」

「後はお前だけだ……」

山本は俺を無視して鹿波の方に歩み寄る。

「こ、来ないで！」

「なにをビビってるんだよ、大丈夫、『俺は』なにもしないからさ……」

「う、撃ちますよ!？」

鹿波は弓矢を構え、弦を引き絞る。

「そんな顔されたら……ヒューマンハーフ族は喜ぶかもな……どうだ？ 性奴隷にならないか？ 快楽に浸れるぜ……」

「私は……奴隷なんかにならないっ！」

矢を放つが、山本にトンファーで弾かれ、一気に近づく。

「っ!？」

鹿波は弓を山本に投げつけ、ショートブレイドを構える。

「ははは……死ね！」

「えっ……しまっ……」

山本が一瞬で鹿波の背後を取り、トンファーを構える。

「くっ、そおおお！」

腹部の痛みを堪えながら立ち上がる。

「ブレイドビットオ！」

ショートブレイド二本を投げ、ブレイドの軌道を頭で思い描く。

「なにっ!？」

山本は鹿波から距離を置く。

山本が元居た場所にブレイドが突き刺さる。

「ちっ、脅かせやがって……なっ!？」

鹿波の頭上を飛び越え、両手にハンドガンを持つ。

「マジックショットお！」

二つの銃口からビームが出る。

「ちっ、このクソガキがああ！」

トンファーを二つとも弾き、地面に着地する。

そのまま山本の懐に近づく。

「どんだけ諸突猛進なんだよ! くらえ！」

山本の右ストレートを左腕で弾き、右の銃剣で振り下ろす。

しかし山本に抑えられ、右足が向かってくる。

「ちい！」

「なにっ!?!」

俺はそのまま飛び上がり、山本を飛び越える。
背後を取った俺は、振り向く山本に銃口を構える。

「くっ……」

「殺す前に、牢屋の場所を言ってもらおうか」

「ふっ、そんな余裕ぶっこいていいのかよ？」

「なに?」

すると、突然銃声が鳴り響き、山本に向けていたハンドガンが飛ばされる。

銃弾の先を見ると、俺の右頬に銃弾がかすめ、血がゆっくりと滲み出す。

「ふう、危ない危ない」

「増援……?」

そこにいたのは、魔物のような体格で、デザートイーグルというハンドガンを持った男だった。

「山本、この学園は放棄する、撤退するぞ」

「しかし! こいつが……」

「異論は受け付けん! それでも逆らうならお前の頭を吹き飛ばす」

「くっ、仕方ない、次は必ずぶっ殺すからな!」

そう言い残して、この場を離れていく。

「君が、藤山君だね?」

「だったら、なんだ、お前は何者だ?」

「俺はロマノフ・フィンダー。簡単に言えば君達とは敵対するね……」
「ふうん、で、そのお前が俺になんの用だ？」
「用？ そんなの、殺しにきたに決まってるでしょ」
「そんなこと、させない！」

鹿波が俺を庇うように両手を広げ、俺とロマノフの間に立つ。

「まあ、それは二の次ですよ。俺達は君の力に大変興味がある。どうかな、俺達の仲間にならないか？」

「まさかの引き抜きかよ」

「地位と名誉と女には困らせませんよ？」

「へえ……そりゃいいね」

鹿波の手を退かし、前に出る。

「え、ひ、ひろ？」

ロマノフに笑みを見せる。

「ふっ……」

「俺のことを評価してくれて……ありがとよ！」

もう一つのハンドガンでロマノフの持つデザートイーグルを撃つ。

「……それが君の答えかい？」

「俺は生憎地位とか名誉なんて興味ないんでな。女なら、既にいるしな」

「えっ……」

「そうですね……それは残念です。交渉決裂ですな」

そう言いながら吹き飛ばしたデザートイーグルを拾い、ホルダーにしまう。

「今回は見逃します、不意打ちした詫びもありますから」

「……………」

「しかし、今度会った時は……………」

目を細め、低い声で「容赦はしない！」と言った。

「ああ、ロマノフ」

「？」

「なんでお前達は人間に害を与えるんだ？」

「それは一方的だな。人間もまた、俺達ヒューマンハーフ族に害を与えているんだよ」

「はっ？ なにを言って……………」

理解できなかったので追及しようと思ったが、既にロマノフの姿は消えていた。

「なんだったんだ？」

「さ、さあ……………。あ、あのさ、ひろ」

「ん？」

鹿波の方に振り返ると、顔を赤らめていた。

「あの、ひろの女って、もしかして……………」

「勿論、かなのことだよ」

「……………」

「え、なんかまずいことでも言ったか？」

「うっん、えへへ」
「？」

鹿波が笑う理由がちょっと理解できなかった。

*

「これで最後の牢屋ね」
「美希、居たか？」
「うっん」

牢屋にいた女性達を助け出したが、りる達の姿は見当たらなかった。

俺はルチアちゃんを探すラットに話しかける。

「ルチアちゃん、いたか？」
「うっん……」
「そうか……」
「ルチア……？」

俺達の会話が耳に入ったのか、一人の女性が声をかける。

「その子って、小さい女の子のこと？」
「うん、そうだけど……知ってるの？」

ラットの消え入りそうな声に、女性はラットと視線を合わせ、優しく話しかける。

「うん、同じ牢屋にいたからね」
「あの、すみません」

「はい？」

俺も二人の妹について聞いてみることにした。

「水色髪の女の子と、長い黒髪の女の子、知ってますか？」

「黒髪の方はわからないけど、水色髪の女の子ならルチアっていう子と一緒にいましたよ。あ、そうそう、脱走する時に黒髪の女の子が牢屋の鍵を開けて回ってましたよ。脱走したらあなた達に助けてもらったからどこに行ったのかはわからないけど」

「そうですか、ありがとうございます」

だったらもしかしたらどこかに逃げたんだろうな。

りるとまなとルチアちゃんは……。

妹達とは会えなかったけど……、助け出した女性達の笑顔を見るとやってよかったと思った。

「あの、宏樹先輩」

「どうした、雅啓？」

「こんなのが落ちてたんですが……」

雅啓が拾ってきたのは、なにも見えない玉だった。

「これは……」

「それはフェアリーボールだな」

「フェアリーボール？　なんだそれ」

俺の肩に乗るスモールフェアリーがそう言った。

「とりあえず、上に掲げて『ドライブイン』って言ってみる」

「こ、こうか？」

ボールを上に掲げる。

「ドライヴイン！」

すると、ボールが砕け、中から出てきた白いオーラが俺を包み込む。

「これは……」

「宏樹に新たな力が宿ったんだよ」

「宿った？ またフェアリーが増えるのか？」

「まあ、そうなる」

突然、目の前に現れるフェアリー。

容姿はやはり俺をデフォルメした感じだが、手に扇子を持っていた。

「俺は風を操るスモールフェアリーだ、よろしくな」

「あ、ああ……」

扇子なけりゃ見分けつかんぞ、こいつら……。

「あれ、ひろもフェアリーボール使ったの？」

鹿波がやってくる。

「もって……かなもか？」

「うん、私も拾って使ったんだ。フェアリーボールって元々学園入学者に渡される物らしいよ」

「ふうん、詳しいな」

「うん、スモールフェアリーに聞いたから」
「……だろうな」

別に驚きもしないよ。

「学園内を探したらもしかしたらもっと出てくるかもしれないね、よし、雅啓、探しに行くよ！」

「は、はい！」

しかし、隅々まで探したが、見つかることはなかったのであった。

【第八章・疾風学園攻略戦終わり】

第九章 疾風学園脱出戦

作戦決行日、魔物は定期巡回にやってくる。
決行日は性奴隷選択日だった。

「さて……今日は誰にしようか」

「」「」「」

皆、怯える演技をする。

……こいつ等に一泡吹かせてやる！

「あ、あの〜」

「ん？」

私はおずおずとした感じで立ち上がり、手を上げる。

「えっと、立候補って、いいですか？」

「立候補？ お前に指名してほしいのか？」

「はい……ヒューマンハーフ様に忠誠を誓いたいです、私、あなた達に惚れてしまいました」

「ほお、なかなか物分りのいい奴だな……身体つきも悪くない。よし、今回はお前だ」

魔物は牢屋の鍵を開け、私を牢屋から出す。

「へへっ、結構かわいいじゃねえか」

「ありがとうございます」

「俺達に忠誠を誓うのであれば手荒な真似はしない、もったいないからな」

私をなめ回すように見つめる四つの目。

「こりゃ楽しみだな」

「だな」

魔物二体が一瞬だけ後ろを向いた隙に私のブレザーを二体に被せる。

「な、なんだ!?!」

「ドライヴ」

「クロスフォーム」

背中のミドルブレイドを二本持ち、ブレザーを退かした魔物達の首を刎^はねる。

「何事だ!?!」

「な、コイツ!」

「大人しく寝てなさい!」

監視兵が来たのでブレイドを投げつける。

「ぐはっ!」

「なめるな!」

一体は胸に刺さったが、もう一体は弾いてこちらに向かってくる。

「ええーい!」

魔物の槍を弾きながらスピンジャンプし、着地の瞬間に魔物を斬

り下ろす。

「あつた、ポーラ」

魔物から鍵を奪い、牢屋の中にいるポーラに投げる。

「麻奈美は死体を奥に持って行って」
「わかった」

さつき倒した魔物を引つ張り、部屋の奥に置いておく。
私は別の鍵を持ち、りるちゃん達がいる牢屋に向かった。

「ふあゝ」

「アクアスパイラル」

あくびしていた監視兵の口に魔法の水を大量に突っ込み、溺れ死にさせる。

「まなちゃん、大丈夫？」

「私は大丈夫」

牢屋の鍵を開ける。

すべての牢屋を開けると、頭からポーラの声が聞こえてきた。

（そっちは終わった？）

（終わったけど……これ、どうやって使ってるの？）

（え、フェアリーコミュニティ、知らないの？）

（うん、なにそれ）

（えっとね……自分のスモールフェアリーを使って別のドライヴ者に通信を送ることができるの）

(へえ、そんな機能があるんだ……)
(やり方はスモールフェアリーに頼んだらしてくれるし、頭の中で考えた言葉がそのまま相手に届く仕組みになってるの)
(そっか、詳しい説明ありがとう)
(いえいえ……準備はいい?)
(うん、OKだよ)
(よし……ミッションスタート!)

私達戦闘員は先陣をきつて牢屋がある部屋を飛び出す。

「な、なんだあ!?!」
「だ、脱走だ!?!」
「りるちゃん!」
「うん!」
「クロスフォーメーション!」

私は手を掲げ、水の魔法を出す。
りるちゃんは杖から雷の魔法を作り出す。

「サンダーstorm!」

魔物の頭上に雨雲が発生し、雨を降らす。
さらに濡れた魔物に雷が落雷する。

「だああー!」
「ぐはっ!」

次々と倒れていく魔物達。

「そこだ!」

ポーラは槍二本を振り回し、魔物を蹴散らしていた。

「皆は早く逃げて!」

ポーラの叫びに頷くことなく走る女性達、しかし……。

「逃がさない、わよ!」

「はぐっ……」

「なっ……」

一人の女性の首を大きな鎌で刎ねた。

「ふふっ、最高ね! 逃げる女を狩るなんてさあ!」

「させない!」

私はそいつに近づき、ハンドガンで撃つ。

しかし、赤髪をなびかせてそれを鎌で弾かれる。

「見つけたよ……麻奈美……」

「石田、咲子……」

「ふふっ、お前が憎くて会ったあの時に殺してやりたかったけど、宗太が殺すなって釘を打たれてたしね……でも、いま、お前の処刑許可が下った、麻奈美の人生は私の手で終わらす!」

「勝手に人の人生を終わらないでくれる!？」

銃を乱射して距離を取る。

いくらなんでもあの大きさの鎌では接近戦で勝ち目がない!

「どうしたのさ、そんな射撃じゃ私を撃てないわよ?」

「くっ、口ばっか動かしてる奴に私は倒せないよ?」
「言うねえ……だったらズスタズタに引き裂いてやる!」

咲子がこちらに踏み込んでくる。

「ソニックブーム!」

ビームセイバーを振り、音速波を出す。
しかしそれを飛び上がって避けられる。

「くらいなさい、アイスシックル!」

鎌が氷つき、そのまま私に振り下ろす。
ビームセイバーで受け止める。

「ふふっ……」

「え、な、なにこれ……!?!」

鎌を受け止めた辺りから氷づいてくる。
そして、セイバーは砕け散る。

「そのまま死になさい」

押さえる物がなくなり、鎌の刃が私を襲う。

刹那、誰かが私を抱きかかえ、咲子と距離を取った。

「誰、私の邪魔をするのは!」

「ああ、邪魔して悪かったね。けど、麻奈美は私達のエースだから
簡単にはやらせないわよ」

「ポォーラ!?!」

「里流葉！」

「はい、サンダー！」

「くっ……」

りるちゃんの電撃攻撃に咲子は足止めをくらう。

「今のうちに離脱するよ」

「え、でもまだ脱出してない人が……」

「これ以上私達が留まるほうが危険よ。皆覚悟の上よ、それに……」
「それに……？」

すると、遠くの方から魔物が吹き飛ばされてきた。

「どうやら同時期に攻めてきた人達がいるみたいね、急ぎましょ」

「う、うん」

私達は足早にこの場を後にした。

*

裏門に続く長い廊下を走り続ける。

私達の後ろにはルチアちゃんをはじめ、数十人の女性がいた。

「ポーラ、あとどれくらいで裏門なの？」

「そろそろのはずだけど……ん？」

すると、ポーラは突然止まり、薄暗い先を見つめていた。
そして、遠くのほうから「ムー」という音が響く。

「！？ 里流葉、チャフフィールドを！」

「チャ、チャファイールド！」

りるちゃんがフィールドを形成したと同時に大量の銃弾が飛んでくる。

「なにこれ!？」

「この弾のばらつき……ミニガンかしら」

「なんなの、それ？」

「ガトリング砲よ! 走るわよ!」

ポーラに言われるまま走りだす。

「私があいつをけん制するから麻奈美はガトリング砲を壊して!」
「わかった」

ポーラは走りながらアサルトライフルを乱射する。

ガトリング砲を持った人影は物陰に隠れるが、大きすぎるガトリング砲は隠れきっていなかった。

「ソニックブーム!」

ビームセイバーを振り、ガトリング砲を壊す。

「よし、このまま私が奴を押さえておくから先に脱出して」

「え、でもポーラ……」

「私は大丈夫、今は脱出が優先事項なの。それに、私としてもあいつには因縁があるから……」

「ポーラ……」

「ちっ、よくもやってくれた……」

ハルバードを持った魔物が立っていた。

「くっ、どうやら逃げるチャンスを逃したみたいね」

「一匹たりとも、ここは通さん！」

「ルマノフ・フィンダー！ お前の相手は私だ！」

ポーラは槍二本でルマノフという魔物を壁に追いやる。

「麻奈美！ 早く！」

「わ、わかった、皆、全力疾走でここを抜けますよ！」

「それでいい……。さてと、あの時の続きでもしますか」

「へっ、いいだろう……」

私は二人の激しい戦闘を見届けながらこの場を走り抜けた。

*

「ルチアちゃん、もう少しだから頑張って！」

「う、うん……」

ルチアちゃんを励ましながら長い廊下を突き進む。

「あと少しで裏門に……」

「ふふっ、行かせないよ」

目の前に立ち塞がる宗太。

その後ろから咲子も出てくる。

「逃がさない、あんた達は私に処刑されるのよ！」

「咲子に殺されるわけにはいかないの！ りるちゃん！」

「うん！ りるも、お兄ちゃんに会うまでは、死なない！」

私は両手にミドルブレイドを持ち、咲子に走り出す。

「まなちゃん、援護するよ、ファイア！」

りるちゃんは魔法を唱え、咲子に放つ。

咲子はそれをショートシールドで防ぎ、鎌を構える。

「水色、邪魔だから先に殺してあげる！」

「テレポート」

宗太は咲子に触れながら魔法を唱える。

咲子は一瞬でりるちゃんの背後を取る。

「っ！？」

「狩ってあげる、その首い！」

「インパクトバリア」

バリアを作り、攻撃してきた咲子を吹き飛ばす。

「くっ、な、なに、今は……」

「スピードランサー！」

「スピードブレイカー！」

私と宗太は高速で武器を振り、つばぜり合いになる。

「くっ……」

「最後のチャンスだ、俺の女に……」

「くどい！ アクアブレイド！」

剣に水をまとわせる。

そのまま宗太を押し出し、居合の構えを取る。

「水よ、すべてを切り裂け！」

一振りすると、水の刃が宗太に向かって飛んでいく。

それを槍で抑えるが、宗太は飛ばされ、槍はボロボロに碎ける。

「何度も言っけど、私は宗太の女にならない、私には……進也君がいるから！」

「あ、あんな男のどこが……」

「宗太がどう思おうが関係ない、私は進也が好きだから」

「だったら……僕の手で葬ってやる！」

宗太は、杖を支え代わりに立ち上がり、魔法を唱えようとする。

「させない、アクアショット！」

ハンドガンから放つ水の弾は宗太の腹部に直撃し、壁まで吹き飛ばした。

「はあはあ、りるちゃん!？」

りるちゃんの方を見ると、咲子に押されていた。

「剣を持たずに頑張るね、そろそろ私に狩られたら？」

「イヤだ……私も、お兄ちゃんに会っただからっ！」

杖で鎌を押さえていたりるちゃん。

その杖から炎の剣が出来上がる。

「な、なんだこれ!?!」

「剣がないなら、作ればいい話っ!」

りるちゃんは身体をずらしながら鎌を受け流し、地面に突き刺す。

「ファイアブレイド!」

杖から作られた炎の剣を咲子に振る。

それを咲子はシールドで防ぐ。

「っ、調子に乗りやがっ……!?!」

一瞬で距離を取ったりるちゃんはウィップを咲子の腕に絡める。

「サンダーウィップ!」

「くうううあああ!?!」

鞭に電気が走り、咲子有感電させる。

痙攣を起こしながら膝から崩れ落ちた。

「はあ………なんとか勝てた………」

「ふう、なんとか追いついた………」

「ポーラ!? 無事だったの?」

「ええ、なんとかね、さっ、急ぎましょ」

私達は裏門まで走り出す。

*

裏門から飛び出し、疾風学園が小さくなるまでひたすら走った。他の脱走者とは次々と別れていき、いつの間にか私達四人になっていた。

「はあはあ……………」

「ここまで、来れば……………」

「疲れた……………」

りるちゃんは地面に寝ころび、呼吸を整えていた。

「……………まなちゃん」

「……………ん？」

「空、きれいだね」

「あ……………そうだね、眩しいや」

顔を空に向け、そこでやっと解放された感じになった。

自由なんだ、誰にも縛られない、外の世界……………。

「他の方って、大丈夫なんですか？」

ルチアちゃんが心配そうにポーラに聞く。

「大丈夫よ、皆それぞれの道に進んだと思うから……………さ、休憩終わり、進むわよ」

寝転がるりるちゃんを起こし、先を進む。

「あ、分かれ道だ。えっと、『あっち』と『こっち』だって」

りるちゃんは二つに分かれた道の真ん中に刺さった看板を見てそう言った。

「なんか、適当な看板だね。ポーラ」

「そうね、『あっち』に行きましょうか」

「なぜ？」

「『あっち』には私の知り合いがいるの、そこでこれからのことを考えましょうか」

「そうね」

今一度、この世界がなんなのか、見直さなければならぬかもしれないね。

私達は『あっち』の道を進むことにした。

【第九章・疾風学園脱出戦終わり】

第十章 新たな敵、新たな力

疾風学園を出た俺達は分かれ道に来ていた。

「『あっち』か『こっち』か……ひつきーどうする？」

「どうするかって……風斗、どうする？」

「なんで俺に訊くんですか？」

「存在感なしだから」

「理由酷っ！ ちゃんと存在感出してますよ！」

「えっ、そうかな？」

「そうです！」

「ま、いいや、とにかく選んでくれ」

「……えーと、ど・ち・ら・に・し・よ・う・か・な……」

風斗はお馴染みのアレで道を決める。

「……い・う・と・お・り、じゃあ『あっち』で」

「ん、じゃあ『こっち』に行くぞ」

「えっ、あれ？ 今『あっち』に決まったの？」

「風斗が決めた道の反対の道に進む事に決めてたから」

「そっ、そっすか……」

風斗いじりを程々に『こっち』方面に向かった。

*

車のエンジン音を聞きながら流れゆく景色を荷台から見ていた。それにしても、ロマノフが言っていた言葉が引っかかる。

「『人間もまた、俺達ヒューマンハーフ族に害を与えているんだよか……』」

「兄ちゃん？」

「ラット、なんでもないよ。それともなにか用か？」

「うん、兄ちゃんにも妹がいたんだよね？」

「いるよ」

「どんな妹なの？」

「どんな……ねえ、そうだな……一人はすぐく甘えん坊でもう一人はしっかり者かな」

「へえ〜なんだか兄ちゃんの妹達を足したらルチアみたいだね」

「ルチアちゃんって甘えん坊でしっかり者なのか？」

「うん。普段しっかりしてるんだけど、たまに甘えてくるんだ。いつもなら鬱陶しいと思うけど、今なら……どんなに甘えても許すと思う」

「ああ、俺もだよ……」

俺とラットは似たもの同士なのかもしれないな。

そんな時、車が突然止まる。

「勇樹、どうかしたのか？」

「村があるんだが……」

「……寂れてるな」

いつ頃に放棄されたのかわからないが、寂れた村が進路上にあつた。

「どうする？」

「ああいう所に敵が潜んでる可能性があるしな、マヴィと二人で偵察に行つてくるよ。マヴィ、ホバークラフト頼む」

「はい」

マヴィがホバークラフトに乗って俺が乗る車に近づく。

「ひろ、気をつけてね」

「ああ。勇樹、車を頼む」

「任せろ、連絡はスマートフォンフェアリーを使ってくれ」

「わかった」

ホバークラフトに飛び乗り、マヴィと二人で村に向かった。

*

「……不気味なところですね」

「そうだな、敵じゃなくてオバケが出そうだな」

ホバークラフトから降り、ドライブフォームして辺りを散策する。
割れた窓、風できしむドア……人の気配は感じられない。

「ここは既に魔物達に襲われた後なのかな？」

「疾風学園から比較的に近いですね……でもそれにしては死体等
が見当たりませんけど……」

「それもそうだな。それにしても静かすぎる……」

腐臭とかも感じない、明らかにおかしい。

それに、人の気配は感じないが、誰かに見られてるような……。

「……なあ、マヴィ」

「はい……誰か見てるような気がします」

「奇遇だな、俺も思ってた……ん？」

不意に静寂に聞き慣れない音が小さく鳴り出す。

「どうかしましたか？」

「しっ、なんだ……なんの音だ……」

目を閉じ、耳を澄ませる。

人とは思えない歩く音……消えた？

「マヴィ、伏せろ！」

「へ！？」

マヴィの頭を押さえて地面に伏せる。

刹那、銃声が数回鳴り響く。

「敵！？」

「とにかく物陰に隠れるぞ！」

姿勢を低くして建物の裏に隠れる。

「魔物って銃使えたっけ？」

「私が見た限りでは使ってなかったと思います」

「だよな。ってか魔物って引き金引けるような手をしてないしな」

「じゃあ、別の何かが……？」

「人……か？」

それにしても、さっきの異様な音は……。

そして、再びさつきとは違う異様な音が聞こえてくる。

例えるなら、『ムー』という音……。

「マヴィ、伏せろぞ！」

「え、きゃー！」

マヴィの頭を押さえ、地面に伏せる。

大量の銃声の中に銃弾を連射する音が加わり、建物を次々と打ち抜く。

俺はマヴィを引き寄せ、落ちてくる破片から守る。

「……尋常じゃないぞ……ガトリング砲を持つてる奴って」

「どうします？ このままじゃ私達……」

「どうするって……うわっ!？」

再びガトリング砲が鳴り響き、俺達が隠れる建物を文字通り蜂の巣した。

そして、攻撃に耐えられなくなった建物は、異様な音を立てながら倒れていく。

「は、走るぞ！」

「はい！」

俺達は隠れていた建物から離れ、別の建物に隠れる。

そして、無残にも建物は崩れ去った。

「はあ、下敷きになるところだった」

「でも、どうします?」

「そうだな……」

敵戦力は不明だが、銃やガトリング砲を持っている。

対して俺達は戦力は相手に知れ渡っているし、二人しかいない。圧倒的じゃないか……。

「……とりあえず、俺が物陰から様子を見てみるよ」

俺はハンドガンを持ち、建物に背中をつける。
息を殺しながらゆっくりと覗き込む。
見ると、赤く発光する目があった。

「!?!」

「なっ!?!」

お互いがお互いの姿にびっくりしていたが、俺はすぐさまハンド
ガンを敵に向ける。

そこにいたのは見た目は人間のようなロボットのような……。

「ターゲットカクニン」

「ちっ!」

撃ってきた銃弾を側転で避け、俺はロボットめがけてトリガーを
引こうとした瞬間だった。

なにものかが突然ハンドガンを破壊した。

「なにっ!?!」

ハンドガンを破壊した人物がゆっくりと俺の方に向く。

オレンジのショートヘアで、どことなくマヴィと似た容姿……。

俺は、コイツを知っている……どこで会ったかはわからないけど。

「メ、メヴィなのか……?」

「……うん、久しぶりだね、ひろ……」

「メヴィ!?! どうしてあなたが……」

マヴィもメヴィの存在に驚きを隠せずにいる。

「お姉ちゃん、ひろ、私のお願い聞いてくれる？」

「な、なんだよ……」

「私達、『マシンドール族』の仲間になって」

「は？」

「私は二人と戦いたくないの、だから……ね？」

俺達に優しく微笑みかけるメヴィ。

「……勧誘するわりには手荒い歓迎を受けたんだが……？」

「それはゴメン……私の命令を無視して攻撃を始めたバカがいるから……そのことは私から謝罪するね、ごめんなさい」

「……悪いが、それはできない」

「……どうして？」

「……俺はどの種族にも属さない、ただでさえこの世界はおかしいのに」

「だからだよ、私達だって他の種族を倒すために活動してるから。」

それに私だけじゃない、ムヴィもいるよ？」

「他の種族を倒す……か、共存の道はないのか？」

「それはないよ」

さっきまでの態度とは打って変わり、真剣な表情になる。

「マシンドール族ってのはね、ヒューマン族とヒューマンハーフ族にいいように扱われてきたの、他の種族にもね……」

「それはヒューマン族だって同じだ」

「同じじゃない！ 一緒にしないで！」

「メヴィ……」

「私が聞いた限り、人間も魔物もマシンドール族に害をなす存在な

の！」

メヴィは槍を俺に向ける。

「だから、私がすべてを破壊する、ロボットが平和に暮らせる世界を作るまで破壊し尽くす！」

メヴィの気迫に一瞬反論できなかった。

「そんなことしたって……」

「だから、お願い、私達の仲間になって……じゃないと、私が二人を殺すことになるから……」

「……メヴィはともかく、俺は人間だぞ？」

「そんなの大丈夫、私とムヴィがなんとかするから……」

「メヴィはそれでいいかもしれないが、他のマシンドール達が許すとしても？」

「え、それは……」

「俺はお前達が憎くて破壊しようとしているヒューマン族なんだぞ？俺をそんなかに入れてみる、袋叩きにされるか後ろから討たれるかのどっちかだ」

「だから、私達がなんとかするから……」

「俺とメヴィが一緒になる方法は一つしかない、共存しかない」

「それだけは、ダメ……」

俯くメヴィに俺は少しずつ距離を取っていく。

「じゃあダメだ、俺にだってやることがあるんだ」

メヴィの手を掴んで走り出す。

「！ 攻撃して！」
「リョーカイ」

銃を撃つてくるなか、俺達は物陰に隠れるまでひたすら走った。

「はあはあ………」
「………」

建物に背を預け、呼吸を整える。

しかし、いきなり俺とマヴィの間に銃弾が通り抜ける。

「逃がしません、二人とも………」
「まさか、ムヴィ！？」

狙撃銃を持ったクリーム色のショートヘアの少女、ムヴィ。

「ムヴィ………」
「宏樹様………」

俺とムヴィは視線をぶつけあう。

「メヴィが言ったように、私達の仲間になってください」
「断る」
「二人に逃げ道などありませんよ？」
「だとしてもだ、俺達は仲間になるつもりはない」
「そう、ですか………なら！」

ムヴィがスナイパーライフルを構える瞬間に俺はムヴィに走り出す。

「クイツクショット！」
「スライドダッシュユ！」

ほぼ同時にSAを唱えた俺とムヴィ。
銃弾は俺に当たらず、ムヴィの後ろに回り込んだ俺はショートブレイドを振る。

ムヴィはそれをスナイパーにつけた銃剣で防ぐ。
刃と刃がこすれる音を出しながら、俺とムヴィは睨み合う。

「俺は他の種族と共存する道を作る、だから！」

「共存なんて……お言葉ですが、宏樹様のお考えは甘すぎます！」

俺を押し出し、そのまま銃剣を横に振る。

一閃を身を屈めて避け、ショートブレイドで斬り上げる。

「ひろ、やらせないから」

「メヴィ……………」

俺の攻撃をメヴィが十文字槍で防ぐ。

「ひろならわかってくれるって思ったのに……どうして仲間になつてくれないの!？」

「悪いが……二人の意見に賛同できん。他を除外した世界なんて間違ってるんだ」

「正しいです」

ムヴィが静かにそう呟く。

「他が居るから、この世界は歪むんです」

「だから、私達が世界を作り直す！」

メヴィが俺を突き飛ばし、距離を取る。

「どんな障害でも……」

「例えひろが立ち塞がろうと……私達は……」

「「すべてを破壊する！」」

ムヴィとメヴィが俺に迫る。

刹那、俺とムヴィ達の間銃弾が数発地面に刺さる。

「ムヴィ、メヴィ、あなた達の考えは間違ってる！」

「マヴィお姉ちゃん……お姉ちゃんならわかるでしょ!? マシン
ドール族のこと」

「……聞いたことがないから……」

「扱いは、人間と同じかそれ以上です。肉体重労働、性奴隷、迫害
……」

「ムヴィ……」

「それでも、他との共存を、お姉ちゃんは望むんですか？」
「……」

返答に困った表情になるマヴィ。

しかし、決断したのか、ムヴィ達をしっかりと見据える。

「私は、それでも宏樹様についていきます」

「マヴィ……」

「確かに、あなた達の考えは間違っていないかもしれませんが、他を
破壊し、自分達の世界を作る……。でも、それは結果として良いこ
となんでしょうか？」

「できません、やってみせます」

「それは到底無理な話です。考えてみてください、自分達はそれで

いいかもしれませんが、他はそれを許すともお思いですか？」

「だから、すべてを破壊するんです、なにもかも」

「ムヴィ、そんな考えはおかしいよ」

俺は構えていた武器をおろし、ムヴィに優しく問いかける。

「そんな世界、俺は認めない。俺は共存できると信じてる、いや、共存させてやる」

「……それも無理な話ですよ、宏樹様……」

ムヴィの背後にロボットが並ぶ。

「私はマシンドールがのびのびと過ごせる世界を作る為なら、自分の手を汚してでも成し遂げてみせます、総員、構えっ！」

ロボット達が俺達に銃口を向ける。

(宏樹、ウインドフォームになるんだ)

「え……」

(風で銃弾を防ぐんだ)

「……ドライヴ、ウインド！」

(クロスフォーム)

「撃ええ！」

「エアシールド！」

シールドを構えると、俺の周りに風が吹き抜ける。

銃弾は俺に当たることなく次々と地面に落ちていく。

「マヴィ、一旦距離を取るぞ！」

「は、はい……」

ホバーが発動してるのに気づきながらマヴィを抱きかかえて逃げる。

「逃がさないでください！」

「各機散開！」

ムヴィ達と距離を置き、抱きかかえていたマヴィを降ろす。

「俺が時間を稼ぐからマヴィはここからなるべく離れて狙撃してくれ」

「え、でも……」

「遅くなりすぎたら俺でも危ないから、信じてるよ」

「は、はい！」

マヴィが走っていくのを見送る。

「さて……付き合ってもらっぞ！」

「ターゲットカクニン」

「コウゲキカイシ」

両手に鉄扇を持ち、ホバーで接近する。

「テエー」

敵の攻撃を右、左と避け、鉄扇を開いて銃弾を防ぐ。

「エアスラッシュ！」

鉄扇を振り、風の刃がロボットを切り裂く。

「よくも！」

「メヴィー！」

建物から飛び降りてくるメヴィー。

そのまま槍で突くが鉄扇で受け流す。

俺はそのまま鉄扇の仕込み刃で攻撃する。

しかし、瞬時に槍を回転させ、刃を弾く。

「スナイプショット」

「ちい！」

遠距離からムヴィーが狙撃してくる。

それをバックステップで避ける。

「マジックジャベリン！」

メヴィーは魔法の槍を作り、それを投げる。

俺は右にずれて槍を避ける。

「テエー」

ロボットの射撃を鉄扇で弾きながらメヴィーに狙いをつける。

「エアショット」

ハンドガンから空気砲を放つ。

「くっ……」

メヴィは風で吹き飛ばされる。

「よくも！」

ムヴィが正確な射撃で攻撃してくる。
そのうちの一発が右肩をかすめる。

「ち……………」

「宏樹様、ご覚悟を！」

スナイパーライフルを投げ捨てショートブレイドに持ち変えたムヴィが俺に迫る。

俺は左腰のショートブレイドを逆手で抜き、つばぜり合っ。

「悪いが、俺はやられるつもりはない！」

「私だって……………負けません！」

ブレイドに力が込められていき、俺は徐々に押し込まれる。

「くっ、なんて力だ……………」

「普段はリミッターが掛かっていますが、宏樹様の力なんて、リミッターを解除したら……………余裕です！」

ブレイドが刃こぼれしていく。

ドライヴフォームで身体能力が上がるみたいだけど、ロボットでリミッターを解除したら、ドライヴした人間でも敵わないのか。
そして、耐えられなくなったお互いのブレイドが碎ける。

「な……………」

「……………」

俺の腹部にサブマシンガンが突きつけられる。

「これが本当の最後です、私達の仲間になつてください」
「……くどいぞ」

額に汗が流れる。

これは流石に、無理か……。
その時だった。

「スナイプショット！」

突然俺の肩に銃弾がかすめ、ムヴィの肩に直撃した。

「つつ、くつ……」

ムヴィは肩を抱えながら距離を取る。

「ゲギャ！」

「グワ！」

そして、他のロボットの頭を次々と打ち抜いていく。

「くつ、流石お姉ちゃん……」

「ムヴィ、流石にこのままじゃ、きゃ！」

メヴィにも銃弾がかすめる。

「仕方ありません、撤退します、スモーク！」

ムヴィは煙幕を出す。

「……逃げたか」

煙幕が晴れた時にはムヴィ達の姿は消えていた。

俺はムヴィに連絡してみる。

(ありがとう、もう少し遅かったら死んでたかもな)

(間に合ってよかったです。あの、肩、大丈夫でしたか?)

(ああ、ブレザーが少し溶けただけだから)

(申し訳ありません、狙撃ポイントからだとそこしかなかったわけ
です……)

(でも、なかなかの命中率だな)

(ええ、レンズのズームが可能ですし)

(銃の?)

(いえ、私の目がですよ)

(ああ、ロボットだったんだな)

(もしかして、忘れてました?)

(まさか、じゃあ皆と合流しますか)

(はい、建物から降りますから待っててくださいね)

(ああ)

通信を切る。

「……すべてを破壊する、か」

俺は誰もいない寂れた村を見つめるのであった。

【第十章・新たな敵、新たな力終わり】

第十一章 滅びし学園

「リーサ、居る？」

ポーラの知人宅にやってきた私達は家の中に遠慮がちに入る。部屋はとても片付き、清潔なお家だけど、やけに静かだった。

「リーサさん、居ましたか？」

「ううん、どこに行ったのかな……」

そう呟きながらドアを開ける。

「え……」

「!？」

りるちゃんはとっさにルチアちゃんの目を塞ぐ。

その光景は、女性が首を吊っていた。

おそらく、随分前に自殺したんだろう。

「リーサ……」

ポーラは吊り下げられていたリーサさんを降ろそうとしていた。私も手伝おうとしたが、机に置いてあった紙を見つけた。

「ポーラ、コレ……」

その紙を降ろしたポーラに渡す。

「……」

ポーラはそれを無言で読み進める。

「……辛かったんだね、リーサ……」

リーサさんの両手を胸辺りに持っていく。

「……安らかに眠りな、リーサ……」

私達も目を閉じ、冥福を祈った。

この世界は、とても歪んでいる、人間をなんだと思っているんだ、
魔物達は……。

「……麻奈美、この家の中で使えそうな物を集めて」

「え、いいの？」

「うん、リーサもそれを望んでるみたいだし」

そう言いながら私にさっきの紙を見せてくれる。

確かに自殺の理由とこの家の物はなんでも使っていいと書かれていた。

「じゃあ皆で集めましょう、リーサさんの為にも」

皆、コクンと頷く。

*

食糧を確保し、ガレージにやってくると、中型のホバークラフト
が置いてあった。

「へえ、こんなまであるんだ……」

「これで移動はかなり楽になるね、MCも満タンだし」

「MCってなに？」

りるちゃんが首を傾げる。

「マジックコンデンサーの略、要は魔力を溜めておく装置よ」

「魔力って、りる達が持つてる魔力と同じなの？」

「うん、魔法のホバーを使うようなものよ」

「へえ」

「それにしても、なかなか大きいね、何人乗りなのかな？」

私が見た限り、車のようなハンドルがある席と助手席、その後ろは一つの長いシートの後ろはやや広めの荷台……七、八人は乗れるのかな？

「さて、と。じゃあ手早くコレに荷物を載せましょうか」

十分後、荷物を載せ終えた。

「ふう、今日はここで休ましてもらおうか」

ポーラがあくびしていると、ルチアちゃんが遠慮気味にこう呟いた。

「魔物、来ます」

「え、どこから？」

周囲を見回しても、魔物はおるか、人影すら見当たらなかった。

「私達が来た道からです」

「……そうなるよ、敗残兵でしょうね、でもどうしてそれを？」

ポーラが腕組みしながらルチアちゃんに聞く。

「私にもわからない、ただ、そう感じるんです」

「……ルチアちゃんの言うことを疑うわけでもないけど、感じるねえ……」

「でも、本当に近づいてきてたら？」

「りるはルチアちゃんを信じる」

「里流葉お姉ちゃん……」

「……そうね、それが嘘だったとしても、疾風学園から比較的近いし、今すぐ移動しましょう」

ルチアちゃんのお言葉を信じたのかそうじゃないのかはつきりしなかったが、私達は足早にリーサさんの家から離れることにした。

日が沈んでも、私達は進み続けた。

当てなどなく、ただ道をひたすら突き進む。

「……」

「くう……」

りるちゃんとルチアちゃんは身を寄せ合って眠っていた。

「疲れたんだろうね、脱走してずっと歩いてきたから」

「だね、麻奈美も寝たら？」

「そういうポーラも寝たら？ 疲れてるでしょ？」

「そうだけど……」

「自動操縦できるのも知ってるから、寝たら？ 私が見ておくから」

「……じゃあお言葉に甘えるよ。なにかあったらすぐに起こしてね」

「うん、わかった」

ポーラが寝息を立てるのは少ししてからだった。

「……それにしても」

私って、元々ここにいたのかな？

でもいた割には記憶がない。

記憶喪失でもなさそうだ、だつてりるちゃんの顔を覚えていたから。

りるちゃんだけじゃない、兄さんの顔や進也君の顔も鮮明に覚えている。

それに私やりるちゃんが着てる制服……どこかの制服なのかわかるけど、名前が出てこない。

自分が着てる赤い制服を見つめる。

「……まあ、いいか」

あまり考えてても仕方ない、今を生きよう、私にできるのは、それくらいしかできないから……。

*

次の日、眠っていた私を誰かがゆする。

「まなちゃん、起きてよ」

「ん、どつしたの、りるちゃん？」

「はい、朝食」

そう言って差し出してきたのは皿に乗った目玉焼き。

「……いつ調理したの？」

「りるが魔法のファイアで調理したんだけど、少し焦げちゃった」

確かに白味の周りに少し焦げが付き、黄身もカチカチだった。

「りるちゃんって、意外と料理下手だね」

「だ、だからファイアの火力が強すぎて……」

「強すぎたって言っても……」

言いかけたけど止めた。

このままガミガミ言い続けたらりるちゃんが拗ねてしまう。

「まあ、食べれなくもないか、ありがとう、りるちゃん」

「え、えへへっ」

りるちゃんから箸と目玉焼きえを受け取り、一口食べてみる。

「ん〜ん？」

焦げの苦みこそあるけど、それ以外に目玉焼きでは絶対味わえない味が……。

「ねえ、りるちゃん」

「お、おいしかった？」

「……か、隠し味になにか入れた？」

「おお！ 流石まなちゃん、ご名答」

額に汗が流れる。

コレって、まさか……。

「隠し味に塩と酢を入れてみました」

「ごめん、全然隠しきれないから！」

白味の中にジャリジャリと塩がまんべんなく振られ、そして、酸味が凄まじいことになって、絶妙な殺人料理に……。

「もしかして、おいしくなかった？」

「うっ……」

瞳をつるわせ、上目ずかいで見つめてくるりるちゃんに「まずい」とは言えず……。

「お、美味しゅうございます……」

「ホント!? やった〜」

はしゃぐりるちゃんに気付かれないように、ルチアちゃんとポーラに真実を言ってもらおうと見てみると、ルチアちゃんはグツタリし、ポーラは青白い表情で運転していた。

「うまく改良できてよかった〜」

……ああ、私の人生、ここで終わりそうな気がする……。

恐るべし、りるちゃん……。

*

りるちゃんの殺人料理から立ち直り、流れる景色を眺めていると……。

「魔物、来ます」

「ルチアちゃん？」

「三人……空から」

私は双眼鏡で空を見回す。

すると、羽がはえたゴブリンが三人、脚部につけたスラスタールでこちらに飛んでくる。

「す、凄い、数もあつてるし、こっちに来てる」

「本当なの！？ 皆、戦闘態勢にはいるよ」

「『ドライブ』」

「クロスフォーム」

武装化した私とりるちゃんは荷台に移動し、ハンドガンのスナイパーに見立てるパーツを取り付ける。

「……狙えるかな？」

「まなちゃんなら大丈夫だよ」

スコープを覗き、狙いをつける。

「当たって」

トリガーを引く。

しかし、銃弾は魔物にかすることはなかった。

「外した！？ ちっ」

リロードし、再び狙いをつける。

トリガーを引き、発砲する。

銃弾はスラスタに直撃したが、すぐさまパージして爆発から逃れた。

魔物の二体が弓を引き絞り、矢を放つ。

「くっ、撃ち落とす、スナイプショット」

二本のうち、一本を撃ち落としたが、もう一本はそのままこっちに飛んでくる。

「バリアフィールド」

りるちゃんが魔法を唱え、矢を防ぐ。

「くっ、もう少し近かったら当てられるのに……」

銃はまだ慣れないみたいね。

「麻奈美、前からトラックが……」

「え、ホントだ……」

前方に、トラックが走っていた。

「この速さだと、あと少しで追いつくけど」

「……え」

コンテナの扉が開き、中から弓矢を持った少年が出てくる。

りるちゃんと同じ青い制服に身を包んだ少年は、ゆっくりと『』の弦を引き絞る。

構えただけなのにきれいで見とれてしまった。

「サンダーアロー」

SAを唱え、矢を放つ。

弓は電気をまといながら魔物に向かって直進し、突き刺さる。少年はこちらに視線を向け、手招きする。

「……ポォーラ！」

「うん、しっかり掴まってて！」

ホバークラフトを急加速させ、コンテナ内に飛び込む。

「よし、先輩、煙幕を！」

「了解」

トラックから白い煙幕を出す。

「……ふう、これで撒けたかな」

「あの、助けていただき、ありがとうございます」

ホバークラフトから降り、さっきの少年にお礼を言う。

「いいですよ、僕は川原秀一。君は？」

「私は橋本麻奈美です」

私は川原さんと握手を交わす。

「あの、川原さん……」

「秀一でいいよ、どうやらそんなに歳は離れてないみたいだし」

「あ、はい。秀一さん、ここでいったいなにを？」

「ちょっと野暮用だね、君達は？」

「疾風学園から逃げてきたんです」

「え、あそこから？」

「はい……逃げることしか考えてなかったの、なにしようか迷ってる時に魔物が攻めてきて……」

「で、現在に至るんだね、わかった。行くあてがないなら僕達と行動するかい？」

「え？」

「今、さっき言ったように野暮用でここに来てるんだけど……少数人数で行動するよりたくさんいた方が楽しくなるしね」

「……ポーク」

「麻奈美が決めた、私はそれに反対しないから」

「……じゃあお言葉に甘えて、一緒に行動しましょう」

「決まりだね、じゃあ皆を紹介しないと、ちよっと待っていてくれる？」

「あ、はい」

秀一さんが運転席の方に行き、そして数人を連れて戻ってきた。

「あ、麻奈美！」

「え、光！？」

そこにいたのは、私の友達である松本光ひかるだった。

光は嬉しかったのか、独特の髪型をなびかせながら私に飛びついて背中をバンバンと叩いた。

「ちょ、痛いよ……」

「あ、ゴメン。でもまさか麻奈美に会えるなんて……」

「ホントだね」

「二人は知り合いだったのか」

「はい」

「松本さんの紹介は後にするか、こっちが近藤武志君ね」

そう言っつて一人の男子の肩に手を置く秀一さん。

「……よろしく」

「あ、うん、私は橋本麻奈美です」

「ああ」

無愛想に挨拶を交わす近藤君。

「あ、武志君？」

「え、ふ、藤山!？」

りるちゃんが近藤君に声をかけた途端、顔を赤くして慌てだした。

「久しぶりだね」

「あ、ああ、そうだな……」

グイツと顔を近づけるりるちゃんに近藤君は明らかに動揺を隠せないでいた。

「ん？ 顔赤いけど、大丈夫？」

「だ、大丈夫だよ、じゃ、じゃあ俺、やることあるから」

「うん、またね」

……なんていうか、りるちゃんって、もしかして……。

「りるちゃん、なんで顔赤いかわかる？」

「え？ 熱でもあるから？」

「……」

やっぱり、ね。

「まあ、ある意味熱でもあるんじゃないかな？」

「ホント！？　じゃあ寝てないと、武志君！　熱あるよね！？」

「えええ！？　な、ないよ！」

「はあ、意外に、鈍いんだね、りるちゃん……」

私はりるちゃんと近藤君のやり取りを微笑ましく見つめるのであった。

*

突然トラックが止まる。

「着いたみたいだね」

「着いたって……どこにですか？」

「まだ言ってなかったね、僕達の目的」

「そうですね」

「僕達がここに来た理由、滅びし学園の調査だよ」

「滅びし、学園……」

「見たらわかるよ、でも、衝撃がデカいかもしれないけどね」

そう言いながらコンテナから出ていく秀一さん。

私達も外を出る。

「え……」

コンテナから出た私は目に入った光景に絶句する。

ツタにまみれた校舎、雑草が生い茂り、窓やドアが破壊されてい

た。

「ここは、一体……」

「……ナイツ義塾学園」

ポーラが小さく呟く。

「ポーラ……?」

「私を通つてた学園よ」

「ここが……?」

「……まさかここに戻ってくるなんて……秀一、ここで調査をするんだよね?」

「うん、とある人から依頼を受けてね。なんでも『ナイツ義塾学園の内部を調査してきてほしい』だそうだよ」

「中ね……もしかしてあのままなのかな?」

「ポーラさん?」

「ん、なんでもないよ……なんでも」

私に心配かけまいと笑顔をみせるが、私から見れば無理をしているのはすぐにわかった。

「ポーラ、辛いならトラックの中で待つてもいいんだよ?」

「ううん、大丈夫だから……」

「そう……」

「先輩、トラックの警護、お願いします」

「うん、任せて」

「ルチアちゃん、ここで大人しく待つてるんだよ?」

「うん、待つてます、里流葉お姉ちゃん」

私とりるちゃん、ポーラと秀一さん、光と近藤君の六人で校舎の

中に入っていく。

校舎の中は、異様な空気が漂っていた。

「……この臭いって、腐臭だよな」

「血の臭いも混ざってるし……気持ち悪くなってきた……」

光が鼻と口を押えてそう言った。

「……やっぱりあの時のままか」

ポーラが辛そうな表情で呟く。

「え？ いたた……」

りるちゃんが突然こけてしまう。

「っ！？」

りるちゃんは人の腕でこけたみたいだ。

それも、赤く染まった腕に……。

「……ここで一体なにが……」

泣きそうなりるちゃんを慰めながら辺りを見回す。

首のない生徒、魔物と相討ちしたものの、原型を留めていない人や魔物……。

「……魔物が、ここに攻めてきたの」

「え？」

ポーラは小さな声で語りだす。

「私の力、『フェアリーサーチャー』を調べる為だけに、ここを滅ぼしたの」

「え、どうして？」

「それは私もわからない、けど、直接的な原因は私なの……」

「えっと、フェアリーサーチャーとは？」

秀一さんが首を傾げる。

「本来人に宿ったスモールフェアリーを視認することはできないけど、私には見えるの」

「……なんかビミョーな能力だな」

近藤君の無神経な発言に光は睨む。

「いいよ、別になんとも思っていないし、私もこんな能力、戦闘ではなんの役に立たないって思ってるし」

「……」

「……さ、調査を再開しましょ、ね？」

沈黙した空気をポーラは無理矢理明るくしだす。

「こんなところ、長時間もいたらおかしくなるし、さっさと終わらせましょ」

「そう、だね」

私もそれに乗り、場を盛り上げる。

「……え」

突然光が変な声を出して固まる。

「どうしたの？」

「あれ……死体、だよな？」

指差す先には、確かに屍だった。

「そうだけど」

「今、動いたような……」

「まさか……」

と言ったまさきにその時、突然屍が立ち上がる。

「ひゃっ！ やっぱり！」

「光、悲鳴あげてないで武装化するよ！」

「『『『『『ドライブ』』』』』」

「クロスフォーム」

私達は武装化し、構える。

「まなちゃん、いつの間にか囲まれて……」

「え、いつの間に……」

大量の屍が私達を取り囲む。

「これは……結構厳しいかも」

「そうですね……秀一さんはこういう状況、経験ありますか？」

「いや、流石に……橋本さんは？」

「私もないです、あと、私のこと、麻奈美でいいですよ？」

「わかった、麻奈美、無理はしないでね」
「ええ、お互い、命が大事ですから……」

皆、来た道に向かって突撃をかける。

「ソニックブーム！」

近藤君が剣を振り、音速波を出す。
しかし、それを盾で防ぐ屍。

「もらった！」

ポーラがそのままシールドクロードで屍を切り裂く。

「ショットオール！」

光がショットガンで広域を攻撃する。
屍は数体地面に倒れるが、再び起き上がる。

「くっ、何発当てれば死ぬのよ!？」

「もう死んでるけどね」
「知ってるよ！」

私のツッコミに反応する辺り、余裕そうだ。
私もハンドガンで屍を攻撃するが、思いのほか直撃コースに当たらない。

「……やっぱり、私には！」

両手にセイバーを持ち、走り出す。

「ちょ、まなちゃん!？」

「りるちゃん、援護お願い」

「う、うん。ファイア、サンダー、アクア、アイス、クエイク!」

りるちゃんが魔法連発援護を受け、私は魔法陣を地面に描き、飛びあがる。

「でええい!」

力任せに屍を一刀両断する。

「これなら生き返ることは……え？」

さっき両断した屍が、再生していき、元通りになった。

「ど、どうなってんの!？」

動揺する私に屍は持っていた斧を振り上げる。

「まなちゃん危ない!」

「! くっ……」

バックステップで攻撃を回避する。

「これじゃあ突破できない」

「退路も見つからないし……麻奈美」

「……」

落ち着け……どこかに、打開策は……。

辺りを入念かつ素早く観察してみると、ある場所に目が止まった。
二階の通路なのだろうか、コンクリート橋みたいなのが私達の少し前の上にあった。

「ねえ、この中でマジックサーベル使える人居る？」

「俺が使えるけど」

「私と近藤君であの上にある廊下みたいな橋を壊すから、残りの皆は援護とそれを支える柱をすべて壊して」

「わかった」

「じゃあ近藤君は橋の端っこを斬って、私はその反対を斬るから」

「よし、タイミング合わせるぞ……」

私と近藤君は足元に魔法陣を描き、タイミングを計る。

目の前にはゆっくりとした足取りでこちらに近づく屍達。

「せーのっ！」

同時に飛び上がり、セイバーに魔力を集中させる。

「マジックサーベル！」

斬りつけるが、コンクリートだからか、斬れない。

「くっ……ありったけの魔力を……剣先につ！」

マジックサーベルの威力は更に上がり、橋を破壊することができた。

「麻奈美、橋が崩れる！」

「皆は衝撃に気をつけて！」

私と近藤君は橋と共に落下し、下にいた屍達を下敷きにした。

「今のうちに突破するよー!」

復活する前に私達はこの場を立ち去った。

*

「やった、あと少しで出口だ!」

「でも、目の前になんか居るんだが……」

秀一さんに言われ、よく見てみると、数人の人影があった。

「えー!? マ、マサキ……」

ポーラが絶句する。

「どうしたの? ポーラ!?!」

「そ、そんな……なんで、ここに……」

「ポーラ!」

ポーラの肩を持ち、強めにゆする。

「しっかりして! あの屍、ポーラの知り合いなの?」

「し、屍じゃない!」

「でも……」

「マサキ……生きてたんだ……」

屍に近づくとポーラ。

すると、一人の屍が弓を構える。

「ポォラ危ない！」

「えっ……………」

放たれた矢はポォラを庇った秀一さんの肩をかすめる。

「くっ……………」

「あ……………」

「死にたいのか！ 事情は知らないけど今は戦闘中だ、私情をだすな！」

「……………」

あんなに優しそうな秀一さんが怒っていた。

「つうう……………どうやら矢に毒が塗られてたみたいだ……………腕の感覚が

……………」

「川原さん、りるが魔法で……………」

「後でいいよ、それよりもここで立ち往生してると後ろの魔物に追いつかれる、一気に攻めるぞ」

秀一さん言い分も一理ある、このまま挟撃されたら私達に勝ち目はない……………。

「皆、ここを一気に突破するよ！」

「……………」
「……………」
「……………」

私は左手に魔力を集中させる。

「アクア！」

左手から水の魔法を出し、屍に攻撃する。

「……」

ビシヨビシヨに濡れた屍にりるちゃんが杖を構える。

「サンダー！」

杖から電気を出し、屍を感電させる。

「マジックショット！」

さらに光がハンドガンで屍の胸を撃ち抜く。

「やったの？」

「いや……まだ」

撃ち抜かれた胸は既に再生していた。

「どうなってるのよ！」

「光、落ち着いて」

屍達の足元に突然魔法陣が描かれる。

すると、三体の屍は素早い動きで私達の死角を取る。

「な、なんだこいつら!?!」

近藤君がロングブレードを振るが、避けられる。

「なんかさつきと動きが全然違うような……」

「（アクアレイン）」

屍が小さく何かを呟く。

そして、私達の周りに突然大量かつ凄まじい勢いで水が降り出す。

「いたた！」

「水でも結構痛いね……」

この状況でのんきなこと言ってるよ……。

けど、本当にどうなってるの？

ふと目に入ったのが、屍が両手に電気を持っていた。

「ま、まさか……」

私が気づいた時には既に遅く、屍は魔法を唱えていた。

「（サンダーレイン）」

そして、私達に大量の電気が落ちてくる。

「きゃああああー！」

「うわわああー！」

「ぐうう……！」

「くっ……まさか、そっくりそのまま返してくるとは……」

「（アイスレイン）」

地面に突っ伏す私達にさらに大量の水が襲う。

「っあっ！」

氷の刃が体中に刺さる。
しかも濡れた身体のせいで、地面と身体が凍ってしまい、身動きが取れなくなる。

「……さ、寒くて痛い……」

りるちゃんが震えながらそう言う。

「身体に力が……」

全身がガタガタ震えてるのはすぐにわかった。

私の目の前にいる屍がゆっくりと剣を振り上げる。

このままじゃ、殺られる！

（麻奈美、オーバードライブしかないよ）

「オーバー、ドライブ？」

スモールフェアリーに聞き返す。

（とにかく、オーバードライブって唱えて）

「オ、オーバードライブ」

（クロスフォーム）

地面に赤い魔法陣が描かれ、高速回転しながら上に上がっていく。
私の周りの氷を溶かし、身体全体が温かくなる。

「でえい！」

素早く起き上がり、いつの間にか装備していたミドルシールドで

突進する。

屍を吹き飛ばし、皆の方に向き直る。

「ヒーリングオール」

私が魔法を唱えると、皆の身体についていた氷を融かす。

「身体が、あつたかい……」

「なんとか、動ける」

（麻奈美、今オーバードライブフォームになってるけど、正直言って諸刃の剣なの）

「どうということ?」

（意識をちゃんと持ってないと暴走するから）

「……わかった」

どつりで頭が痛いわけだ……私という自我を保ちつつ戦うには……

「短期決戦しかない!」

背中に装備した二本の槍を持ち、屍達に狙いをつける。
数は三体……。

「一体二十秒、一分で片付ける!」

背中にできていた赤い光の翼を使って一気に飛び上がる。
そして高所から一気に屍達目がけて突撃する。

「ダガービット!」

勝手に唱えていた。

……これは思った以上にヤバイかも。

腰についていたダガー六本が勝手に動き出し、屍二体の頭と胸を同時に突き刺さった。

「あと一体……」

頭の痛みもそろそろ限界かも……。

「でえい！」

槍二本を同時に振り下ろす。

屍は二本の剣で受け止める。

(麻奈美、これ以上このままでしたら暴走するぞ！)

「わかってる……けど」

コイツ、強い……。

「麻奈美、オーバードライブを解いて、早く！」

「ポォーラ!?!」

ポォーラの声に従い、オーバードライブを解く。

「え、槍も消えるの!?!」

屍の前で無防備になる。

「しまっ……」

「間に合ええ！」

その時、ポーラが凄い勢いで近づき、屍の首を刎ねた。

「麻奈美、心臓を突き刺して！」

「うん！ くらええ！」

ミドルブレイドで胸を突き刺す。

「これで、おしまい……」

ポーラはさつき刎ねた頭に銃剣を突き刺していた。

「さよなら、マサキ……」

その屍は再生することはなかった。

そして、私達は足早にここを立ち去ることにした。

【第十一章・滅びし学園終わり】

第十二章 宏樹達VSメイドロボシスターズ

車を運転しながらムヴィ達のことを考えていた。記憶は定かではないが、ムヴィとメヴィは俺の側にいた……と思う。

ホント、一部だけの記憶が欠落してる。

幼馴染みや友達、会いたくなかった奴の顔と名前は覚えているのに、俺達が着てる制服とか、まったくわからない。

「宏樹？」

隣に座る美希が声をかける。

「どうかしたの？」

「え、いや……」

「……？」

「……平和だな」

「へ？ あ、そうだね……」

と、そんなことを言っていると、目の前に大量のロボットが一人の男と揉めていた。

「ねえ、なんかヤバくない？」

「そうだな……」

車を道の端に止める。

「美希、様子を見に行くぞ」

「うん」

車から降り、ロボットの前に行く。

「ン？ ナンダ？」

「それはこっちのセリフだよ、大量の人数で道を塞ぐから進めないじゃないか」

「ソナノシルカ、コッチハイソガシインダ」

「はあ、ツベコベ言わずに道を開けなさいよ」

「オンナ、ダメレ」

「ええ〜女性差別反対〜」

「ダメラナイナラ、ハイジヨスル」

銃を美希に構える。

「コワイダロ？ ダッタライマスク……」

「別に、撃てるもんなら撃ってみなさいよ」

非武装状態なのにロボットを挑発する美希。

「イイダロウ、イマスグウツテヤル」

「なにやってんだバカ！」

俺はロボットの持っていた銃を蹴り上げる。

「ドライブ！」

それと同時に美希は武装化し、ダガーで攻撃しようとしたその時。

「マジックサーベル！」

「美希っ！」

俺はとっさに美希抱え、その場を離れる。

刹那、さつき居た場所にマジックサーベルが地面に刺さる。

「メヴィ……？」

「残念、ボクはメヴィじゃないんだよね」

そこにいたのは、メヴィではなく、黄色髪の少女だった。

「君が藤山宏樹君だね」

「あ、ああ……」

「じゃあ、軽く死んでもらうよ！」

「ええい！」

バックステップで距離をとる。

「ドライブ」

「クロスフォーム」

ショートブレイドを抜き、少女に斬りかかる。

俺の剣をロングブレイドで受け止められ、つばぜり合いになる。

「お前、メイドロボだろ」

「ご名答、ボクはモヴィ。先に言っとくけど、ムヴィとメヴィと違って、手加減しないから！」

「ぐっ！」

腹部を蹴り飛ばされる。

「クラッシュインパクト！」

回避が間に合わず、受け止めるが、身体全体に衝撃が走る。全身の骨が折れるんじゃないかと思えるほどに……。

「ダガービット！」

「え？」

美希がモヴィをけん制する。

「くっ……」

なんとか態勢を整え、二本のショートブレイドを連結させる。

「ブレイドオブーメラッツ！」

モヴィに全力で投げつける。

「当たらないよっ」と

サイドステップで避けられる。

「かかった」

「え？」

「ネットショット！」

美希がモヴィにネットを被せ、足を奪う。

そして、投げたツインブレイドは大きく弧を描き、モヴィに迫る。

「スナイプショット」

しかし、それを誰かが軌道を変えてしまう。

「まったく、少しは私と連携してくださいよ……」

「えへへ、ごめんごめん」

ハンドガンを二丁持った青髪の少女が現れる。

……コイツもロボットだな、間違いなく。

「さて、二人のうちに片付けましょうか」

「そうだね」

「……それはどうかな？」

「宏樹先輩！」

「ひろ！」

車で待機していたメンバーが合流する。

「さて、戦力は互角かな？」

「それはどうでしょうか？」

短い青髪をなびかせながら余裕の表情を見せる。

「ショットオール！」

「撃てえ！」

突然左から大量の銃弾が飛んでくる。

「チャフフィールド！」

美春の防御魔法で防ぐが、大量のロボットが突撃してくる。

「くっ、各個で迎撃、二人一組で対応しろ！」

「了解」「了解」

「美希、ついてこい」

「いいよ、いっちょ派手に行きますか！」

美希の射撃の援護をもらいながらモヴィに接近する。

「く……」

モヴィは美希が放った銃弾をロングブレードとミドルブレードで弾く。

「じのっー」

飛び上がり、両手にハンドガンを持ち、銃剣を出す。

「調子に乗らないでください！」

「乗ってなんかいない！」

青髪の少女が放った銃弾を銃剣で弾きながらモヴィに近づく。

「ええい！」

振り下ろした銃剣をモヴィはブレードで受け止める。

「甘いよー」

「……」

銃剣を弾き飛ばされる。

「ブレイドビット!」

「モヴィ、後ろです!」

「え!?!」

「なによそ見してんだよ!」

「え、くっ……!」

シールドで体当たりし、モヴィを吹き飛ばす。

「よくも!」

「私を忘れないでくれるかな!?!」

「っ!?!」

美希のダガービットで足を止める。

俺は引き寄せたツインブレイドでソイツに攻撃する。

「!?!」

しかし、それを受け止められる。

「な、なんとか間に合った……」

「メヴィ……」

「悪いけど、ミヴィはやらせないよ!」

「それはコッチのセリフだ!」

俺とメヴィの間に入る進也。

「宏樹先輩をやらせるわけにはいかないんだ」

「進也様……」

「ミヴィ!?!? なんでここに……」

「当てる!」

「くっ！」

進也に向かって飛んできた銃弾をマヴィが盾で防ぐ。

「ボーっとしないでください！」

「わ、悪い……」

珍しくマヴィは声を荒げていた。

「今の攻撃、ムヴィね……」

「流石お姉ちゃん……」

護衛をつけたムヴィがやってくる。

「……私達は分かり合えないんですね」

「そうですね……お姉ちゃん」

マヴィの手は強く握られ、震えていた。

「ならば……私はもうためらわない！ 狙い撃つ……ムヴィ！」

「望むところです、お姉ちゃん！」

俺はマヴィを援護しながら前に出てムヴィに近づく。

「宏樹様を近づけないで！」

「そこをどけえ！」

ツインブレイドを分離させ、立ち塞がるロボットをすれ違いざまに斬る。

「ドライブウインド！」

「クロスフォーム」

「ウテエ！」

「エアシールド！」

銃弾を防ぎながらロボットの懐に入る。

ロボットが腕につけたセイバーで応戦するが、ハイジャンプで攻撃を避ける。

後ろで着地し、振り向きざまに鉄扇で一閃する。

「宏樹様！」

「ムヴィ！」

ムヴィの弾幕をホバーの力で次々と避けていく。

近距離になると、俺は勢いをつけてムヴィにハイキックする。それをムヴィはスナイパーライフルで押さえる。

「イナズマキック！」

「きゃっ！」

足に電気をまとい、押さえていたスナイパーライフルごとムヴィを吹き飛ばす。

「ムヴィ、覚悟！」

「くっ……」

「させないっ！ ライトニングランサー！」

メヴィは槍を持って構え、電気を身体中にまといながら高速で口ツチに突っ込んでくる。

俺はシールドとハンドガンを構える。

槍をシールドで弾こうとしたが、触れた途端、電流が身体に走る。

「ぐあっ!」

そして、メヴィの突進の力で俺は吹き飛ばされる。

「とどめ!」

「ちっ!」

そのまま攻撃動作に入ったので、俺は地面を転がり、回避する。起き上がってメヴィを見ると、既に俺の目の前で振りかぶっていた。

とっさに銃剣で受け止める。

「マジック……」

横では俺を狙うムヴィ。

「くっ……オーバードライブ!」

「きゃ!」

武装化時に衝撃波が発生する。

「ショット!」

「ライフルビット!」

ムヴィの攻撃をショットブレイドで弾き、ムヴィにライフルビットで攻撃する。

「ええい!」

ムヴィはスナイパーライフルの銃剣とショートブレイドで銃を落とすとしていく。

しかし、銃弾の一発がムヴィの右ふくらはぎに当たる。

「くっ」

膝をつくムヴィに俺は光の翼で一気に近づく。

「これで決める！」

「スモーク」

煙幕をまき散らすがお構いなくムヴィが居るであろう場所をショートブレイドで攻撃する。

しかし、手応えがなかった。

「……はあ」

ドライブを解き、ため息をつく。

「凄い戦いぶりだったよ」

完全に忘れていたけど、さっきからいた少年が近づく。

「ありがとう、助かったよ」

「いえ、礼には及びませんよ」

「いや、お礼を受けてくれ、どうかな？ 特に急いでないなら俺の家でゆっくりすればいいよ」

「……そうですね、じゃあお言葉に甘えて」

「うん、それがいい、皆さんも俺についてきてください」

俺達はその少年の後をついていくことにした。

「そういえば自己紹介がまだだったね、俺はマスク・ニーパー」
車と並んで歩くマスクに俺達はついてきている。

「でも、どうしてロボットがここに来たんです？」
「なんでも『聖なる石をよこせ』ってさ」

「『聖なる石』？ そんなのがここにあるのか？」

「まあ、あるのは事実なんだが……」
「なんか問題でも？」

「ああ、聖なる石が祭つてある建物に結界が張られていて俺でも近づけないんだ」

「へえ。でもロボット達が欲しがると代物なのか？」
「さあな、俺にもさっぱり。着いたぞ」

前を見てみると、大きな屋敷がそびえ建っていた。
……いかにもお金持ちそうな屋敷だ。

その隣には学校の校舎らしきものが建っていた。

「あの、ニーパーさん……」

「マスクでいいぜ、あと普段通りの口調でいいよ」

「マスク、あそこに校舎みたいなのが建っているんだけど……」

「校舎だよ、まあ今の状態ではただの空き家だけだな」

「学校でもしようとしているのか？」

「まあ、そういう話は屋敷ないでということだ」

車を近くに止め、俺達は屋敷に入ることにした。

「おかえりなさいませ、マスラク様」

「ああ、客人だ、丁重におもてなししてくれ」

「かしこまりました」

メイドらしき人がこちらに来て深々とお辞儀をする。

「ようこそいらっしやいました、わたくし、マスラク様に仕えるニーナ・ヴェンタルと申します」

「ど、どうも……」

近くで見て気づいたが、このニーナって言う人、ヒューマンハーフ族だ。

特徴的なつり上がった目、短くなつてはいるが、爪はやや鋭かった。

しかし、牙はなく、手も人間とさほど変わらず、一見したら気づかないな。

「マスラク……変なこと聞くけど、ニーナさんって……」

「ああ、ヒューマンハーフ族だよ、人間と魔物のハーフだよ」

「人間と魔物の!？」

「人間の女性は魔物の性奴隷にされて無理矢理レプされてるんだぜ、別に驚くこともないだろ」

「いや、そうかもしれないけど……」

「心配しなくてもニーナに害はないよ、コイツは赤ん坊の時に捨てられていたのを俺が拾って育てたんだから」

「そ、そうなの……」

そうは言っても少し落ち着かないな。

「人間の血が流れてるからドライブできるし、用心棒としては申し

「分ないぞ？」

「そ、そう……すみません、身構えてしまつて……」

「いえ、構いませんよ」

ニーナさんに連れてこられた場所は、応接室だった。

「ここに掛けていてくれ」

「はい」

俺はマスクに指定されたソファに腰を下ろす。

他のメンバーも椅子やソファに腰を下ろしたり壁にもたれかかつてつた。

「さて、そういえば名前聞いてなかつたね」

「俺は藤山宏樹、宏樹でいいです」

「宏樹はコーヒー飲める？」

「ブラックでなければ」

「砂糖何個？」

「三個で」

「え、そんなに入れるの？」

「はい」

「そう、ニーナ、頼む」

「かしこまりました」

ニーナさんがコーヒーを淹れて一人一人に聞いては配つていった。

「で、話をするわけだけど、なにから聞きたい？」

「マスクつてお金持ちなの？」

「最初の質問がそれ！？ まあ、いいけど……金持ちと言えば金持ちかな」

「校舎作れるほどのですか」

「まあな、さつきも言ったように、今は空き家同然だけどね」

「でもなんで校舎なんて作ったんだ？」

「それだけど、俺な、将来は学院長になるのが夢なんだ。で、勢いで建てた校舎だけど、なかなかうまくいかなくて今の状態になってる」

「そうなんだ……でも学院ね……どんな学院にしたいんだ？」

「そうだな……いろんな種族が差別なく、楽しく学院生活を送れる学院にしたいな」

「いろんな種族が差別なく、か……。」

「……どうかしたのか？」

「いや、こんな荒んだ世界なのに、理想が高いなと思って」

「バカにしてるのか？」

「まさか、俺は良いと思うよ、俺もそんな世界を望んでるしね」

「そうか……だったら頑張らないとな」

「俺もその世界を作る為に努力するよ」

「え？」

「この際だから、一緒に作らないか？ どの種族も差別されず、共存する世界を」

「……ははっ、面白そうだな、乗ったよ、俺はすべての種族が通える学院を作り、宏樹はすべての種族が共存する世界を作る」

俺が差し出した右手にマスクは応じた。

「その話は今度にして、もう一個質問してもいいか？」

「なんだ？」

「『聖なる石』についてなんだが……」

「ああ、なんだでもヒューマン族にしか効果がないと言われる代物

でな、その石の恩恵は世界のバランスを壊しかねない物らしい」

「世界のバランスが？」

「ああ。だから俺の祖父母が結界を張って封印したんだ、二度と、誰の手にも渡らぬようにと……」

「そんなに凄いなだな。でも人間にしか効力がないのにどうして口ポット達はそれを欲しがるんだ？」

「それは俺にもわからない。ところでさ、今日はここで休んでいいかい？」

「え、いいのか？」

「構わないよ、なんなら宏樹が目指す世界を作る上での拠点にしても構わないよ、ここなら港も使えるし船で移動することだってできる。人数分の部屋もあるし、いいこと尽くめだぞ？」

「でも、迷惑にならないのか？」

「全然、むしろ賑やかになって楽しいじゃないか」

「……そうだな、ならここを拠点にさせてもらうよ」

俺達はここに住むことになった。

*

「ここが俺の部屋か」

「はい」

「なかなか大きい部屋だよ、ニーナさん」

「そうですね、マストラク様はこれでも小さい方と仰っていましたが「流星金持ちだな」

「それではこれで失礼します、なにかありましたらご遠慮なくお呼びくださいませ」

「ああ、ありがとう」

ニーナさんが退室し、一人になった俺はベッドに腰を下ろし、そ

のまま寝転がる。

「はぁ……………」

ゆっくりとため息を吐くと、いままでの疲れが急に出てくる。目をゆっくり閉じると、特に時間が掛かることなく眠りについた。

*

気が付いた時には既に部屋の中は暗闇になっていた。窓から差し込むのは月光だった。

「どれくらいまで寝てたんだろ……………」

そんなことを呟きながら窓に近づくと、テラスに鳥獣族が居た。

「…………アーステイ？」

「やっと起きたか」

「どれくらいから居たんだ？」

「太陽が沈む直前から居たな」

「だったら起こせよ…………で、なにか用か？」

「ああ、あのお方がお呼びだ」

「あのお方？」

「ああ、俺達のリーダー、アライン様かな」

「アライン……………」

【第十二章・宏樹達VSメイドロボシスターズ終わり】

第十三章 ガールズウォー

「この村に依頼者が居るんですか？」
「うん」

後部座席から見える村を見ながら私は秀一さんに聞いていた。

「秀一、村に着いたら私達はどうすればいい？」

車を運転する橘清美さんは前を見ながらそう言った。

「自由行動してていいですよ、すぐに終わるかもしれないからね」
「そう」

そんな感じに話していると、村に到着した。

「じゃあ僕、依頼主のところへ報告してくるよ」

「あの、秀一さん」

「ん？ どうかした？」

「私も同行してもいいですか？」

「？ まあいいけど。ついてきてもなにもないよ？」

「わかってます、でも色々と聞きたいこともありますから」

「情報収集というわけだね、じゃあ一緒に行こうか」

「はい」

私と秀一さんの二人で村の中を歩いていく。
少し歩くと小さな家の前に着いた。

「ただいま帰りました」

「ああ、川原君か、依頼の方は済んだかい？」

少し小太りし、短い銀髪の男が出てくる。

「ん？ 見慣れぬ人が居るようだが……」

「ああ、彼女は橋本麻奈美と言うんです。疾風学園に捕らわれていたんですが、脱走してきたみたいですので、依頼に向かう前に保護したんです」

「ほお、あの疾風学園から……大変だっただろうに」

「いえ……あの、よろしければ依頼の内容、私に教えていただけませんか？」

「いいですよ、依頼の内容は、数年前にナイツ義塾学園はヒューマンハーフ族が攻め、学園は崩壊しました。それから現在に至るまで調査班等は恐れて手つかずにしていますので彼に依頼したんです。ナイツ義塾学園は現在どうなっているかを」

「そうでしたか……」

だったら死体とかが放置されっぱなしだったのも頷けるわね。

「それで、内部はどうなっていましたか？」

「はい、内部は腐臭と死体だけでした。調査途中に屍が突然動きだし、それを退けながら撤退してきました。ですので奥はどうなっているか不明です」

「そうか、ご苦労だった、これが報酬金だ」

「はい、ありがとうございます」

男から袋に入った報酬金を受け取る秀一さん。

「あの、調査って、なんの仕事をしていらっしゃるんですか？」

「生体調査班の一人さ、あそこ周辺の生体を調べたかったんですが、

このように私は戦闘なんてできませんし、もしもの為に彼に依頼したということですよ」

「は、はあ……」

生体調査班、ねえ。

「しかし、屍が動きだす……ねえ」

「？」

私は男がそう呟いた後に一瞬だけ不気味な笑みを見せるのを見た。

「それではここの調査も終わったことだし、私はここを出ることにするよ」

「はい、それでは僕達も失礼します」

私はなにか引つかかったが、気にするのを止め、皆の元に戻ることにした。

戻ってみると、車の近くにりるちゃん達が集まっていた。

「りるちゃん、どうしたの？」

「ああ、まなちゃん。武器商人だってさ」

「武器商人……？」

首を傾げながら集まりの中心を見ている。

「今なら出血大サービス！ このフェアリーボールがなんと1500Gだよ！」

「秋山先輩が武器商人なんだよ、なぜか」

「知り合いなの？」

「うん、秋山亮太先輩で、お兄ちゃんのお友達です。詳しくはよく

覚えてないんだけど……」

りるちゃんも顔と名前は覚えているのに詳しい情報は覚えていないんだ……。」

「あれ、秀一じゃん」

「亮太くんが武器商人をやってるなんてね……」

「どう？ 似合ってるか？」

「え、あくまあ、似合ってるんじゃないかな？」

「だろ？」

秀一さんが苦笑していた。

「でも、武器商人がこのボールを売るんですか？」

「ああ、フェアリーボールと言って、宿る妖精の数を増やせるんだ」

「へえ……それは凄いですね……」

「それにしても、君、凄くかわいいね？」

フェアリーボールのことを考えていると、秋山先輩が突然顔を近づける。

「へっ、あ、どうも……」

「彼氏とかいるの？」

「ええ、いますよ」

「……なんだっ」

「……あれ？」

急に冷めてかのように定位置に戻る先輩。

「え、あれ、私、なにかまずいことでも……」

「ああ、気にしなくていいから。亮太くんは女癖は悪いけど、彼氏がいたらそれ以上はナンパしてこないから」

「は、はあ……」

「秀一く俺ってそんなに女癖悪いかな？」

「うん」

「うわっ、即答……」

胸を押さえてその場でうずくまる秋山先輩。

「秀一さん、この後どうしますか？」

とりあえず、今後をどうするかを秀一さんに聞いてみる。

「そうだな……とりあえず今日はこの村に滞在して、その時に考えるよ」

「あの、予定が決まってないんでしたら、私達の協力をしてくれませんか？」

「協力？」

「はい。この世界にいるかわからないんですが、りるちゃんの兄、藤山宏樹と一緒に探してくれませんか？」

「宏樹くんを？」

「知ってるんですか？」

「知ってるよ、ってか僕以外にも武志くんと清美先輩、亮太くんも知ってるから」

「そうなんですか……」

「宏樹くん探しを手伝うよ。僕達がこうして集まってるんだし、宏樹くんの他にもいるかもしれないしね」

「ありがとうございます」

私は秀一さんに頭を下げる。

「でも今日は身体をゆっくり休めるんだよ？ 脱走してろくに休めてないだろ？」

「はい、そうします」

*

「ベットなんて何日ぶりなんだろ……」

「そうだね。ずっと牢屋の中にいたし、外に出てもバタバタしてたしね」

村の宿屋で休むことになった私達。

りるちゃんと一緒の部屋になる。

「えへへっ、フカフカ」

りるちゃんはベットに寝転がり、顔を緩めていた。

「麻奈美、里流葉、お風呂一緒に入らない？」

「ポーラ？ そうだね、行く、りるちゃん」

「うん」

私達女子組は村名物らしい露天風呂にやってくる。

「露天風呂なのはいいけどさ……なんか誰かが見てそんな気がするんだよなあ……」

光が心配そうに呟く。

たしかに心もとない困い。

隙間もよく見ればところどころにある。

「……こりや常にタオルつけてないといけないかもしれないわね」
「そうだね」

ポーラの言う通りね。

「でも湯加減はとてもいいね」

りるちゃんがはしゃいでいた。

「……あれ？」

しかし、りるちゃんは湯船の端に近づぐ。

「ねえ、まなちゃん」

「ん？」

「これってさ、カメラだよね？」

りるちゃんが指差す先を見ると、石と石の隙間にあるはずもない小さなカメラが仕掛けてあった。

私はこのことを皆に知らせた。

「まさか、盗撮とはね……」

清美さんは腕を組んでそう呟く。

「経営者を問い詰めてみる？」

「そうしましょうか」

私達は服を着直して宿主の方に向かった。

「え、カメラがですか？」

「はい、露天風呂の女湯に小型のカメラがあっただんです」

「はあ、そうでしたか……」

宿主の反応がどうも変だ。

なにか、隠してるんだろうか……。

「そうでしたか、って、それだけなの！？」

光が宿主に言い寄るが、当の宿主はダルそうな表情をしながら「申し訳ありません」と言った。

*

私達は一つの部屋に集まり、女子のみで会議をしていた。
ちなみに男子は現在入浴中。

「あの宿主の反応、引つかかるな……」

「でも知らないって言ってたよ？」

「うん。でも本当に知らないならあの反応はおかし過ぎるの」

りるちゃんが言うように本当に知らないならあんな態度をとるの
であろうか……。

「気になる？」

悩む私を見て、ポーラが覗き込んでくる。

「うん……どうも宿主の反応が引つかかって……」

「ならさ、今窓を見たらさ、その宿主が一人で出て行ったからさ、つけてみない？」

「宿主が出て行ったの？ 荷物とか持ってた？」

「うん、結構持ってたわよ」

「なら、つけてみましようか」

「ルチアはここで留守番ね」

「え、あ、はい」

「え、なに？ 皆で行くの？」

「当たり前じゃん、人の裸をタダで撮ったんだからね、それなりの料金が発生するわよ」

光が腕を回しながらそう言った。

他の人も光の意見に頷いていた。

「……と、なると、二つに分かれて行動した方がいいよね、人数が多ければバレル確率が高くなるし」

「じゃあ、私が率いるポーラ隊と麻奈美が率いる橋本隊に分かれましようか」

と、言うわけで私の隊にはりるちゃんと光、ポーラの隊には清美さんとに分かれ、別々で宿主の後をつけることにした。

*

宿主は村から離れ、獣道を突き進んでいく。

追跡すること二分、私達は一つの大きな建物の前に来ていた。

「こんなところに建物があるなんてね……」

光は茂みの隙間から建物を観察していた。

「ここからじゃあ中の様子が見えないよね、どうするまなちゃん？」

「うん……窓から覗き込んで見る？」

「そうしようそうしよう」

私達三人は音をたてないように建物に近づき、窓から中の様子を見してみる。

部屋内は宿主の他に、五人の魔物が居た。

会話内容はわからなかったけど、モニターには盗撮映像なのか、裸の女性の姿などが映し出されていた。

(これってさ、確実に盗撮だよね?)

(うん、ならポーラ達に連絡して一気に……)

「ん？ 誰かいるのか？」

「グルルツ！」

行動を移そうとしたその時、ゴブリンとビーストウルフに見つかってしまっ。

「くせ者が居るぞ！ 逃がすな！」

「くっ、りるちゃん、光！」

「ドドライヴ！」

「クロスフォーム」

武装化し、私達はまずゴブリンとビーストウルフを片付けにはいる。

「くられ、サンダー！」

「うわわっ！」

りるちゃんが杖から電気を出し、ゴブリンを攻撃する。

「ええい、行けっ!」

「ガルツ!」

「えっ、きゃ!」

ビーストウルフの突進を受けたりるちゃんは吹き飛ばされる。そのままビーストウルフはりるちゃんに飛び乗る。

「ぐふ、ぐふっ!」

「うっ……」

噛みつき攻撃を杖で防ぐ。

「里流葉、今助けるよ!」

「キャン!」

光がビーストウルフを蹴り飛ばす。

「あ、ありがとう……」

「いって」

「はあああ!」

私はミドルブレイドで窓を破壊し、建物内に侵入する。

「お、お前は!?!」

「……逃がさないわよ、女の敵が!」

宿主に斬りかかろうとするが、それを魔物が阻止する。

「っ、邪魔よ！」

「うわっ！」

身体を回転させながら魔物を横斬る。

「ち、違うんだ！ これは魔物に脅かれて……」

「だとしても、破壊する！」

「ひいい！」

宿主が持っていたカバンを両断し、映写機をブレイドで弾き、足で踏み壊す。

「ちい、よくも！」

「この変態野郎が！」

光も部屋内に侵入し、魔物を背後から撃つ。

「魔物のくせして、人の裸を勝手に撮るなんて……いい度胸してるじゃないか」

「は、人間の女なんか所詮俺達に遊ばれるためだけの存在なんだよ！ その証拠を今から教えてやる！」

光の背後にあった木箱から突然魔物が飛び出し、光の自由を奪う。

「な、なにする気よ！？」

「なについて、今から犯してやるんだよ！」

「させない！」

私は背後から魔物を攻撃するが、受け止められ、逆に吹き飛ばさ

れる。

「つつ……」

「麻奈美!？」

「さてと……どこから引き裂いてやるつか……」

「くっ……」

「へっ、そんなに睨んだって俺が怯えるんでも思ってるのか!？」

「まさか……怯えるよ、私達に」

「は?」

突然壁が吹き飛び、りるちゃんが水色の光の翼を出して、突っ込んでくる。

「な、なんだコイツ!？」

「マツハウイング!」

残像を出しながら高速移動し、光を捕縛していた魔物を吹き飛ばす。

「よし、お返しよ、受け取りなさい!」

自由になった光はハンドガンを構える。

「スタンショット!」

黄色い弾丸が発射され、魔物に当たる。

「ぐっ、身体が……」

膝から崩れ落ちる魔物に光は銃剣を出し、飛び上がる。

「クロスソニック！」

光は高速で銃剣を振り、十の字に斬りつけた。

「麻奈美、大丈夫？」

「うん、なんとか……」

差しのべられた光の手を握り、立ち上がる。

「よくもやってくれたな！」

「いくら強かるうが、これだけの人数で仕掛ければ！」

いつの間にか部屋内は魔物でいっぱいだった。

「インパクトショット！」

清美さんの声が聞こえたかと思うと、魔物達の背後の壁が爆破され、アサルトライフルを構えた清美先輩が立っていた。

「なにかと思えば、逆に俺達の退路を開けてくれるとはな！」

「さあ、どうでしょうか？」

「ライトニングランサー！」

清美さんがジャンプして飛び上がると、電気をまとい、槍を構えていたポーラが突撃してくる。

「ぐはっ！」

「ははっ！」

突き刺した魔物を魔物の集団に目掛けて投げつけた。

「逃がしはしないわよ、その宿主さんっ！」

「ひっ！」

ポーラはシールドクローを投げつけ、クローを挟んで、宿主を壁に突き刺す。

クローと宿主の頭は約一センチ。

「さて、命が惜しい奴は今すぐ逃げるんだね」

「ヒュ、ヒューマンの女のくせして！ 野郎ども、一点突破だ！」

「どうやら皆死ぬ気でくるみたいだ……全員、挟撃で一気に倒すぞ」

「」「」「おっ！」

そして、三分もかからないうちに魔物達は全滅した。

「さて、宿主さん、このこと、村の皆に自分の口で言ってください

ねっ」

「はい……」

縄で宿主を縛り、村に帰ったのであった。

「あれ、皆で出かけていたんですか？」

宿に帰ると、髪がまだ湿った秀一さんが私達に声をかける。

「お散歩です、ね、りるちゃん」

「うん、夜風に当たってたの」

「でも夜風に当たり過ぎて身体が冷えてしまったから、女子の皆で

二度風呂しようかと思いついて」「
「そう、風邪ひかないようにね」

そう言って自分の部屋に帰った秀一さん。

「あ、ルチアちゃん呼んでこないかね、全然温泉満喫できなかったしね」

「そうだね、りるが呼んでくるよ」

「はあ、やっとゆつくり温泉を満喫できるね」

「光、まずは宿主さんにすべての隠しカメラを撤去してもらってからだよ」

「あ、そうだったね」

その後はカメラがなくなった露天風呂を楽しく満喫しました。

【第十三章・ガールズウォー終わり】

「ふふっ、良い物を見せてもらったよ」

「亮太くん？ なにしてたの？」

「ああ、秀一か、ちょっとひと仕事さ」

「？」

次の日、亮太さんが女湯を覗いていたらしく、女子全員で肅清しましたとさ。

【本当に終わり】

第十四章 理想の世界

「なあ、マスラク」

「ん？」

「マーガレッツ島ってここから近くにあるのか？」

次の日、朝食を食べながらある島のことを聞いていた。

昨日、アースティがこんなことを言っていた。

『明日、ここの港を使つてマーガレッツ島に来てくれないか？』

『マーガレッツ島？ なんだよ、それ？』

『俺達鳥獣族とスピアビードル族が争っている島と言えるな』

『……………』

また聞き慣れない種族を聞いた。

一体どんな種族なんだろうか……………。

「まあ、あるけど。ニーパー家とは同盟関係を結んでるシユラム家があるんだよ、マーガレッツ島は」

「シユラム家？ 人、住んでるの？」

「いんや、鳥獣族という人間とは異なる種族だよ」

「へ……………」

「でも、マーガレッツ島がどうかしたのか？」

「いや、なんでもアーラインって言うやつが俺に用があるとかかなんとか……………」

「アーラインが？」

「知ってるのか？」

「そりゃ同盟者なんだしな、彼はアーライン・シユラム、シユラム家の正統なる後継者だよ」

「へえ……」ごちそうさま」

立ち上がり、大きく伸びをする。

「じゃあさ、その港に案内してくれるか？」

「いいけど、一人で行くのかい？」

「そうだけど……」

「だったらニーナを同行させるといいよ。港に事情を話してくれるし、マーガレット島の道案内、護衛にもなるだろう」

「護衛って……そんなに危険なのか？」

「あの島は鳥獣族とスピアビードル族が争っているんだよ」

「ああ……そうだったな」

*

マスラクの家から徒歩で三分の場所、シヨープ港。

「ここはシユラム家を海上から援護するときに使っている港です」

「援護って、戦闘でもするの？」

「いえ、物資支援などです」

「戦争してるんだな……あの島で」

港から肉眼でもはっきりと見える島、マーガレット島。

「ん？ ニーナじゃないか」

俺達の元に一人の老人がやってくる。

「あ、ボスロット様、こんにちは」

「ニーナ、今日もきれいだよ」

「あ、ありがとうございます」

「ところで、こいつは？」

「彼は藤山宏樹様です。彼をマーガレッツ島に運んでほしいんです」

「ニーナの頼みならお安い御用といきたいところだが……」

「どうかしたんですか？」

「ああ、どうもマーガレッツ島を囲むように虫どもが展開してるんだ」

「虫？ スピアビードル族のことですか？」

終始黙っていた俺はやつと口を開く。

「そうだよ、多分近づいたら攻撃されるな」

「でも、行かないとな……」

「まあニーナの頼みだ、よし連れて行ってやる」

「助かります」

「しかし、条件がある」

「なんですか？」

「自分の身は自分で守れ、いいいな？」

「承知してますよ」

「よし、準備するから少し待ってる」

数分後には船に乗って出発していた。

出航して二分が過ぎた時だった。

「なんかあそこの空、黒くない？」

「虫の大群だよ」

「え、えええ！？」

ある場所だけ虫が群がり、水色の空を黒くさせていた。

「多分戦闘になる、準備はいいな？」

「準備はできてますけど……相手は空か……」

「心配せんでも空中戦はできるぞ、コレで」

「なんです、この機械の塊は？」

「プロトタイプだけどフライヤーユニットだ。これを背中に背負ったら空を飛べる」

「へえ……」

「だけどプロトタイプだから虫とか鳥獣族みたいな機動性はないし、専用カタパルトから出ないと飛ぶこともできんし、使用時間は三分じゃ」

「欠点だらけですね……まあ、飛べないよりかはましか」

「あとこのライフルを持っていけ」

「大型のライフルですか？」

渡されたライフルは見た目どおり、少々重量があった。

「えっと、これも……」

「プロトタイプだ」

「ですよ〜」

「でも威力は保障するよ、ほれ、早くフライヤーユニットを背負わんか」

「はいはい……」

このフライヤーユニットもなかなか重たいな……。

「スクランブルじゃ！」

船の中央にカタパルトと棒が出てくる。

俺はカタパルトに足をくっつけ、棒を握る。

「行ってこい！」

「行きます!」

電磁加速により押し出された俺はフライヤーユニットの主翼を展開し、バランスをとる。

「よし、いける」

進路をスピアビードル族の大群に向ける。

「ドライブ」

「クロスフォーム」

武装化し、メガネをスコープモードにして狙いをつける。

トリガーを引き、ライフルを発射する。

撃ち出されたビームはスピアビードルをとかす。

それにビームの近くにいたスピアビードルもとけていった。

「なんて威力だ……」

虫が一斉に飛んでくる。

「宏樹様、援護します!」

「援護?」

ニーナさんが甲板に設置されたガトリング砲のトリガーを握っていた。

「当たらないようにしないと」

俺は虫が近づく前に再びライフルのトリガーを引く。

命中するが大量故にあつという間に囲まれてしまう。

「ってかデカいなオイ！」

虫と言っても人の半分くらいの大きさだった。

近づいてきた虫に対し、俺は左でショートブレードを逆手で抜き、切断する。

俺の右側ではガトリング砲で虫達が駆逐されていた。

「しかし、こつも近くには……」

ライフルが弾切れになったのにリロードのチャンスが全然ない。しかも大型故にリロードできてもこつ近すぎては撃てない。

「くそっ！」

俺は一気に飛び上がり、虫と距離をとる。

しかし振りきれなかった。

「ええい、邪魔だ！」

ライフルを振り回して虫を近づけさせないようにする。

だが、振り払うどころか逆にライフルに虫が集^{たか}る。

そして、虫が離れたライフルはボロボロで使い物にならない状態になっていた。

「くそっ！ 気色悪いな！」

ライフルを投げ捨て、ハンドガンを持つ。

「マジックサーベル！」

銃剣とショートブレードから魔法の剣を発生させ、虫達を斬り飛ばす。

「離れるよ！」

銃剣を横振りするが、虫はそれを避け、こちらの頭めがけて槍を突き出す。

とつさに頭を下げ、攻撃を避けるが、背中のフライヤーユニットに当たる。

「しまっ……くそっ！」

制御不能になり、ユニットをパージして海中に飛び込む。水中までは流石に追ってこなかったが、これでは逆に俺と船が危ない。

体勢を整え、ドライブウインドに変わり、浮上する。

「エクスプロージョン！」

水面から出した銃口から上空めがけて極太ビームを放つ。そのまま水上をホバリングしながら船の前で構える。

「ははっ！」

突然高速でこちらに飛んでくる一つの影。

その影は小さいサイズである虫を的確に斬りつけて回っていた。

「なんだ？」

「アーラインだ」

ボスロット船長がそう答えた。

「え、あれが……アーライン・シュラム」

虫達はこの場を逃げるように立ち去る。

それを見送った鳥獣族はゆっくりとこちらに振り返る。

「……お前が、藤山宏樹だな？」

「……ああ」

「待っていたぞ……」

「俺を……？」

「ここでは虫共がくるかもしれない、我が城に案内しよう」

俺は頷き、アーラインについていくことにした。

*

連れてこられた場所は、自然が豊か……と言うか随分と雑草が豊かに育っていて足の踏み場なんてなかった。

そりゃ鳥獣族っていうんだから行動の基本は空だから地面を歩く必要がないとはいえ……地上を歩く俺達にしてみれば苦労しか出てこない。

ツタでさつきから足を奪われて思ったように進めなかったし。

なんだかんだで到着したが、目の前には少し朽ちたお城がそびえ立っていた。

「……お城って、もしかして……」

「……ここだよ」

「あ、やっぱり?」

ドアが開かれ、中に招かれる。

階段を上り玉座の方に通される。

その玉座の奥に座る年老いた鳥獣族と数人の護衛が立っているだけの広い空間。

「……親父、期待のヒューマン族を連れてきたぞ」
「うむ」

俺はアーラインと共にその年老いた鳥獣族の前に立つ。

「待っていた、異界の者よ……」

「異界? 俺が?」

「うむ。お主とお主が着用する制服を着る者はすべて異界の住人、ここに元々住んでいた者ではない」

「あの、いきなり何を仰るんですか?」

「まあ信じるか信じないかはお主に任せよう。紹介が遅れた、我はササミナ・シユラム。シユラム家の前代表だ」

「あなたが……でも俺に一体なにを?」

「我が理想とする世界作りの手伝いをしてほしい」

「理想? 他種族を滅ぼすとかですか?」

「否、その逆だ、皆が共存する世界……それが我の望みであり希望」

「それは俺も思いますけど……どうして俺なんですか?」

「未来が、そう告げている」

「……はい?」

「……お主にこれをやるう」

俺はササミナ殿に近づき、フェアリーボールを頂く。

「これは……いいんですか？」

「うむ、お主なら使いこなせよう」

「……ドライヴイン」

フェアリーボールを掲げると、ボールは砕け、フェアリーが飛び出し、俺の身体の中に入っていった。

「……」

「お主なら、切り開けるかもしれないな……」

「……買い被りですよ」

「活躍はアースティから聞いている、大変だったろう」

「そうですね……そのアースティはどちらに？」

「いまは本隊を連れてスピアビードル族のすみかに進軍中だ」

「和平交渉ですか？」

「いや、向こうは徹底抗戦の構えにいるから、全面戦争になるだろうな」

「そうですね……」

「なんで分かり合っことができないんだろうな……種族は違えど、同じ生き物だと言っのに……」

「同じ生き物だからこそ、争っんですよ」

突然女の声が部屋に響き、銃声が一発。

「ぐっ……」

「親父!？」

「ササミナ殿!？」

銃弾はササミナ殿の左胸あたりに当たり、血が噴き出す。

「どこから……!？」

高い位置にある光が差し込む場所に人が一人、立っていた。
その容姿は、なんとも戦って覚えた容姿。

「……………ムヴィ」

「和平？ 共存？ なに寝言を言っていらっしゃるんです？」

「くっ……………難しいことくらい百も承知じゃ……………できないと決めつけ
ればそれはできない……………」

「じゃあ私が断言します、無理だと。お分かりでしょう？ ドルイ
ドだったあなたには」

「ドルイド……………魔法使い？」

「……………そうだな、我は簡単に言えば魔法使い、未来を透視する力を
持った……………な」

「……………」

「お主がくることも、我を葬ることもわかっていた。だから、我の
思いを彼に託した」

「ササミナ殿……………」

「我は長く生き過ぎた……………終わりがこれでも心残りはない……………が、
世界の行く末を、見てみたかったものだ……………」

「なら、どうしてこのことを話さなかったんです!？」

「話しても、未来は変わらぬ……………」

「あなたさえ葬れば共存とか甘い考えを持つ者を大方排除できる。
覚悟はよろしいですか？」

ムヴィはそう言うと、スナイパーライフルをササミナ殿に向ける。
俺はその間に立ち、両手を広げる。

「やめるムヴィ。お前、なにしようとしてるかわかってるのか？」

「わかってます。私達が理想とする世界に邪魔な者を排除する、た
だそれだけ……………」

「違うな、この方の考えを失くしてしまえば、世界は泥沼化する。それをお前は、共存を望むササミナ殿を、殺めるつもりか!？」
「その通りです、宏樹様……」

表情を崩すことなくトリガーを引く。

銃声が響く。

しかし、俺に当たることはなく、俺の前に立ったササミナ殿が当たった。

「え……な、なんで……」

膝から崩れ落ちるササミナ殿を支える。
傷口から大量の血が噴き出す。

「我が生き残っても、先はない……だから、私の代わりに、世界を、正しく、導いてくれ……」

「……はい」

「すまない……お主にこんなことを頼むこと……」

「いえ……自分も、そんな世界を望みますから」

「詫びとなるかわからんが、ここの兵の指揮権と、島、すべてをお主に捧げる。そして、我が理想とする世界を阻む脅威が出てきたなら、世界の中心に行くとき……」

「え、世界の中心?」

「あと、これも……」

力を振り絞って懐から取り出したのは、フェアリーボールの一回り小さい玉だった。

「お主に秘められた力を解放するものだ、大事にするのだぞ……」

「……はい」

玉を受け取ると、ササミナ殿の力が抜け、グツタリとした。

「……ムヴィ、いくらお前でも……こればかりは許さん！」

「怒りに身を任せた戦いは身を滅ぼすだけですよ？」

「だからどうした……いや、そうだな」

「？」

薄く笑みを浮かべ、立ち上がる。

「こんなところで死ぬわけにはいかんな……どの種族も笑い、楽しく暮らせる世界を作るまでは！」

「残念だが、君達の命運はここまでだよ」

聞き慣れない男の声が響く。

独特の機械音を出しながらこちらに近づく人影が一つ。

「この城は我々マシンドール族が包囲した、投降したまえ」

その人影が光で姿があらわになる。

見た目はロボットだった。

「投降するつもりはない」

「これでもですか？」

すると、ロボットに捕縛された鳥獣族の少女が連れてこられる。その少女に別のロボットが首元にビームセイバーを突きつける。

「なっ……卑怯な！」

「宏樹、俺達鳥獣族は誇り高い種族、女だろっがつねに覚悟はでき

ている！」

「しかし……」

言いよどむ俺にアラインは叫ぶ。

「お前もだ、鳥獣族なら、覚悟はできてるだろ!？」

「うう……」

覚悟があるなら目に涙は溜めない……。

「……全員、投降しよう」

「は？ なにを言ってる……」

「ササミナ殿の遺言を忘れたか？ 全部隊の指揮権は俺にある」

「けど！」

「誇り高い種族なら女の子一人の命を軽視するな！」

「なに!？」

「命を軽視する奴は、誇り高くもなんでもない、ただのクズだ！」

「……ちつ、腰抜けヒューマンが、失望したよ」

「どうとでも言えはいいさ。けどな、お前が勝手に行動すればそれは鳥獣族全滅を意味するんだ、上に立つお前ならわかるだろ」

「……」

「この状況はまさに全滅するか生き残るかの二択しかないんだ。外が随分騒がしいから包囲されているのは事実、村も差し押さえられているはずだ。それでも、お前は戦うとでも？ 戦争で犠牲になるのは兵隊でも家でもない、民間人なんだ、お前、それがどういう意味かわかるだろ？」

「……命令ならば従う。だがな、その命令は俺達のお前に対する忠誠心を削いだことになるのは頭にいれておけ」

「……言っとくが、俺は諦めたつもりはないぜ」

「どうするんです、戦うのか、降伏するのか？」

「降伏しよう。けど命の保証はしてくれんだろうな？」
「……いいでしょう」

手錠をかけられる。

隣にいたアーラインがこちらに耳打ちする。

(あいつらの言うことを信じてるわけじゃないよな？)
(なるべくなら信じたいが、他種族を嫌うからな……)
(……どうなってもしらんからな)

そして城にいた俺達と村、町に居る鳥獣族を一か所に集められるのであった。

【第十四章・理想の世界終わり】

第十五章 捕らわれの兄

「ん、んんゝあ」

ベットから起き、大きく伸びをする。

数日間宿屋で休養をとったから最近はずいぶん調子がいい。

「すうゝ」

隣でかわいい寝息を立てて寝ているりるちゃん。私はりるちゃんを起こさないように部屋を出る。外は非常に天気がよく、眠気を誘う陽気だった。

「あ、麻奈美、早いね」

「秀一さん、おはようございます」

「おはよう」

秀一さんとあいさつを交わす。

「どうだい、ぐっすり眠れた？」

「はい、おかげさまで」

「さて、宏樹くん探しをやりたいところだけど、情報がなすとすぎるんだよね……」

秀一さんは頭をかきながら苦笑いしていた。

「ですよね……私もさっぱりです。いるのか自体定かではありませんせんし」

「うゝん……誰か知っている人は……」

(ぐ〜)

「……」

「あ、あはは、まずは朝食作らないとな」

「そうですね、宿屋の契約は終わってしまいましたし、どこで食べます？」

「自炊するか」

「どこでするんです？」

「材料はあるし、調理場所もちゃんとあるよ」

「あ、トラックですね」

「うん、皆を起こして朝食の準備としますか」

「はい」

私達は皆を起こし、朝食の準備に取り掛かる。

「村の許可ももらったし、まずは里流葉ちゃん、魔法で火を付けて」
「はい、ドライヴ、ファイヤ」

武装化したりるちゃんは地面に集めた枝めがけてファイアを唱える。

「う〜ん、少し火力が強いな」

「あ、あはは、まだ細かいコントロールが難しくくて……」

「じゃあ武志くん、水をこのバケツに汲んできてくれる」

「わかった」

「で、女子組は武志くんが水を汲んできたら野菜を洗ってみじん切りで切ってくれる？」

「わかったわ」

「残った女子組はご飯を炊いてくれる？」

「うん」

次々と皆に指示を出していく秀一さん。

「汲んできたぞ」

「うん」

秀一さんは頷きながら両手で卵を割り、手際よくボウルの中の玉子をかき混ぜる。

「料理得意なんですか？」

「まあね、自慢できるほどじゃないけど」

「秀一先輩、適当なサイズってどれくらいですか？」

りるちゃんが玉ねぎを持ってやってくる。

「玉ねぎか……里流葉ちゃん、これ、僕が玉ねぎを切り終わるまで混ぜといてくれる？」

「わかりました」

玉ねぎを受け取った秀一さんは、玉ねぎの皮をめくり、軽く水洗いし、真ん中を包丁で切る。

そして、素早い手つきで玉ねぎをみじん切りにしていく。

「うぐっ、涙が……」

隣でニンジンを切っていたポーラが玉ねぎの影響で涙を流していた。

そして涼しい顔で玉ねぎをみじん切りにした秀一さんはりるちゃんの前に戻る。

「ありがとう、里流葉ちゃんはご飯ができたなら三つのお皿に分けて

くれる？」
「わかりました」

……りるちゃん、事実上の戦力外通告。

当人は気づいていないのか、シャモジ片手に鼻歌を歌っていた。

「麻奈美、この玉子でスクランブルエッグにしてくれる？ なるべくこまかくで」

「は、はい！」

これは気合をいれなくては！

飯盒の横でフライパンに油をいれ、まんべんなく伸ばしたあとはゆっくりと玉子をいれていく。

「野菜切り終わったよ」

「ご苦労様、少し休憩しててよ」

野菜組の光とポーラは仕事を終えたようだ。

私はフライパンにくっつかないように箸で玉子をグチャグチャにしていく。

秀一さんの方を見ると、リンゴの皮を手際よくむいていく。

そのまま手に持ったリンゴを適当なサイズに切り、ミキサーに入れ、次のリンゴに取り掛かった。

「秀一先輩、凄いでしょ？」

「そうだね……」

光の言葉に頷く。

「料理の実力では私じゃ敵わないんだよね」

「なんだか尊敬しちゃうよ。私でも手に乗つけたリングなんて怖くて切れないし」

「料理の神でも降臨してるのかな……」

光と二人で実力の差に嘆息する。

そうこうしてるうちにスクランブルエッグは完成した。

「秀一さん、できましたよ」

「うん、じゃあ光さんと二人で三つのフライパンを少し温めといてくれるかな？」

「はい」

「ご飯炊けましたよ」

「ありがとうございます、清美先輩、それじゃあ里流葉ちゃんと協力してご飯を三つのお皿にいれてください」

りるちゃん、当てにされていないんだろっか……。

「光、麻奈美、今から切った野菜とご飯をミックスさせるけど、自信のほどは？」

「ありません」

「そう言わずに、女の子なんだからできるよ」

さわやかにそう言われてしまった。

「いや、秀一先輩の実力が凄すぎて、私達がかすれてしまいます」

「そんなことないよ、僕一人で準備してたらもっと時間がかかるよ。これは皆の実力だよ」

そして凄く謙虚な方だった。

りるちゃんと清美先輩がご飯を運んできてくれる。

「じゃあ、一気にいくよ」
「は、はい！」

もうどうにでもなってください！

ガムシヤラにフライパンを動かし、ご飯を宙に浮かす。

フライパンの下がたき火で熱かったけど、とにかくガムシヤラだった。

そして野菜を炒めるのに二分、ご飯を混ぜて一分くらいで完成した。

「う、腕が攣りそう……」

「そ、そうだね……」

二人してげんなりする中、秀一さんはやはり涼しい顔をしていた。

*

「いただきます」「」

合掌して創作チャーハンを一口食べる。

口いっぱい広がる一つ一つの野菜、でもお互いが争うわけでもなく、絶妙な味だった。

そして、果汁百パーセントのリンゴジュースもとても美味しかった。

「凄い、美味しい……」

「皆が料理上手だからだよ」

「えへへっ、料理上手だって」

「りるちゃんはなにもしてないから」

りるちゃんにツッコミをいれながら味をかみしめる。

「お、いい匂いじゃん」

フラフラとやってくる武器商人の秋山さん。

「あ、風呂の……」

「あゝ！ そうだった！ 俺今凄く腹減ったんだよ。秀一、俺にもくれ」

「いいよ、はい」

「おお、ありがとう、流石友……ってこれリンゴの皮じゃん！」

「リンゴの皮って栄養満点なんだよ？」

「それぐらい知ってるけど！ モグモグ」

……食べるんだ。

「……あんまり味しない……」

「冗談はさておき、はい、亮太くんの分」

「はあ、やっと食べれる、助かるよ。んじゃいただきます！」

凄い勢いでチャーハンを食べ進めていく秋山さん。

「でも数日いなかったけど、どこかに行ってきたのか？」

「ああ、どうも彩子ちゃんが良い情報を見つけてきたんだ」

「あやちゃんが!?」

りるちゃんが発すると、秋山さんはコクンと頷く。

「そろそろくると思っけど……」

「やっと見つけましたよ」

突然風が吹いたかと思うと、秋山さんの横に紫髪の女の子が立っていた。

「え、忍者？」

「あ！ りるちゃん！」

「わく久しぶりだね、あやちゃん！」

二人は手を取り合って喜んでいた。

「えっと、りるちゃん、知り合い？」

「あ、うん。親友の近藤彩子ちゃんだよ」

「近藤……」

そう呟きながら武志君の方を見る。

「あゝまあ、うん、義妹だ、同い年の」

「へ」

「で、どうだった、彩子ちゃん？」

「はい、情報は確かでしたよ」

「情報って、なに、亮太くん？」

「タダでは教えてやらんな」

「タダ飯食ってるくせして……」

秀一さんの呟きに秋山さんの顔がひきつる。

「しょ、しょうがないな、今回だけだぞ。どうも宏樹達を見たって
いう情報があったんだ」

「えっ!?!」

「お兄ちゃんが!？」

私とりるちゃんは秋山さんに詰め寄る。

「それ、本当なんですか!？」

「本当だよ」

「ですが、どうやら事態は最悪の方向に向かっています」

彩子さんが言いにくそうに付け足す。

「どういうことですか？」

「昨日のことなんですが、宏樹お兄さんは一人のお供を連れてマーガレット島という島に行っただんですが、マシンドール族という種族の一派が宏樹お兄さんと鳥獣族達を捕まえたので、ニーパー家の所に連絡があつたみたいです」

「……全然理解できないけど、要は兄さんは捕らえられているんですね？」

「うん。場所はここから五キロ先にある小さな島です。その島はマシンドール族が本拠地としている島です」

「島っていうことは、海を渡らないとならない……」

「うん、それが一番厄介なんです」

彩子さんがそう言った後に秋山さんが説明にはいる。

「その島はロックキャツスルという名前だな、その名の通り、島の周りは岩でできた天然の要塞だ、上陸しても天然のジャングルと機械でできた迎撃装置、対空設備、おまけにトーチカまである」

「それだけでなく、海上には無人の迎撃装置が設置され、上陸さえ困難な難攻不落です」

「でも、そこに兄さんがいるなら……」

「行こう、お兄ちゃんを助けに！」

「しかし、このメンバーでは戦力的にも無理だ」
「でも！」

りるちゃんが一際大きな声で叫ぶ。

「今この時でもお兄ちゃんは危険に晒されてるかもしれないんだよ
!?!」

「りるちゃんが言わなくてもわかっているよ」

秋山さんがりるちゃんをなだめる。

「だから既に対策は打ってある」

「対策って？」

「今、とある方に協力してもらって戦力を集めているところだよ」
「だから私達はそのままロックキャッスルに向かうよ」

彩子さんがりるちゃんの手をギュッと握る。

「宏樹お兄さんを助けにね」

「うん！」

「その前に」

秀一さんが手をパンパンと叩く。

「ちゃんとご飯食べないとね、戦闘しに行くんだから、なおさらね」
「そうだね、早く食べよつと」

急ぎたい気持ちもわかるけど、食事はちゃんととらないと。

……厳しい戦いになるだろうし。

*

朝食を食べ終えた私達は早速ロックキャッスルを目指し、トラックで突き進んでいた。

「……………」

りるちゃんは真剣な表情で精神を集中させていた。

りるちゃんの気持ち、わからなくもない。

自分の兄で、大事な人でもある宏樹兄さんが危険に晒されているんだから。

「秋山さん、ホバークラフトの整備は終わりましたか？」

「ああ、今終わったよ。……………しかし、あのりるちゃんが怖い表情するなんてな」

「それだけ宏樹兄さんのこと、好きなんですよ」

「……………けど、今の状態で戦場に出すのは危険だな」

「そうですね……………」

すると、秋山さんはりるちゃんの元に歩み寄る。

「りるちゃん」

「……………なんですか？」

「おゝこわっ。気迫は充分だけどき、今のりるちゃん、視野が狭くなってると思うよ？」

「そんなことないですよ」

「あるよ」

さっきの口調とは打って変わり、真剣な口調に変化した。

「助けたい気持ちはわかる、でもな、さっきも言ったように難攻不落の要塞だ、今のりるちゃんでは必ず死ぬ」

「りるは死にません、お兄ちゃんを助けるまでは……」

「死ぬよ、俺が保障する」

「じゃあどうしたらいいんですか!？」

りるちゃんは目に涙を溜めながら秋山さんを睨み付ける。

「今すぐ飛んでいきたいけど我慢してるんだよ！ それでもりるにはなにか足りないの!？」

「足りないよ、大事な物が一つな」

「えっ……」

「その足りない物はいつもりるちゃんがしてることだよ」

「してること?」

頬に涙が流れるのを秋山さんはそれをハンカチで拭う。

「笑顔だよ」

「笑顔?」

「うん。焦ったり我を失った行動は死に繋がる。だったらいつもどおりにいることを心がけるんだ、そしたらおのずと良い結果に繋がるよ」

「いつもどおりに……笑顔で……」

「うん。それに、これをあげよう」

「フェアリーボール……?」

「この妖精が、きつとりるちゃんを手助けしてくれるよ」

「いいんですか? これ、売り物じゃあ……」

「いいよ、りるちゃんには笑顔でいてほしいし、俺なんてこれぐらいのことしかできないし……」

「……ありがとうございます。必ず、生きて、お兄ちゃんを助けてみせます」

「ああ……」

笑顔にした秋山さんはこちらに帰ってくる。

「凄いですね、りるちゃんを冷静にさせるなんて」

「女の子は笑顔でいなくちゃね、勿論、君もね」

「え……口説いてるんですか？」

「半分冗談だ、ほら、橋本にもあげよう」

「いいんですか？ 売り物なんでしよう？」

「緊急事態なのは商人の俺でもわかる、戦闘経験皆無に近い俺が戦場に出ても足手まといなだけだ。だったら、俺は戦える力を授けたい」

「そうですか……」

私はフェアリーボールを受け取る。

「まあ、逃げるつもりはないから戦うけどな」

「さっきと言ってることが矛盾してますよ」

「そんなことないよ、俺だってドライブできるんだし、もったいないだろ？ それに戦闘経験はないけど、訓練はちゃんとしてきたから素人よりかはなんとかなるよ」

「実戦はそんなに甘くないですよ」

「知ってるよ」

そう言つと、秋山さんはそれ以上話すことはなかった。

*

「あれが、ロックキャッスル……」

海岸に着いた私達は目の前に広がる光景に絶句していた。

想像以上の迎撃装置が海上に設置され、上陸を妨げる断崖絶壁が島を囲んでいた。

そして、島にも大量の対空装置、トーチカが設置され、文字通り、難攻不落の要塞だった。

「なんか来たぞ……」

近藤君がなにか呟く。

私達は近藤君が見つめる先を見る。

中型のシャトルバスを中心に、数台の小型ホバークラフトを引き連れて目の前に止まった。

「集まってるな」

助手席から降りてきた一人の男が呟く。

「あなた達は……？」

「俺は宮河勇樹、宏樹不在の間、指揮を執っている」

「兄さん……？」

「勇樹お兄ちゃん！」

りるちゃんが宮河さんに飛びつく。

「里流葉……」

りるちゃんの頭を撫でる宮河さん。

「君は？」

「私は橋本麻奈美です、藤山宏樹の妹です」
「妹？ え？」

宮河さんはりるちゃんと私を交互に見比べる。

「宏樹って、里流葉以外にも妹がいたの？」

「そうです、血も繋がっていますし」

「ふむ、よく見ると宏樹の面影が……」

マジマジと観察する宮河さんの横から見知った顔が目に入った。

「進也……君！？」

「麻奈美……無事だったのか！？」

「進也君っ！」

目頭が熱くなり、飛びっこうとしたが、グツと堪える。

「麻奈美？」

「ゴメン……後で、ね？」

「……わかった」

私一人が喜んで仕方がない、喜ぶのは、兄さんを助けた後でもできる。

すると、バスの運転席から男性が一人降りてくる。

「ん〜それにしても遅いな」

「あの、あなたは？」

「ん？ 俺はマスク・ニーパーっていうんだ、よろしく」

「私は橋本麻奈美です、こちらこそよろしくお願ひします」

マスラクと名乗る男性と握手を交わす。

「ところで、まだ集まるんですか？」

「集まるよ、鳥獣族の残りが」

「？」

「噂をすれば、来たな」

マスラクさんが見つめる先を見てみると、空から背中に羽をはやし、クチバシを持った大量の鳥人間が私達の目の前で止まった。

「すみません、少し遅れてしまいました」

「いやいいさ、アーステイ、なんとか無事に合流できたみたいだな」

「ええ、虫共に手痛い一撃を浴びせられましたけど……」

「戦力が消耗したのか……まあ仕方ないさ、スピアビードルに包囲された状況だったしな」

「すみません……」

「気に病む必要はない。さて、役者は揃った、宏樹と鳥獣族救出作戦を始めるぞ」

「え、作戦って、私達なにも聞いてませんよ？」

「あ、そうだったな、じゃあ皆集まってくれ、勇樹が考えた作戦なんだがな……」

*

私達は指示された配置につく。

頭の中から宮河さんの声が響く。

（準備はいいか？ ドライバーはアクセル全開で、残りのメンバーは乗り物と鳥獣族を守るんだ）

「了解」

(全員、作戦開始！)

合図が出ると、一斉にホバー移動可能なバスとホバークラフトが発進する。

そして間もなく、海上から大量のミサイルがこちらに降り注ぐ。

「「チャフフィールド！」」

天坂先輩とりるちゃんが私達が覆いかぶさるほどの巨大なバリアを展開し、ミサイルを防ぐが、数発がバリアを突破する。

「攻撃開始！」

佐藤先輩の合図でミサイルに飛び道具で撃ち落とす。

「くっ、当たらない……」

ミサイル一発にてこずっていると、隣にいた光が代わりに撃ち落とす。

「射撃、苦手なんだね」

「うん、なんとなく狙えないっていうか……」

「動いてるターゲットを狙うには、ある程度予測して撃たないとダメだよ」

「予測……」

私はバリアを貫通してきたミサイルにハンドガンを構える。

「予測……そこっ！」

進行方向を予測し、射撃すると、命中し、爆散した。

「あ、当たった」

「流石麻奈美、センスあるね」

「そうかな……」

ミサイルを防ぎきると、今度は島のトーチカから砲撃され、海上は大いに荒れる。

「こんなに揺らされると、狙いが……」

慣れない海上戦に苦戦する私達に海上を滑るように進軍してくるロボット達。

「アレを取りつかせるわけには……」

秀一さんが膝をついて弓矢を構える。

「ロボット達は俺達に任せろ！」

海上スレスレを高速飛行するアースティさん率いる鳥獣族がロボットと戦闘する。

「だから砲台を破壊して俺達を援護してくれ」

「わかった、美春、ホバーを」

「うん、エリアホバー！」

天坂先輩が魔法を唱えると、私達の足元が少し浮き上がる。

「時間は三分、それまでに乗り物に戻らないと溺れるよ」
「わかってる、白兵隊、攻撃開始」

宮河さんの合図で迎撃装置めがけて突撃する。

「被害は出させない！」

私はすれ違いざまに迎撃装置をビームセイバーで破壊する。
そのまま別の装置にセイバーを投げつける。

「てえい！ サマーソルトキック！」

刺さったセイバーめがけて後方に宙返りしながら蹴り、セイバーを貫通させる。
体勢を立て直しながらハンドガンを手に持ち、装置を次々に破壊していく。

「そろそろ三分だよ！」

天坂さんが叫ぶ。

「戻ろ……っ!？」

突然水中から手が伸び、私の足を持って海へ引きずり込まれる。

（なに!?!）

目が赤く発光するロボットが剣を構える。

（やられるわけには!）

ハンドガンから銃剣を出し、応戦する。

ホバーの効果時間はとっくに過ぎている、早く倒さなくては！

(くっ、息苦しい……)

ゴボツと口から空気が出る。

海面に上がるうとすると、ロボットがワイヤーで私を捕縛する。

銃剣で斬るが、絡まってしまい、身動きが取れなくなる。

(苦しい……)

意識がもつろうとしてくる。

「麻奈美いい！」

(進也……君)

進也君が水中に飛び込み、ビームセイバーでロボットを撃破する。
ゆっくりと進也君に手を伸ばす。

それをギュツと握りしめ、私を引き寄せる。

そのまま唇が重なり、空気を分けてくれる。

頭の中から進也君の声が聞こえてくる。

(俺が助けてやるから、しっかりしろ！)

(……うん)

進也君は私を抱えた状態で海面に浮上する。

「ぶはっ！」

「くっ、げほっげほっ！」

「大丈夫か、麻奈美!？」
「だ、大丈夫……」

進也君の肩をしっかりと持ち、呼吸を整える。
戦闘中なのに、進也君の温もりを求めていた。

「……」

この手を、離したくなかった。
いつ振りになるかわからない恋人の温もり……。

「大丈夫だよ、俺がついてる……」

そう言っつて私に口づけを交わす。

「大丈夫か!？」

空から鳥獣族が二人やってくる。

「はい、なんとか」

「本隊は……?」

「先に進軍してる、俺達も早く合流するぞ」

鳥獣族に担がれ、本隊と合流した。

「大丈夫!？」

「うん、なんとか……」

光が心配そうにしてたので笑顔を見せる。

「溺れかけといてアレだけど、そろそろ上陸するよ」

ビシヨビシヨの身体を再ドライブで拭き取り、断崖絶壁と対峙する。

「あそこにお兄ちゃんが……」

りるちゃんがいつになく真剣な眼差しで断崖絶壁を見つめていた。

「シャイニングウイング！」

「え、りるちゃん！？ ってきやつ！」

光の翼を出したりるちゃんが単身上陸してしまった。

直後にホバークラフト近くに砲弾が落ち、大きく揺れる。

「追いかけないと！」

「俺に掴まれ！」

アースティさんが手を差し出す。

「はい！」

私はそれに頷き、アースティさんに担がれ、私も上陸することにした。

「りるちゃん！？」

上陸し、りるちゃんを探す。

しかし、姿は見当たらず、ロボット達の濃い弾幕だけだった。

「それにしても、なんて弾幕の濃さなの……」
「ここでは飛び上がったって撃墜されるのがオチだな」
「では、陸を走って強行突破しかないですね」
「陸戦はあまり得意じゃないんだけどな……」

そう言いながら、アーステイさんは鞘から刀を取り出す。
後ろでは鳥獣族に担がれて上陸を成功させる他の仲間達。

「よし、白兵戦になるが、一人で突撃なんて絶対するなよ」

宮河さんが皆に指示を出していた。

「宮河さん、りるちゃんが……」

「一人で行ったんだろ、わかってるよ」

「へ？」

「里流葉には宏樹を助けに行かせたんだ」

「き、危険ですよ、りるちゃん一人でなんて……」

「大丈夫、兄離れできてないけど、根はしっかりしてる。それに、提案もなしに里流葉一人でいかせないさ」

「どういうことですか？」

「里流葉には電光石火のように動ける魔法があるだろ？ それを使った作戦を伝えてある、大丈夫だよ、里流葉は強いよ、宏樹絡みになるとな」

「は、はあ……」

「さっ、俺達も行くぞ」

あっけにとられていた私を置いて、宮河さんは敵陣に走って行った。

「兄さん絡みになると、か……」

飛び出す直前のりるちゃん表情は、確かに自信に満ち溢れていた。

自分がお兄ちゃんを助ける、絶対に……と。

……だったら、私も頑張ろう。

「生きて、兄さんを、助ける！ ドライヴナイト！」

「クロスフォーム」

武装変更し、銃弾が飛び交う戦場を走る。

ロボットが私に目掛けて銃を乱射する。

私はそれをミドルシールドで防ぎながら距離をつめる。

「くらえっ、アクアランサー！」

地面から出てきた水に乗り、その勢いでロボットを槍で貫通させる。

刺さったロボットを別のロボットに投げつけ、誘爆させる。

「次っ！」

右からの攻撃をバックステップで回避する。

別のロボットがボウガンでこちらに撃ってくる。

私は槍を回して矢を弾く。

「でえい！」

サイドステップしながら近づき、腰のビームセイバーを左で持ち、斬りつける。

「くっ、やはり数が……っ！」

突然目の前に一閃が走る。

そこにいたのは、人間とほとんど変わらない女の子。

「……モヴィなの？」

「まなみん？」

「モヴィなの！？ どうしてここに!？」

「それは……まなみんの敵だから！」

「くっ！」

モヴィのロングブレイドを回避する。

「私達が戦う理由なんてないよ！ また一緒に笑おうよ、ね？」

「……笑う？ ふ、ふふふっ」

「モヴィ？」

「寝言を言いたいなら今すぐ寝かせてあげる！」

「モヴィ!？」

「いつとくけど、まなみに戦う理由がなくても、ボクにはある！」

モヴィの激しい攻撃を受け止めることしかできない。

「いつだったか忘れたけど、たしかにボク達は一緒に笑ってた。でも、今は違う、マシンドール族の未来が安泰するまで、ボクは楽しく笑ったりなんかしない！」

「え、なにを……」

「ロボットが笑える世界を作る為なら、まなみんでも容赦しない！」
「!？」

モヴィの剣さばきで私の持っていた槍が粉々に碎け散る。

「くっ、モヴィ！」

「麻奈美、覚悟！」

「スライドダツシュ！」

「なに！？」

不意を突き、モヴィの背後に回り、シールドで体当たりする。

「ロボットが笑える世界？ それは良い世界だと思う。けど、その世界に私達人間は居るのかな？」

「いるわけないじゃない！ 人間がいるから、ロボットは安心して暮らせない！」

「だったら、私はその世界を実現させるわけにはいかない！」

ビームセイバーを両手に持ち、構える。

「そんな世界、普通に考えたらおかしいよ！」

「人間がロボットを酷使しなければ、そんなことしないよ！」

「酷使って……そのロボットを作り出したのは人間じゃないの！？」

「それに関しては人間に感謝してるよ、でもそれとこれとはわけが違う！ まなみん、知ってる？ この世界でロボットを誕生させた理由、人間の欲求を満たす為だけに作ったんだよ！？」

「それは違うわ！ すべての人間がそう思っただけで誕生させたわけじゃない、ちゃんと人間と同じように扱ってくれた人だっただけだよ！」

「それがいなかっただよなよねえ、魔物に性奴隷として扱われたように、ロボットも人間の性奴隷として扱われたの！ その屈辱を、マシンドール族の祖先は受けてきたの。だったら、滅ぶか魔物のペツトとして扱われたほうがいいよ？ ははっ、まなみんはどうする？」

「なに？」

「魔物のペットになるか、私達に干し首にされて辱めを受けるか」
「干し首って……いつの時代の人よ」

苦笑しつつ、モヴィの目をまっすぐに睨み付ける。

「悪いけど、その選択肢にはないわね、皆が共存する世界に住む、
がね」

「……甘いことを、宏樹って言う奴もそんなこと言ってたよ」
「兄さんが!？」

「今頃、ムヴィさんに性奴隷にでもされてるんじゃないかな？あは
はっ!」

「つつ、そんなことさせない!」

「男ってさ、女が色気見せたら犬のようにしっぽを振って言うこと
をきくわ!」

「その男でも、女を自分の欲求を満たすための道具としか思っ
ていない奴もいる! モヴィ、あなた、男に辱めを受けたことある
?」

「そんなのなにに決まってるじゃん」

「私は受けかけた、見てて最低だと思った。でもね、モヴィが言っ
た男も、私が言った男にも当てはまらない男がいるの……」

「へ?」

「自分の大切な人の為なら、身を挺してでも助け出す男がいる!

私はさつき身を持って体験したわ! 愛って素晴らしいね」

「え、はあ? なにをいきなり……」

「モヴィにはわからないかもしれないけど、少なくとも、モヴィの
言う男が正解ではない!」

一気に近づき、セイバーを振り下ろす。

「くっ!」

バックステップで避けられるが、私は剣先に魔力を集中させる。

「ソニックブーム！」

二つのセイバーを振り、音速波を出す。

「ちい……！？」

懐に近づき、モヴィの動きを押さえる。

「モヴィ、悪いけど、少し眠っててくれる？」

「！？」

セイバーをスタンモードにしてモヴィを斬る。

「うっ……まなみ、ん……」

意識を失ったモヴィは膝から崩れ落ちる。

「……モヴィにもわかってほしいよ、人の温もりを……」

私はモヴィを置いて先を進んだ。

*

敵の攻撃をかいくぐり、場内に進入することができた。

「ふう……」

そして、ついたのは大きな広間。

天井がないことから、疑似的なバルコニーかなにかだろうか？

「麻奈美、無事か？」

「進也君、うん、なんとか」

進也君の後ろからゾロゾロと皆がやってくる。

「ほう、あの防衛網を突破しましたか……」

どこからかが声が聞こえてくる。

そして、空から中央に降り立つロボット。

「お前は……」

「俺の名はゴード、マシンドールの指揮をやっている」

「あなたが、指揮官っていうわけね、兄さんを返してくれる？」

「兄さん？ 誰のことだよ」

「藤山宏樹、あなたは知ってるはずよ」

「ああ、あの腰抜けか、へっ、俺が鳥獣族を殺すって言ったら、あいつ、土下座したんだぜ！？ ははっ、今でも思い出すと、滑稽な光景だったぜ！」

「くっ……兄さんはどこにいるのよ」

「さあな」

「言え！ この鉄くずが！」

「麻奈美？」

「な、俺が、鉄くず、だと？」

怒りが込み上げてくる、兄さんを、腰抜けなんて……。

「だってそうでしょ？ 兄さんを抑止するために、鳥獣族を人質に

でもしたんでしょ？ そんなことする奴、鉄くずでしょ？」
「お前……今なら許すから早く土下座したほうがいいぜ？」
「許す？ 結構よ、私の兄さんを侮辱する奴は、破壊する！」
「……配置につけ」

すると、広場を覆い尽くすほどのロボットが私達を包囲する。

「いまから土下座しても遅いぞ、まあ身にまとっている布きれを剥いで許してやるのかな？」

「結構つて、言ったでしょ？ それに、私の裸を見ていいのは、進也君だけだから！」

「……はあ！？ ま、麻奈美、なにいきなり……」
「あ……つい」

「ついじゃないだろ！ なんかむっっちゃ恥ずかしいじゃないか！」

進也君が隣で顔を真っ赤にしていた。
ロボット達もあっけにとられていた。

「野蛮人だな、ヒューマン族つてのは……」

「しかも野蛮族扱いされたじゃん！」

「ご、ごめん……けど」
「ん？」

「人間だつて、結構楽しいところあるでしょ？」

「はあ？ お前、頭いかれてるのか？」

「喜怒哀楽の表現が豊かな人間を、あなた達は滅ぼそうとしてる、それであなた達は幸せになれるの？」

私は声を大にしてロボット達に言う。

「いまなら武装を解いて私達に降伏してください、命の保証はしま

す、信じてください」

「「「……………」」」

動揺するロボット達にゴードは手をバンバンと叩く。

「惑わされるな、人間の言い分など耳を貸すな。構えを解くな！

メヴィ、ミヴィ、頼む」

「「了解」」

私達の前に青の制服と、赤の制服を身にまとった少女が武器を持つて構える。

「ミヴィさん……………武器を捨ててください」

「拒否します」

「……………そう」

構えようとした刹那、地面が凄まじく揺れる。

「地震？」

「震源は……………下？」

「「「!?」」」

突然ロボットの大群の一部が大きく拭き取んだかと思うと、青と水色の光の翼を出し、交差しながら飛び上がる二人の影。

二人とも、青い制服を身にまとい、お互いの背中をつけていた。

「……………もしかして、兄さんと、りるちゃん？」

私はその光景を見つめることしかできなかった。

【第十五章・捕らわれの兄終わり】

第十五 五章 里流葉の任務（ミッション）

「里流葉」

「なに？」

「里流葉に宏樹救出を頼みたいんだが、いいか？」

「え……うん！」

「危険だと思うが、俺が提案する作戦に従ってくれよ？」

*

断崖絶壁が目の前まで近づく。

私がお兄ちゃんを助ける……。

勇樹お兄ちゃんの言った作戦なら、大丈夫のはず……。

「ここにお兄ちゃんが……」

りるが、助けてあげるから、絶対！

「シャイニングウイング！」

「りるちゃん！？ ってきやつ！」

まなちゃんの静止を振り切り、崖を飛び越える。

飛び越えた景色は最悪で、大量のロボットが配置されていた。

『上陸したら素早く動き、大きく右に迂回するんだ』

勇樹お兄ちゃんの言葉を思い出す。

「マッハウイング！」

素早い動きでロボット達を翻弄し、突破する。
しかし、突破した先でもロボットが立ち塞がる。

「退いて！ インパクトウィップ！」

すれ違いざまに鞭を当て、通過する。
刹那、当てたロボットが大きく爆散する。

「待ってて、お兄ちゃん！」

城があり、そこを大きく右に迂回すると、女性が一人いた。

「あなたが里流葉ちゃんね？」

「そうですね、あなたは？」

「キューノ・サキリっていうの。マスラクの使いの者よ」

「あなたが……」

『すると、そこにマスラクの使いの者が待っている』

『敵中にいるの？』

『ああ、彼女には侵入経路を確保してもらってるから』

「ここをまっすぐ行けば牢屋よ、私は鳥獣族達を助けに回るから、
里流葉ちゃんはお兄さんを」

「はい、ありがとうございます！」

キューノさんにお礼を言い、通路を飛んで移動する。

「ナンダ？」

「邪魔！ インパクトウィップ！」

通路から出てきたロボットを、私はすれ違いざまに当てて突破す

る。

二体のロボットは直後に爆発する。
そして、牢屋のある部屋に出る。

「どこ、お兄ちゃん……」

辺りを見回すが、お兄ちゃんの姿が見当たらなかった。

「ここじゃないのかな？」

「ナニモノダ!？」

「しまった!」

急いで物陰に隠れ、銃撃を回避する。
銃声で悲鳴をあげる鳥獣族の子供達。
こんなところで長時間戦うのは……。
懐からフェアリーボールを取り出す。
亮太先輩からもらったボール。

「りるに力を……ドライブイン!」

玉を掲げ、妖精を宿わせる。

「ドライブトリッカー!」

「クロスフォーム」

武装変更し、物陰から飛び出す。

「行って、マジカルビット!」

両腰の自律攻撃兵器を動かし、ロボットの背後に回す。

後ろに向いた隙に、ハンドガンを構える。

「エクスプロ ジョン！」

銃身から極太のビームを放ち、ロボット達を吹き飛ばす。

「はあ、はあ……急がないと」

砂煙が舞う中、私は別の牢屋を探すことにした。

何か所か牢屋はあったが、お兄ちゃんの姿はなかった。

「……お兄ちゃん、どこなの……？」

不安で泣きたかった。

でも、泣いてる暇はない。

「トマレ！」

「くっ、マジックショット！」

「ウワッ！」

「どこなの！ お兄ちゃん！」

私の叫びも響くだけだった。

一滴の涙が頬を伝う。

『まったく、泣き虫りるめ』

「え……お兄ちゃん？」

頭の中から声が聞こえたような気がした。

しかし、声はそれ以上聞こえてこなかった。

でも、目の前にお兄ちゃんの姿が見えた。

「お兄ちゃん！」

お兄ちゃんに近づくと、姿が見えなくなっていた。

周りを見渡すと、少し先にお兄ちゃんが微笑み、手招きしていた。

「……………」

近づくと、再びいなくなり、少し先にお兄ちゃんが隠れるように指示していた。

「……………」

指示通りに物陰に隠れると、ロボットが慌ただしく通り過ぎていった。

お兄ちゃんは再び手招きする。

「そこに……………いるの？」

少しずつ歩くスピードを上げ、いつの間にか走っていた。なぜだか分らなかつたけど、お兄ちゃんがそこにいるように感じた。

ドアの前でお兄ちゃんの姿が消えた。

私は勢いよくドアを開ける。

「お兄ちゃん！」

「えっ!?!」

「りる!?!」

そこにいたのは、ムヴィさんと牢屋に閉じ込められたお兄ちゃん

だった。

やっと会えた……。

「お兄ちゃんを……返してもらおうよ!」

【第十五 五章・里流葉の任務終わり^{ミッション}】

第十六章 兄妹の力

一か所に集められたかと思うと、急に目隠しされ、船に乗せられ、ある場所に連れてこられていた。

「ここは……」

「ロックキャツスルです」

ムヴィが淡々と答える。

「なんだよ、そこ……」

「私達の本拠地です」

「そんなとこ連れてきてなににする気だよ？」

「それはゴード様がお決めになります」

「ゴード？ ああ、あの紳士もどきのロボットか」

会った当初は口調は大人しめだったのに、いざ降伏すれば途端に態度を急変させやがった。

「さあ、虫けらども、俺にひざまずけ！」

さっそく態度がでかいこつて……。

「誰が虫けらだ！」

アーラインが声を荒げていた。

「じゃあクスだ」

「なにつ！」

「アーライン、落ち着け！」

「落ち着いてられるか！」

「面が高いぞ、地面に頭をつけんか」

「てめえ……」

「我慢しろ！」

「くっ……屈辱的だ……」

俺はアーラインの頭を押さえて共に頭を下げる。

「凄いな、最高の眺めだ！ よし、殺すか」

「なっ！ 話が違うじゃないか！？」

「なにがだ？ 命の保証は約束したか？」

「くっ……」

信じられなかったが、俺は……。

バカみたいじゃないか、こんなの……。

「さてと……よし、お前な」

そう言ってさっき人質にされていた鳥獣族の女の子の首元にセイバーをつきつける。

「い、いや……」

「滑稽だな……」

恐怖に怯え、涙ぐむ少女を、見捨てることなんてできない！

「ゴード……お前の望みはなんだ？」

「ん？ 俺達以外の抹殺が望みだ」

「……それを、俺の首でなんとかならないか？」

「はぁ？ なに言ってるんだ？ お前の首一つ……ん、そつだな……
いいだろう、貴様の首でなんとか生かしてやるつじやないか」
「……………」

内心ホツとしていると、ゴードは付け足す。

「あと、貴様、俺の目の前で土下座しろ」

「なに!?!」

「……………やらないのか?」

「ひい!」

「やめろ！ わかった、土下座でもなんでもしてやる」

「ふふっ……………」

俺はゴードの前に行き、膝をつく。

「ここでドライブしてあいつの首を奪えることができればいいけど、
その後はどうする?」

「俺の命で、皆を、どうか助けてください……………」

地面に手をつき、頭を下げる。

「……………頭が高いなあゝいいのかなゝ」

「くっ……………」

手が震える。

怒りを通りこして殺意が芽生える。

ゆっくりと頭を地面につける。

「ははっ、こりゃ傑作だ！ あははっ！ 滑稽だな、ヒューマン!」
「……………」

齒を食いしばる、こいつ、どれだけ人を下に見下したいんだ!?

「仕方ない、腰抜けヒューマンの努力に免じて、一週間だけ生かしてやる」

「どれだけ、お前は人を馬鹿にしたいんだ……」

「あ？ 逆らうのか？ 逆らったら女の子の首が離れちゃうよ？」

「くっ……すみません」

「ありがたく思えよ、この腰抜けと鳥獣族を牢屋に閉じ込めておけ。腰抜けは隔離しとけよ」

「宏樹様、行きますよ」

俺はムヴィに連れられて城の地下に行った。

*

地下の一番下に連れてこられ、冷たい牢屋に閉じ込められる。手には相変わらず手錠がかかったままだった。

「……寒いな」

「地下ですからね」

ムヴィは淡々と答え、牢屋の鍵を閉めた。

「宏樹様」

「なんだよ？」

「どうして他人の命なのにそんな行動ができるんです？ ましてや、宏樹様とは異なる種族だというのに……」

「他人でも、敵でも、命は尊い物なんだ。それを粗末に扱う奴を、

許さないだけだ」

「……」

「命は他人がどうこうする権利はない。自分の命は自分の物だ。……俺はそう思うけどな」

「……宏樹様らしいですね」

「そうかい？」

「でも、宏樹様の考えを持つ人なんて実際にはいません。それは宏樹様自身の目で見えてきたでしょう？」

確かに、俺は見えてきた。

人の命を軽視し、道具のように扱う奴等がいるというのを。

「だから私達は私達以外の種族を滅ぼします。それが私達ロボット
の悲願です」

「そんな世界、実現させるのは不可能だよ」

「できますー！」

「無理だよ」

「……口を慎んでください」

そう言っただけで俺にハンドガンを構える。

「私はゴード様から射殺の許可が下りているんです、無駄口をたた
かないでください」

「……撃てよ」

「え？」

「目障りなんだろう？ お前達を作る世界に、俺は邪魔なんだろう？
だったら撃てよ」

「それは……」

ムヴィの握ったハンドガンが静かに震える。

「……その程度の志で世界は作れないぞ」

俺はその場に座り、ムヴィを睨む。

「俺はすべての種族が平和に、笑っていられる世界を作る覚悟はできている」

「……」

「ムヴィならわかるよな？ 同じ世界を作るなら一人でも多くの生き物が残ってる方が後が楽しいぞ？」

「宏樹、様……」

「それでも嫌なら今すぐ俺の頭を撃ち抜け！」

「！？」

「結局、生き残った奴が世界を作ればいいんだ。お前の言う世界も、俺の言う世界も、正解ではないからな」

「わ、私は……」

「どうした？ 撃てよ、撃てるものならな。俺なら、ためらうことなくお前の頭を撃ち抜く。そりゃ、なるべくならお前を撃ちたくないが……」

「……」

「なんども説得しても、変化がないなら、俺は敵と認識してお前を殺す！ ためらうことなくな！」

「くっ！」

狭い室内に銃声が響き渡る。

銃弾は俺の頬をかすめ、壁にめり込んだ。

火薬の臭いが辺りに充満する。

「う、撃てるわけがない……」

手からハンドガンが落ち、地面に転がる。

「私は……」

すると、けたたましく鳴り響くアラートにムヴィイはハッとする。

「……戦闘、みたいだな」

「その、ようですね」

「行かないのか？」

「宏樹様の監視が私の任務ですから」

「そっ……」

「……宏樹様」

「なんだよ？」

「その手錠、特殊な物ですから、無駄な抵抗はしないほうがいいですよ？」

「どういうことだ？」

「ドライブの使用不可……と言ったところですよ」

「ふ〜ん。俺には関係ないや。牢屋に閉じ込められているし、どうせ処刑なんだろ」

そして、二人して沈黙する。

外が騒がしく、砲台がなにかを撃つような音や、爆発する音が部屋中に聞こえる。

「……ムヴィイ」

「なんですか？」

「覚えているか？俺とムヴィイって、とっても仲がよかつたんだぜ？」

「……そのようなことも、あつたですね」

「……」

俺はムヴィの目が動揺するのを見逃さなかった。

「確かな……キスもしてたような」

「！」

「……それも忘れたか？」

「……はい、覚えていません」

「ふうくん……じゃあなんで俺と同じ制服を着てるのかな？」

「そ、それは……」

「……俺達が、異界の住人だからだろ？」

「……」

「お前はあの場でササミナ殿の言葉を聞いていたはずだ。俺と、俺と同じ制服を着た者はこの世界の人ではないと」

「……」

「異界のことはまったく覚えてないけどさ、これだけは覚えてる。

俺は、ムヴィのこと……」

「言わないでください！」

ムヴィの悲痛な叫び。

「わ、私達は、て、敵同士なんですよ……」

「……だったらなんで撃たなかった」

「！？」

「そんな感情がないなら、引き金を引くくらい簡単にできたろ。ましてや、ムヴィはスナイパーで、命中力もなかなかじゃないか。この距離で外すとも思えないしな」

「……」

「お兄ちゃん！」

「えっ！？」

「りる！？」

ドアが突然開き、肩で息をする義妹の里流葉が立っていた。

「お兄ちゃんを……返してもらおうよ!」

「里流葉様……くっ仕方ない」

そう言ってるに鍵を投げつける。

「宏樹様、勘違いはしないでください。これは、決闘ですから。決闘で、宏樹様を処刑しますから」

「……」

「……上で、待ってます」

そう言い残すと、部屋から出て行った。

「今開けるね」

りるが急いで鍵を開け、手錠を解く。

「りる……よく来たな……」

「……お兄ちゃん!」

涙ぐむりるが抱きついてくる。

「……辛かったろ?」

「うん、怖かった……」

俺はりるをきつく抱きしめる。

いつ振りかわからないりるの温もりを身体全体で感じる。

「少しだけ、いいか?」

「うん……いいよ」

俺はりるの頬に手を添え、唇を重ねる。

「んっ……」

身長差を補う為に、りるは背伸びする。

俺はりるの背中に腕を回し、少し持ち上げる。
唇を離し、デコ同士をくつつける。

「やっと会えた……」

「ああ……やっと、だな」

そう言って再び口づけを交わす。

お互い同時に互いの舌を絡ませる。
外の戦闘音なんて関係なしにディープキスに没頭していた。

「……お兄ちゃん、続きは後、ね？」

「……そうだな」

お互い名残惜しいのか、身体を離すことはなかった。

「皆と、合流しないと」

「でもどうやって……」

そう言いながら天井を見る。

「上……か。よし、ドライブ」

「クロスフォーム」

魔法陣が描かれ、武装化する。

「ササミナ殿から授かったこの玉を……」

懐から玉を取り出す。

「りる、手を握れ」

「うん」

ぎゅっと握るりるの小さな手。

「クロスフェアリー」

ボールが突然光だし、俺とりるのスマールフェアリーが実体化する。

そして、俺の三体のスマールフェアリーが一つになり、りるの二体のスマールフェアリーが一つになった。

「え、なにこれ？」

すると、俺達の足元に魔法陣が描かれ、高速回転しながら上にかつていく。

「武装が……」

「変わってる……」

明らかに装備してる武器の数が前よりも違った。

「一つにまとまったんだ……」

「りる、力を貸してくれ」

「え？」

首を傾げるりるに、俺はハンドガンを天井に構える。

「りるの魔力が必要なんだ、頼む」
「わかった」

りるは俺に近づき、俺が持つハンドガンに手を添える。

「行くよ」

「ああ……」

「「エクスポージョン！」」

二人の魔力で放たれたビームは、天井を軽々と突き破り、太陽の光が地下の冷たい部屋を明るく降り注ぐ。

「りる！」

「うん！」

「「シャイニングウイング！」」

光の翼を展開し、りると二人で飛翔する。

牢屋から飛び出し、りると交差しながら空に出る。
心地よい風が頬にかすめ、吹き抜けていく。

「りる、大丈夫か？」

「うん、お兄ちゃんが側にいるから怖くないよ」

「そうか……」

下を見ると、大量のロボットが俺達の仲間達を包囲していた。

「行くぞ、りる！」

「うん、お兄ちゃん！」

「オーバードライブ！」

空中でオーバードライブし、りると手を握る。

「クロスフォーメーション！」

りるの自律攻撃兵器と俺のハンドガン、アサルトライフル、サブマシンガン、ショート、ミドルブレードが周りに浮遊する。

「ビットカーニバル！」

大量の浮遊武器と共に急降下する。

「ウテ！」

ロボットが俺達に向かって銃を撃ちまくる。

「ツインブレード！」

浮遊してるショートブレード二本を連結し高速回転させ、銃弾を弾く。

「!？」

りるのマジカルビットがロボットの武器を的確に破壊していく。

「なんでお前が!？」

「ゴード……貴様がムヴィ達を歪ませたな！」

ゴードに近づこうとした時、ムヴィが立ち塞がる。

「ムヴィ……装備が」

「宏樹様だけがオーバードライブできるわけじゃありません……」

クリーム色のシャイニングウイングを出すムヴィがスナイパーライフルを構える。

「決闘、始めますか？」

「ああ……来い」

俺がハンドガンを構えたと同時にムヴィは正確な射撃で攻撃してくる。

右、左と銃弾を回避し、飛ばしていたブレイド六本をムヴィに向かわせる。

「そんな攻撃！」

ショートブレイドの攻撃を回避しながらスナイパーライフルを連射して撃ち落としていく。

俺はその隙にムヴィに近づき、銃剣を振り下ろす。

「くっ」

しかし、読まれていたのか、スナイパーライフルに付けられた銃剣で押さえられる。

俺は受け流しながらその場で回転し、遠心力を使って銃剣を横に振るが、ムヴィの居た場所は空を斬る。

「なに？」

下を見ると、落下しながら銃を構えていた。

「マジックショット！」

「くっ……」

俺は上体を後ろに反らして銃弾を避ける。

「ムヴィ……」

手を抜けばこちらがやられる……。

「っ……」

すべての浮遊武器を俺の周りに集める。

持っていたハンドガンも手放し、ミドルブレイドに持ち変える。

「ムヴィ、知ってるか？」

「……なにがですか？」

「オーバードライブの状態で長時間いるとどうなるかを……」

「暴走、するんでしょう？」

「知ってるのか。ならわかるよな？ 原理も」

「はい……スモールフェアリーがいればいるほど負担も減り、暴走のリスクも少なくなる。でしたよね？」

「俺は三匹だ。ムヴィは？」

「……一匹です」

「俺的には今すぐオーバードライブを解いてほしいんだが……するわけないよな」

「当たり前です……さあ、お話はここまでです。行きます！」

ムヴィは両肩に取り付けたシールドからなにかを飛ばしてくる。

「なんだ、これ……」

「行って、ヴァリアブルビット！」

その物体は突然変形し、自律攻撃兵器に変化した。

「なっ、くっ！」

動揺しつつ動きを追いかける。

ヴァリアブルビットと呼ばれる自律攻撃兵器は、りるのマジカルビットよりも素早い動きで俺をかく乱させる。

俺も浮遊武器で応戦するが、それすらも圧倒していた。

「!?!」

八機のヴァリアブルビットの四方からの斉射を間一髪回避する。

「インパクトショット！」

ムヴィが弾を発射させる。

「そんな攻撃！」

俺は素早く回避する。

「……かかった」

刹那、横切る弾をヴァリアブルビットが撃ち落とし、爆発させる。

「なっ、エアシールド！」

慌ててシールドを構えるが、防ぎきれず、吹き飛ばされる。

「宏樹様、これで決めます！」

周囲にビットが狙う。

ふと視界に入ったのは、美春がビームフィールドを展開していた。

「ラーニング、ビームフィールド！」

無意識になにかを唱えたかと思うと、ビットが発射したビームを防ぐ。

「えっ！？」

「な、なんだこれ……」

動揺する俺とムヴィだが、先に我に返った俺は、ムヴィにマツハウイングで急接近する。

「っ！マジック……」

「遅い！」

「くっ！」

懐に近づき、ムヴィの自由を奪い、地面に急降下させる。

「な、宏樹様！このままでは……」

「安心しろ、叩きつけられるのは、ムヴィだけだ」

「！？？」

そして、ムヴィイから離れる瞬間に蹴り落とす。
ムヴィイはロボットの大群の中に落下し、地面に叩きつけられる。
俺はハンドガンを両手に持ち、二丁のサブマシンガンとアサルト
スナイパーを左右に浮遊させる。

「……………エクスプロ ジョン」

五丁から放たれた五本の極太ビームは地面を焦がす。
そこにいたロボットすべてを吹き飛ばす。

「……………」

辺りに砂煙が舞う。

砂埃がなくなり、地面を視認できるようになると、ムヴィイは息を
荒げながら地面に倒れていた。

「……………はあ、はあ……………」

俺は地面にゆっくりと降り立ち、ムヴィイを見下ろす。

「……………ムヴィイの、負けだ」

「……………ま、まだです……………」

「ボロボロじゃないか……………無理するな」

「無理なんてしてません……………ボロボロなんかでもありません……………」

フラフラになりつつもムヴィイは立ち上がる。

「……………そんなにロボットだけの世界を作りたいのか？」

「……………はい」

「共存……………する気はないのか？」

「ありません……………」

「……………俺個人的には別にどうなるかが構わない。けどさ……………」

ムヴィに近づくと。

「俺はムヴィに苦しそうな顔でいてほしくない」

「え……………」

「俺は生半可な覚悟で共存する世界を作るなんて一回も言ったことないよ。難しいことだというのもわかってるから。ムヴィ……………俺はお前がいてくれると凄く嬉しい」

「……………」

「ムヴィの力を、俺の為に、使わないか？」

「私は……………」

「約束する、皆が笑って暮らせる世界を作るって」

「宏樹、様……………」

少しずつ俺に近づき、俺に飛びついてくる。

それと同時にムヴィはオーバードライヴを解く。

俺に抱きつくムヴィの目に涙があふれ出る。

「う、あああああつ……………！」

そしてそのまま大声を出して泣き出した。

俺はそれを受け止める。

「辛かったろ……………」

「宏樹様……………私……………私！」

刹那、ムヴィの身体がビクツと動いたかと思うと、途端に辛そうな表情に急変した。

「ム、ムヴィ？」

「……は、あはは……どうやら、制裁を受けたかもしれませんが……」
「制裁……！？」

ムヴィの背中から暖かい液体が流れ出てるのに気づく。
自分の右手を見てみると、血とオイルが混じったような液体がついていた。

「な、なんなんだよ、これ……」

「まったく、最後まで使えん奴だな」

すると、銃を持ったゴードがあざ笑いながら歩いてくる。

「抱きついたなら刃で貫けばいいものを……」

「貴様っ……」

「宏樹様……私のことはいいですから、ゴードを……」

「ムヴィ……」

「なんだ、まだ息があったか、死ぬ、裏切者」

「くっ」

俺はムヴィを庇いながらシールドを構える。

「そんなちっさい盾で隠しきってるつもりか？　メヴィ、殺れ」

「え……でも」

「……」

ゴードは困惑するメヴィの右腕を銃で撃ち抜く。

「つうあー！」
「な、ゴード！」
「でもじゃない、お前も姉みたいにされたいのか？」
「くっ……………」

撃たれた腕を庇いながら俺に構えるメヴィ。

「ひ、宏樹様……………」
「どうした？」
「このままではメヴィも危ないです……………私はいいから……………」
「よかないよ。ムヴィにはまだ仕事が残っているだろ？」
「え……………」
「ロボット達の中では人望があるんだろ？ この場を収める時にムヴィの力が必要だよ。あと……………」
「あと？」
「また、俺のメイドになってくれるか？」
「あ……………はい」
「よし……………」

俺はムヴィの傷口に手を添え、魔力を集中させる。

「……………ヒール」

しかし、俺の治癒魔法はなまくら故に銃弾取り出しと止血が限界だった。

「また傷が開くかもしれないから下がっているんだよ？」
「は、はい……………」
「さて……………メヴィ」

「っ……」

「メヴィはどうしたいんだ？」

「どっつて……」

「俺に敵対するのか、俺の味方になるのか」

「……」

メヴィはゴードの顔色をうかがっていた。

「周りは気にするな、俺はメヴィ本人の意見が聞きたいだけだ」

「私は……ひろの、味方になりたい、一緒に戦いたい！」

「な、メヴィ、お前！」

ゴードがメヴィに向かってトリガーを引く。

「させるか！ ブレイドビット！」

ショートブレイドを二本飛ばし、メヴィに向かって飛んでくる銃弾を弾く。

「よく言った、後は任せろ」

「……うん！」

「こ、この腰抜けヒューマンがあ！」

「腰抜けはどっちだよ、ゴード！」

「なに！？」

「自分は口だけ動かして傍観とは……腰抜けとしかいいようがないだろ！」

「貴様……」

「だったら来いよ、来て俺を殺してみろ、この腰抜けが！」

「い、言わせておけば……いいだろう、行ってやるよ！」

冷静さを失くしたゴードがこちらに向かって突っ込んでくる。

「悪いが……一撃で仕留める！ マジックサーベル！」

ミドルブレイドから魔法の剣を出し、構える。

「うおおおっ！ くたばれええ！」

「……」

すれ違いざまに互いの剣の一闪が出る。

「……」

「……は、ははは……俺の……」

ゴードは笑いながら胴体がゆっくりと切断されていた。

「……貴様の、負けた。ゴード……」

ミドルブレイドを鞘に納めながらオーバードライブを解き、メヴィに近づく。

「ひろ……」

「大丈夫か？ 腕は……」

「うん。ありがとう、助けてくれて」

「いいよ」

「ま、まだまだ……」

「……まだ生きてたか」

後ろを振り返り、地をはつゴードを見下ろす。

「俺は、まだ、負けてない！」

「いや、あんたは、負けたの！」
「ぐわああ！」

ゴードの背後に人影が現れたかと思うと、ゴードの中心に一閃が走る。

その一閃の正体は、振り下ろされた鎌で、その後ろで女がニヤツいていた。

「……石田、咲子」

「ふふつ、久しぶりね、メガネ君。じゃあ……公開処刑でも始めますか」

すると、咲子の背後に大きな魔法陣が描かれたかと思うと、大量の魔物が転送されてくる。

「さあ、この場に居る奴等を皆殺しにしてください。女はその場でもてあそんでもいいわ！」

「この乱戦状態では……ムヴィ！」

「なんですか？」

「ロボット達に今すぐ休戦させ、魔物を迎撃するぞ」

「わかりました」

「メヴィ、戦えるか？」

「うん、片腕だけならなんとか」

「りるに治療してもらった方がいいな……。まずりると合流するからついてこい」

「うん」

俺とメヴィは、乱戦状態である戦場を走ることにした。

「りる！ どこにいるんだ！」

こう戦場が混乱しては、フェアリーを使った通信ができない。

「マシンドールの皆、聞いてください！」

ムヴィがシャイニングウイングで飛び、叫んでいた。

「私達はゴードに騙されていたんです！ ロボット以外の種族を滅ぼすなんて、悪がすることなんです！ 私は、今気づきました……」
「ムヴィ……」

ムヴィの演説にロボットの攻撃が沈静化する。

「ふははっ！ もらった！」

その際に魔物が剣を振り下ろす。

「ちい、させるかあ！」

俺はロボットと魔物の間に割って入り、剣を防ぐ。

「ナニ……」

「貴様……」

「ぼけつと突っ立ってんじゃねえ！ 死にたいのか!？」

受けた剣を吹き飛ばし、時計回りに回転しながら、魔物を横に斬る。

「ムヴィの声に聞き惚れるのはいいけど、周りに警戒しとけ」

「ア……スマナイ」

「いいよ、シャイニングウイング！」

その場で飛び上がり、皆に聞こえるように叫ぶ。

「事情が変わった。各自、さっきまで戦っていた種族は味方だ！
いまこそ共闘するんだ、俺たちの未来を守るために！」

「……おう！」

「そう、今、私達を脅かす存在はヒューマン族ではない、ヒューマン
ハーフ族こそ、我らの敵です！ 各機、自分と仲間である、ヒュー
マン族と共に敵を排除します！」

「……リョーカイ！」

俺とムヴィは目を合らし、互いに微笑む。

そして空からりるを探し、見つけた。

「メヴィ、そこからまっすぐいけば居るが居る、ムヴィと一緒に回
復してもらってこい」

「わかった」

「宏樹様……」

「……ロボット達のリーダーなんだ、応急処置程度じゃ不安だしな」

「はい、指揮を、よろしくお願いします」

「ああ、任せる……」

前を向くと、魔法陣から次々と魔物が転送されてきていた。

「どうやら、あれを操る者を倒さなきゃいけないみたいだな」

「この場での敵指揮官は咲子だけか……」。

咲子にこんなに魔力があるとは思えない……ってことは他にいる
のかな？

「戦える者は互いをカバーしながら前線を固める。麻奈美と進也で前線の維持を頼む」

「わかった、兄さん」

「任せてください」

「マシンドールもその二人に続いてくれ、腕に自信がある者は前線の維持を」

「」「リョーカイ」「」

「さて、俺は……」

辺りを見渡し、魔法陣を操っている奴を探す。

「くそ、どこに……ん？」

不意に建物の内部から一瞬だけ光ったような気がした。

「……もしかして」

俺はそのまま突撃し、窓ガラスを割って侵入する。

そこにいたのは三人の弓矢兵と杖を持った魔物だった。

「見つけた」

「ち、近づかせるな！」

弓矢の風切音を読み、飛んできた矢を回避する。

「な、この距離を避けた！？」

「悪いが、遊んでる暇はないんだ！」

一気に踏み込み、銃剣の一閃を魔物が持つ弓に浴びせる。

「なめるな、弓矢がなくなつて……」

そしてそのまま左の逆手ブレイドで持った直後の剣を吹き飛ばす。

「な、なんなんだ、コイツ……」

「イナズマキック！」

「どわっ!?!」

電気を帯びた回し蹴りで、魔物二体を窓から突き落とす。

「スライドダッシュ！」

「ひっ！」

杖を持つ魔物の背後に回り込み、すれ違いざまに逆手ブレイドで首を切り落とす。

「なっ、いつの間に……」

残った弓兵にハンドガンを構える。

「サンダーショット！」

「だぁぁ!?!」

電撃弾が貫通し、魔物は膝から崩れ落ちる。

「はぁ……これで魔法陣は……あれ？」

倒したはずなのに、魔法陣は消えるどころか、数が増えていた。

「どづいうことだ……?」

「はは、まさか宗太の言った通りになるとはね」

「その声……咲子か？」

「ご名答、藤山君……」

ゆっくりとした足取りで咲子が現れる。

手には威圧感丸出しの鎌を持って……。

「藤山宏樹は一兵士としても、司令官としても侮れない人物。周りを常に見渡せる視野の広さを持ち、中間の危機を未然に防ぐ手腕……完璧ね」

「……」

「でもね、その視野の広さがあだとなつたみたいね」

「……どういうことだ？」

「気づかない？ あなたは畏にかかったの。それも皆が全員死ぬよ
うな、ねえ。あははっ！」

「なに？」

「あなたのことだから、魔法陣を操る奴を一人で探すでしょう。仲間を危険に晒したくないから」

「くっ……」

「そして、操っているであろう魔物を見つけ、一人で倒す。それがあなたの書いたシナリオね」

「続きでも、あるのか？」

「あるわよ。けど、一人で倒した魔物はダミーで、本物はあなたの仲間の魔法をすべて封じ身動きが取れない魔法をかけられる。男は首を斬られ、女は身に着けている衣をすべてはがれ、魔物に犯される……そして、あなたは、私に原形が保てないほど切り刻まれるのよ！」

「ちい！」

窓から外の様子を見ると、異様な空間が広がり、そこにいる

魔物以外の者は辛そうだった。

「ふふ、今すぐ会わせてあげる……地獄でね！」

こちらに飛び上がり、鎌を振り下ろす咲子。

「くっ」

俺はバックステップで回避する。

「甘い、アイス！」

手から氷が吹き出し、着地した右足に吹き付けられる。

「なに！？ 身動きが」

地面と足が凍りつき、身動きが取れなくなる。

「さあ、あなたはいつまで耐えられるかな？」

「っ……」

咲子の攻撃をショートブレイドで防ぐ。

くそ……このままでは……。

*

「くっ、身体が……重い」

突然周りが薄暗くなったかと思うと、身体全体に圧力がかかり、身体が思うように動かない。

「よし、突撃っ！」

フライゴブリンの合図で、一気に突撃してくる魔物達。

「ロツサ、お前もいい加減戦果をあげたらどうだ？」

「……正々堂々じゃないな」

「なに言ってるんだ、要は勝てばいいんだよ、勝てば。見とけよ」

すると、さっきのフライゴブリンが私に向かって飛び降りてくる。

「まずはその女あ！」

「くるー！」

振り下ろされた剣をセイバーで受け止める。

そのまま受け流し、横ステップで距離を置く。

「これじゃあ満足に戦えない……」

「どうだ？ 怖いだろ？ 泣き叫べよ！ はははっ！」

「くっ……」

その時、フライゴブリンの顔面に誰かが飛び蹴りをかましていた。

「ぐえっ！？」

顔面が歪むほどの蹴りをくらったフライゴブリンは、豪快に吹き飛ばされる。

「はあ、はあ……大丈夫、まなちゃん？」

「りるちゃん……」

りるちゃんが地面に膝をつけながら私に笑みを見せる。

「だ、誰だ！？ 俺を蹴り飛ばした奴は！？」

「さあ、誰だろ？」

「お前か……ぶっ殺す！」

「りるは死ぬつもりはないよ……絶対生き残る！ シャイニングウイング！」

りるちゃんは一気に飛び上がり、フライゴブリンに飛び込む。

「……アンチマジック」

「え、あれ？」

しかし、飛び上がった直後に光の翼は消え、地面に叩きつけられてしまう。

「くっ……」

「ははっ、俺を怒らした奴はタダでは済まさないぞ……」

「りるちゃん！」

「おっと、お前の相手はこいつ等にももらえ」

りるちゃんに近づこうとした時に、目の前に立ち塞がるゴブリンが二体。

「くっ……」

「さっさと」

「くっ……」

フライゴブリンはりるちゃんの胸ぐらを掴み、持ち上げる。

「く、苦しい……」
「絞殺してもいいが、生憎俺は優しくないんでね、生殺しにしてあげるよ」
「くあっ……」
「りるちゃん!」
「もらった!」
「くっ……」

私はゴブリン二体を相手するのが限界。
でも、このままではりるちゃんが……。

「ふはは、じゃあ少しずつ剣で貫いてあげるね……」
「お兄ちゃん……助けて……」
「お兄ちゃん? はは、来るわけないだろ、今頃咲子様がぶっ殺しているよ!」
「そんな……」
「大丈夫だよ、お前もいずれお兄ちゃんに会えるからさ!」

そう言ってるちゃんに剣を突き刺そうと構えた。

「させるかああ!」

突然青い閃光がフライゴブリンを横切り、そいつが持っていた剣を腕ごと斬り落とす。

「ぐわあああ!」
「イナズマキック!」

そして、再び回り込んでフライゴブリンを蹴り飛ばす。

最後に、解放されたりるちゃんを優しく抱き寄せる。

「…………お兄、ちゃん…………？」

「大丈夫か？」

そこにいたのは、ボロボロになった兄さんだった。

*

「はあ、はあ……………」

「しぶといわね……………」

「…………足が……………」

氷ついて、足が凍死寸前だった。

「そろそろ、やられてくれないかな？ こっちだって暇じゃないんだし……………」

「だったら遊んでないで早く殺してみろよ、この二流が……………」

「な、言わせておけば……………」

「だってそうだろ？ 足の自由が利かない俺になんてこずっているんだよ……………」

俺の周りの足場は、咲子の攻撃を受け流した跡が無数にあった。

受け流しの影響でショートブレイドは刃こぼれしまくり、持って数回が限界だった。

「口だけは元気ね、でも、身体は既に限界じゃなくて？」

「身体はな……………正直立っていられるのが凄いくらいだよ……………」

「そう……………だったら、楽にしてあげるね……………」

「ちっ」

振り下ろされた鎌を押さえ、受け流し、地面に突き刺す。そして、左足に魔力を集中させ、電気を発生させる。

「イナズマキック、叩きつけバージョン！」

力強く地面を踏みつけ、ボロボロになった床を破壊する。

「なに！？」

そして、俺と咲子の周辺の床が崩れ、下に落下する。

崩れた拍子に地面にくっついていたら足が解放されるが、それでも少し床がへばりついていた。

「こっちだって暇じゃないんだ、くらえ！」

「くっ！」

落下する咲子に俺は空中で一回転し、咲子の腹部に右足でかかと落としを決める。

その拍子に足についていた氷と床はすべてとれた。

「ぐっ……」

そして咲子そのまま床と共に地面に叩きつけられ、辺りに砂埃が舞う。

「シャイニングウイング！」

光の翼を出し、建物から脱出する。

「くっ、ここだけ重力が違う……」

外に出ると、身体全体に圧力が加えられ、重く感じる。

「あれは……りるか!？」

フライゴブリンに拘束され、剣を向けられるりるがいた。

「間に合えよ、マツハウイング!」

高速移動し、一気に近づく。

「させるかああ!」

左腰のショートブレイドに手をかけ、フライゴブリンとすれ違いざまに抜き、腕を斬り落とす。

「ぐわあああ!」

そのまま高速でフライゴブリンの周りを一周し、足に電気をまと
う。

「イナズマキック!」

フライゴブリンを蹴り飛ばし、拘束から解放されたりるを左腕で抱きかかえる。

「……お兄、ちゃん……?」

俺の顔を見てキョトンとするりるに微笑みかける。

「大丈夫か？」

「腕が……腕がああ！」

絶叫するフライゴブリンを無視し、りるの安否を確認する。

「うん、大丈夫……」

「ちっ、ライト、ひとまず下がれ」

「な、なんだと!？」

フライゴブリンの前に立つ一体のゴブリンナイト。

「今のお前は邪魔なだけだ、さっさと下がれ」

「ちい、貴様等、必ず俺の手で殺すからな！」

そう言い残し、腕を抱えながら離脱した。

「……さて、こちらとしては対等でない戦いは好まないんだが、仕方ない。仕留めさせてもらっぞ」

ゴブリンナイトは槍を構える。

俺はりるを庇いながらハンドガンに持ち変え、構える。

「……でもなんで急にシャイニングウイングが消えたんだろ……」
「え？ 消えた？」

ゴブリンナイトを警戒しながらりるに聞き返す。

「うん、フライゴブリンに飛びかかった時に突然消えたの」

「消えた……ちっ」

ゴブリンナイトが突っ込んでくるので、ハンドガンを発砲する。

「甘いな」

しかし、巧みな槍さばきで銃弾を簡単に弾かれてしまう。

「俺に銃弾を当てることなど不可！」

「なめるなよ」

俺は左にもハンドガンを持ち、ツインで連発する。

「数を増やしたところで」

しかし、やはり弾かれてしまう。

「お兄ちゃん、援護するよ、サンダー！」

だが、りるの杖から電撃の魔法は出ることにはなかった。

「な、なんで……魔法が唱えられない」

「ふふっ、それは僕が君の魔法を封じたからね……」

突然気味の悪い笑い声が聞こえたかと思うと、岩沢宗太が目の前に現れた。

「久しぶりだね、藤山宏樹君、里流葉さん」

「じゃあ、さっきの唱えた魔法が、宗太の魔法だったというわけね」

そう言いながらまなが横に並ぶ。

「無事だったか、心配したよ、麻奈美」

「それはどうも……兄さん」

「ん？」

「私がああのだらけゴブリンの相手をしますから、兄さんは宗太をお願いします」

「え、しかし……」

「兄さんは射撃が得意なのは知ってます。けどあのだらけゴブリンには射撃は効かないと思いますよ？」

「そうだな……無理はするなよ」

「はい、お互い様ね」

俺はハンドガンのリロードを、まなはビームセイバーを両手に持って構える。

「ははあっ!」

宗太に向かって走り、銃剣を横に振る。

「そんなもの……なに？」

「甘いな」

避けた宗太にもう一つのハンドガンで狙う。

「エアショット!」

「ぐっ!」

宗太の胸に直撃し、豪快に吹き飛ばす。

「くっ……」

「りるの魔法封じは、高くつくぞ」

「なめるなよ、第三隊、前につけ！」

宗太の指示で、ゴブリン達が前に立ち塞がる。

「ちっ」

まずい、これでは宗太と距離をとらされ、魔法の餌食だ。

「シャイニングウイング！」

「させません、アンチマジック！」

しかし、俺が出した魔法は消えることはなかった。

「な、なんで!?!」

「悪いが、俺にはシャイニングウイングを常時展開できるフェアリーを持つてるからな、意味ないんだよ！」

宗太の上空を取る。

「ええい、フライゴブリン！」

「そこをどけ！」

向かってくるフライゴブリンを銃剣であしらいつつ宗太に近づく。

「なに!?!」

「マジックサーベル！」

銃剣から出した魔法の剣を宗太に振り下ろす。

しかし、バックステップで回避される。

「くられ、ダークウエーブ！」

宗太の手から出された闇のオーラが俺を包み込む。

「なんだ……」

そして、身体全体に走る激痛。

「ぐっ、うわっー！」

オーラから追い出され、地面に叩きつけられる。

「くっ……」

「まだだ、グラヴィティフィールド！」

膝をつく俺に、身体にかかる重力に両手を地面につけてしまっ。

「ぐう、お、重い……」

「はは、覚悟していただく」

「まだだ……まだ負けてないっ！」

力を振り絞って立ち上がる。

「なんだコイツ、他の奴より重力がきついはずなのに……」

「はっ、重力なんて、気合でなんとかなる……なんなら自分で試してみるか？」

「なに？」

「ラーニング、アンチマジック」

「お前、ラーニングを……」

「まだだ、ラーニング、グラヴィティフィールド！」
「ぐあ……き、聞いてないぞ……」
「ラーニング、グラヴィティフィールド」
「ぐうう……お前が……僕達と同じ……」
「ラーニング、グラヴィティフィールドオ！」
「ぐわっ！」

宗太にかかる重力は4G。
立つこともままならない宗太は、地面に押し付けられる。

「くそ、魔法を封じられては……」

俺は宗太に銃口を向ける。

「今度は、当てる」
「くっ……」

トリガーを引く。
銃声が鳴り響く。
しかし宗太に当たることはなかった。

「え……」

俺の銃弾は発砲直後に撃ち落とされていた。

「まったく、ヒヤヒヤさせる」
宗太の後ろに現れたのは……。

「ロマノフ……?」

「よく覚えてたな。褒めてやる」

デザートイーグルをくるくると指で回しながらそう言った。

「最強のハンドガンを片手で、なおかつ二丁扱……尋常じゃないな」

「まあ、俺は人間でもなんでもないしな、お前達みたいな脆弱な種族じゃないんだ」

「ふっ、脆弱なのはお前達種族も一緒だ」

「なに?」

「はははっ!」

「ぐわっ!」

涼風がビームダガーで周囲のゴブリンを血祭りにあげる。

「たかが重力が増えただけで、私を押さえるのは無理よ!」

「その通りだ、姉貴! ファイアランサー!」

風斗が炎をまとして突撃し、ゴブリンを突き刺す。

「死ね!」

「ちい!」

背後から迫るゴブリンに、風斗はさっき突き刺したゴブリンで攻撃を防ぐ。

「なに!?!」

「活躍してないからってなめるなあ!」

「ぐはっ!」

串刺しにし、ゴブリン数体に投げつける。

「どわ！」

風斗は魔法陣を描いて飛びあがり、槍を下に向ける。

「インパクトシュート！」

オーラをまとして落下し、周囲に衝撃波が発生する。

「はあ、はあ………」

風斗の周囲にはクレーターができていた。

「シューティングスターダストシュート！」

後方からかなが矢を放ち、大量の矢となりゴブリンに降り注ぐ。

「私達は……一人一人が脆弱なのかもしれない……けど、私達には仲間がいる！」

「そう……その意味が、お前にわかるか？ ロマノフ？」

「弱者がいくら揃おうが………」

「俺達人間は足し算じゃない……掛け算だ」

「りる達は力を合わせれば、力は無限になる！」

「右隣りにりるが並ぶ。」

「大丈夫なのか？」

「魔法封じでまだ唱えられないけど、りるだって戦えるよ」

「そっか」

「兄妹の力っていうの、やってみますか？」

「まな……お前、口から血が……」

「大丈夫です、外傷はありませんから」

そう言いながら口から垂れていた血を腕で拭き取る。

「ちい、陣形を立て直せ！」

ロマノフの指示で、素早く陣形を立て直される。

「揃えたところで」

「りる達には」

「無駄よ！」

「……クロスフォーメーション！」

俺達の周りに描かれる魔法陣。

りるの両手には炎の魔法が、まなの両手には水の魔法、俺の両手には電気の魔法……。

「どうやら、クロスフォーメーションの時は使えるみたいだ、魔法が」

「そうだね。なんだか、凄く力がみなぎる……」

「行きます、まなちゃん、兄さん」

俺達は両手を前方に構える。

「……トライアック！」

三つの魔法が放たれ、それらが混ざり合いながら直進する。

「どわああああ！」

「ぐはっ！」

「まだ、終わってないです！」

まながビームセイバーを持って突撃する。

守りを捨てたまなの猛攻に次々と倒れていく魔物達。

「りる、まなの援護を」

「うん！ グレネードショット！」

ハンドガンから放たれた弾は、魔物に当たると爆発し、周囲の魔物を巻き込む。

「シャイニングウイング！ 光を越えろ！ マツハウイングウ！」

低空飛行で突撃し、すれ違いざまに次々と魔物を斬り刻む。

そのままロマノフに攻撃する。

「はあっ！」

「くっ」

銃剣アサルトライフルで防がれる。

「前よりも動きが早い……コイツ、できる！」

「まだだ！」

着地して回し蹴りする。

しかし、ロマノフのアサルトライフルで防がれる。

「しかし、まだ甘い！」

蹴りを弾き飛ばし、銃剣を突き刺す。
俺は紙一重で避ける。

「なに……」

「悪いが、仕留めさせてもらおう！」

俺の銃剣がロマノフの右頬をかすめる。

「避けた!？」

「くっ！」

ロマノフはバックステップで距離をとる。

「不利か……撤退するぞ」

そう合図を送ると、転送魔法陣に次々と撤退する魔物達。

「ツイゲキスルゾ！」

「やめろ、追撃するな」

追い打ちをかけようとするロボットを手で制する。

「シカシ……」

「深追いは禁物だ、死にたいなら好きにしろ」

「クッ……」

「撤退してくれなきゃ、戦力差と重力増加で負けていた……」

終わったと思うと、足から力が抜け、膝から崩れる。

「はあ……」

とにかく、今生きてることを実感していた。

【第十六章・兄妹の力終わり】

第十七章 しばしの休息

各種族はそれぞれの島に帰っていき、俺達も元の場所に帰ってくる。

「はぁ……長い一日だった」

自分の部屋に入ると、さっそくベッドで横になり、ため息をつく。

「それにしても……異界の人間、ねえ」

俺達が着てる青い制服と、まな達が着てる赤い制服。色に分けられていたけど、意味とかあるのかな……。男女別というわけでもなさそうだし。

「それに、この玉……」

懐から出したのは、ササミナ殿から頂いた玉。これを使って俺とりのスモールフェアリーを統一した。

「なあ、これってさ、なんの玉なんだ？」

「ん？ それは『クロスボール』だと思っ」

と、銃を持ったフェアリーが答える。

「人間に宿った複数の妖精を一つにまとめる玉です」

と、鉄扇を持ったフェアリーが答えた。

「いちいちエンジンする必要がなくなるから便利だよな」

と、光の翼を出したフェアリーが答えた。

「つてか、三体分裂してるし」

「仕方ないだろ、ドライヴしてる時だけだから」

「ドライヴすればちゃんと一つになってますよ」

「僕は一つになるの嫌だけどね」

協調性のないフェアリーを宿してしまったような……。

「ああ？　なにが不満なんだよ？」

「だってさ、気色悪いじゃん、一つになるって」

「俺だつてお前みたいなのハイテンション野郎と一緒になりたくないわ！」

「じゃあドライヴアウトしてどっかいつちやえば？」

「なんだとお!？」

「やるのかい？」

「……」

なんか收拾がつかなくなってきたぞ。

「……ガキですね」

鉄扇妖精がそんなことを呟く。

「あ？」

「ん？」

それが聞こえたのか、いがみ合う妖精二人が鉄扇妖精を睨む。

「おいおい、傍観者気取りかよ」

「僕ってさ、鉄扇君みたいな奴、大っ嫌いなんだよね」

「ふ、ガキのたわごとなど……」

「キザ野郎」

「腰抜け」

「なんだところらあ！」

鉄扇妖精が怒って鉄扇を開く。

「お、やるのか？」

銃妖精もハンドガンを構える。

「いつそのこと、ここでまとめて倒してあげるね」

羽妖精もミドルブレイドを構える。

トライアングルを形成して三体が睨み合う。

「……………」

布団を深くかぶって目をつぶった。

少しの間、小さな戦闘が近くで行われていたのだった。

*

次の日、目を覚ます。

「んんん……………え？」

身体に重りを感じて下を見てみると、メヴィが規則正しい寝息を立てて眠っていた。

「……いつの間に」

そう呟きながらメヴィの頭を優しく撫でる。

この感触、不思議と経験したことある肌触りだった。

なつかしみながら撫で続けていると、ムヴィの目がゆっくりと開く。

「あ、起こしたか？」

「おはよう……ひろ」

「おはよ、いつからいたんだ？」

「ひろが寝たあとに」

「上に乗ってないで布団の中に入ればいいものを……」

「あ、そうだね、えへへ」

半分寝ぼけたメヴィが笑う。

「さて、起きるからそろそろどいてくれるかな？」

「うん」

俺からメヴィが離れると、ベットから起きあがり、大きく伸びをする。

「んん〜はぁ……メヴィ、少し散歩しないか？」

「え、うん、いいけど」

「よし、どうせ朝食まで時間あるしな……顔洗ってくるよ」

「うん、あ、私も洗わないと」

*

朝の陽ざしを身体いっぱい浴びる。

「清々しいなあ」

「そうだね」

「メヴィはこの周りって知らないよな？」

「うん、昨日初めてここに来たからね」

「実は俺もそんなに知らないんだ、だから一緒に散歩しないか？」

「うん、するする」

とりあえず、港の反対方向に行ってみるか。
少し歩き進めると、キレイな花畑があった。

「凄い……」

「ん、ニーナさん」

「あ、宏樹様、おはようございます」

俺に気づいたニーナさんが軽くお辞儀をする。

「ニーナさんがこの手入れを？」

「はい、私の趣味みたいなものですけど……お気に召しましたか？」

「うん、とつても手入れが行き届いてますよ」

花一つ一つがまるで感情を持って、喜んでいるみたいに感じた。

「それにしても、お二人とも、お早いですね」

「そうかな？ あ、そうだ、ちょっとこの辺りを散歩したいんだけど、なにかオススメな場所とかあるかな？」

「オススメですか……」

悩むしぐさを見せるニーナ。

「岬なんか、どうでしょうか」

「あるの？ ……港があるならあるよな」

「はい、あそこからの景色は最高ですよ」

「そっか、じゃあ行つところかな」

「はい、あ、馬で行つたほうがいいですよ」

「そんなに遠いの？」

「いえ、でも馬に乗って朝風を身体いっぱい浴びるのはいいと思いますよ？」

「そうだな……じゃあまずは馬舎に寄らないとな」

ニーナと別れ、馬舎に到着する。

「バルド、元気か？」

「ブルル」

「そっか……ちょっと俺達についてきてもらつてぞ」
「……」

バルドを馬舎から出し、乗馬する。

「さあ、メヴィ」

メヴィに手をさしだし、メヴィを後ろに乗せた。

「しっかり掴まっているよ」

「うん」

俺の腹部に回るメヴィの腕。

背中にびつちりとくつつくメヴィ。

「行こうか」

「うん」

馬を少し走らせる。

上下に身体が動く中、俺達の身体に朝風が吹き抜けていく。

「……」

メヴィは終始黙り込んでいた。

「……メヴィは」

「？」

「メヴィは、ロボットの過去がどうだったのか知ってるのか？」

「うん、ゴードから聞いたから」

「どんな過去なんだ？」

「えつとね……人間とヒューマンハーフ族が戦争してた時にね、マシンドール族が人間の手で作られたの」

「うん」

「その目的が、人間を手助けするためらしいんだけど、差別が起きたの」

「例えば？」

「重労働や突撃兵士、さらには人間の性的欲求を満たすための存在」
「……」

「当時は人間にドライブできる技術はなかったの、だから常に劣性だったらしいの」

「そうだな、生身の人間が魔物とやりあうのは無理だ」

「そこでロボットが玉砕覚悟で戦果を挙げたの、多数の命を失って

「……」

「特攻か……」
「女性タイプのロボットは人間に無理矢理犯され、魔物に捕まったら魔物に無理矢理犯され……」
「……やってることは人間も魔物も一緒か」
「でも、ロボット達が築いた戦果を評価した人間達は、ロボットの街を与えたの。文字通り、ロボットだけの街を……」
「そうなんだ」

話していると、岬に到着していた。

景色はとてもきれいで、思わず見とれてしまう。

「だけど、ヒューマンハーフ族がその街を攻めてきた時、人間は一つも援護しなかった」

「え……」

「個々の性能は高くても、数では勝てず、その街は陥落するの。その後が酷かった」

「その後？」

「男性タイプのロボットは、一か所に集められ、生きたままで埋め立て、大量の水を被せた」

「むごい……」

「女性タイプは壊れるまで犯され続けた。人間と違って、壊れなければ死なないから」

「生き地獄といったところか……」

「ロボットの先祖は、ロボット以外の種族を恨んでるの。人間や魔物は勿論、後から誕生した鳥獣族やスピアビードル族も、全部」

「だから、すべてを滅ぼす、か」

「うん……私が正しいと思って協力したのに……」

俯くメヴィに、俺は小さく呟く。

「自分が正しいと思えば、それは正しいんだよ」
「え？」

「ただ、それが行き過ぎなのか、そうでないかのことだよ。周りに支持される行為でも、悪と唱える奴はいるし、自分は正しいと信じていても、周りはそうじゃないと思っていたり……さじ加減が難しいところなんだよ、そういうの」

「……ひろは、自分がしようとしてること、正しいと信じているの？」

「俺はそう思う。でも、現実問題、無理な話なのかもしれない。ロボット達みたいに過去の出来事に恨みを持つものがあるのも事実、俺の考えは甘い世界なのかもしれない……」

「甘くなんてないよ。凄いことだよ」

「メヴィー……」

「私は協力するよ、ひろの考える世界を作るために」

「ありがとう……」

少しの間、岬の景色をメヴィーと二人で鑑賞した後、屋敷に帰った。

*

皆で食堂に集まり、朝食を食べる。

「お兄ちゃん、行儀悪いよ」

「いいだろ、少しくらい」

「ダメだよ〜」

ラットとルチアは仲良くパンを食べていた。

この二人を見ていると、和むよな……。

「お兄ちゃん、隣いい？」

そんなことを考えていると、俺の妹がやってくる。

「ああ、いいよ」

イスを後ろにずらし、りるを座らせる。

「いただきます」

合掌してサンドイッチを食べるりる。

ここの食堂はバイキング形式で、自由に、好きなものを食べられるわけだ。

りるの食べてる姿を見ていると、目の前にアースティが席についた。

「なんだ、来てたのか」

「来ちゃ悪いかよ」

「いや、そうは言っていないけど」

「ここの料理は美味いからな、マーガレッツ島から比較的近いし、食いにくるのもいいだろ」

「村の方はどうだ？ 被害でてたんだろ？」

「ああ、今は復興作業に入ってる。アーライン様はその指揮を執っていらつしゃる」

「ふうん、お前はのんきにここで朝食食べてていいのかよ」

「今は休暇中だ。それに、俺だけじゃなく俺の部隊全員、ここに来てるぞ」

「マジで……本当だ」

アースティ以外の鳥獣族が他の皆とけこんでいたので気づかなかった。

「まあ、そのかわりに午後は仕事あるけど」

「ご苦労なこつたな。その仕事って、虫のことか？」

「ああ、敵対関係だしな」

「なんとか虫達と和解する方法はないのか？」

「正直、ないだろうな。俺達が休戦を呼びかけても無視した連中だしな、虫だけに」

「なるほど……ギャグは触れないけど。じゃあ滅ぼすしかないと？」

「そうなるな……お前の言う世界に反するだろうが、こつちだって必死なんだ」

「わかってるよ……鳥獣族だけでなんとかなるのか？」

「どうだろうな、なんせ、昨日の戦いでだいぶ戦力が消耗したしな」

「……ってことは、俺達が向かう必要があるのか」

「宏樹様、お隣いいですか？」

悩んでいると、ムヴィがやってきた。

俺は頷きながらりるとは反対の席にムヴィを座らした。

「宏樹様、ちよつといいですか？」

「どうした？」

「ミヴィから連絡があったんですが、ロボットの一部分が反乱を起こしたみたいで、ロツクキャッスル近くにある研究所に立てこもったみたいです」

「このタイミングでかよ……」

「え、どうかしたんですか？」

「いや、今マーガレット島を治めるために戦力を送ろうとしてたんだが……まずいな」

さて、どうしたものか。

「それに、なにか別の戦力が欲しいな……なんだかんだいっても少数精鋭だしな」

「ロボットの火器は協力だしな」

アーステイの言葉にコクンと頷く。

「そんなお悩みをもったそこの君」

「え？」

突然後ろから声が聞こえたので振り返る。

「いい場所を見つけたよ」

「えっと、確か……」

「キユーノ・サキリです」

「そう、キユーノ。で、なにを見つけたの？」

「なんだかお宝が眠ってそうな施設がありましたね」

「施設？」

「うん。ボクが調べたんだけど、なんでも、対魔物用の装備研究をしていた場所だそうなの」

「対魔物用か……今回の戦いに魔物関係ないんだけどな。でも戦力アップするなら調べてみる必要があるな。場所は？」

「疾風学園から東に五キロ向かった先にあるよ」

「疾風学園か……その施設は規模的にどれくらいだ？」

「サイズは疾風学園並か一回り小さいかくらい」

「結構大きいな……調査メンバーでも考えるか」

まずは戦力強化を行うために、今日の夜に出発しようと思っただけで、朝食を食べるのであった。

少しして外に出て、辺りを散歩する。
屋敷から少し出たところに着くと、まなと進也が木刀を持って立っていた。

その周りにポラと健治がいた。

「なにしてるんだ？」

「決闘だそうですよ、進と麻奈美の」

そう答える健治。

「行くぞ、麻奈美！」

「うん」

「はああ！」

進也が竹刀を振り上げながらまなに近づく。
まなは進也の竹刀を軽くあしらう。

「まだまだ！」

そのまま進也は下から上に斬り上げる。
しかし、それを読んでいたのか、受け止める。

「進也君……意外と弱いね」

「な、なんだと……」

「そうれ！」

まなは素早く受け止めた竹刀を受け流し、そのまま横に吹き飛ばした。

「あ！」

「しまった！ 危な……」

その弾いた竹刀が俺に向かって突っ込んでくる。

俺は慌てて手で防ぐ。

すると、奇跡的に俺の手には竹刀が収まった。

「だ、大丈夫ですか、兄さん!？」

「あ、ああ、なんとか……それにしても、力凄いな」

「え、そう?」

「そうだろ、進也の竹刀をこんなに力強く弾き飛ばすなんてな」

「え……あ」

「……まな、俺と決闘しないか?」

「兄さんと?」

「ああ」

「でも兄さん、私に勝てるの?」

いかにも自信ありげな表情で見ってくる。

「なめるなよ……兄をな」

進也がいた場所に俺が立つ。

「射撃では勝てないのはわかってますが……接近戦なら兄さんに勝てる自信がありますよ」

「ふっ……言うじゃないか」

「……行きます!」

まなの表情が一瞬で変わり、真剣な眼差しでこちらにつっこんでくる。

振り上げられた竹刀を受け止め、弾きながらバックステップで距離をとる。

かすかに手が震えるのを感じた。

「なんて力だ……」

「隙あり！」

まなの力に驚いていると、まなが素早い動きで一気に距離をつめられる。

「くっ！」

「え！？」

俺は身体をねじってまなの攻撃を回避する。

そのまま下から上に竹刀を斬り上げる。

しかし、まなは瞬時に身体を後ろに反らし、ばく転する。

その拍子に、まなのスカートの中が見えた。

「！？」

「？ 兄さん？」

俺の反応が気になったのか、構えを解いて俺に近づいてくる。

「どうかしましたか？」

「え、あ、いや……その」

「？」

「スカートの中がといていますか……」

「スカート……」

そう言いながら自分のスカートに視線を移す。

「……見ました？」
「み、見えない見てない！」
「本当ですか？」
「本当本当！」

俺はまなの威圧感に押され、必死に否定する。

「……なら、いいですが」
「はあ……」
「なにが見えたの？」

進也は気づいてないのか、墓穴を掘るような発言をしだした。

「え、私のスカートの中」
「中？ えっと、黒だったっ……」
「クラッシュ！」

まなの素早い剣さばきで進也の目にクリーンヒットする。

「ぎゃあああ！」
「進也君でも見ていいのと悪いのがあります！」
「……ご愁傷様」
「で、兄さん？」

標的が進也から俺に変わり、威圧感を出していた。

「は、はい」
「正直に言ってください、見たんですか、見てないんですか？」
「あゝえっと、み……」

「み？」

「見ました……」

「……はあ、まだまだ回転が甘いのかな……」

しかし、まなは俺の目をクラツシユすることなくブツブツと呟いていた。

「……スカートでばく転は無茶だと思うぞ」

「ですよ……」

「うん、まあ、男が相手なら、黒が見えたら油断させられ……」

「いまなにか言いました？」

「いえ、気のせいだと思います」

いかん、口を滑らしてしまった。

「えっと、見られなくなかったらさ、スカートの中になにかはけは？」

「例えば？」

「例えばって……ポラ、助言頼む」

「ここで振るかな……ん、超短い短パンとかは？」

「なんか嫌だよ」

「じゃあブルマしかないね」

「とんだ二択ね！？ それしかないの？」

「物資が少ないのは事実らしいし、短パンがマスラクが作った学院規定のブルマしかないね」

「ブルマって……マスラクにそんな趣味があつたんだな」

俺がそんなことを呟くかたわら、まなは真剣に悩んでいた。

「……」

「ちよ、麻奈美、待ってくれよ」

そしてそのままどこかに行ってしまった、進也がそれを追いかけた。

「……ポーラ、物資が少ないのは本当なのか？」

「ええ、一気に人が増えたのが要因かと思う。戦力増強も兼ねて必要ね」

「ふむ……近くに町とかあるかな」

「町ならなくはないぞ」

その声の主に顔を向けると、マストラクがやってきた。

「……ブルマ」

「は？」

「いや、なんでもない……でも近くに町あるのか？」

「ある。『スクリングゴロン』という大きな町だ」

「なんだ、あるんだ。そこで物資を……」

「それが無理なんだ」

「なんで？」

「最近部外者の立ち入りを禁止してるんだ。俺の屋敷も一応その町のものなのに。城壁の外はすべての住人は立ち入り禁止だ」

「なんだそれ、新手の鎖国か？」

「鎖国か……例えるなら箱庭だな」

「箱庭って……」

「無理矢理入ろうとすれば、女だろっが子供だろっが容赦なく殺してくる」

「……足元を固めるには近場を安泰にさせないとならない。しかし、戦力の増強も必要……忙しいな」

下手すれば、スクリングゴロンに攻めなければならぬ。

やはり順番的に……。

「まずは戦力増強を優先しよう」

「そうだな、兵を送るのにシャトルバスを使えばいい」

「バスって、あの水陸両用の？」

「ああ。運転手は他のやつに頼んでくれ。俺はちょっと忙しいし」
「わかった」

マスク達と別れ、自分の部屋に戻った。

*

部屋に戻ると、朝出ていく時よりも窓が大きく開いていたのに気づく。

「あれ、こんなに開けてたかな？」

全開にされた窓を半分閉め、ベッドに視線を移す。

「すう……」

「……え？」

なぜか俺のベッドの上に鳥獣族の女の子が眠っていた。

「……なんで？ あれ？」

どこかで見たとあるような……。

「んう……あ」

「おはよ、よく眠れた？」

「あ、あわわ、宏樹様！？ きゃ！」

突然慌てだしたかと思うと、勢いよくベットから転げ落ちた。

「だ、大丈夫？」

「は、はい、なんとか……」

少女の手を握り、立ち上がらせる。

「えっと、なんでここにいるの？ あと名前知ってるみたいけど、どこかで会ったっけ？」

「はい、宏樹様は私の命の恩人です」

「恩人？ ……はて、鳥獣族の女の子を助けて覚えが……あ」

あるじゃん、一人だけ。

「もしかして、マシンドール族とやりあってた時の人質の子？」

「はい！ ルミアと申します。あの時はありがとうございます！」

……なんとなく、人質にされてた時よりもはきはきしてるよう
な。

「……まあ、お礼をされるようなことはしてないよ。俺は当然だと
思っただけだし」

「それでもですよ、私、凄く嬉しかったです」

「そう……それでわざわざここまで来てくれたんだ」

「はい、あ、あと、もう一つ用件があります」

「なにかな？」

「あの」

「うん」

「私、宏樹様のことが好きになりました！」

「……………へ？」

「ですからその……………宏樹様がよろしければなんですが……………」

ルミアは手をモジモジと動かして、照れた様子だった。

「いやいや！ ちょっと待ってよ、俺に好意を持ってくれるのは嬉しいけど、俺ヒューマン族だよ？」

「知ってます、種族の壁なんて関係ありませんよ！」

「そうかもしれないけど……………急過ぎて混乱してるから」

「あ、そうですね、いきなり恋人同士になるのは私も欲張りでしたね。まずはお友達というところから始めます」

「ま、まあお友達からならね……………」

「本当ですか！？ えへへっ」

無邪気に喜ぶルミアに笑みを見せる。

「……………ところでね」

「はい？」

「今この屋敷に居る鳥獣族、ルミアだけなんだけど」

「え？ アースティ様は？」

「さっきマーガレッツ島に帰ったぞ」

「ええ！？ ど、どうしよう、今日中に帰らないとお父さんに怒られちゃう」

「……………」

だったら来るなよと思ったが、口に出さないでいた。

「……………送ってやるのか？」

「え？」

「距離が近いとはいえ、虫の脅威がないわけではないからな。俺がマーガレット島まで送ってあげるよ」

「い、いいんですか!?!」

「ああ、いいよ」

*

ということで、俺とルミアは、シヨープ港に来ていた。

「ボスロットさ〜ん」

「なんだ?」

少し上上がったボートの下からボスロットさんが出てくる。

「フライヤーユニットを貸してください。後使用時間も長くしてください」

「注目の多いガキだな、まあ使用時間に関してはわしが独自に改良を加えたから大丈夫じゃ」

「ちなみに、使用時間は?」

「三十分かな」

「上出来ですよ」

「ただ、少し重くなってる」

「……MCタンクむき出しですか」

「仕方ないだろ、このフライヤーユニットはプロトタイプなんだから」

「戦闘でMCタンクに被弾したらヤバイな、このフライヤー……」

「あと相変わらず専用カタパルトからしか飛ばないぞ」

「……相変わらず欠点だらけですね。でも、借りますね」

「後ろにいる鳥獣族のお嬢ちゃんとデートか?」

「え? いや、ただ送るだけで……」

「デ、デート!?!」

なぜか過剰反応するルミア。

「そ、そんな、宏樹様といきなりデートだなんて……キヤ」

「ガキのくせして、色男だな、コノコノ」

「……」

……めんどくせえ。

「とにかく、フライヤーユニットとカタパルトを借りますね」

「おう、頑張ってくださいよ」

なにを頑張るんだよ、つたく……。。

フライヤーユニットを背中に背負い、ついだったので試作ライフルも持って船のカタパルトに足を固定する。

真ん中から出てきた棒に左手で持ち、姿勢を低くする。

「行きます」

カタパルトから射出され、水面ギリギリのところまで主翼を展開し、高度を上げる。

「ルミア、行くぞ」

「あ、待ってくださいよ!」

*

一定の高度、一定のスピードでルミアと並走飛行する。

「でも、まさか宏樹様と一緒に空を飛べるなんて……」

「まあ、俺はヒューマン族だしな……ボスロットさんも凄いのを発明するもんだ」

「この装置がちゃんと完成したら、宏樹様とずっとお空を飛べるんですね？」

「ずっとは流石に……でも、一緒に飛べるよな」
「なんだか楽しみです」

横目でルミアをチラツとみてる。

風でなびく長くてきれいなオレンジ色の髪。

口元にあるほんの少しとがったくちばし。

背中からはえたきれいな翼。

少し膨らんだ胸……。

俺がパツと見た感じ、とてもかわいい子だと思える。

「？　どうかしましたか？」

「ん？　いや別に」

「そうですか？　ならいいですけど……あれ？」

「どうかしたのか？」

「アレって、スピアビードル族じゃないですか？」

ルミアが指差す方向、そこは確かに虫だった。

数的には五匹、偵察かなにかだろうか？

「ルミア、高度を海面すれすれまで下げられるか？」

「はい、できますけど……」

「じゃあ下げろぞ、敵にみつからないようにな」

「はい」

海面スレスレまで高度を下げる。
下を見れば目と鼻の先に海面があった。

「ルミアは離れているんだぞ」
「はい」

加速して虫に近づく。

「？」

「ドライヴ」
「クロスフォーム」

試作ライフルを構え、メガネのレンズにスコープが形成される。

「いつけえ！」

トリガーを引き、ビームを放つ。

直撃した虫は一瞬で溶けて消えてしまった。

そのまま二回射撃するが、避けられてしまう。

「ちっ、一体だけか」

四匹の虫が散開して俺を包囲する。

「……」

なにを呟いたのかわからんが、口がわずかに動く。
すると、二匹の虫が突撃してくる。

「当たれ」

トリガーを引き、発射する。

それを避ける虫だが、粒子が強力故に溶けて消える。

「……」

「ちい」

もう一体を左で抜いたショートブレイドで受け止める。

その間に残りの二体の虫がルミアに向かう。

「くっ、させるか！」

俺は素早く受け止めた攻撃を弾き、胴体を切り裂く。

そのまま二体の虫を追いかける。

試作ライフルを構えるが……。

「これじゃあ強力過ぎてルミアに当たるな」

試作ライフルを腰にマウントし、ハンドガンを構える。

「スナイプショット！」

虫の頭を撃ち抜く。

だがもう一体の虫がルミアに剣を振り上げていた。

「ルミアあ！」

「！ 召喚、サンダーバード！」

ルミアがかざした手から魔法陣が描かれ、電気をまとった鷲^{わし}が現

れる。

「きししゃやあああ！」

そして、虫に雷を落雷させる鷲。

虫は燃えカスのごとく、黒焦げになって海面に落ちた。

「……………」

「あ……………えっと、その、私……………笑わないですか？」

「……………笑わないけど、なにこれ？」

「この子はサンダーバードです」

「見たまんまだな」

「それで、私、幻獣使いなんです。村一番の」

「その歳で村一番の幻獣使いねえ……………」

なんと信じられん話だが、目の前にはこの世のものとは思えない鷲がいるしな……………。

「でも、その力があれば、人質にされることなかったんじゃないのか？」

「それは……………抵抗すれば村の人を殺すって脅されていたから」

「そう……………とりあえず、その鷲さんをしまってくださいませんか？」

「あ、はい」

なんか凄い威圧感を放ってたし、あのサンダーバード……………。

「とりあえず、ここに留まるのは得策ではないから先を急ぐか」
「はい」

マーガレット島にはすぐに到着した。

低空飛行で村に向かう。

「あ、見えてきました。バラッシュっていつ名前の村なんですよ」「へえ……」

やはり、被害は出ていたようで、がれきに近い状態だった。

「宏樹様、送っていただき、ありがとうございます」

俺の前に出て、深々とお辞儀するルミア。

「いいよ、そうかしこまらなくても。それに、宏樹様って言わないでくれよ」

「え？」

「友達同士なのに様付けはどうかと思うぞ？」

「そうですか？ ん〜じゃあ、宏樹……でいい？」

「ああ、いいよ。そっちの方が落ち着く」

「えへっ、じゃあね、宏樹っ」

「ああ、またな」

手を振りながら村に降りていくルミアに手を小さく上げ、俺は屋敷に戻った。

*

その日の夕方。

俺は外に配置されているベンチに腰を下ろす。

「……兄さん？」

後ろから声をかけられる。

「ん、まなか」

「なにしてるんですか？」

「いや、なんとなく」

「隣、いいですか？」

「ああ、いいよ」

俺の右隣に腰を下ろすまな。

「兄さんは、この世界のこと、どう思ってますか？」

「どう……と言うと？」

「この世界はどうなってるんだろ、と思って。兄さんの意見も聞いてみたいので」

「ん〜そうだな」

人間以外に異なる種族が住み、争っている。

「俺は……かなり混沌な世界だと思う」

「そう……」

「異なる種族とはいえ、争っていてもダメだと思う」

「うん。兄さんの考える世界になるといいね」

「いいねじゃダメだ。俺達が行動しなければならぬ……」

なにもしなければ結果も変化しない。

なにかを成し遂げるには、誰かが行動を起こさなくてはならない。

「そうだね。私も協力するよ」

「ああ、助かる。それでなんだが、研究所の調査に麻奈美をサブリーダーに起用したい」

「私が？」

「ああ、やってくれないか？」

「うん、いいよ」

「頼むな、期待してるからな」

「はい！」

*

「皆いるか？」

食堂に全員を集合させる。

「今から研究所の調査メンバーを発表する。まず宏樹隊、ムヴィ、勇樹、鹿波、涼風、里流葉、風斗。次に麻奈美隊、進也、ミヴィ、モヴィ、光、ポーラ。あと、キューノには道案内を頼んで、キューノは麻奈美隊に入る。で、なんでも現地に先行して向かってる味方がいるみたいなんで、その場でどちらかの隊に組み込む形になる。呼ばれなかった者はここで待機し、ここの防衛を頼む。以上、各自準備に取り掛かれ」

「了解」

「私は留守番なの？」

準備に取り掛かる中、メヴィが少し不満そうに呟く。

「メヴィは腕の傷は完全じゃないだろ？ それにメヴィには期待してるからこそ、ここの防衛を頼んでるんだ」

「そうなの？」

「ああ、ここは俺達の家同然なんだし、潰されるわけにはいかないだろ？」

「そうだね、うん。私頑張る！」

「頼むよ」

メヴィの肩をポンポンと叩き、車庫に向かった。

「亮太、バスの整備は？」

「あとは最終調整だけだよ」

「そっか。なにか手伝おうか？」

「いや、宏樹は今のうちに少しでも身体を休めておけ」

「……そっだな、じゃあそっさせてもらおうよ」

ベンチに座り、軽い休憩をする。

そして、十分後に俺達調査隊は屋敷を出発した。

【第十七章・しばしの休息終わり】

第十八章 変異種

早朝、シャトルバスを自動操縦にして一人、流れゆく景色を眺めていた。

他のメンバーは仮眠をとっており、バス内はとても静かだった。隣を見ると、りるとまながお互いの身体に寄り添いながら眠っていた。

「ひろ、寝ないの？」

後ろからかなが声をかけてくる。

「あ、起こしちゃったかな？」

「ううん、そんなことないけど。少しは寝たら？」

「自動操縦と言っても誰か一人見てないと危ないだろ？」

「そうだけど、ひろが寝不足で倒れたりしたら部隊の統率は誰がするのよ？」

「そうだな……じゃあ少しだけ寝ようかな」

「そうしなよ、その間は私が見といてあげるから」

「ああ……」

目をゆっくりと閉じ、直後に眠気に襲われた。

*

少しして目が覚めると、バス内は俺しかいなかった。

「あれ、皆は……？」

そして前を見ると、皆が集まってなにかをしていた。

「なにしてるの？」

「あ、起きた？ ついたよ」

涼風がそう答えた。

「ここか……」

目の前にそびえ立つ大きな建物。

外壁は比較的きれいだ、窓から見た内部はかなり荒れていた。

「先に向かっている人って誰なの？」

ポーラがそう聞いてくる。

「簡単に言えば、技術部門の人だよ」

「え？」

「あ、来た来た」

俺の声に皆が反応する。

一台の荷台つきバイクがこちらに向かってくる。

そして俺達の前で止まり、バイクと荷台から二人の人間が降りてくる。

一人がヘルメットを外し、顔をあらわにさせる。

長いオレンジ色の髪を後ろにまとめ、瞳の奥にうつすらと見える人間とは思えないレンズを持った少女。

荷台から降りた少女が俺の前にやってきて止まる。

「申し訳ありません、遅れてしまいました。それで、藤山宏樹さん

「ですね？」

「ああ、じゃあ君が現地合流する……」

「はい、早河茉莉佳です」

「俺と年下とは聞いていたけど、見た目幼いね」

「あ、あはは、よく言われます」

苦笑しながら三つ編み少女、早河が答える。

「まり、どうしてここに？」

勇樹が驚きを隠しきれずにそう言った。

「ボクにもさっぱり……でも、キューノさんと会って、この世界のこと、宏樹さんが作ろうとする世界を聞いて、ボクでも力になれるならと思ってここにきたの」

「そうか……無茶だけはするなよ」

「はい！」

「……さて、じゃあさっそくだけど早河と……なんて言うの？」

「コヴィイです」

「そう、そのコヴィイの二人を俺の隊に入れる」

俺達は早河とコヴィイを入れ、施設の中に侵入した。

「……広いな」

エントランスは俺達全員が入っても余裕なほどの広さだった。しかし、床や天井などに謎のシミが飛び散っていた。

「なにかあったのかな……？」

光がそう眩く。

「……これ、血ですね」

麻奈美が地面にかがんでシミを観察してそう言った。

「血……なにかあったのは確かだろうな」

「兄さん、ここからは部隊を二手に分けましょうか」

「そうだな、麻奈美の隊は左の廊下から、俺の隊は右から調査する」

麻奈美達と別れ、少し広めの廊下を進んでいく。

「静かですね……」

風斗が少し自信なさげに眩く。

「大丈夫だよ、私達にはひっきーという頼もしい味方がいるから」

「涼風、あまり買い被りはよしてほしいな」

「買い被ってなんかないよ、私はひっきーの実力を知ってるし……
それに、ひっきーに頼りつきりとかじゃないよ？」

涼風が突然俺に近づき、顔を近づける。

「ひっきーは頑張りすぎだよ……辛かったら私に頼ってもいいんだ
よっ」

「……ああ、そうだな。じゃあ信頼して命令するぞ、涼風が一人で
前線で戦うこと」

「うん、任せ……ってええ!？」

「いや、俺は後ろで応援してるからさ」

「いやいや、私を最前列に出すのはどうかと思うよ!？」

「まあ冗談はさておき……期待してるから、そういう時になったら」
「あ、うん、任せてよ」

少し照れる涼風に笑みを見せながら一つの部屋に入ってみる。

「……誰かいるのか？」

回転イスに腰掛ける人影があった。

「ちょっと見てくる」

「気をつけてね……」

「ああ」

かなの言葉に頷きながら後ろ姿を見せる人影の前にやってくる。

「……！？」

そこにいたのは白骨化した人間だった。

「い、いつ頃のなんだ……？」

「……少しほこりが積もってるから最近じゃないでしょうか？」

早河が机に積もったほこりを指で触りながらそう言った。

しかし、最近だったら、白骨化するんだろうか？

「ん？ これって……」

すると、早河がなにかの資料を手に取り、ペラペラとめくっていき。

「……この資料、白骨化を急速に進める薬の資料です」
「え？」

「薬品から見て予想なんです……注射も地面に転がってますし」
「ホントだ」

「でも、どうしてその薬を使う必要があったのかな？」

りるの疑問に答える者はいなかった。

俺はなにげなく机の引き出しを開けてみると、ファイルを見つけた。

「『DNA』……？」

「遺伝子のアレっすか？」

「そうだろうけど……」

風斗と二人でファイルの中身を見てみる。

「『ヒューマンハーフ族のDNAを改造し、誕生した新しい種族……』

読めない」

「字が霞んでますね」

「ヒューマンハーフ族の亜種ってことか？」

「人間と魔物のハーフ、というわけでもなさそうですね」

二人で悩むが、答えは出なかった。

*

別の部屋にやってきた俺達。

この部屋だけなんとなく雰囲気違った。

「電気つく？」

「ちょっと待って……これかな」

かなが暗闇の中で壁を伝って電気をつける。

「……なんだこれ」

円柱内に充たされた水の中に魔物らしきものが保管されていた。

「……魔物、には少し形が違うような」

ムヴィが観察しながらそう呟く。

豚のような鼻、上向きの牙、ゴブリン以上の強靱な肉体。

「……早河、なにかわかるか？」

「いえ、まったくです。こんなの、初めて見ました」

「ふむ……」

俺にも理解しがたい状況だった。

この研究所は対魔物用の研究所と聞いていた。

専用なら魔物の解剖模型とかあっても頷けるが、この部屋には魔物とは少し異なる物が眠っていた。

「……なんか雲行きが怪しくなってきたな」

「お兄ちゃん……」

りるが俺の腕にしがみつく。

かすかに震えてるようにも思えた。

「大丈夫、俺がついてるから」

「うん……」

「先を急ごうか」

俺達は部屋を後にして先に進んだ。

*

あれから他の部屋に入って調査を試みたが、死体が数体転がってるだけで、これといったものはなかった。

「ここが最後か」

そして、俺達は一際大きな部屋に来ていた。

「広っ……ん？」

部屋の広さに驚いていると、視界になにかが入った。

「これは……」

フェアリーボール……ではないな。

球体のなにかを手で転がしながら周りを見てみる。

そして、俺は一つのファイルを手取る。

「『ネクストドライブ』……なんだそれ？ スモールフェアリーなにかわかるか？」

「いや、俺にもさっぱり……初めて聞いた」

「ネクスト……次？」

そして、俺の足元を見ると、箱に収まった数個のボール。

俺はその箱に手に持ったボールとファイルを突っ込み、箱を持ち上げる。

「これを持って帰るぞ。他に気になるものとかあるか？」
「ないですね。使い物になる物はありません」

早河の発言に小さく頷く。

「ならばはまな達と合流するだけだな」
「？」

すると、りるが突然辺りを見渡し始める。

「どうかしたのか？」

「なんか、さっき廊下から音がしたような……」

「音？ どっちから？」

「りる達が来た方向から」

「え？ 誰かいるのか？」

「臨戦態勢になった方がいいよな？」

「ああ、勇樹の言う通りだ、警戒して損はないぞ」

俺達はドライブフォームし、それぞれ武器を手に持つ。

俺と風斗で入口近くの壁に背中を預け、息を潜める。

「俺がドアを開けるんで、先輩は銃を構えていてください」
「わかった」

風斗が慎重にドアノブに手をかけ、一気に開ける。
すかさず俺がドアの前に立ち、ハンドガンを構える。

「!?!」

刹那、コンクリの塊が俺に目掛けて飛んでくる。慌ててシールドで防ぐが、質量が違い過ぎ、大きく吹き飛ばされる。

「ぐっ!」

「ひろ!?!」

「俺に構うな、来るぞ!」

「う、うん!」

部屋内にゾロゾロと入ってくる人影。

「こ、こいつ等って、さっきの!」

「生きてたのか!?!」

風斗と勇樹が動揺する。

「皆様、散開して敵を包囲します!」

しかし、コヴィイが冷静に戦線指揮を執っていた。

「コヴィイの言う通りだ、室内で固まっていたら全滅も早い、囲んで殲滅するぞ!」

「!?!」

「いけ、アクア!」

りるが敵に水魔法で攻撃する。

「お兄ちゃん!」

「任せろ！」

俺は敵に突っ込み、右足に電気をまとう。

「イナズマキック！」

しかし、敵はキリモミジャンプで軽々と回避した。

「なんて運動神経だ」

「……ドライブ」

「え！？」

すると、魔物みたいな敵の足元に魔法陣が描かれ、あっという間に武具に身を包んでいた。

「武装化したのか！？」

「そんな、ドライブは人間にしかできないんじゃない……」

「ソニックブーム」

敵は剣を振って音速波を出す。

「くっ、マジックサーベル！」

銃剣から魔法の剣を作り、攻撃を受け止める。

「うっ、なんてパワーだ……ええい！」

下に受け流すのが精いっぱいだった。

その流した音速波は、床を大きくえぐるほどだった。

「エクスプロ ジョン」

「!?!」

「ビームフィールド!!」

りるがバリアを展開し、ビームを受け止める。

「ぐうう、防ぎきれない……」

俺はりるの手を握り、魔力をりるに送る。

すると、バリアの強度が上がリ、ビームを相殺した。

あいつら、銃も使えるのかよ。

「兄さん! 無事ですか!?!」

すると、別のドアからまな達がやってくる。

「ナイスタイミングだ、一気に離脱するぞ」

箱を担いでまな達が来た通路から脱出する。

「兄さん、その箱は私が持つので、兄さんはハンドガンで後ろの敵をけん制してください」

「わかった、頼む。ホバー」

魔法を唱え、後ろを向きながらハンドガンを二丁を手に持つ。

「スプリッドショット!!」

二つの銃口から散弾が飛び出す。

「チャフフィールド」

しかし、敵の一人がバリアを展開し攻撃をすべて防がれる。

「こ、こいつ……」

斧を持った敵が天井スレスレまで飛び上がり、俺に振り下ろす。
俺は地面に魔法陣を描き、飛び上がって距離をとる。

「兄さん！」

「どうした!？」

「……挟まりました」

「えっ……」

振り返ると、俺達が逃げていた方向に、魔物が立ち塞がっていた。
その中心には赤い制服を着た男が一人……。
その男を見てりるの身体が震えていた。

「まさか、自分から死にくるとはね……浅はかにもほどがあるぞ
?」

「……お前」

「誰だ? みたいな顔だね」

「知ってるさ……お前は……」

「佐々部康太郎……覚えときな」

言おうとしたのに……。

そして、佐々部はりるに気づいたのか、まなの後ろに隠れるりる
に近づく。

「りるちゃんになにする気!？」

「お前に用はない!」

「!？」

佐々部のパンチがまなの腹部に直撃し、豪快に吹き飛ばされる。

「まな!？」

「里流葉……」

「な、なんですか……」

「お前! りるに変なことするんじゃない……」

佐々部に飛びつこうとしたが、ゴブリンが道を塞ぐ。

「おっと、無駄な抵抗はするなよ、すれば里流葉がどうなるか……」

「くっ、卑怯な……」

「周りの雑魚も、抵抗するなよ」

「誰が雑魚なんだよ……」

勇樹が小さく愚痴る。

「雑魚じゃないなら、こんな女なんか捨てて俺に刃向えるだろ？」

「なんだと……？」

「腰抜けだから雑魚って呼ばれるんだ……その意味もわからんなんで、バカだな、それも特大のな!」

「……それは違うな、雑魚はむしろお前だ」

「なに……それはどういう意味だ？」

俺は魔物を強引に抜かして佐々部の前が出る。

「人質をとって俺達を無力化して、自分の有利になるようにことを運ぶ……それって、腰抜けでバカで、雑魚がやることだぜ？」

「お前、口のきき方には気をつけたらどうだ？」

「お前が言ったんだろ、人質に取られた女を捨てられなければ雑魚だと……」

「宏樹、お前、里流葉を……」

勇樹の発言を遮りながら、ショートブレイドを抜く。

「ほら、剣を抜いたぜ、どうするんだよ？」

「お前、頭おかしくなったのか？ そうか、そんなにコイツを殺してほしいみたいだな！」

「!？」

りるの首元にロングブレイドを突きつける佐々部。

「ほら、今なら助かるぞ、今すぐその剣を捨てろ」

「……やだね」

「なに？」

「俺は雑魚じゃないからな！」

一気に踏み込み、佐々部の懐に入る。

「なっ！」

そして、一瞬でロングブレイドを粉々に砕く。

砕けた刃は結晶のようにキラキラと輝く。

「言っとくが、俺をなめるんじゃないぞ？」

「なっ、お前……」

佐々部を蹴り飛ばし、りるをこちらに引き寄せる。

「本当の強者は、人質をちゃんと助けるものだぜ」

「お兄ちゃん……」

「貴様……おい、こいつらを皆殺しにしろ！」

魔物と背後の敵が身構える。

「くっ……」

「つう……え？」

麻奈美の目の前に散乱した玉の一つが大きく光り出す。

そして、俺の前に飛んできて、勢いよく碎け散る。

「えっ……」

その碎けた破片は俺の身体に入っていく。

痛みは……なかった。

そして、頭の中から声がささやく。

『ネクストドライブ、ダウンロード完了です』と……。

ネクストドライブって、さっきファイルで見たあれだろ……？

「……ドライブ！」

「クロスフォーム！」

足元に描かれた魔法陣が、電気をおびながら高速回転し、上に上がっていく。

そして、武装が変わっていたのに気づく。

見たことない銃や盾、剣……。

「な、なにが起こったんだ!？」

佐々部が動揺していた。

「くっ、武装が変わったところで、貴様らの運命は変わらん、やっ
てしまえ！」

俺に向かって飛び上がってくるゴブリン。

俺は瞬時に左腰と背中に装備したショートブレイド？を斬り抜く。

「なっ……」

裂けたゴブリンの身体の一部から驚く表情を見せる佐々部を見つ
ける。

「行くぞ、佐々部！」

「こいつー！」

身構える佐々部に、俺は一気に踏み込む。

「調子に乗るなあ！」

佐々部の槍を右ひざについて回避する。

そのまま俺は逆手に持ったショートブレイドで槍を斬る。

「なっ、なんて切れ味なんだ……」

「いっけえー！」

右のブレイドからビームを発生させ、佐々部を斬る。

「！？」

「はっ……調子に乗ったのはお前だ」

俺の目の前に向けられた銃口。

「宏樹！」

「おっと、動くと、撃つぞ」

「くっ……」

美希が唇を噛む。

しかし、俺にしてみればチャンスだ。

俺はすかさずシールドについたビットらしき物の軌道を頭で描く。

「ん？ お前！」

ビットに気づいたのか、佐々部は慌てて引き金を引く。

銃声が響いたかと思うと、俺の目の前では四つのビットが四角形のビームシールドを形成していた。

「なんなんだ、この武器は！？」

「悪いが……そこをどけ！」

「ぐはっ！」

俺の回し蹴りがもろに入ったのか、佐々部は壁に吹き飛ばされる。

「ここを一気に突破する！ まな、大丈夫か？」

「はい、荷物も大丈夫ですし」

「そうか、じゃあ走るぞ」

「はい！」

*

「勇樹、バスにエンジンを！」

「わかってる！」

「残りは乗り込んで迎撃しろ、来るぞ！」

直後、研究所の壁が爆発し、中からゴブリンとビーストウルフ、あのよくわからない敵が出てくる。

「りるはバリアでバスを守ってくれ」

「わかった、チャファイールド」

バリアを形成した直後、数発の実弾が飛んでくる。

「バスはやらせん！」

太もものハンドガンを両手に持ち、てっぺん同士を連結させる。

「スーパーエクスプロ ジョン！」

人一人分の太さのビームを放つ。

あまりの威力に、後ろに押される。

そして、大爆発を起こす。

研究所はその爆発で半壊する。

「まだいるのか……」

空からフライゴブリン、陸からは大量の魔物達。

「勇樹、エンジンは!?!」

「くそっ、こんな時になんでつかないんだ!」

「ちい」

二丁のハンドガンについたボタンを押すと、ソードモードに変形した。

銃口と銃剣の部分からビームの刃が出る。

「はああああ！」

ゴブリンに飛びつき、一刀両断する。

右から来たゴブリンの攻撃をバックステップで避け、すれ違いざまにゴブリンを斬る。

「さあ、来るなら来い！」

飛びかかってきたビーストウルフを蹴り飛ばし、銃にモードを変える。

メガネのロック機能を使って狙いをつける。

トリガーを引き、ビームを発射する。

「!?!」

蹴り飛ばしたビーストウルフとフライゴブリンを同時に撃ち抜く。

「つ、強すぎる……」

俺にびびって、攻撃の手が一瞬緩む。

「死にたいやつだけ来いよ……」

「兄さん、離脱しますよ！」

「ああ……」

バスに向かって走ろうとした直後、佐々部が叫ぶ。

「あいつらを生かして帰すな！ 必ず殺せえ！」

「おとなしくしとけばいいものを……」

「藤山！ 俺を怒らせたのがお前の運命を決めたな！」

「俺が生きて、お前が死ぬのか？」

「逆だな、お前は俺の手で殺される……覚悟しろ！」

佐々部の放った銃弾を俺のハンドガンで相殺する。

「悪いが、銃の腕だけは自信あるんで……」

「だったら、これでどうだ！」

佐々部が一気に踏み込んだかと思うと、一瞬で視界から消える。

「どこいった……」

「もらったあああ！」

「なにっ！？ くっ……」

銃剣で防ごうとするが、間に合わず、左肩を斬られる。

「死にな！」

「まだだ！」

シールドの隠しブレイドを出して、突き出す。

佐々部の銃剣が、俺のブレイドが、互いの顔をかすめる。

そのまま空いた右手で銃剣を横に振るが、佐々部の銃剣で防がれる。

「……………」

「イナズマキック！」

「ぐあっ！」

佐々部の横腹に右足が入り、その場に倒れ込む。

「はあ、はあ……………」

「お兄ちゃん、早く！」

「あ、ああ……………」

「逃がすか！」

「くっ！」

左肩を庇いながら得体のしれない敵の攻撃を受け止める。

「先にいけ！」

「でも……………」

「いいから、俺はこいつを片付ける！」

「なめるなよ……………」

「失せろ、雑魚が！」

素早く弾き、二刀セイバーで斬る。

後ろに振り返り、バスを見る。

「間に合えよ、シャイニングウイング！」

光の翼を出し、バスに向かって飛翔する。

「……………なに？」

後ろから車に乗った魔物と、陸上を高速で走るビーストウルフ、空からはフライゴブリンが追いかけてくる。

「しつこいな！」

「皆、ひろを援護するよ！」

「みんな……」

バスに乗った仲間、窓から身を乗り出して飛び道具で応戦してくれてる。

「お兄ちゃん、この手に！」

「りる……」

りるがドアを開けて手を伸ばす。

俺も右手を伸ばすが、フル加速のバスに徐々に離されていく。

「くう……」

頭に突き刺さるような痛みが走る。

……どうやら魔力を使い過ぎたみたいだ。

「けど……がんばれ宏樹！俺はこんなことで諦めたりするかあ！」

自分で自分を奮い立たせ、魔力を翼に注ぎ込む。

そして、離されていた距離が再び縮まる。

「んんー！」

「とどけえー！」

後ろから飛び道具が飛んでくるなか、俺とりるの手はあと数センチ

手となる。

少し指が触れ、気がつけばりるの手が俺の手をがっちりと掴んでいた。

「うんんっ!」

「……っっ」

後ろから飛んできた矢が左肩をかすめる。

「がんばれ、りる!」

「お、重い……」

「……」

飛び道具が飛ぶ中、りるは高速で走るバスから身を乗り出して俺を必死に引つ張ってくれていた。

俺の魔力もそろそろやばい……。

「りる、離しても……」

「やだ! 離さない!」

「りる……」

「お兄ちゃんを見捨てたりなんか、絶対しない!」

口ではそう言っていたが、りるの握力がなくなってきたのはわかっていた。

この手を離したら、地面に叩きつけられるんだろっなあ……。

その後に魔物達に八つ裂きにされて……まあ、それも運命なら……

…。

そんなことを考えていると、突然凄い力で俺をバスの中に入れた。

「え……」

あまりの勢いでりるに覆いかぶさる形になる。
そのりるの後ろにはまながいた……。

「ふう、危なかった……」

「まな、りる……ありがとう」

俺は思わず二人を抱きしめる。

「ちょ、兄さん!?!」

「え……」

「ありがとう……」

「……お取込み中悪いんだが」

勇樹がやや遠慮気味に運転席から声をかける。

「ハグは後にしてもらえるか？ 敵が包囲しつつあるんだが」

「あ、すまん……さて、迎撃に……」

「待って、お兄ちゃん」

「え?」

すると、りるは俺の左肩に手を添え、目を閉じる。

りるの右手が光だし、俺の傷は少しずつ癒えていった。

「……応急処置はしたけど、無理しないでね」

「……ありがとう、りる」

「んう!?!」

「?!?!?」

周りのメンバーが目を見開く中、俺はりるの唇を奪う。

「大丈夫、俺はりるを……皆を守ってみせるさ」
「あ、お兄ちゃん！」

腕の力でバスの上に乗る。

正直バランスを取るので精一杯だし、魔力もあまりない、けど、やるしかない。

銃を構えた瞬間、頭の中からメヴィイの声が聞こえる。

(ひろ、今どこにいる?)

(どこって、今研究所から出て敵に追われてる状態だが……)

(ちょうどよかった、マシンドール用のフライトユニットを秋山が改造してね、そちらに向かってるから)

(は? フライトユニットって、専用のカタパルトがいるんじゃない?)

(それが不要なの、あれはプロトタイプだけど、今送っているのはいずれ量産するやつだから)

(ってことは、完成したのか?)
(ボスロットさんのやつはまだだけど……とりあえずそれでなんとかなる?)

(ああ、なるよ……でも結構距離あるのによく通信できたな)

(皆のフェアリーを使ってるから……)

(そうなんだ……皆にありがとうって言ってくれるか?)

(うん、気を付けてね)

(ああ……)

「宏樹、前からなんかくるぞ?」

「わかってる、勇樹はそのまま直進してくれ」

……あれか。

大きな空に飛んでくる一つの物体、俺はそれを見ながらタイミン

グを見計らう。

足元に魔法陣を描き、ジャンプする体制に入る。

「いっけえ!」

上にハイジャンプし、フライトユニットと高度を一緒にする。

背中を向け、フライトユニットと合体する。

「兄さん、空中ドッキングしちゃった……」

「凄いよ、お兄ちゃん!」

「よし、これなら……」

魔物の軍勢に単身突っ込む。

「人間が、飛んでるだど!?!」

「バスターブレイド!」

銃をセイバーモードにして二つを合体させ、大きなビームセイバーにする。

「あんな武器見たことないぞ!?!」

「俺だつてないさ!」

すれ違いざまにフライゴブリンを斬る。

「次は」

「う、撃ち落とせ!」

得体のしれない敵が重火器で応戦する中、俺は急降下して車に狙いをつける。

「これでもくらえ！」

敵がバズーカを俺に向かって放つ。

俺は突っ込みながらロングシールドとビットのビームシールドを展開する。

直後に爆発が起こり、視界が煙に包まれる。

「やったか？」

「はあっ！」

バスターブレイドで煙を斬りながら突っ込む。

「ひい！」

「ええい！」

車の横を横切りながら、車を水平に斬る。

直後に爆発する。

「くっ、ソニックブーム！」

「マジックショット！」

敵のSAを次々と避けていく。

「な、なんて機動性なんだ……」

「Gが凄いけど、これは凄い、亮太もこんなによく作ったな……」

「目障りだ、エクスプロ ジョン！」

「バカ、そっちに撃ったら……」

「……」

極太ビームをヒラリと避ける。

「なにつ……」

後ろにいた敵の車が爆発する。

「考えて撃てよ！」

「仕方ないだろ！」

「仲間割れか……」

「「!？」」

バスターブレイドで車を一刀両断する。

そのまま分離して銃モードに変える。

「逃げるなら早く逃げな！」

銃を乱射して、ビームの弾幕を張る。

「て、撤退するぞ！」

徐々に減速していく車を見つめ、バスに戻る。

「アンドライブ……」

武装を解き、バスの横を飛ぶ。

「宏樹先輩、凄過ぎですよ！」

「兄さんだからね」

進也とまなの言葉を聞きながら、バスの天井に着陸する。

「……はあ、なんとかなるもんだよな」

しかし、あのSAを使える敵はなんだったんだろうか……。

【第十八章・変異種終わり】

第十九章 スクリングコロソ解放作戦

「これでよしと……」

「ありがとう、ムヴィ」

「いえいえ、でも、無理しちゃダメですよ？」

「ああ、気を付ける」

左腕を固定して、ムヴィと一緒に医務室から出る。

「なんだか似合いませんね」

「コレか？」

そう言いながら固定した左腕を少し動かす。

痛みは少しあったけど……。

あれからすぐに館に帰ってきたわけだが、謎が増えただけだった。

407

「茉莉佳ちゃんの解析はどうなってるんだ？」

「順調、とは聞いてますけど」

「そっか。ちよつと様子でも見てこようかな」

「それは構いませんが、腕の怪我、忘れないでくださいね」

「ああ、わかってるよ」

ムヴィと別れ、地下に研究施設を即席で作った茉莉佳ちゃんに会いに行くことにした。

「ふう……涼しいなあ、地下は」

一階と比べて少し涼しくなっていた。

「あ、宏樹先輩」

俺に気づいた茉莉佳ちゃんが振り返る。

さらさらとした紫髪がなびく。

「腕大丈夫ですか？」

「ん？ ああ、大丈夫だよ。それよりも、どう、解析は？」

「はい、何個かはわかりました」

そう言いながら奥の部屋に向かう茉莉佳ちゃんだが、突然俺の方
に向き直る。

「先輩、ついてきてくださいよ」

「ん、ああ」

茉莉佳ちゃんの後ろをついていくと、ベットと机に散らかった書
類と、研究所から持ち帰ったダンボールがつまれた部屋に入った。

「ここ、茉莉佳ちゃんの部屋？」

「はい」

「部屋なら俺達と同じくらいの広さの部屋ならあつたる？」

「はい、でも、あまり広いのは落ち着かないんです」

「ふうん……そういうえばコヴィイの部屋ってどこなんだ？」

「コヴィイならこの部屋の隣で今は充電中です」

「充電中？」

「はい、テスト機であるAHMS-10シリーズにはソーラーパネ
ルと水力発電などで半永久的に活動できるんですが、量産型である
コヴィイにはそれらは備わっていませんので、充電が必須なんです」

「へ、へえ」

一瞬引くほどよくわからないこと言われたが、要はコヴィイは充電中で、隣の部屋で眠っているのか。

「……そういえば、この世界に来てからマヴィ達は充電してる様子はなかったから、それのおかげなんだな」

「はい。話が逸れましたが、この布きれ、なにかわかりますか？」

すると、俺の目の前に差し出される青い布、長さにマントだろうか？

「いや、マントか？」

「マントはマントですけど、それをつけてみてください」「こっか？」

身体にマントをはおり、ヒモを首元で締める。

「……で？」

「じつとしてくださいね」

「はっ？」

「ドライヴ」

突然茉莉佳ちゃんは武装化して、ショートブレイドで俺を斬る。

「いつ……あれ？」

しかし、俺に傷をつけることなく、マントが刃を防いでいた。

「……防刃？」

「はい、そのマント、防弾、防刃、防魔機能があるんです」

「マジかよ、そりゃ凄い！」

「あ、でも数回受け止めると破れますので、気休め程度に思っ
て下さい」

「そうなんだ……使い捨てマントか……」

「そのマント、意外に複製可能なんで、どんどん使ってください」

「じゃあさっそく着けさせてもらおうよ」

「はい、あともう一つ解析できたのがあります」

「それは？」

茉莉佳ちゃんの左手には、球体の何かを持っていた。

「調べた結果、これは『ドライヴアッパー』と呼ばれる物です」

「『ドライヴアッパー』？」

「はい、簡単に言うと、今ボクは武装化してますよね？」

「ああ、そうだな」

「この装備よりも強力な装備をつけてドライヴすることが可能な
が、この球体なんです」

「へえ、一個しかないから使いどころを考えないとな」

「いえ、それが考える必要もないんです」

「え？」

「コレ、何回も使えるんですよ、なぜか」

「へえ………つてことは戦力の強化は容易にできると？」

「容易ではないんですが、可能ですね」

「なんか条件でもあるのか？」

「ありますよ、幾多の戦場を潜り抜けること、それが条件です」

「経験が必要ということか」

楽しんで強くなれば、苦労なんてしないな。

「あと、先輩が新たに使えるようになった装備のことなんですが…

…」

「ああ、それはどうなったんだ？」

「書類を見ただけでなんとも言えないんですが、どうやら、その力が一番オーバーテクノロジーみたいなんです」

「そうなんだ……どうりで見たことない武器ばっかだったし」

「はい、ハンドガンみたいな銃、ありましたよね？」

「あのセイバーになったり合体して大きな剣になったりできるやつだよ」

「はい、その武器、『ヴァリアブルガン』と言いまして、最新型の小型MCを内蔵し、武装変更することなく臨機応変に対応できる武器なんです。両剣モードや斧モード、大剣モードやロングライフルモードもあります」

「そんなに機能あって、ハンドガンと同じ大きさって、なかなかオーバーテクノロジーだな」

「そうですね。他にもショートブレイドにビーム発生装置を取り付けた『ショートブレイド？』、大型のシールドにブレイドと二連装のビーム発生装置を内蔵し、鉄扇も収容できる『ロングシールド』、シールドの外側に取り付けた、可変して攻撃と防御を可能にする『ヴァリアブルビット』と……どの武器も今の技術力では不可能とされている兵器ばかりです」

「なるほどね……」

「ちなみになんですが、複製しろと仰られても、不可能ですから『流石に言わないけど……どうして俺にこの力が……』」

「多分なんですけど、ボールに入っていたフェアリーが、先輩を選んだんだと思います。先輩の想いの強さが、妖精さんが応えてくれたんですよ、きつと」

優しく笑みを見せながらそう言う茉莉佳ちゃんに、俺もそうなんだろうなあと思えてくる。

「てか、今日帰ってきたところなのに、よくそんなに調べられたね」

「はい、結構急ピッチで調べましたので」

「そんな無理しなくてもいいのに」

「いえ、近いうちに大きく動くと聞きましたので、ボクができることを全力でするまでです」

「……そっか、それは嬉しいな、でも、身体を壊してしまっっては元も子もないからな、ほどほどにね」

「はい！」

そう言い残して地下を後にする。

地下には娯楽施設も併設されてたし、息抜きがてらに来てみるのも悪くないかもしれないな……。

*

暇だったのでニーナさんが趣味でやっている庭園にやってくる。

「それにしても、ホントよく手入れされて……ん？」

不意に花畑の隙間からルチアちゃんの頭が見えたような気がしたんだが……。

「……ルチアちゃん？」

「あ、ちよ、宏樹お兄さん、ちよっとしやがんでください！」

「え、え？」

ルチアちゃんに勢いよく右手を引っ張られたので慌てて膝をつく。

「隠れてるの？」

「うん、鹿波お姉さんが鬼なの」

かなが鬼？

かなが怒っても鬼っていうほど怖いわけじゃ……あ。

「もしかして、かくれんぼしてるの？」

「うん、だから見つかったら大変なの」

「なるほどね……」

納得がいった俺はゆっくりと立ち上がる。

「え、お兄さん？ 見つかったちゃうよ」

「大丈夫、俺はかくれんぼしてないし、ルチアちゃんがここに隠れていることも言わないよ」

「ホント？」

「うん、約束する。もしやぶったらルチアちゃんの言うことなんでも聞いてあげるよ」

「約束だよ？」

「わかってるよ」

そう言いながらルチアちゃんが隠れてる場所から離れていく。

……平和なもんだな。

子供の笑顔って、ホント癒されると思う。

「あ、ひろ」

「やあかな、なにしてるんだ？」

なにこともなかったように接する。

「ちょっとラットとルチアとりるちゃんとかかくれんぼしてるの」

「りるもかくれんぼしてるのか？」

「うん」

まあ、普通に喜んでやってそう……そう思える。

「……ん？」

やや先にある茂みに水色のアホ毛らしきものが見える。

……多分、てか絶対りるだな。

「それにしても、良い天気だね」

「ああ、そうだな……」

かなの言葉に頷きつつ、空を見上げる。

すると、比較的近くにある木の上にラットが口到人差し指をつけていた。

あんなところに隠れてるのか……。

「ひろも参加する？」

「え、いや、いや」

「そう、残念」

「腕が治った時に本気でいってあげるから」

「ひろの本気はいいです」

「なんだよ……まあいいや、じゃな、頑張って見つけるよ」

「うん」

手を振りながらかなと別れる。

*

「宏樹」

「ん？」

俺の名前を呼ばれたような気がしたけど、辺りには人が見当たらない。

「ひるる〜き〜」

「上？ ってうわっ!？」

見上げた途端、ルミアが俺に急降下して俺に抱きついてくる。

「怪我したって聞いて急いで飛んできたんだよ!？」

「そ、そうなんだ……でもその怪我した俺に上から飛びついてくるのはどうかと思っけど?」

「あ、ごめん」

そう言いながら俺から離れ、手を差し出してくれる。

俺はその手に掴まり、立ち上がる。

「それでまた一人で来たのか？」

「はい、宏樹に嫁ぐためにね」

「そっか……はいい!？」

「えへへ」

今、『とつぐ』とか言わなかったか!？」

「ちょ、上手く聞き取れなかったからさっきの言葉、もう一回言っ
てくれる?」

「なんども言わせないでよ、恥ずかしいよ……」

「いやいや、結構重要なことだから」

「だから、宏樹のお嫁さんになる為にここに来たの」

「……待て、ちょっと落ち着こうか」

ルミアの肩に手を置くが、それを軽くのけられてしまう。

「私、本気だから！ だから……」

「……つい最近友達になつたばかりじゃないか。前にも言ったように、急展開すぎるからね」

「でも、ゆっくりなんかしてられないの」

「へ？ 別に急いで付き合うとか結婚とかする必要ないんじゃない？」

「それが必要なの！ 子供を育てるって大変なんだから！」

「うん、待て」

俺は思わず右手で頭を押さえる。

「なに俺と結婚前提で話してるのかな？」

「子供を育てるなら若い内にやるべきだって本に書いてあった」

「まったく聞いちゃいない……」

盛大にため息を漏らし、ルミアに向き合う。

「ルミア、俺のこと好きなのは嬉しいよ？ でも俺もルミアもまだ若いだろ？ 子供作るのはまだ先でも……」

「若いからこそ宏樹の子供が欲しいんです！」

「いや、若いの意味が違うから」

「え？」

「まだガキと言える年頃だろ、俺達は」

「そんなことないですよ」

「じゃあルミアの今の歳はいくつだ？」

「十六歳」

「充分子供だ」

「ええ」

「俺よりも年下で、俺がこの歳でガキだと思ってるのにルミアが大
人っておかしいだろ？」

「あれ、知らないの？ 鳥獣族では十二歳で成人なんだよ？」

「……はい？」

「だから、私、大人」

「……」

俺は無言で空を見上げる。

……断る方法が思いつかねえ。

そこでふと思いついた言葉で攻めてみる。

「……ルミアはシヨタコン？」

「シヨタ……なに？」

「シヨタコン。少女が大好きな男性をロリコンと言うのに対し、少
年が大好きな女性のことをシヨタコンと言うの。要は歪んだ考えで
すね」

「歪んでる？ 私が？」

「だってそうだろ？ 『大人』なルミアが『子供』の俺が大好きな
んだろ？ だったらシヨタコンだね」

「そ、そんな、歪んでなんか……そ、そうだ、私子供！」

「子供同士の結婚は認められません」

「も、もう宏樹のいじわる！」

そう言い残してルミアは空に飛び上がってどこかに行ってしまった。
た。

「はぁ……」

なんかルミアに悪いことしたな……。

「でも流石に『結婚』はな……」

そこでふと頭によぎった二人の少女。

……かなとりるだ。

なんでこの二人が頭に上がったのかはわからない。

「……考えても仕方ないか」

首を横に振って忘れ、館に戻ることにした。

*

「宏樹先輩！」

「え、なに？」

大広間のソファアームでくつろいでいると、突然彩子ちゃんが出てくる。

「情報が入ったんですが、スクリングコロンにて公開処刑が明日の正午に行われるようです」

「公開処刑？ 誰の？」

「それはわからないんですが、なんでも王の言うことを聞かなかった男女数人が市民に見せつけるために行うとか」

「それはなんとも……じゃあ明日に攻めないとならないのか。公開処刑を阻止するためにも」

「じゃあ……」

「ああ、今すぐ皆をここに召集してくれ、軍議を行う」
「わかりました」

そう言うと彩子ちゃんは風のように消えてしまった。

「くノ一って凄いんだな……」

なにかと戦略で使えそうだな、忍者って……。

*

夜、皆の前で事情を話す。

「……と、いうわけだが、予定してた時期よりも早いけど明日の早朝、作戦行動に移る。潜入メンバーと揺動部隊を分けたいと思う」

俺は事前にメモしていた紙を取り出し、それを見る。

「まず揺動部隊だが、涼風をリーダーに、深雪、美春、秀一、光と
りる」

「え、りる？」

「ああ、揺動は外でゲリラライブをしてもらおう。りる以外は音楽に
強いと聞いたしね」

「じゃあるが揺動にいる必要が……」

「それがいるんだよ」

「？」

「涼風と一緒にツインボーカル、といったところか」

「え、えええ！？」

「りるの歌唱力は兄の俺が保障する、大丈夫だ」

「りるが大丈夫じゃないよ、歌だつてなに歌うか知らないし」

「それを今から涼風達に教えてもらえ、俺にはさっぱりだから」

「そ、そんな……」

がつくりとうなだれるりるを無視して話を続ける。

「で、絶対ゲリラライブを妨害してくると思うから、それを防衛するのが麻奈美を筆頭に数人が防衛する」

「メンバーは私を選んでもいいんですか、兄さん？」

「ああ、俺が既に選んだメンバー以外ならいいぞ。で、潜入部隊だけど、俺と美希、彩子ちゃん、ポーラ、キューノ、進也の六人で行く」

「残ったメンバーは私の隊に入れていいということですね？」

「ああ、好きにすればいいさ」

「では……防衛部隊は、私と井上先輩、近藤君、ムヴィさん、メヴィさんの五人で行きます」

「よし、各自で集まって個別ミーティング、呼ばれなかった者は亮太のところに集合だ」

「え、なんでです？」

健治が首を傾げながらそう聞いてきた。

「フライヤーユニットの整備と、マントの量産、あとダイバーユニットの整備だ」

「ダイバーユニット？ そんなのあったっけ？」

「あるんだよ、手元にはないけど」

「え、まさか……」

「うん、残ったメンバーで徹夜してダイバーユニットを完成させてくれ」

「ちょ、無茶苦茶ですよ！」

「仕方ないだろ、まさか一般市民を処刑するなんて思ってもみなかったんだし……頼む」

「……はあ、無茶苦茶ですけど、やってやりますか」

「……ありがとう」

俺は健治に感謝の言葉言いつつ、左腕に着けた包帯を外す。

「各自、気を抜かないようにな」

*

「……………」

次の日、潜入部隊はドライヴしてフライヤーユニットと研究所で見つけた設計図を元にして完成された口につけるだけで酸素ボンベの機能を持つダイバーユニットを口に着け、海を突き進んでいた。

（宏樹、この先に地下水路に続く通路があるよ）

（ああ、そのようだな）

フェアリーコミュニケーションを使ってキューノと会話する。

目の前には新たに増設されたのか、壁ができていた。

（壊すしかないか）

ヴァリアブルガン二丁を合体させ、バスターブレイドモードにする。

一振りすると、あっという間に切断できた。

（いくぞ）

フライヤーユニットの推力を使って中に突き進む。

浮上ポイントに差し掛かり、頭だけを水面に浮かべる。

「……………」

「……………」

(番兵が二人……、監視カメラが一つ、その奥の扉に番兵が一人)
(結構嚴重ですね)

隣にいた彩子ちゃんがそう言う。

(そつだな……だが、予定通り行動するぞ)

部隊に合図を送る。

頷いたキューノはスモークを唱える。

「な、なんだ、煙幕か？」

「なにも見えんぞ……………」

「……………」

彩子ちゃんは陸に上がり、番兵二人をビームダガーで瞬殺する。

「なにがあつた……………なものだ!？」

「先輩!」

「ははあ!」

ガンをアックスモードにさせて監視カメラに投げつける。
そのまま残りの番兵の目の前に降り立つ。

「き、貴様……………敵しゅ……………」

「呼ばせるか」

番兵の腹部をショートブレイド?で斬る。

「……先を急ぐぞ」

俺達は地上に続く階段を駆け上る。

そして、階段を上りきると、視界いっぱい広がる太陽の光に思わず目を細めてしまう。

「」

町の外でライブをしてるはずなのにりると涼風の歌声が響く。

「……上手くいつてるようですね」

進也に頷きつつ大通りを見る。

大量の兵士が外に向かって駆け抜けていく。

「行くぞ」

身を潜めて町の中央を進む。

……それにしても、りる達のライブ、結構耳に残るよな。

相手兵士に気づかれないように目的地の公開処刑会場につく。

会場はりる達のゲリラライブで焦りを見せていた。

「ええい、忌々しい歌だ、早くなんとかしろ！」

「し、しかし、思いのほか抵抗が激しく……」

「ふん」

「ぐっ！」

「「「!?!?」「」」

王らしき貴族が腰につけた剣で兵士の腹部を突き刺す。

「わしに口答えする暇があるなら貴様がなんとかしろ」
「ぎよ、御意……」

剣を抜かれた腹部から大量の血が流れる。
それを押さえようとする兵士だが、血が止まることはなかった。

「……あんなの、人がすることじゃないぞ」
「どうする、宏樹？」

美希の問いかけに少し考える。
これを好機と見るか、まだ様子を見るか。
辺りを見渡し、処刑される人物を探す。

「……いた、行くぞ！」
「……おう！」

物陰から飛び出し、奇襲する。

「な、なんだ!?!」
「ダガービット!」

美希のダガーが独特な軌道を描いて兵士の戦闘力を奪っていく。

「そこを、どけえ!」

兵士二人の間を通り過ぎ、その瞬間に兵士の武器を破壊する。

「なっ、速い……」
「な、なにをしておる、こいつらをなんとかしろ!」

俺の前に立ち塞がる重武装の兵士が三人。

「くっ……」

俺は兵士の目の前で急停止し、身体を横に回転させながら背後に回る。

あまりのGに血が逆流する感覚を持ちつつ、振り返った兵士の武器を破壊して無力化する。

「ええい、貴様、何者かは知らんが、こいつらがどうなってもいいのか？」

王貴族が人質に指差しながらそう言うが、俺は気にせず王に突撃する。

「貴様を倒せばいい話だ！」

「くっ、正気か……」

「くらえ……なに!？」

王に銃口を向けた瞬間、殺気を感じてその場から飛び上がって離れる。

直後、銃弾と矢が地面に突き刺さる。

「なんだ……!？」

青の制服に身を包んだ男女と赤の制服に身を包んだ男女を中心に、フライトユニットを装備して俺に立ち塞がる。

まさか、もうマントとフライトユニットは実装済みなんて……。

「お前……まさか」

「……宏樹か」

メガネをくいつと上げる男……高下昌彦。

「な、なんでお前が……」

「……総員、構え」

「!?!」

俺に向けられる銃口と矢……。

「貴様、もし抵抗でもしてみろ、こいつらの命はないぞ」

そう言つて王は兵士に合図を送る。

「!?!」

人質を取り囲むように並ぶ兵士達が剣先を突きつける。

「くっ……昌彦！ お前ならわかるだろ、お前が仕えてる奴がどんなにやばい奴かを！ お前が嫌う卑怯なことを、コイツは！」

「……だからどうした」

「なに？」

「我が主の命令は絶対、たとえそれが卑怯だったとしても、自分の与えられた仕事は自分で果たす」

そう言つと昌彦は静かにロングブレイドを抜き、俺に構える。

「……覚悟しろ」

「くっ!」

俺に向かってくる昌彦。

鈍く光る剣先を俺に向けて突っ込んでくる。

どうする、抵抗したら人質が……。

しかし、俺の考えとは裏腹に、身体はとっさに昌彦の剣を防いでいた。

「し、しまった！」

「抵抗したな、殺せ！」

「や、止めるおお！」

【第十九章・スクリングコロ解放作戦終わり】

第二十章 歌の導き 前編

スクリングコロソ近隣の草原に絶対見ることのないスピーカーなどが設置されていた。

「それにしても、どこから持ってきたんですか？ 特にこのおっきなスピーカーとか」

「ボスロット爺さんと亮太に作ってもらったの、徹夜で」

「そ、そうなんだ……」

涼風先輩の言葉に半分顔が引きつる。

「このフライトユニットだって徹夜で作られてるし……結構無理させたんじゃないですか？」

「まあ仕方ないじゃない、急だったんだし……りるちゃんも結構きついと思うよ、数時間練習しただけだし……ひっきーでも流石に歌をなめてるね……」

「そう、ですね……」

そう言いながらりるちゃんを見る。

「……」

下に俯き、マイクを両手でギュツと握っていた。
私はりるちゃんに近づき肩に手を置く。

「まなちゃん……？」

「肩に力が入ってるよ」

「う、うん……」

「大丈夫だよ、兄さんが直々に指名してくれたんでしょ？ 歌が得意だからって」

「そうだけど……自信ないよ、音程だって取れてないところあるのに」

「……できるよ、りるちゃんなら」

「えっ？」

私は後ろからりるちゃんを抱きしめる。

「私が保障する、りるちゃんの歌声が、作戦を成功へ導くから……」
「……うん」

りるちゃんはゆっくりと深呼吸をし始める。

「りるちゃん、作戦開始時間だ、始めるよ」

「はい、中川先輩……」

ステージに向かうりるちゃんを静かに見つめる。

「じゃあ、行くよ……」

「……ワンツースリーフォー」

深雪先輩がばちでリズムを取る。

軽音楽が同時に鳴り、音楽を奏でる。

皆楽器の使い方が上手く、思わず見とれてしまう。

「……」
「……」
「りるちゃん……」

歌いだしは小さな声だったけど、バンドのメンバーがりるちゃん

を励ます。

「~~~~」

そして、声は大きくなる。

私は静かに武装化して音楽を聞く。

揺動という作戦ではあるけど、作戦を成功させるには必要不可欠。

「各自、警戒態勢に入ってください！」

部隊に指示を出し、周囲を見渡す。

遠目ではあるが、町から兵隊が出てくる。

「よし、鹿波先輩とマヴィさんムヴィさん、攻撃を始めてください」

「了解」

鹿波先輩を中心に右翼にムヴィさん、左翼にマヴィさんが並ぶ。

「クロスフォーメーション！」

鹿波先輩の弓が上空に向けられ、左右の二人は斜めにスナイパーライフルを構え、エネルギー弾を銃口に溜める。

「超弾幕！」

マヴィさんとムヴィさんが発射したエネルギー弾は分裂しながら追い込むように敵兵に突っ込んでいき、鹿波先輩が上空に放った矢は空中で止まり、魔法球に変わる。

その後敵兵の上空で爆発し、無数の矢が降り注ぐ。

地面に着弾した魔法の矢は爆発し、さらに敵兵を戦闘不能に追い

込んでいく。

「……凄いな」

隣にいた武志君がそう呟く。

「これで少しは時間を稼げるかな……」

「甘いよ、麻奈美……」

「え……」

町とは反対の方から兵隊がやってくる。

「なんでこんなところから……」

「戦いとはいつも二手三手考えるものだよ、麻奈美……」

「その声……麻琴先輩!？」

兵隊の隙間からリーダー格らしき女性が出てくる。

その女性は見覚えがあり、私は信じられないでいた。

「なんで、ここに……岡山麻琴先輩が」

「さあ、私もわからない。いつの間にかこの世界にいて、いつの間にか傭兵部隊の隊長になって、いつの間にか麻奈美の敵になってた……」

「傭兵、部隊……?」

「雇われ兵よ、私はその部隊のリーダーで、スクリングコロンの王から直々の命令を受けている。『邪魔者は排除せよ』と……」

「くっ、そんな……」

「『バインドスネーク』隊、攻撃体勢に、入れ。目標、巨大スピーカーおよび、使用者関係者の排除!」

すると、麻琴先輩の後ろにいた兵達が次々と武装化する。

「麻奈美、いくら麻奈美だからって、容赦はしないから……ドライヴ！」

「くっ……」

先輩は十文字槍を右手に持ち、構える。

私も背中のハルバードを手に持つ。

「兄さんが私達の装備をグレードアップしてくれた……その期待には応えてみせる！」

「そっか、宏樹もいるのか、じゃあ今頃宏樹は正規兵に倒されてるかな？」

「なんですって！」

「でも、その前に自分の身を案じた方がいいけどね！」

一気に私に踏む込み、連続突きを繰り出す。

私はそれを避けながら一歩ずつ下がっていく。

「どうした？ 麻奈美って意外に運動苦手？」

「くっ、まだです！」

私は地面を蹴って右ひざを先輩の腹部に当てる。

「ぐっ……やるわね」

「麻琴を援護する、攻撃開始！」

「なに！？」

飛んでくる銃弾をステップで回避し、ハルバード回転させて銃弾を弾く。

「もらった!」

先輩は左手で背中中のミドルブレイドを持ち、それを振り下ろすバックステップで先輩と距離を取るが、それを予想してたのか…。

「いただき」

「!?!」

目の前には鉄扇の刃を出して私の首元にそれを突きつける先輩の姿。

「麻奈美は私の大事な人だからね、最後のチャンスをあげる、私と一緒に行動して」

「え……」

「荒削りだけど、麻奈美には素質あるよ、ここで死ぬような人じゃない」

「……抗っても、私には死しかない?」

「現に麻奈美の首元には刃があるんだよ? 私じゃなかったらとっくの昔に首を斬られてるわよ」

「……」

「そもそもあなた達には勝ち目はないのよ」

「どういう、ことですか?」

「いくらセンスがあっても所詮は素人の戦い方、私達みたいに訓練してるわけではない。宏樹でも、実戦経験が豊富でも積み上げてきたのは素人の戦い方。私達とは違ってが違う」

「でも、だけど、私……うっん、兄さんが目指そうとする世界を手伝う。それがたとえ私の命が尽きる運命だったとしても! ダガービット!」

「なに!？」

持っていたダガーで鉄扇を吹き飛ばし、先輩を蹴り飛ばす。

「くっ、人が下手にできれば……」

「先輩、いくら先輩だろうと、私は兄さんについていく! そう決めたから!」

私の足元に水のベールが出てくる。

「なに、これ……」

「スプラッシュ!」

両手を前に出し、地面のベールから凄い勢いで水が発射される。

「なっ、うわっ!」

水流をもろに受けた先輩は大きく吹き飛ばされる。

「くっ……やるわね」

「麻琴、苦戦してるようだね」

「なに、セルミート・グランブ?」

先輩の背後から突然現れる人間の男。

「あの目障りな女を殺せばいい話だろ?」

「……こいつは私がやる、あんたはあのボーカルをやりな」

「命令口調は気に入くないが、まあ俺もあの歌には飽き飽きしてたところだ」

「行かせない!」

「遅い」
「なっ……」

一瞬で私の背後に回ったセルミート。

「よかったな、いつもの俺ならお前はとっくに死んでる」
「……」

「あの目障りな歌を歌えなくしてやる」

「っ！ 待って……!？」

「よそ見、してるんじゃないわよ」

「先輩……ブリザード！」

両手から吹雪を出し、先輩に攻撃する。

「そんな魔法で……えっ!？」

「よし、さっきの魔法で先輩は水で濡れている。凍って自由は利かなくなる」

「そんなこと……させ……う、動かない、もう凍ったのか!？」

「アイスの上位魔法ですから……すみませんがここにいてもらいますから」

「くっ、くそ……」

私は後ろで既に傭兵部隊と戦闘するりるちゃん達の元に向かった。

「女、そこをどけ!」

「どかない! りるちゃんには触れさせない!」

鹿波先輩は弓に内蔵したビーム発生機からビームセイバーを出し、セルミートに斬りかかる。

「遅いな、そんな攻撃」

しかしセルミートは姿勢を低くして避ける。

「かかった」

「なに……ぐあっ!？」

鹿波先輩の左手が振り上げられ、セルミートは大きく顔をのけぞらせる。

先輩が左手に持っていたのは、左腰に装備していたショートブレイド改。

「な、なんだと……」

セルミートの顔の右側は斬られて血まみれだった。

「貴様あ！俺の顔に傷を……覚悟しろ！オーバーブースト！」

「えっ……」

オーバーブーストしようとしていたセルミートの背後に回り、右手に水の塊を作り出す。

「スプラッシュボール！」

「ぐはっ！」

背中に水の塊は当たり、勢いよく弾ける。

相当の威力だったのか、セルミートは豪快に吹き飛ばされる。

「く、くそっ、邪魔ばかりしやがって……だが、あの女は死んだな」

「え……りるちゃん!？」

私は慌ててりるちゃんの方を見る。
傭兵の一人が歌うりるちゃんに剣を振り上げていた。

「あぶな……えっ」

りるちゃんは歌いながら攻撃を腕から出した炎の剣で受け止める。

「あれって、ファイアブレイド……」

あの技って、杖から出してたような……。
曲は伴奏に入った時、りるちゃん表情は真剣だった。

「邪魔しないで!」

受け止めた剣を弾き、それと同時にその場で一回転し、背中の杖を右手に持つ。

その杖の先からファイアブレイドを出し、敵を斬る。

「」

そして何事もなかったように歌いだした。

そして、遠くから数本の矢がりるちゃんに向かって飛んでくる。

「させるか!」

武志君が高く飛び上がり、ロングブレイドで矢を斬り落とす。
しかし、さらに飛んでくる矢が突破してくる。

「くそっ」

「バリアフィールド！」

美春先輩がキーボードを演奏しながら防御魔法を唱え、矢を防ぐ。

「りるちゃんはひつきーの大事な人だし、この作戦のキー。なにがなんでも守ってみせる！」

ボーカルとギターの演奏の合間にそう意気込む涼風先輩。
その先輩の片手にはクナイが六本。

「踊りな、クナイカーニバル！」

持っていたクナイを上空に投げる。

すると、かなり不規則な動きで傭兵部隊に襲い掛かる。

「な、なんだこいつ!？」

「ぐふっ」

「か、勝てるのかよ……」

傭兵部隊は完全に混乱していた。

「……潮時か、全部隊一時撤退する！」

「なんでだ!？」

「死にたいの？」

「ちっ、おい、その女」

氷から解放された麻琴先輩の号令を聞き、傭兵達は撤退を始める中、セルミートは鹿波先輩に声をかける。

「……なに？」

「お前、名前は？」

「井上、鹿波……」

「その名前、絶対忘れん」

そう言い残し、セルミートも撤退した。

「……はあ、陽動は成功ね」

「次はお兄ちゃんを助けないと」

「そうだね、兄さんを！」

楽器等をそのまま置き、私達はフライトユニットでスクリングコロムへ向かった。

*

スクリングコロムに到着した私達は兄さん達が戦っている場所に到着するが……。

「……」

茫然と空中で立ち尽くす兄さんの後ろ姿。

兄さんの視線の先を見つめると、兵士によって槍で貫かれた数人の男女。

「なんてことを……」

「……」

「くくくっ、ふはははは！」

金持ちが着そうな服をまとった男が高笑いする。

おそらく、スクリングコロンの王様だろう……。

「抵抗するからこうなるのだ……それに、民はわしに抗うことがどれだけ無知なことを見せしめてくれる！」

すると、民衆の塊に向かい、赤ちゃんを連れた女性を引きづりだす。

「や、止めてください、この子だけ……は」

抵抗する女性に問答無用でお腹を突き刺し、地面に転がす。そして、その女性の赤ちゃんを頭から持ち上げる。

「見せしめにちょうどいい、大人の男や女を殺すよりも、無垢なガキを残酷に殺す方が良く記憶に残るそうだ！」

「やめろ……それ以上は」

兄さんの制止もむなしく、赤ちゃんは王様の絞殺で息絶えた。そのまま地面に叩きつけ、頭部に右足を上げる。

「止めろおー！」

「くっ」

兄さんが叫ぶと同時に私や他の人達は思わずそこから目を逸らす。聞きたくない音が辺りに響き、視線を戻すと、原型を留めていない赤ちゃんが寝ていた。

「こうなるんだよ、はははは！」

「き、貴様……人間のすることかよー！」

「わしを人間なんかと一緒にするでない」

「なに……」

「わしは貴様等クズの上位種、『ニューヒューマン』だからな！」

「そんな言葉、聞いたことないぞ！ デタラメを抜かすな！」

「なら証拠を見せてやろう、圧倒的な力に泣き叫ぶがいい！ はあ

……」

すると、王様の周囲に赤いオーラが漂い、それが王様の中に入っていく。

「ドライブ……ふふふ」

衝撃波が発生し、私達は吹き飛ばされまいと踏ん張る。

「なんだと……」

兄さんの声に反応して前を見る。

王様の周囲に浮かぶ大量の武器。

「怯える、泣き叫べ、さすれば、少しの痛みで楽にしてやる」

「こいつ、なに者なんだ……」

「さあ、殺れ、親衛隊共！」

「御意」

すると、敵の兵士達は次々と武器を持って構えだす。

「先に言っておくが、抵抗すれば、民は皆殺しだ」

「貴様の血の色な何色なんだよ……許さない、絶対！」

兄さんが銃を構える。

王様は兵士に合図を送り、兵士達は民衆に向かって歩き出す。

「させるか！」

「やらせないさ」

「なっ、くそっ」

兄さんの周りに大量の武器が回り出す。

「これじゃあ迂闊に動けない……皆、民間人を守るんだ！」

「……すう、はあ……」

隣にいたりるちゃんは突然深呼吸を始めたかと思うと、両手を胸の所に持っていく。

そして、ゆっくりとした口調で歌い始める。

「りる、ちゃん？」

その歌声を聴き、兵士達の動きが止まる。

透き通った歌声、皆をりるちゃん一人に釘づけにさせた。

「この歌って、私の歌じゃ……」

涼風先輩がそう呟くと、納得したような表情を見せ、りるちゃんの横に並び、先輩も歌い始める。

「な、なんだこの不愉快な歌は！」

動揺する王様に対し、鹿波先輩や彩子ちゃんも歌い始める。

「こつこついう時に楽器ないし……ってあれ？」

深雪先輩がそう呟くと、目の前にドラムやキーボードなどが突然現れる。

「ふふつ、佐藤美希のテレポートデリバリーです」

「へえ、美希にしては上出来、これで……」

深雪先輩と美春先輩と秀一先輩は演奏を始める。

「涼風、りるちゃん、マイクだよ」

美希先輩が両手に持っていたマイクをテレポートで二人の手に飛ばされる。

二人は美希に頷いて歌う。

「や、止める、オイ、親衛隊、なんとかしろ！」

「「「……」」」

王様の命令を聞くことなく歌に聞き惚れていた。

「ちつ、使えん奴等め、ならわしが……」

「邪魔は、させない」

王様の前に立ち塞がる兄さん。

「貴様……」

「お前も聞いてみるよ……良い歌だぜ」

「わしには不愉快にしか思えんな」

「そう思えるのは、お前が人間として腐ってるからだよ」

「言わせておけば……親衛隊、動ける親衛隊はいないのか!?!」

我に返ったのか、兄さんと同じ制服を着た者や私達と同じ制服を着た者、白い制服を着た者は王様の前に立つ。

「一瞬、なにかが頭の中に出てきたんだが……」

「昌彦……操られてるのか」

「……主様、ご命令を」

「こいつらをすべて、殺せ」

「御意」

「くっ」

兄さんは大きくバックステップで私達と合流し、大きなシールドから出た剣で地面を突き刺す。

そのシールドからビームが展開し、大きなビームシールドとなる。

「まな、このシールドもそうそう長く持たない、だから、素早く片付けるぞ」

「うん、でも、あの人達、兄さんや私達と知り合いだよね……?」

「ああ、だから、戦闘不能にする、間違っても殺すなよ」

「わかった」

兄さんが銃を構えたと同時にハルバードを持って突撃する。

「迂闊だな」

「それはどうでしょうかね」

私は右足の力で左にステップする。

それと同時に兄さんが放ったビームの閃光が通っていく。

「読んでいるよ」

「え!?!」

しかし、メガネをつけた男性はビームガン改でそれを撃ち落とす。

「俺も、読めてるよ！」

兄さんは素早くその男性に近づき、銃を剣に形を変えて斬りかかる。

「昌彦、お前が操られるとは思ひもしなかった……すぐに助けてやるから」

「うるさい」

昌彦という人は背中に装備した両剣を左手で持ち、横に振る。

それを兄さんは姿勢を低くして避け、左腰に装備したショートブレイドに手を添える。

「はああー！」

ジャンプと同時に剣を下から上に斬り上げる。

しかしその攻撃は両剣で防がれ、バックステップで距離を取られる。

「死ね」

昌彦さんのビームを兄さんは次々とステップを踏んで回避しながら銃をマシンガンのように乱射する。

「くっ……」

ビームの一つが昌彦さんの右頬をかすめる。

そして、両剣の剣先がミツマタに分かれる。

「変形した!?!」

「これなら!?!」

素早い動きで兄さんの弾幕をかくぐり、トライデントを突き出す。

兄さんは左に避けるが、ミツマタが兄さんの左腕に襲う。

「ぐっう!」

「兄さん!」

「邪魔をするな」

「ちっ」

ビームガン改でけん制され、上手く近づけない。痛そうな表情を見せるが、外傷は見当たらない。

「マント……」

「ははっ、マントなかったらやばかったかも」

「だったらその防刃マントごと貫いてやる、アースランス」

トライデントを地面につき刺し、それを抜く。すると、トライデントの刃にくつつく土の塊。

「はああ!」

「くっ……」

「宏樹! 受け取って! テレポート!」

美希先輩の魔法で兄さんの左腕に現れるロングシールド。兄さんはそれでアースランスを受け止める。

「美希、このシールドがなくて大丈夫なのか？」

「大丈夫、だから、勝って」

「……ああ、わかった！」

昌彦さんの素早い突きをシールドで捌きつつ、シールドを前に出して昌彦さんを突き飛ばす。

「くらえ！」

シールドから出てきた二連装ビームガンを発射するが、そこには既に昌彦さんはいなかった。

「どこいった……」

「もらった」

「なに！？」

いつの間にか背後に回っていた昌彦さんはビームガンの銃口を兄さんの頭部に向けていた。
しかし、その二人の間になにかが横切り、昌彦さんのビームガンを弾き飛ばす。

「宏樹君もまだまだ後ろが甘いね」

「キューノ？」

「ちっ、邪魔をして……」

「はああ！」

兄さんの縦斬りをトライデントで捌きつつフライットユニットで飛び上がる。

「逃がすか……」

「スナイプブラスト！」

突然遠距離から閃光の如く速さで銃弾が飛んでくる。

「くっ……」

兄さんはその場でシールドを前に出して防ぐ。

「もらった、アースランス！」

地面に着地し、左手を地面に添える。

すると、魔法陣が描かれ、兄さんの足元が大きく揺れる。

「なんだ……っ!？」

突然地面から先端がとがった土の塊が兄さんを取り囲むように出てくる。

「ちい、やっってくれる！」

兄さんは壊れたフライトユニットとマントを脱ぎ捨て、その場を離れる。

刹那、フライトユニットは魔法の粒子をまき散らして爆発した。

「まな、遠くで狙撃する水無月を抑えてくれ、これじゃあ迂闊に動けない」

「うん、わかった」

私はフライトユニットで空へ飛びあがり、水無月という女性の元

へ向かった。

「見つけた！」

「くっ」

ハルバードを振り下ろすが、水無月さんはバックステップで回避される。

そのままアサルトスナイパーを上空に向ける。

「レインショット！」

「えっ!？」

撃ち出された銃弾は上空で破裂し、無数の鉄の雨が私に降りかかる。

「マジックシールド！」

私はミドルシールドを上に向け、魔法の盾を展開してそれを防ぐ。

「遅い」

「ぐっ!」

水無月さんは一瞬で私に近づき、とび蹴りを腹部に当てる。

私はそこから吹き飛ばされ、家の壁に当たる。

「つつ……強い」

「……」

「けど……まだ！」

構え直し、右手に魔力を集中させる。

「スプラッシュ……ランサー！」

ハルバードの周りに水が溜まり、最大になるタイミングで勢いよく前へ突き出す。

水の塊が飛び出し、鋭い刃となって水無月さんに向かって直進する。

「スプラッシュランサー！」

「えっ！」

水無月さんもスプラッシュランサーを放つ。

互いの攻撃は衝突し、爆発が起こる。

私はその爆発した地点へ走る。

「くっ……」

「……やるね」

水無月さんも前に出てミドルブレイド改で私のハルバードを受け止めていた。

「スライドダッシュ」

私は瞬時に水無月さんの背後に回り、腰のビームセイバーを左で取り、そのまま振る。

「テレポート」

しかし、そこには水無月さんはいなかった。

「上!?!」

ハルバードを上に出して上空から降りてくる水無月さんを待ち構える。

「甘い」

「うっう……」

しかし、紙一重で間に合わず、水無月さんのブレイドが私の左肩に襲う。

幸い防刃マントのおかげで外傷はないけど、鈍器で叩かれたような痛みが左肩にくる。

そして左肩に力が入らなくなり、持っていたビームセイバーを落としてしまふ。

(まさか……)

プランとした左腕を動かしてみようとするが、反応がなかった。

「そっつー!」

「くっつー!」

水無月さんの激しい攻撃を受け流しながら一歩ずつ下がっていく。

「そろそろ決める!」

「なに!?!」

水無月さんのビームウィップが私の左足に絡まる。

そして、水無月さんの右手にはアサルトスナイパー……。

「インパクトショット……」
「!!!？」

ここまでか……。

【第二十章・歌の導き前編終わり】

第二十一章 歌の導き 後編

「ぐわっ！」

持っていたショートブレイド？を弾かれ、吹き飛ばされる。

「なんで、こんなに……」

あいつの、昌彦の弱点がわからない。

なんとかしないと、あのいかれた王様が動き出すかもしれない。

「そろそろ、決めさせてもらうぞ」
「くっ……」

歯を食いしばっていると、昌彦の後ろのほうから爆発が起こり、周囲に軽い衝撃波が飛んでくる。

「なんだ……なっ!？」

まなが爆発に巻き込まれたのか、吹き飛ばされていた。そして、受け身をとることなく地面に叩きつけられる。

「くっっ!」

俺はまなの元に走り出すが、その前に昌彦が立ち塞がる。

「邪魔だあ!」

「なに!？」

昌彦の肩を踏み台にして飛び上がる。

「シャイニングウイング！」

「くる！」

水無月の弾幕をかくぐり、シールドから鉄扇を取り出し、水無月が持つアサルトスナイパーに投げつける。

鉄扇が銃口に刺さり、使用不能になる。

「くっ、やるわね」

水無月は銃を捨て、懐から手裏剣を出す。

「シューティングスロー！」

十枚の手裏剣は凄まじい勢いでこちらに向かってくる。

「そんな攻撃、シャインブレイド！」

俺は右腕から光る剣を出し、手裏剣を弾き落とす。

「ちい！」

「いい加減……」

右腕のシャインブレイドを消し、右手を強く握りしめる。

「目を覚ませええ！」

「ぐっ！」

水無月の左頬に俺の右ストレートが入り、シャイニングウイングの加速力も合わさり、水無月は大きく吹き飛ばされる。

「はぁ、はぁ……………」

「水無月……………くっ、よくも！」

昌彦がトライデントを回転させ、こちらに突っ込んでくる。

「はぁぁー！」

ヴァリアブルガンセイバーモードでつばぜり合っ。

「お前も、いい加減目を覚ませ！」

「俺は……………正気だ。オーバーブースト！」

「えっ……………」

突然昌彦は俺の視界から姿を消す。

刹那、背後から凄まじい殺気を感じ、空中に飛び上がる。

「遅い」

「なに、ぐあっ！」

しかし、背中を豪快に蹴り飛ばされ、地面に叩きつけられる。

「くっ、急に速く……………なっ!?!」

その場から急いで離れるが、トライデントの刃が俺の左肩をかすめる。

「当たり所が悪かったか……………」

出血が激しい、これは長時間戦闘するのは無理だ。

「くそ、昌彦の方が圧倒的に速い……オーバーブーストってなんだ？」

（オーバードライヴの能力をセーブして発動してる状態だ、使用者にもよるが、あいつは既存技の常時発動タイプのようなだ）

「シャイニングウイングが出たが……それだけであんなスピードは出ないはず、っち！」

昌彦の背後からの奇襲をシールドで防ぎつつ、その力を使ってバツクステップする。

（自己強化魔法の『スピードアップ』が発動してるんだろう。行動一つ一つが通常の二倍に跳ね上がる魔法だ）

「じゃあ俺には見切ることができないんじゃない……」

そう言いながらヴァリアブルガンで牽制射撃するが、当たってる様子はない。

（できなくはない、オーバードライヴすればおそらく……）

「暴走するかもしれないじゃないか……非戦闘員がいるこの街で暴走なんかしたら……っっ」

左肩の出血がまだ止まらない、感覚も鈍ってきた。

相手は空中を自由に飛べ、俺の二倍以上のスピードで襲ってくる。

……ん、待てよ、もしかして。

「ラーニング！」

視界が青くなり、昌彦を視界に入れる。
なんとなく、力がみなぎってくる。

「やっぱり、これで！」

同じスピードを得た俺は昌彦の動きが完全に見えていた。

「フェザーショット！」

魔法の羽を銃口から発射する。

その弾は風の抵抗を受け、不規則に動きながら昌彦の右頬をかすめる。

「なに？」

(なるほど、見たSA、魔法を真似る能力『ラーニング』、良く考えついたな)

「なにか知らんが、同じ力を得たところで！」

「すまんが、お前の負けだ、スナイプブラスト！」

高速移動いながらSAを唱え、銃口を仁王立ちする王様に向け、発砲する。

「なにい!?!」

銃弾は王様の頭部目がけて直進し、それを撃ち抜く。

「……………フィニッシュ」

「……………」

「おっと……………」

気絶して落下する昌彦を受け止める。

他のりるの歌を聞いて直立不動だった兵隊も次々と倒れていった。

「ふう、これで一件落着かな……」

「ふふふふふふ……ふははははは！」

「なに？」

さっき頭を撃ち抜いたはずの王様が不敵な笑い声を出しながら立ち上がる。

そして、撃ち抜いた頭が再生していき、元通りになる。

「こいつ、化け物か!？」

「言つたろ、わしはそこらへんのクズじゃないと!」

「クズは、貴様だ! エクスプロージョン!」

ヴァリアブルガンの銃口から極太ビームを発射する。

王様は回避動作を取ることなくそれを受ける。

「やったか……」

「ぬるいな……」

煙が薄くなっていくと、大量のシールドに守られた王様の姿が出てくる。

「いけ、武器共よ!」

無数の武器が俺に襲い掛かる。

銃弾や矢が大量に飛んでくる、避ける場所なんて……。

「バリアフィールド!」

「チャフフィールド！」

美春とりるが俺の前に出て防御魔法を使ってくれ。

「私と里流葉ちゃんて防御するから、宏樹君は前に出て！」

「わかった」

「ひっきーの道は！」

「私達が切り開く！」

涼風と美希、ポーラが援護してくれる。

「ありがとう、皆、バスターブレイドモード！」

ヴァリアブルガン二つを合体させ、大きな剣にする。

そのままシャイニングウイングで王様の近くに寄る。
剣先を王様に向け、突撃する。

「マジックサーベル！」

皆の援護をもらい、王様の心臓部分に剣を突き刺す。

「はぁーあー！」

そのまま分離させ、身体と顔部分を切断する。

「はぁ、はぁ、はぁ……………」

「……………ぬるいなあ」

「!?!」

切断したのに再生が始まり、元通りになっていた。

「じゃあ今度は、わしの番だな」
「しまった!？」

いつの間にか俺の周囲に浮かぶ大量の武器。

「かかれえ!」
「くそお!」

次々と襲い掛かる武器をシールド、二つのヴァリアブルガンで防いでいくが……。

「ぐっ!」

右ふとももにショートブレードが突き刺さる。
そして左わき腹、右腕、左足に刃が突き刺さる。

「ぐああっくう!」

全身に走る激痛。

「お兄ちゃん!」
「待つて里流葉! 今無暗に突っ込んで……」
「そんなこと言ってられない!」

ポーラの制止を振り切り、俺に近づくりる。

「く、来るな……」
「嫌!」

「……これに賭けるか、宏樹、里流葉、よく聞いて!」

ポーラも武器を落としながらこちらに近づいてくる。

「あいつは、生きる屍よ！」

「生きる屍……ゾンビ？」

刺さった武器を取りながら飛んでくる武器を撃ち落とす。

「ええ、前に見たことがあるの、死体が動くっていうね。それで、頭を潰しても、心臓を突き刺してもこいつらは再生する」

「じゃあ俺の攻撃で破壊しても再生するのか……ってかじゃあどうやって倒すんだ？」

「頭と心臓に再生能力が備わっているらしくて、どちらか片方を破壊してももう片方の再生能力で元通りになるから、それらを同時に壊すしかないわ」

「そうか……今の攻撃で使えるのはかろうじて左手だけだ、りる、力を貸してくれ」

「うん、わかった」

「行くぞ」

「「シャイニングウイング！」」

俺は低空飛行でヴァリアブルビットのビームシールドを出したロングシールドで前を守る。

その後ろにりるが位置する。

「こしゃくな真似を！」

「兄妹の力、なめるなよ！ りる！」

「インパクト、ウィップう！」

りるのビームウィップが王様の頭に当たる。

「なにかと思えば……」
「てえーい！」

ロングシールドの隠しブレイドで心臓を突き刺す。
直後に力が抜け、ドライブが強制解除される。

「お兄ちゃん！」

りるに担がれる形でその場を空中に離れる。
直後、王様の頭が爆発する。

「やったよ、倒したよ、お兄ちゃん……お兄ちゃん？」
「……………」

意識が次第に遠のいていく。
遠くの方でりるが泣き叫ぶ声が聞こえたような気がした……………。

*

「……………」

気が付けば自室の天井が視界に入った。

「お兄ちゃん？ 起きた？」

「ああ、りる……………」

「よかった……………」

安心したのか、りるの瞳から涙があふれ出す。

「……おいで」
「うん」

左腕しか動かなかったけど、ずっと心配していたであろうりるを力強く抱きしめる。

「心配、したから……」

「……ごめん」

「今回の戦いで、皆傷ついたから……りる」

「俺の采配ミスだ、まさか、ゾンビまで出るとは……」

そこで思い出すまなが水無月に吹き飛ばされる光景。

「……そういえば、まなは？」

「命に別状はないけど……」

「けど？」

「……目を覚まさない」

「覚まさないって……」

「頭を強くぶつけたみたいで……」

「……」

あの爆発で吹き飛ばされ、無防備で地面に叩きつけられる形だったしな……命があるだけましか。

「しかし、マシンドールの反乱鎮圧にマーガレット島の制圧もあるのに……」

「今回戦闘に参加しなかった人も徹夜で動ける状態じゃないし、お兄ちゃんもボロボロで動けない……ねえ、お兄ちゃん」

「ん？」

「りるに部隊を少し分けてくれないかな？」

「え？ どうして？」

「りるが、反乱軍を鎮圧してくる」

「え、ちょっと待て！」

俺はりるの肩を持つとしたが、右手に痛みが走る。

「っ……………」

「大丈夫だよ、お兄ちゃん。今は少しでも早く傷を癒して……………ね？」
「……………わかった」

俺の過保護もここまでくればな……………。

「今動ける者は？」

「涼風先輩、深雪先輩、美春先輩ぐらいしか……………他は負傷や不眠で……………」

「……………そっか、今この防衛を手薄にするのは得策ではないな。戦闘員が少ないならなおさら……………」

「里流葉、先輩の様子はどうだ？」

すると、部屋にコップを持って入ってくる風斗。

「ふう君？ 寝てなくて大丈夫？」

「ああ、ぐっすり寝たから」

「……………」

俺は無言で風斗にニヤツと笑みを浮かべる。

「え、先輩、起きてて大丈夫……………ってかなんで笑ってるんです？」

「いや、……………風斗、お願いがあるんだけど」

「なんですか？ 改まって」

「りるの指揮下に入ってくれないか？」
「なんだそれくらい……はいい!？」
「今からりると二人でマシンドール反乱軍の鎮圧を命ずる」
「ちよ、ちよっと待ってくださいよ! 二人だけで!？」
「戦力はマシンドール族の部隊と、後は現地で調達してくれ」
「そんな投げやりな……」
「仕方ないだろ、動ける者はここを防衛しなければならぬし……
風斗ならりるを任せられる」
「なにを根拠に……」
「……」

風斗をじっと見つめるりる。
それを見た風斗は半歩後ずさる。

「わ、わかりました、わかりましたとも……」
「やた〜」
「……けど、りる、無茶はするなよ」
「うん、わかってる。だって……」
「え……!？」
「……」

完全に不意を突かれた形でりるに唇を奪われる。
風斗はその光景を見て顔を赤面していた。

「えへへ……じゃあ、さっそく準備してくるね」
「あ、ああ……」
「いこ、ふう君」
「ああ……」

りると風斗が部屋から出ていき、俺一人になる。

「……生きる屍……か」

あの時俺の一撃であいつは死んだ。

そして、突然ゾンビ化した。

なんでだ、いつどうしたらゾンビ化するんだ。

それに、あいつの言葉が妙に引っかかる。

「……裏があるのか？」

俺の知らないところでなにかが動いているというのがなんとなくわかる。

「……俺の思い過ごしならいいけど」

考えるのを止め、俺は目を閉じた。

*

その日の夜、俺の部屋に飯を持ったかながやってくる。

「怪我の方は大丈夫？」

「ああ、なんとか……かなの方は？」

「私はかすり傷程度だから大丈夫だよ」

「……そっか」

「ひろの場合は両手両足を怪我してるからね……」

「……そうだな」

さっきまで全然痛くなかった左腕に視線を移す。
今はズキズキと少し痛かった。

「それじゃあ自分で食べれないから、食べさせてあげるね」

「ああ、頼む」

「あれ、結構素直なんだね」

「動かすだけで痛いから、かなの好意に甘んじようとしただけだよ」
「そっか」

かなの献身的な行動のおかげで俺は無事夕食を食べ終える。

「ごちそう様。そういえば他の皆の調子はどうだ？」

「寝不足によるダウンと、あの戦闘の負傷で動ける人はあまり残ってないかな……私みたいに軽傷っていうパターンもあるけど」

「そっか……りるがロボットの反乱軍鎮圧に向かうのは知ってるよな？」

「うん、でもここから出すメンバーは二人だけでいいの？」

「仕方ないだろ、ここの防衛を手薄にするわけにもいかないし、予想以上の被害でこっちもどうすればいいのかさっぱりだし」

「そっだね……」

「りると風斗には色々辛い状況かもしれないけど、二人を信じるしかないさ。俺が怪我してなかったりるにそんな辛いことさせなかったのに……」

左拳をギュツと握りしめる。

俺がもっと強ければ、こんなことにはならなかったのに……。

「……あんまり自分を攻めたらダメだよ？」

そう言いながらかなは握りしめた俺の左手を優しく包み込む。

「……そう、だな」

「とにかく今は、少しでも早く元気になることだよ。多少の傷なら魔法でなんとかなるけど、こういう状況では治癒魔法でもあてにならないから」
「そうだな」

かなの言う通りだ、ここでグチグチと悩んでも仕方ない。
少しでも早く、元気にならないとな。

*

かなが退室してだいぶ時間が過ぎた頃だった。
控え目なノックが鳴り、りるが入ってくる。

「お兄ちゃん、まだ起きてたの？」

「まあな、そういうりるも起きてるじゃないか」

「そうだけど……お兄ちゃん」

「ん？」

「明日の早朝に、ここを出るから」

「……そっか」

「だからね、お願いがあるの」

「なんだ？」

「……一緒に、寝ていい？」

「しょうがないな、おいで」

「……うん」

ベッドの左側で俺にべったりとくっついて横になるりる。

「左腕、大丈夫？」

「左腕はな、他の方は薬飲んで痛いや」

「そっか……ねえ、お兄ちゃん」

「ん？」
「んっ……」

突然りるは俺の顔に近づき、唇を重ねてくる。

「あむっ」

「!？」

そして、俺の口の中に舌を潜り込ませてくる。

りるに半ばされるがままだったが、ゆっくりと唇を離す。

「りる、お前……」

「だって、当分の間、できないから……それに、少しでもお兄ちゃ
んの傷が治るようになって、おまじない……」

「……ありがとう」

動かせる左腕で力いっぱいりるを抱きしめる。

「無事に、帰ってこいよ」

「うん!」

【第二十一章・歌の導き 後編終わり】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2272q/>

剣銃魔学

2011年9月28日00時11分発行